

# 史跡出雲國府跡

- 3 -

2005年3月

島根県教育委員会

# 史跡出雲國府跡

- 3 -

2005年3月

島根県教育委員会

# 序

史跡出雲国府跡は、『出雲国風土記』に「神名樋野」と記された茶臼山が見下ろす美しい田園地帯である意宇平野中程に位置しています。出雲国府跡は、昭和49年に一部が史跡公園として整備されて以来、市民の憩いの場として親しまれています。

島根県教育委員会では、史跡出雲国府跡を更に整備・活用していくために、史跡の公有地化を進める一方、平成11年度より調査を再開し、国司の館と考えられる建物群を発見するなど多くの成果を挙げてまいりました。

本書は、平成15（2003）～16（2004）年度の2年間にわたる調査成果を取りまとめたものです。この調査では、溝に架かる橋や道の存在を推定させる資料が得られ、『出雲国風土記』に描かれた景観の復元に、また一歩近づくことができたものと考えております。本書が、今後の出雲国府研究はもとより、より豊かな地域の歴史像を構築する上で一助となれば幸いに存じます。

最後になりましたが、調査にあたって多大な御支援・御協力を賜りました地元住民の方々をはじめ、松江市教育委員会並びに関係者の皆様に心より感謝申し上げます。

平成17年3月

島根県教育委員会教育長  
広沢 卓嗣



# 例 言

1. 本書は鳥根県教育委員会が2003（平成15）年度から2004（平成16）年度に国庫補助事業として実施した風土記の丘地内遺跡発掘調査事業の報告書である。
2. 本書に掲載した遺跡の所在地は、下記のとおりである。  
史跡出雲国府跡 松江市大草町510-1外
3. 本書に収録した内容は、2班体制で行った2003（平成15）年度から2004（平成16）年度に実施した発掘調査についてであるが、2003（平成15）年度調査成果の一部は、既に2003（平成15）年度刊行の「報告書2」において既に報告済みである。また、2004（平成16）年度調査の内、日岸田地区の調査成果については次年度以降に報告書作成を進める予定である。
4. 掘削中の方位は旧測地系の第Ⅲ座標系X軸方向を指しており、磁北より7°12'、真北より0°32'東の方向を指している。また、調査に使用した座標は、過去の調査との関連から旧測地系を使用した。
5. 本書に掲載した遺跡分布図は国土地理院発行のものを使用した。また、遺跡周辺の地形図は鳥根県教育委員会で作製した風土記の丘地内の1:1,000地形図を元に作製した。一貫尻地区の遺構図は株式会社大陸設計が3次元形状計測を行って得られたデータを図化したものを作成して使用している。
6. 本書に掲載した図面は林健亮、勝部悠美、上山直志、岡本育子、寺本和明が作製した。
7. 本書に掲載した写真は空中写真及び第6章の写真を除き林健亮が撮影した。
8. 本書に掲載した出土遺物、写真・実測図などの資料は、鳥根県教育庁埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。
9. 本書の編集は、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て林健亮が行った。

# 調査組織

2003（平成15）年度

調査指導委員会委員 町田章（奈良文化財研究所長）、井上寛司（大阪工業大学教授）、金田章裕（京都大学副学長）、佐藤信（東京大学大学院教授）、蓮岡法暉（鳥根県文化財保護審議会委員）、渡邊貞幸（鳥根大学教授）

指導助言 加藤真二（文化庁文化財調査官）

調査指導 田中義昭（鳥根県文化財保護審議会委員）、山中敏史（奈良文化財研究所）

事務局 金篠孝（鳥根県教育府教育次長）、宍道正年（教育府文化財課長）、祖田浩志（同文化財課課長補佐）、宮澤明久（同課長補佐）、廣江耕史（同主幹）、原田敏照（同文化財保護主事）、伊藤徳広（同主事）、卜部吉博（鳥根県教育府理藏文化財調査センター副所長）、永島静司（同総務課長）、西尾克己（同調査第1課長）、椿真治（同企画調整係長）

調査員 林健亮（埋蔵文化財調査センター調査第3係長）、守岡正司（同文化財保護主事）

調査補助員 阿部智子（調査第3係臨時職員）、勝部悠美（同臨時職員）

2004（平成16）年度

調査指導委員会委員 町田章（奈良文化財研究所長）、井上寛司（大阪工業大学教授）、金田章裕（京都大学副学長）、佐藤信（東京大学大学院教授）、蓮岡法暉（鳥根県文化財保護審議会委員）、渡邊貞幸（鳥根大学教授）

指導助言 清野孝之（文化庁文化財調査官）

調査指導 成瀬正和（宮内庁正倉院事務所）、田中広明（埼玉県埋蔵文化財調査事業団）

事務局 安井守（鳥根県教育府教育次長）山根正巳（教育府文化財課長）、祖田浩志（同文化財課文化財グループリーダー）、丹羽野裕（同主幹）、原田敏照（同文化財保護主事）、東森晋（同主幹）、卜部吉博（埋蔵文化財調査センター副所長）、永島静司（同総務グループ課長）、川原和人（同調査第1グループ課長）、廣江耕史（同総務グループ主幹）

調査員 林健亮（埋蔵文化財調査センター調査第1グループ企画員）、伊藤智（同文化財保護主事）

調査補助員 勝部悠美（調査第1グループ臨時職員）、上山直志（同臨時職員）

## 調査協力機関・協力者

文化庁、奈良文化財研究所、宮内庁正倉院事務所、松江市教育委員会、松江市大庭公民館、松江市竹矢公民館、鳥根県立八雲立つ風土記の丘資料館、鳥根県古代文化センター、平澤毅（文化庁）、飯沼賢二（別府大学）、藤澤良祐（愛知学院大学）、百瀬正恒、上原真人（京都大学）、岡崎雄二郎、吉岡弘行（松江市教育委員会）、瀬古涼子・藤原哲（松江市教育文化振興事業団）、清水重教（奈良文化財研究所）

# 本文目次

第1章 史跡出雲国府跡の位置と歴史的環境 .....	1
1. 出雲国府の位置 .....	1
2. 出雲国府跡周辺の歴史的環境 .....	1
3. 意宇平野周辺の古代の遺跡 .....	3
第2章 発掘調査に至る経緯と調査の経過 .....	5
第3章 一貫尻地区の発掘調査 .....	14
1. 一貫尻地区的調査状況 .....	14
2. 一貫尻Ⅱ区の遺構 .....	18
3. 一貫尻Ⅰ区の遺構 .....	24
4. 一貫尻地区出土遺物 .....	35
5. 小結 .....	62
第4章 大舎原地区の発掘調査 .....	65
1. 37トレンチの調査 .....	65
2. 大舎原4区の調査 .....	75
3. 小結 .....	98
第5章 試掘調査 .....	101
1. 38トレンチの調査 .....	101
2. 38トレンチの状況 .....	102
3. 出土遺物 .....	104
4. 小結 .....	106
第6章 自然科学的分析 .....	107
1. 出雲国府跡発掘調査に伴う珪藻分析 .....	107
2. 出雲国府跡出土木製品の樹種鑑定及びAMS年代測定 .....	123
第7章 まとめ .....	131

# 挿図目次

第1図 史跡出雲國府跡の位置	1	第40図 一貫尻地区出土瓦実測図（2）	58
第2図 史跡出雲國府跡の位置と周辺の遺跡 (S=1:150,000)	2	第41図 一貫尻I区出土木製品実測図	59
第3図 出雲國府跡発掘調査区配置図（1） (S=1:16,000)	6	第42図 一貫尻地区出土金属関係遺物実測図	60
第4図 出雲國府跡発掘調査区配置図（2） (S=1:11,500)	8	第43図 一貫尻地区出土玉・石器実測図	61
第5図 出雲國府跡採集土器実測図	11	第44図 大倉原地区調査区配置図（S=1:2,000）	66
第6図 出雲國府跡採取砥石実測図	12	第45図 第37トレーナ実測図（S=1:80）	67
第7図 一貫尻地区査定区配置図（S=1:2,000）	15	第46図 第37トレーナ西側邊構実測図	68
第8図 一貫尻地区土層断面図（1）	17	第47図 5号溝実測図	68
第9図 一貫尻地区抜張部土層断面図	18	第48図 5号溝・ピット出土土器実測図	69
第10図 一貫尻II区実測図	19~20	第49図 57号溝実測図	69
第11図 一貫尻II区昭和44年調査区の溝実測図	21	第50図 3・4号溝実測図	70
第12図 一貫尻II区59号溝実測図	22	第51図 3号溝出土土器実測図	70
第13図 一貫尻II区N100付近邊構配置図	23	第52図 4号溝出土土器実測図（1）	71
第14図 一貫尻II区石敷き道構実測図	25~26	第53図 4号溝出土土器実測図（2）	73
第15図 一貫尻I区実測図	27~28	第54図 4号溝出土土器実測図（3）	74
第16図 一貫尻I区護岸状施設実測図	29~30	第55図 4号溝出土土器実測図（4）	75
第17図 一貫尻I区石敷き道構実測図	31~32	第56図 平成15・16年度大倉原4区道構配置図 (S=1:160)	76
第18図 一貫尻地区護岸施設・石敷き道構実測図	33~34	第57図 大倉原4区土層断面図（1）	77
第19図 一貫尻I区石敷き道構上面出土土器実測図	36	第58図 大倉原4区土層断面図（2）	78
第20図 一貫尻I区出土弥生土器実測図	36	第59図 56号溝出状況	79
第21図 一貫尻II区出土土器実測図（1）	37	第60図 56号溝出物出土状況	80
第22図 一貫尻II区出土土器実測図（2）	39	第61図 56号溝護岸施設実測図	81
第23図 一貫尻II区出土土器実測図（3）	41	第62図 56号溝南端土層図	82
第24図 一貫尻II区出土土製品実測図	43	第63図 56号溝出土土器実測図	83
第25図 一貫尻II区出土土器実測図（4）	44	第64図 56号溝出土木材実測図	84
第26図 一貫尻I区出土土器実測図（1）	45	第65図 60号溝付近実測図	85
第27図 一貫尻I区出土土器実測図（2）	47	第66図 26号土坑出土土器実測図	86
第28図 一貫尻I区出土土器実測図（3）	48	第67図 27号土坑実測図	86
第29図 一貫尻I区出土土器実測図（4）	49	第68図 28号土坑付近実測図	87
第30図 一貫尻I区出土土器実測図（5）	51	第69図 27・28号土坑出土土器実測図	87
第31図 一貫尻I区出土土器実測図（6）	52	第70図 大倉原4区出土土器実測図	89
第32図 一貫尻I区出土土器実測図（7）	53	第71図 大倉原4区出土土器・磁器実測図	90
第33図 一貫尻I区出土土錘実測図	54	第72図 大倉原4区出土土鍾実測図	91
第34図 一貫尻I区出土土器・陶磁器実測図	54	第73図 大倉原4区出土瓦実測図（1）	92
第35図 一貫尻地区出土陶磁器実測図	55	第74図 大倉原4区出土瓦実測図（2）	93
第36図 一貫尻I区出土土器実測図（8）	55	第75図 大倉原地区4号溝出土木製品実測図	94
第37図 一貫尻地区出土墨書き器実測図	56	第76図 大倉原4区出土金属関係遺物実測図	95
第38図 一貫尻I区出土土器実測図（9）	56	第77図 大倉原4区出土石製品・銅生産関係実測図	95
第39図 一貫尻地区出土瓦実測図（1）	57	第78図 大倉原4区出土玉作遺物実測図	96
		第79図 大倉原地区出土土器実測図	97

第80図 第38トレンチ位置図 (S=1:4,000) .....	101
第81図 第38トレンチと56号溝の位置 .....	102
第82図 第38トレンチ造成土出土器実測図 .....	102
第83図 第38トレンチ実測図 .....	103
第84図 第38トレンチ出土土器実測図 .....	104
第85図 第38トレンチ出土瓦実測図 .....	105
第86図 第38トレンチ出土玉作遺物実測図 .....	106
第87図 試料採取地点 .....	107
第88図 Ⅱ区南壁東地点の土層図 .....	108
第89図 Ⅱ区南壁西地点の土層図 .....	109
第90図 N62ライン地点の土層図 .....	109
第91図 N70ライン東地点の土層図 .....	110
第92図 N70ライン西地点の土層図 .....	110
第93図 Ⅱ区南壁東地点の珪藻ダイアグラム .....	114
第94図 Ⅱ区南壁西地点の珪藻ダイアグラム .....	115
第95図 N62ライン地点の珪藻ダイアグラム .....	116
第96図 N70ライン西地点の珪藻ダイアグラム .....	117
第97図 N70ライン東地点の珪藻ダイアグラム .....	118
第98図 調査区配置および試料採取地点 .....	124
第99図 出雲国府跡遺構配置図 (S=1:2,000) .....	132
第100図 大倉原地区遺構配置図 (S=1:200) .....	133~134
第101図 大倉原地区遺構変遷図 (S=1:800) .....	135

## 表 目 次

第1表 調査地一覧 .....	7
第2表 史跡出雲国府跡及び周辺の発掘調査 .....	9
第3表 黒岩土器・ヘラ書き土器一覧 .....	136
第4表 瓢一覧表 .....	136
第5表 丸瓦・平瓦分類表 .....	137
第6表 陶磁器一覧表 .....	138
第7表 添付兼土器一覧表 .....	139
第8表 玉石材別量集計表 .....	139
第9表 玉石材別点数集計表 .....	139
第10表 水晶製作段階別集計表 .....	139
第11表 琥珀製作段階別集計表 .....	139
第12表 メノウ製作段階別集計表 .....	140
第13表 玉簡製作段階別集計表 .....	140
第14表 カド石製作段階別集計表 .....	140
第15表 黒曜石製作段階別集計表 .....	140
第16表 安山岩製作段階別集計表 .....	140
第17表 第33トレンチ玉観察表 .....	141
第18表 水晶製作段階別集計表 (第33トレンチ) .....	141
第19表 土器・陶磁器観察表 .....	145~157
第20表 木製品観察表 .....	157
第21表 鉄製品観察表 .....	157
第22表 全金属関係遺物観察表 .....	158
第23表 石製品観察表 .....	158
第24表 玉作関係遺物観察表 .....	158
第6章表 1-1 検出された珪藻化石の種類一覧 .....	112
第6章表 1-2 Ⅱ区南壁東地点の珪藻化石組成表 .....	114
第6章表 1-3 Ⅱ区南壁西地点の珪藻化石組成表 .....	115
第6章表 1-4 N62ライン地点の珪藻化石組成表 .....	116
第6章表 1-5 N70ライン西地点の珪藻化石組成表 .....	117
第6章表 1-6 N70ライン東地点の珪藻化石組成表 .....	118
第6章表 2-1 樹種鑑定用ブレバラート作成 フローチャート (破壊法) .....	126
第6章表 2-2 樹種鑑定結果一覧表 .....	127
第6章表 2-3 年代測定結果 .....	127

## 図版目次

図版1 一貫尻地区全景 (南から) 昭和44年調査区 (西から)	図版4 一貫尻I区拡張トレンチ (西から) 水没した一貫尻I区 (北から)
図版2 59号溝検出状況 (南から) 一貫尻II区南壁土層堆積状況	図版5 謙岸状施設 (北から) 謙岸状施設 (西から)
図版3 一貫尻I区謙岸状施設検出状況 (南から) 謙岸状施設土層堆積状況 (南から)	図版6 一貫尻I区の状況: 中央が石敷き溝渠、奥が謙岸 状施設。左は上面礫層 (東から)

- 図版 7 表採遺物・石敷き溝構造物・一貴尻地区出土遺物
- 図版 8 一貴尻 II 区出土遺物
- 図版 9 一貴尻 II 区出土遺物
- 図版10 一貴尻 II 区出土遺物
- 図版11 一貴尻 II 区出土遺物
- 図版12 一貴尻 II 区出土遺物
- 図版13 一貴尻 II 区出土遺物
- 図版14 一貴尻地区出土遺物
- 図版15 一貴尻 I 区出土遺物
- 図版16 一貴尻 I 区出土遺物
- 図版17 一貴尻 I 区出土遺物
- 図版18 一貴尻 I 区出土遺物
- 図版19 一貴尻 I 区出土遺物
- 図版20 一貴尻 I 区出土遺物
- 図版21 一貴尻 I 区出土遺物
- 図版22 一貴尻地区出土遺物
- 図版23 一貴尻地区出土瓦
- 図版24 一貴尻地区出土瓦
- 図版25 一貴尻地区出土瓦
- 図版26 一貴尻地区出土瓦・木製品
- 図版27 一貴尻地区出土金属関係遺物・玉作関係遺物・石器
- 図版28 大倉原地区調査前近景（南から）  
57・58号溝検出状況（北から）
- 図版29 57号溝完掘状況（東から）  
56号溝（手前）・4号溝検出状況（東から）
- 図版30 大倉原地区土層堆積状況（西から：中央は27号土坑）  
26号土坑・60号溝検出状況（北から）
- 図版31 56号溝謹半部分・土層堆積状況（北から）  
N65付近土層堆積状況（南から）
- 図版32 56号溝謹半部分（北西から）  
N90付近土層堆積状況（南から）
- 図版33 N100グリッド完掘状況（南から）  
56号溝N90付近遺物出土状況  
56号溝内側の状況（北から）  
大倉原 4 区全景（北から）
- 図版34 56号溝南筋土層堆積状況（西から）  
56号溝南筋土層堆積状況（北から）
- 図版35 56号溝遺物（64-2）出土状況（北西から）  
56号溝遺物（64-1）出土状況（北から）
- 図版36 56号溝遺物（64-1）取り上げ後の状況（東から）  
56号溝完掘状況（南西から）
- 図版37 大倉原 4 区完掘状況（南から）  
大倉原 4 区・十字街推定地を望む（南から）
- 図版38 大倉原地区出土遺物
- 図版39 大倉原地区出土遺物
- 図版40 大倉原地区出土遺物
- 図版41 大倉原地区出土遺物
- 図版42 大倉原地区出土遺物
- 図版43 大倉原地区出土遺物
- 図版44 大倉原地区出土遺物
- 図版45 56号溝出土木材（64-1）
- 図版46 56号溝出土木材（64-2）
- 図版47 大倉原地区出土遺物
- 図版48 大倉原地区出土遺物
- 図版49 大倉原地区出土遺物
- 図版50 大倉原地区出土遺物
- 図版51 大倉原地区出土遺物
- 図版52 大倉原地区出土遺物
- 図版53 大倉原地区出土瓦
- 図版54 大倉原地区出土瓦
- 図版55 大倉原地区出土金属関係遺物・石製品
- 図版56 大倉原地区出土木製品
- 図版57 大倉原地区出土玉作関係遺物
- 図版58 38トレンチ溝構検出状況（東から）  
38トレンチ土層堆積状況（北から）
- 図版59 38トレンチ完掘状況（北から）  
38トレンチ完掘状況（北西から）
- 図版60 大倉原地区出土遺物・瓦
- 図版61 一貴尻 I 区・38トレンチ・大倉原地区出土遺物
- 図版62 大倉原 4 区調査後空中写真（南東から）  
一貴尻 II 区出土赤色顔料付着陶器（25-3）

# 第1章 史跡出雲国府跡の位置と歴史的環境

## 1. 出雲国府の位置

史跡出雲国府跡は、松江市東南部の意宇平野南側を中心に展開する遺跡である。現在では史跡出雲国府跡公園として10,480m<sup>2</sup>が整備されている。公園南側には出雲總社である六所神社が鎮座し、さらにその南を意宇川が東流している。六所神社周辺から意宇川沿いには集落が展開し、公園より北側には広々とした水田地帯が広がっている。

意宇平野は松江市八雲町から狭い谷を抜けて流れ込む意宇川が形成した沖積平野で、現在でも地形図上に旧河道の痕跡を目にすることができる。

史跡公園から北西を見ると、『出雲國風土記』に「神名種野」と記された茶臼山がそびえ、北から北東には島根半島側の山塊を目にすることができる。東には低丘陵が続き、真冬の晴れた日には鳥取県の大山がその雄大な姿を見せる。平野南側の丘陵には42・43石塚山古墳群<sup>(11)</sup>・46安部谷横穴墓群<sup>(12)</sup>や、最古の石棺式石室である44古天神古墳<sup>(13)</sup>などが分布する。また、北東約800mには47史跡出雲国分寺跡<sup>(24)</sup>が史跡公園として整備されているほか、そのさらに東約150mには、出雲国分寺瓦窯<sup>(15)</sup>が保存されている。平野北西には山代段丘が南北に延びており、20山代二子塚<sup>(16)</sup>・19大庭鶴塚<sup>(17)</sup>などの後期の大型古墳や13山代郷（北）新造院跡（来美廃寺）<sup>(18)</sup>・27山代郷（南）新造院跡<sup>(19)</sup>など『風土記』記載の新造院跡に比定される寺院跡なども知られている。この内、山代郷（南）新造院跡の西側約100mには、同遺跡に瓦を供給したとされる28小無山Ⅱ遺跡<sup>(10)</sup>の瓦窯跡が松江市教育委員会によって調査され、一部が保存されている。

## 2. 出雲国府跡周辺の歴史的環境

意宇平野とその周辺では風土記の丘地内遺跡発掘調査の他にも送電線鉄塔建設や、国道9号線松江道路・安来道路建設などの大型公共事業、周辺道路の拡幅などに伴って、多くの発掘調査が行われている。以下、発掘調査成果に基づき、出雲国府跡周辺の遺跡の状況を述べる。

現在までに意宇平野内で旧石器・縄文の良好な遺跡は知られていないが、平野西側の山代段丘上では石器製作跡と考えられるユニットを検出した25下黒田遺跡<sup>(21)</sup>がある。平野の内側で遺跡が急増するのは弥生時代以降のことで、建築材と考えられる木製品が多数出土した37上小紋遺跡<sup>(22)</sup>や弥生時代の水田跡として知られる50布田遺跡<sup>(23)</sup>などがある。

古墳時代の集落としては51夫敷遺跡<sup>(24)</sup>が知られている。夫敷遺跡からは多孔の甌が出土しており渡米人との関係も指摘されている。周辺の丘陵部には多くの古墳が知られており、県内最古級の前方後円墳である36廻田1号墳<sup>(25)</sup>から大庭山古墳群など大橋川沿いから大庭町にかけての地域に非常に多くが分布している。この内33岩屋後古



第1図 史跡出雲国府跡の位置

墳<sup>(33)</sup>は石棺式石室を持つ古墳であるが、丘陵部ではなく平野部に作られている。

古代については次節で詳しく述べるが、出雲国府跡近接地では古代の集落等は知られていない。

意宇平野を横断する送電線鉄塔建設に伴う発掘調査では陶磁器を伴う遺跡が多く調査されている。この内、意宇川対岸の45天溝谷遺跡<sup>(34)</sup>では谷間を造成して建てられた掘立柱建物跡が調査され、古代末から中世の土器・陶磁器が出土した。また、49出雲国分尼寺跡に隣接する48中竹矢遺跡<sup>(35)</sup>でも白磁類を多く伴う集落の調査が行われている。意宇川河口に近い鶴貴遺跡<sup>(36)</sup>では少量の陶磁器が出土し、付近に中世の有力施設が存在したことが推定されている。松江市八雲町（旧八東郡八雲村）では、古墳時代の琴や木製刀装具などを出土した62前田遺跡<sup>(37)</sup>や古代の集落である61青木遺跡などが知られている。両遺跡は国府から直線距離で約2kmしか離れていない。



第2図 史跡出雲国府跡の位置と周辺の遺跡 (S=1:50,000)

1. 遷原 1号墳
2. 朝酌岩屋古墳
3. 魚見塚古墳
4. 池ノ瀬空塙群
5. 山津窯跡群
6. 寺尾塙跡
7. 岩沙窯跡群
8. ババタケ窯跡
9. 石台遺跡
10. 石居古墳
11. 手岡古墳
12. 竹矢岩舟古墳
13. 山代郡北新造塙跡
14. 来美墳墓
15. 間内越塙墓
16. 平所遺跡
17. オノ岬遺跡
18. 向日日 1号墳
19. 大庭御壁古墳
20. 山代二子塙古墳
21. 山代方塙
22. 永久宅後古墳
23. 東瀬寺古墳
24. 山代郡正倉跡
25. 下黒田遺跡
26. 黒田塙跡
27. 山代郡新造塙跡
28. 小無田Ⅱ遺跡
29. 寺の前遺跡
30. 黒田塙跡
31. 出雲國造塙跡
32. 同岡山古墳群
33. 岩屋後古墳
34. 朝崎山古墳
35. 大坪遺跡
36. 剽田古墳群
37. 上小絞遺跡
38. 向小絞遺跡
39. 四配田遺跡
40. 神田遺跡
41. 才町大屋敷遺跡
42. 百百塙山古墳
43. 東百塙山古墳
44. 古天神古墳
45. 天溝谷遺跡
46. 安部谷後穴羣
47. 出雲圓寺古墳
48. 中竹矢遺跡
49. 出雲國分尼寺跡
50. 布田道跡
51. 小絞遺跡
52. 原尾遺跡
53. 鳥田池遺跡
54. 大木櫻山古墳群
55. 寺庚古墳群
56. 焼田遺跡
57. 洪山池古墳群
58. 洪山池遺跡
59. 原の前遺跡
60. 弥乞山古墳
61. 青木遺跡
62. 前田遺跡
63. 増福寺古墳群

### 3. 意宇平野周辺の古代の遺跡

昭和40年代に行われた出雲国府跡の発掘調査では<sup>[32]</sup>、「當時考えられていた国府方六町説の境界を検出する目的で、水垣地区（35大坪遺跡東側の水田か？）で東西40mのトレンチが調査されているが、古代の遺構・遺物は出土しなかった。市道の拡幅に伴って行われた35大坪遺跡<sup>[32]</sup>の発掘調査は現真名井神社参道に沿って長いトレンチを設定するような調査区を設定し、仮に古代山陰道の遺構があれば確実に捉えられると考えられていたが、古代の道路跡を検出することができなかつた。大坪遺跡では「急急禁解・・・」「延暦八年」などの木簡が出土しており、付近に古代の遺構が存在したことが推定されるが、周辺に遺構面が残存していないようである。平野を離れて西側の山代段丘上には規格的に配置された柱建物群を検出した24山代郷正倉跡<sup>[33]</sup>があり、その南には25下黒田遺跡<sup>[34]</sup>・26黒山館跡<sup>[35]</sup>が知られている。国道432号線を挟んだ南側には「云石」（飯石郡を表すか？）の墨書き土器を出土した30黒田畦遺跡<sup>[36]</sup>があり、官衛関連遺跡が集中する地域となっている。その東側の茶臼山麓部には『出雲國風土記』記載の「山代郷（南）新造院」に比定される27四王寺跡<sup>[37]</sup>とその瓦を供給したと考えられている4基の瓦窯を検出した28小無山II遺跡<sup>[38]</sup>がある。

一方、意宇平野北端には47出雲国分寺跡<sup>[39]</sup>が知られており、周辺には、出雲国分寺瓦窯跡、49出雲国分尼寺<sup>[40]</sup>の存在が知られている。出雲国分寺瓦窯跡西側の丘陵部には瓦窯や古代末の集落を検出した48中竹矢遺跡<sup>[41]</sup>、加工段上に多くの掘立柱建物跡を検出し、土馬や手捏ね土器などが出土した17才ノ峠遺跡<sup>[42]</sup>などが知られており、国分寺や国府との関係が推定されている。

平野東側の東出雲町内の丘陵部は国道9号安来道路建設に伴って発掘調査が行われており、複数の古代の聚落が調査されている。53島田池遺跡<sup>[43]</sup>・52岸尾遺跡<sup>[44]</sup>では鉄鉢形須恵器などが出土した。また、57渋山池古墳群<sup>[45]</sup>・58渋山池遺跡<sup>[46]</sup>からは9世紀後半代と考えられる須恵器窯跡2基が確認されているほか、58渋山池遺跡では古代の聚落が発見されている。意宇川を遡る松江市八雲町（旧八束郡八雲村）の61青木遺跡<sup>[47]</sup>では掘立柱建物跡が調査されており、ヘラ書き土器「社辺」や墨書き土器「林」が出土している。

奈良平安時代の墳墓としては48中竹矢遺跡の丘陵頂部に位置する社口古墳群<sup>[48]</sup>で八陵鏡を収めた火葬骨壺が出土したほか、同じく八陵鏡を収めた木棺墓が東出雲町の勝負遺跡<sup>[49]</sup>から発見されている。墳墓以外でも53島田池遺跡<sup>[50]</sup>では特殊な平面形を持つ掘立柱建物から八陵鏡が出土しており、信仰関係の建物と考えられている。この島田池遺跡の南斜面に当たる8区からは、複数の掘立柱建物跡に伴って鉄鉢形須恵器や、灯明痕跡を持つ小型の須恵器が多量に出土しており、奈良時代後半から始まる仏教関係の施設であった可能性がある。

意宇平野内では、古代山陰道の痕跡を捉えることができないが、松江市乃白町の松本古墳群<sup>[51]</sup>では、幅10mの道路跡を調査している。側溝は確認されていないが、古代山陰道の可能性を直接的に考えられる県内唯一の資料となっている。山陰道関係では、鳥取県米子市の橋本徳道西遺跡で<sup>[52]</sup>、幅9mの両側側溝の道路跡が調査されており、山陰道駅路の可能性が検討されている。

註1 『八束立つ風土記の丘周辺の文化財』島根県教育委員会1975年

註2 註1に同じ

註3 『右槻式石室の研究』出雲考古学研究会1987年

註4 註1に同じ

- 註5 岡崎雄二郎『出雲国分寺丸塚について』『八雲立つ風土記の丘No.35』鳥根県立八雲立つ風土記の丘1979年
- 註6 註3に同じ
- 註7 註3に同じ
- 註8 『来美庵寺』鳥根県教育委員会2002年
- 註9 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書IV』鳥根県教育委員会1985年  
『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書V』鳥根県教育委員会1988年  
『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書X山代郷南新造院跡』鳥根県教育委員会1994年
- 註10 『小無田II遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会1997年
- 註11 『風土記の丘地内遺跡発掘調査報告書VI』1989年
- 註12 『北松江幹線新設工事松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』鳥根県教育委員会1987年
- 註13 註12に同じ
- 註14 『国道9号線松江バイパス延段予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV(大畠遺跡)』鳥根県教育委員会1989年
- 註15 『松江市東部における古墳の調査』鳥根県古代文化センター2004年
- 註16 『岩屋後方古墳』鳥根県教育委員会1978年
- 註17 註12に同じ
- 註18 『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X』鳥根県教育委員会1992年
- 註19 『島田池遺跡・鶴賀遺跡』鳥根県教育委員会1997年
- 註20 『前田遺跡(第Ⅱ調査区)』八雲村教育委員会2001年
- 註21 『出雲国守跡発掘調査概報』松江市教育委員会1971年
- 註22 『市道真名井神社前壁櫛事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会2002年
- 註23 『史跡出雲国山代郷正倉跡』鳥根県教育委員会1981年
- 註24 『下黒田遺跡』松江市教育委員会1988年
- 註25 『黒田前跡』松江市教育委員会1984年
- 註26 『黒田町遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会1995年
- 註27 註9に同じ
- 註28 註10に同じ
- 註29 註1に同じ
- 註30 『出雲国分尼寺第3次発掘調査概報』鳥根県教育委員会1976年
- 註31 註18に同じ
- 註32 『国道9号バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書X I(才ノ岬遺跡)』鳥根県教育委員会1993年
- 註33 『島田池遺跡・鶴賀遺跡』鳥根県教育委員会1997年
- 註34 『岸尾遺跡・島田遺跡』鳥根県教育委員会1997年
- 註35 『浜山池古墳群』鳥根県教育委員会1998年
- 註36 『浜山池遺跡・原の前遺跡』鳥根県教育委員会1997年
- 註37 『前田遺跡(第Ⅱ調査区)』八雲村教育委員会2001年
- 註38 『社日古墳』鳥根県教育委員会1999年
- 註39 『一般国道9号安来道路西地区埋蔵文化財発掘調査報告書10』鳥根県教育委員会1998年
- 註40 註33に同じ
- 註41 『松本古墳群・大角山遺跡・すべりざこ古墳群』鳥根県教育委員会1997年
- 註42 『古谷鬼尾ノ上遺跡・橋本徳道西遺跡』御米子市教育文化事業団2003年

## 第2章 発掘調査に至る経緯と調査の経過

史跡出雲国府跡は、松江市大草町・山代町地内他に所在する。奈良時代に全国で記されたとされる地誌『風土記』の内、唯一の完本として伝えられる『出雲国風土記』には、当時の出雲国について地名由来や産物などが記されているほか、施設等が郡家からの距離と方向によって示されている。このことから、遺跡の発掘調査と同時代文献に示された内容を比較できると言う、奈良時代の地方においては希な地域となっている。

『出雲国風土記』には当時の諸施設や山河が郡家を中心に方位と里程によって示されており、その位置比定研究は、過去には盛んに行われてきた。出雲国府については、『出雲国風土記』巻末記に、「・・・国庁意宇郡家の北の十字街・・・」と記されていることから、意宇郡家と同所にあると解釈されている。また、黒田駅が「意宇郡家に付けり」、意宇軍団が「意宇郡家の西にあり」と記されており、出雲国府周辺には多くの施設が隣接していた時期があることが推定されている。

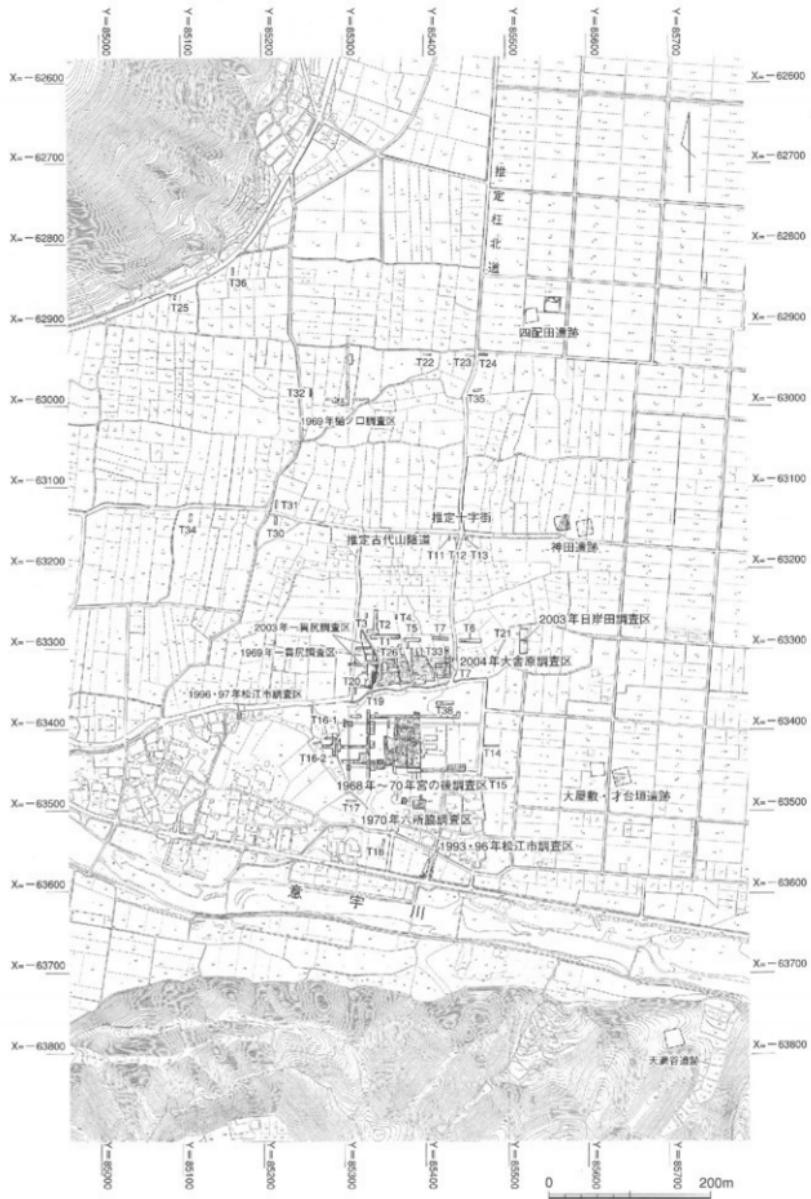
出雲国府の中心施設である国庁の所在については意宇平野の各所に推定されてきたが、昭和43年から行われた松江市教育委員会を中心とする発掘調査において六所神社周辺に在ったことが確定的となり、昭和46年に約410,000m<sup>2</sup>を史跡指定、昭和49年に「八雲立つ風上記の丘」の中心的施設として公園化整備が行われた。

昭和43年の発掘調査では六所神社西側の水田部や六所神社北側の宮の後地区などで発掘調査が行われた。宮の後地区では掘立柱建物跡などを検出したもの、六所神社西側の発掘調査では遺構が希薄で、遺跡中心部が調査地より西に位置することが予想された。翌昭和44年には、宮の後地区で計画的な掘立柱建物跡群などが発見された。また、この年の調査では国府城の把握を目指して、木垣地区・樋ノ口・一貫尻地区の調査が行われたが、樋ノ口地区において宮の後地区とは主軸の異なる掘立柱建物跡が複数確認されたものの、国府城を示す資料は得られなかった。宮の後地区の掘立柱建物跡群が、国府政府にはなり得ないと判断から、昭和45年には六所神社東に隣接する六所脇地区を中心に宮の後地区などで発掘調査が行われた。六所脇地区的調査では、4面庇を持つ身庇5間の大型掘立柱建物跡が発見され、政府後殿と推定されるに至った。これらの調査によって、六所神社周辺に国府政府が存在した可能性が高まった<sup>(41)</sup>。

昭和45年の調査以降は、大規模な発掘調査は行われていないが、公園化整備や道路・水路の改良に伴って小規模な発掘調査が行われている<sup>(42)</sup>。昭和49年には公園化整備に伴って、公園内北側東西素掘溝復元位置の調査が行われている。北側東西素掘溝は、昭和43~45年の調査結果に沿って、復元位置が決定されたが、東側では主軸を南に振っているものと見え、復元位置から外れている。また、東側コーナー復元位置より西へ約20mの位置に南北方向の溝が検出されており、復元案と異なる可能性が出てきた。一方、この発掘調査では、墨書き器「少目」や、漆容器と考えられる木栓をはじめ込んだ甕など注目すべき遺物が出土している。

昭和60~62年には土地改良総合整備事業に伴い、史跡指定地内の各所で調査が行われた<sup>(43)</sup>。土地改良工事を行うに当たっては、史跡指定地内であることが考慮され、最小限の農道・水路改良工事に留められたため、細長く、限定期的な調査となった。

平成5・8・9年には道路拡幅や個人住宅建設に伴い(松江市教育委員会)発掘調査を



第3図 出雲国府跡発掘調査区配置図（1）(S=1:6,000)

第1表 調査地一覧

調査年	地区名	所在地	字名	面積 (m <sup>2</sup> )	報告者
平成12	大倉原1区	大草町522-1	大シャラ田	140	1
平成13	大倉原1区	大草町522-1	大シャラ田	155	1
平成12	大谷原2区	大草町522-1	大シャラ田	153.5	1
平成13	大倉原2区	大草町522-1	大シャラ田	191	1
平成13	大倉原3区	人草町510-2	大シャラ田	195	1
平成13	大倉原4区	大草町510-2	大シャラ田	230	1
平成11	T1	大草町522-1	大シャラ田	140	1
平成11	T2	大草町522-1	大シャラ田	156	1
平成11	T3	大草町522-1	大シャラ田	12	1
平成11	T4	人草町522-1	大シャラ田	12	1
平成11	T5	大草町510-2	大シャラ田	80	1
平成11	T6			104	1
平成11	T7	大草町510-2	大シャラ田	104	1
平成11	T8	大草町510-2	大シャラ田	50	1
平成11	T9	人草町510-2	大シャラ田	24	1
平成11	T10	大草町522-1	大シャラ田	24	1
平成11	T11			12	1
平成11	T12			8	1
平成11	T13			12	1
平成11	T14			40	1
平成11	T15			60	1
平成12	T16			44	1
平成12	T17			21	1
平成12	T18			20	1
平成13	T19	大草町573-1	老賀尻	12	1
平成13	T20	人草町573-1	老賀尻	40	1
平成13	T21		日津田	10	1
平成13	T22		横ノ口	20	1
平成13	T23		萬代田	20	1
平成13	T24		神田	20	1
平成13	T25		天岡田	10	1
平成14	T26	人草町573-1	老賀尻	32	2
平成14	T27	大草町510-1	大シャラ田	40	2
平成14	T28	大草町510-1	大シャラ田	25	2
平成14	T29	大草町510-1	大シャラ田	10	2
平成14	T30	山代町地内	鍛冶ヶ崎	20	2
平成14	T31	山代町地内	鍛冶ヶ崎	20	2
平成14	T32	山代町地内	横ノ口	20	2
平成15	一貫尻1区	人草町573-1	老賀尻	800	本報告
平成15	一貫尻2区	人草町573-1	老賀尻	600	本報告
平成15	大倉原4区	大草町510-2	大シャラ	75	本報告
平成15	日津田1区		日津田	140	本報告
平成15	日津田2区		日津田	160	本報告
平成15	T33	大草町510-2	大シャラ田	60	2
平成15	T34	大草町地内	深坪	20	2
平成15	T35	山代町地内	神田	20	2
平成15	T36	山代町地内	水ノ尻	20	2
平成16	大倉原4区	大草町510-2	大シャラ田	245	本報告
平成16	T37	大草町	宮ノ後	20	本報告
平成16	日津田1区		日津田	800	未定

行っている。この内平成8年の六所神社南東側の道路拡幅に伴う調査では橋脚と考えられる柱が出土しており推定政府周辺の状況を考える上で参考となる資料を提示した。

平成11～13年には、史跡指定地の外側ではあるが、跡松江市教育文化振興事業団が大坪遺跡の発掘調査を実施している<sup>(21)</sup>。大坪遺跡の調査は、真名井神社参道に当たる市道の拡幅に伴って、意宇平野を南北に継続する調査を行つており、古代山陰道の遺構が残存していれば確實に当たるものと見られていたが、遺構面を確認できなかった。大坪遺跡からは「延暦八年□」「恐々勤跡□□□」などの木簡が出土しており、付近に古代の遺構が在ったものと推定されている。

昭和58年からは中国電力の送電線鉄塔建設に伴い史跡指定地の東側で発掘調査が行われている<sup>(22)</sup>。この内、意宇川対岸に当たる天溝谷遺跡は中世の上器・陶磁器の出土で知られているが、この中世の遺構は整地層の上面に営まれていて、その整地層中からは古代の土器が多く出土しており、整地上の搬入元として国府周辺との関係が考えられているほか、意宇川の位置や意宇川を渡る交通路の問題を考える上で重要な資料となっている。一方、史跡指定地に近い大屋敷・才台垣遺跡や神山遺跡の出土遺物は、弥生・古墳時代のものを除くと、古代末から中世の遺物が中心的で奈良時代の遺構面は検出できていない。一連の鉄塔工事に伴う調査結果からは、中世府中の存在が垣間見られる一方、古代の遺構面が認識できず、古代末から中世の意宇川の流路の変化が想像される。

鳥取県教育委員会では、直接的に国府に関わる本格的な調査が終了してから約30年が経過した平成11年に周辺施設の確認と景観復元を目指して発掘調査を再開した。調査は、公園北側の水田部である大倉原地区<sup>(23)</sup>を中心に行い、平成13年までに国司館と推定される建物群などを検出している他、平成14年には八脚門と推定される建物を検出した。一方、史跡指定地の各所においては、古代山陰道などの検出を目指し、試掘調査を実施したが、古代山陰道の考古学的な発見には今だ至っていない。平成11～14年度にかけての調査状況は『史跡山雲国府跡1・2』(以下『報告書No.』)と表



第4図 出雲國府路発掘調査区配置図（2）(S=1:1,500)

示する）に報告している。

平成15年度からは、国司館と推定される建物群の周辺状況を確認するために大倉原地区・一貫尻地区の発掘調査、及び昭和初期に銅印「春」が採取されている公園北東側の日岸田地区の発掘調査を実施した。

#### 平成15（2003）年度

平成15年度の発掘調査は2班体制で実施し、1班が大倉原地区南側及び北側の調査を行った。この調査では、東西5間の礎石建物跡である10号建物や、平安時代の桧扇が出土した井戸などを検出した。この班は8月に現地調査を終了し、整理作業を行って年度末にその成果を『報告書2』として既に報告している。

一方もう1班は、大倉原地区西側の一貫尻地区の全面調査、大倉原地区北側・東側での試掘調査、日岸田地区での調査を行い、11月には水ノ尻地区などの3箇所の試掘調査を行った。この内、大倉原地区北側、水ノ尻地区など3箇所の試掘調査結果については、『報告書2』に掲載している。

平成15年度に調査を行った一貫尻地区は、大倉原地区西側に当たり、昭和44年、平成13・14年に試掘調査が行われ、石を配した水付きの遺構が存在するものと考えられていた。5月21日から重機を使用して表上掘削を開始し、26日から作業員を投入して本格的な掘削に入ったが、調査区全面に広がる石の堆積の解釈に振り回されることとなった。一貫尻地区では調査区のほぼ全面に渡り、薄い石の堆積が見られ、その右の層が西に傾斜している状況が確認された。6月25日には別府大学飯沼賢司教授が見学に訪れ、この石の堆積について、洪水面であり自然地形の可能性が高い、と指摘している。第9回発掘調査指導委員会直前の7月14日には佐藤信出雲国府跡発掘調査指導委員による調査指導があり、大倉原地区の国司館とされる建物跡群との関係から、池を配した庭園造構の存在を推定され、7月17日の委員会当日にも池の存在が大きな話題となった。一方、7月22日井上委員の調査指導、28日の三瓶自然館中村唯史氏の指導では、いずれも池の可能性に否定的な見解が示され、現場も困惑することとなる。

大量の石の固化に現場が混乱する中、夏休み入りし、遺跡見学の研究者が多く訪れた。7月28日出雲古代史研究会16人、30日には瀧音能之氏を始め駒沢大学古代史研究室から9人、8月20日山梨大学大隅清陽氏を始め12人が見学し、それぞれから参考となる意見を伺った。

池の可能性を特定するには、対岸の有無を確認するのが確実であろうとの判断から、7月31日に、重機を使用して底土を除去し、一貫尻地区南西側にトレッチを拡張しているが、対岸の存在は確認できなかった。8月6日に調査地を視察した文化庁平沢毅調査官からは、庭園造構とするには無理があるとの指導を受けている。

一方、現場では、広大な面積に広がった石の堆積の手測りによる実測に手間取り、そのめどが立ったのは11月も後半を迎えてからであった。それでも、周囲の状況との関係や、個々の石の高さを記録するには手測りでは困難なことから、11月4日には3次元形状計測を実施し、併せてラジコンヘリにより空中写真を撮影した。この日は午後から西よりの強風が吹いたため、ラジコンヘリでは十分な撮影ができず、同月18日に追加の撮影を実施している。11月26日に珪藻化石分析のための土壤サンプリングを実施し、28日に現地調査を終了した。

一貫尻地区的調査と並行して、8月4日からは日岸田地区的調査を開始し、多量の遺物の出土に驚くことになる。9月11日には銅碗片と考えられる金屬片が、同26日には獸足付き須恵器など、一

貧尻地区では見られなかった特徴的な遺物が出土している。

日岸田地区は、耕作土中からも土器を始め水晶・黒曜石片など多量の遺物が出土することから、8月16日に八雲立つ風土記の丘主催の体験活動17組、9月3日に八雲村立八雲小学校約80人、10月5日ケイズラリー16組約40人が発掘体験を行うなど体験活動も多く実施している。

大倉原地区は、史跡公園北側に広がる水田部で、平成11年の再開以来、毎年調査を行ってきた地区である。平成14年度までに国司館とも推定される同規模の東西2棟の礎石建物跡（1・4号建物跡）が並び立つ状況や墨書き土器などを始めとする多量の遺物を出土した南北方向の溝（4号溝）、八脚門と考えられる掘立柱建物跡（9号建物跡）などが検出されている。7月17日の第9回指導委員会において、「9号建物跡から東へ延びる4号柵列が施設群北側境界であるならば、施設群東側境界と考えられている4号溝との関係を明らかにせよ。」との宿題が出され、両造構が交わると推定されるN85E25付近を中心トレンチを設定（37トレンチ）し、10月7日から掘削を開始した。ところが、37トレンチ付近は削平が及んでおり、4号柵列そのものを検出することができず、4号溝との関係を明らかにすることはできなかった。一方、この調査では、4号溝東側に4号溝と平行する溝（56号溝）が存在することが明らかになった。10月29日に開催した第10回指導委員会では、直ちにトレンチを拡張して、56号溝の実体を把握するよう指導があり、翌30日から37トレンチを東へ拡張し、両岸に石が配された溝が出現した。この56号溝は、この時点では両岸を石で護岸した溝と認識されたことから、素掘りの溝しか確認していない大倉原地区においては、極めて重要な溝であると思われた。一方、56号溝が延びるであろう延長線上の、わずか1m南は平成13年度調査区であり、13年度にこの溝が確認されていないとが言う点が問題となった。よって、翌16年度には、平成13年度調査区の再発掘及び37トレンチ北側に調査範囲を広げ、56号溝を面的に検出すると言う調査方針が決定した。

この間、10月15日には奈良文化財研究所山中敏史氏の調査指導を受けた。第10回発掘調査指導委員会及び山中敏史氏の指導内容を請け、11月16日には現地説明会を開催し、約40人の見学者が訪れた。

大倉原・日岸田地区の調査にめどが付いた11月17日からは、古代山陰道の検出などを目指して、深坪地区他の試掘調査を開始したが、大きな成果は得られなかった。11月19日に県文化財保護審議会委員田中義昭氏による調査指導を受けた後、11月28日に現地を撤収した。

#### 平成16（2004）年度

平成16年度も2班体制で調査を実施した。5月20日に現地の杭打ち・地形測量を開始し、27日から作業員を投入しての掘削に入った。1班が日岸田地区的調査を行い、他班は大倉原地区東側（4区）で56号溝の平面的検出を目指した。大倉原4区での調査は、南側の区画から調査を開始し、徐々に北側へ拡張していった。5月27日には平成13年度調査区の再発掘にめどが付き、56号溝が南側で検出できないことを確認し、6月9日には北側でも石が見られないことが確認された。翌10日には56号溝の土器を取り上げたが、その中には墨書き土器1点が含まれていた。7月7日には、前夜の夕立により水没した調査区の復旧作業中に、56号溝にまたがる木材が出土した。この時点では、この木材が橋の部材であると言う認識はなかったが、7月14日の第11回発掘調査指導委員会、同月20日の速岡法障委員・佐藤信委員、22日の井上寛治委員の調査指導では、橋や築地の基礎ではないかという指摘がなされた。7月23日に現場を訪れた財團馬県埋蔵文化財調査事業団高島英之氏は、

古代文化センター平石充と共に56号溝出土墨書き器の紹説に当たっていただいたほか、同日夕刻には長崎外国語大学木本雅康氏が訪れ、古代道に関する指導を受けている。

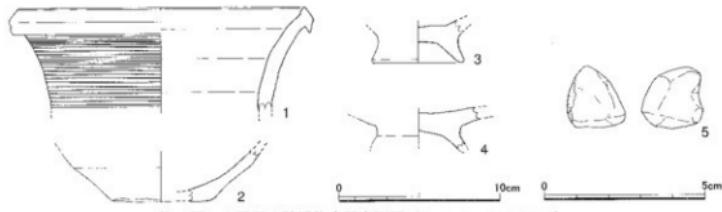
5~6月は、用水路周辺で夏草が繁茂した。地元からの強い要望もあって、調査員も休み時間などに草刈りに追われており、6月10日からは近所で飼われているヤギまでも交えて草刈りに当たっている。この間、6月16日にはN105E20グリッドの表上掘削中に鉄砲の弾と思われるもの（図版61右下）が出土し、調査員を驚かせた。この弾は直径6.45mm、長さ31.7mmで、口径から第2次世界大戦中に使用された38式歩兵銃から発射されたものと思われる。

6月22日からは、56号溝の南側延長の検出を目指して、公園内にトレンチ（38トレンチ）を設定し掘削した。同日には、公園の造成上内から須恵器高杯が出土した。38トレンチは7月26日まで調査を行ったが、目的とする56号溝の延長を検出することはできなかった。

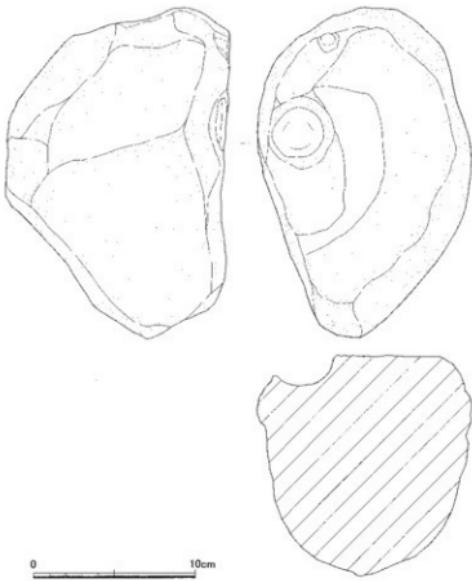
大倉原地区・公園内の調査と同時平行で行っていた日岸田地区の調査では、7月22日に、多量の遺物を出土したSX01の遺物の取り上げを行っている。大倉原地区・公園内試掘は7月30日に終了し、本報告書の作成に入った。一方、他班による日岸田地区の調査は、その後も継続し、約800m<sup>2</sup>の調査を行っている。

平成16年の前半は安定した好天に恵まれ、順調に調査が推移したが、8月後半以降は頻繁に台風が接近し、9月7日の台風18号、9月29日の台風21号など、発掘現場がたびたび水没することになったほか、台風16号通過後の8月31日には現地事務所内に船が迷い込むと言う珍事も発生した。台風接近などの影響により、遺構掘削作業が十分に進展せず、10月31日からは報告書作成を一時中断し、報告書班も現場の応援に参加した。11月9日には第12回出雲国府跡発掘調査指導委員会が、また、直前の6日には委員会当日に欠席の井上寛治委員による、23日には金田章裕委員、佐藤信委員による調査指導会を実施した。大倉原地区では確認できない北側への遺構の広がりや、南北溝の新たな発見、大倉原地区と異なる遺物相など、日岸田地区で調査を行うことの重要性は再確認されたものの、時期や遺構の性格の把握が不十分であるとの指導を受けている。11月21日には現地説明会を行い約40人の見学者が訪れた。平成16年度の日岸田地区の発掘調査では、建物跡6棟、井戸跡3基、古代の溝跡4条などを検出し、12月6日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行った後、同月10日に現地作業を終了した。

一方、8月1日から開始した本報告書の作成作業では、9月16日に宮内庁正倉院事務所成瀬正和調査官に一貫尻地区出土土器に付着していた赤色顔料について分析を依頼し、水銀朱であった事が確かめられた。また、10月28日には奈良文化財研究所清水重教氏より『報告書1』で掲載した1・4号建物跡の庇の構造や大倉原地区56号溝に橋が架かる可能性などについて指導を受けた。12月



第5図 出雲国府跡採集土器実測図 (S=1:3、5のみ2:3)



第6図 出雲国府跡採取砥石実測図 (S=1:3)

日には湘南学園高校の高校生7人が見学に訪れた。8月18日には恒例となった八雲立つ風上記の丘主催の発掘体験、9月3日に八雲村立八雲小学校約60人の発掘体験が実施された。また、10月3日には出雲国府跡周辺を会場にクイズラリーが行われた。

#### 出雲国府跡周辺の採集遺物

国府を中心に多くの遺構が展開していたと考えられる出雲国府跡周辺地域では、分布調査時などに多くの遺物を採取することができる。その結果は『報告書1・2』に報告しているが、それ以外にも耕作中の採集遺物を地元住民の方々から持ち込まれることがあり、第5・6図に図示した。

5-1~4は推定十字街に近い字領掛・神田地区での採集遺物である。

5-1は、須恵器壺の口縁部である。口縁端部を玉縁状に折り曲げており、頭部に明瞭なカキメを施している。

5-2は、土師器壺の体部である。底部には回転糸切り痕を残し、体部は直線的に立ち上がる。5-3・4は、高台の付く土師器の小片で、3は壺、4は皿と思われるものである。5-2~4は、平安時代中頃~後半のものと考えられる。

5-5は、平成13年度大倉原地区の調査で出土した土製品であるが、『報告書2』編集段階でその正体が把握できず、掲載できなかったものである。高さ1.9cmの小型の土製品で、全体的に磨滅が進んでおり細部の状況は把握できないが、大きな破損箇所は無いものと思われ、上製支脚のミニチュアであろうか。

第6図は日岸田地区で採取された窪みのある石で、玉砾石と考えられるものである。平成13年度

15・16日には岡崎玉県埋蔵文化財調査事業団田中広明氏を調査指導に招き、国司館の構造・景観についての指導を得た。

平成16年度は、現地調査とは別に鳥取県古代文化センターの風土記研究事業の一環として、「地方行政と地域社会」研究事業が立ち上がり、史跡出雲国府跡発掘調査担当も参加して事業を進めることとなった。国府・郡家などに関わる文献からの整理と、『報告書1・2』の内容や周辺の遺跡の概要などを検討し、その内容についても本報告作成の参考とした。

平成16年度も日岸田地区を中心に行なった普及活動を行っており、6月22日には松江市立中央小学校約60人による発掘体験を日岸田調査区において行ったほか、7月7

にも複数の雀みを持つ玉砾石と考えられるものが大倉原地区より出土しており、同種のものであろうか。

註1 『出雲国史跡発掘調査概報』松江市教育委員会1971年

註2 『史跡出雲国府跡環境整備報告書』島根県教育委員会1975年

註3 『土地改良総合整備事業に伴う史跡出雲国府跡発掘調査報告書』島根県教育委員会1988年

註4 『市道真名井神社線整備事業に伴う大坪遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会2002年

註5 『北松江幹線新設工事松江連絡新設工事予定期内埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会1987年

註6 調査地の読み方は、地元住民の方々に伺い、「オオジャラ」・「ヒガンデ」と読む事とした。

## 第3章 一貫尻地区の発掘調査

### 1. 一貫尻地区の調査状況

#### ① 一貫尻地区の調査

一貫尻地区は、大倉原地区西側、史跡公園駐車場北側に位置する約4,000m<sup>2</sup>の三日月形の水山部である。湾曲した地形となっている東側には、南西から公園北端を東流する水路が一貫尻地区南端部で分流して北へ流れている。一方西側を南北に区画する道路は昭和33年の空中写真には、小さな畦道としか写っておらず、近年になって造られたものであることが判る。昭和44年の調査では、この畦を越えた西側までトレンチを延ばしており、土器・木器が出土したとされているが、今回の調査では、水路と畦道部分は調査することができない。

調査地は、大倉原地区的遺構とは、1号建物身舎部分から約10m、16号土坑検出最西端からは1.5mしか離れていない。一方、昭和44年の発掘調査では、公園内北側東西大溝（SD034）が北へ向きを変えることが判っており、それから想定される南北溝の位置が、一貫尻調査区内を通過することになる。

一貫尻地区では、昭和44年・平成13年の調査で、水に接した、南北方向に石を積んだ遺構が存在し、その西側は池か川が在ったと想定されていた。調査地の標高は8.7mであるが、道路を挟んだ南西側の水田は標高9m以上と高い。一方東側の大倉原地区が一貫尻地区と同じ8.7m前後であり、南西側が高く、北に傾斜が変わる地形で、水路もその傾斜方向に沿って流れを変えている。もし、池が存在していれば、地形的に高い道路西側まで展開しているとは考えにくく、一貫尻調査区内で完結するものと想定された。

調査区は、畦・水路を避けた三日月形の地形の内側に接し、東西方向に延びる畦を避けた、南北2箇所の調査区を設定した。過去の試掘調査の結果から西側は次第に低くなり、遺構の残存が望めないと判断から、西側半分を廃土置き場として確保し、便宜的に南側調査区を一貫尻Ⅰ区、北側調査区を一貫尻Ⅱ区と呼んで調査を開始した。合計面積は約1,400m<sup>2</sup>である。

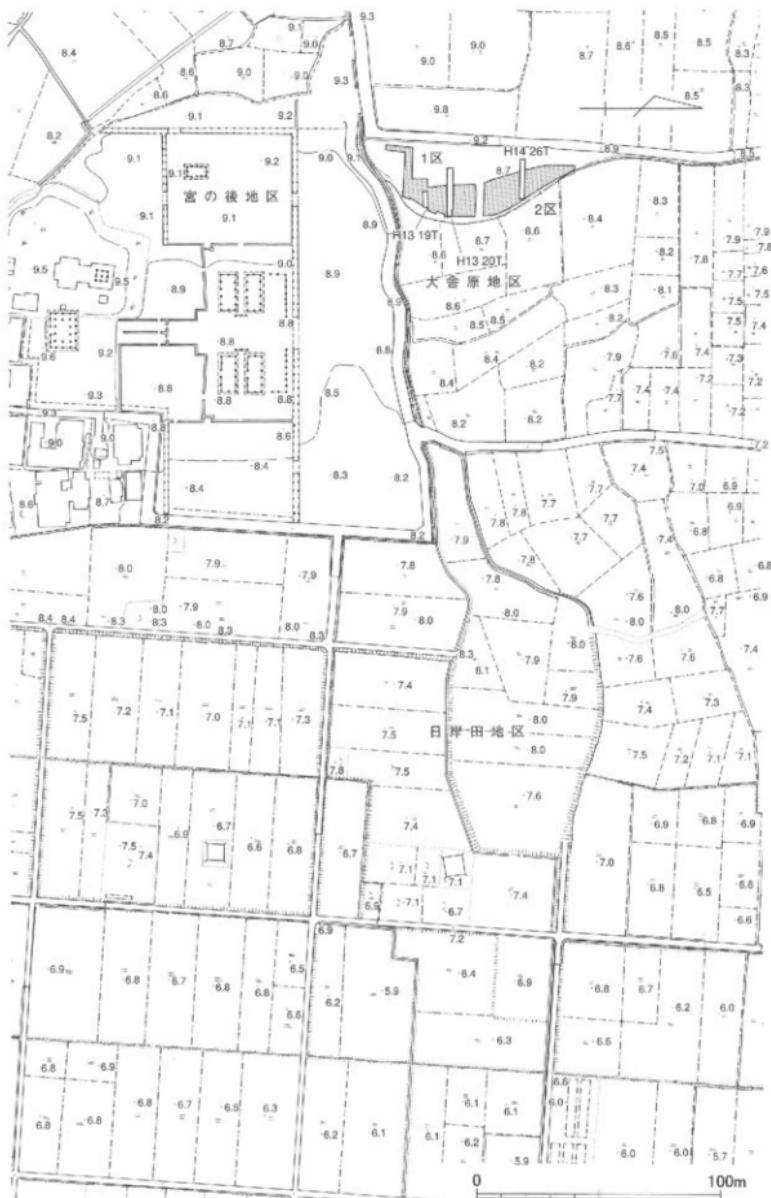
調査にあたっては、グリッド名称について平成11年の調査再開以来の呼び方を踏襲することとし、旧測地系の第Ⅲ座標系X=-63400m、Y=85400mの交点を原点として北○m（N○）、東○m（E○）と表記した。

なお、Ⅰ区には平成13年度の19・20トレンチを、Ⅱ区には平成14年度の26トレンチを含んでいる他、昭和44年の一貫尻調査区がⅠ・Ⅱ区境に展開している。

#### ② 土層堆積状況（第8・9図）

調査前の地表面の標高は8.7mで、調査区全面で高低差はほとんど見られない。地表より約10cmの厚さで水田耕作土である1 暗灰褐色土が堆積しており、地表面でも須恵器小片などが表採できた。その下層には5cmほどの厚さで、2 橙色粘土の堆積が見られる。橙色粘土は水田床土と見られるが、場所によっては1 暗灰褐色土と明確に分かれない。2 橙色粘土は、調査区東側では、わずかな厚さしかなく、直下が遺構面となる。また、調査区西側では、その下層に第9図③褐色土が堆積しており、多量の遺物を含んでいる。

調査区東側を中心に、耕作土（1・2）を除去すると、すぐに多量の石が現れる（以下疊層と呼

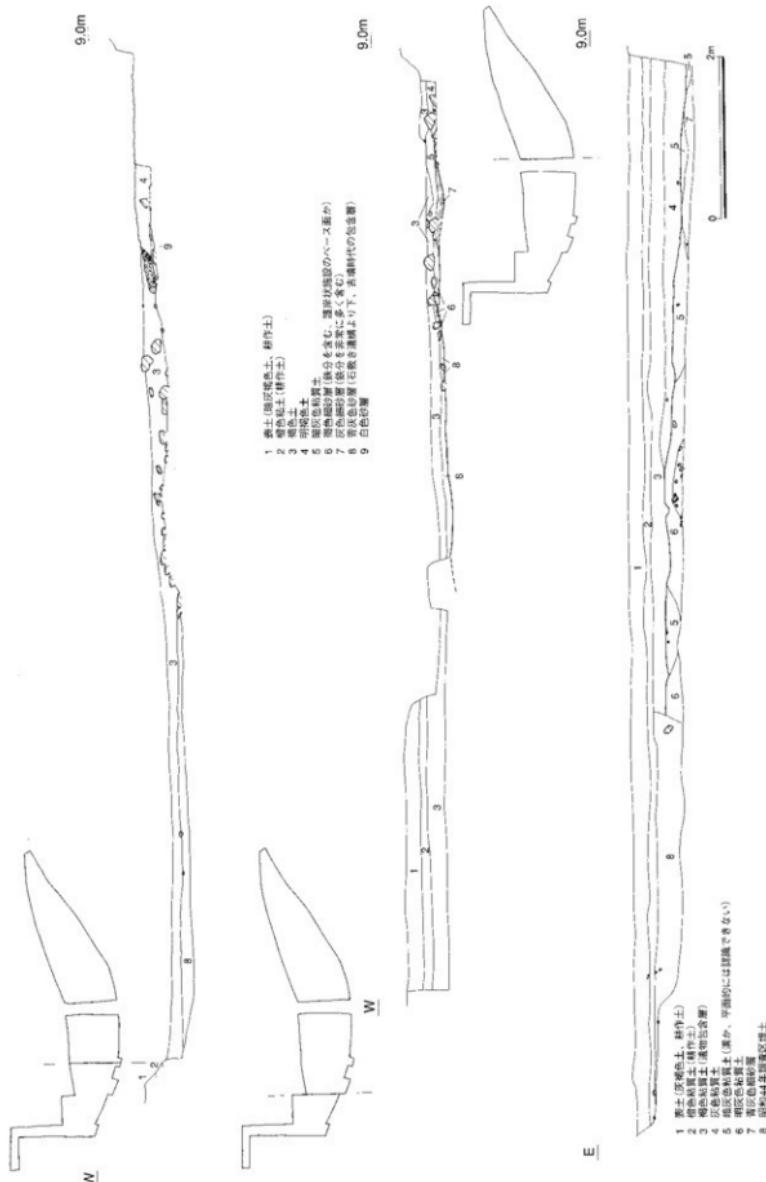


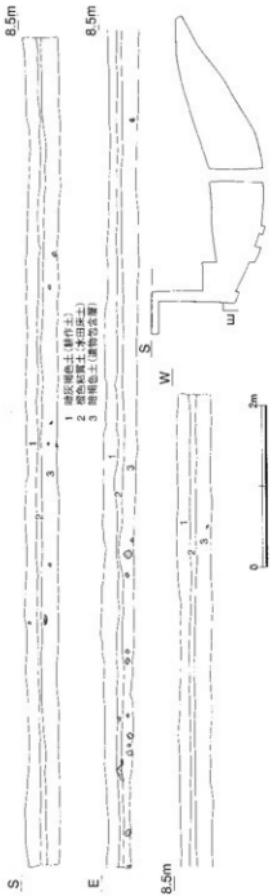
第7図 一貫尻地区調査区配置図 (S=1:2,000)

ぶ)。この礫層は遺物包含層である3 褐色土上面を中心に見られ、西に向かってわずかに傾斜している。当初は、この礫層が、一枚の均一な堆積である事、一貫尻II区で、礫層上面に土師器柱状高台付皿などが、ほぼ完形を呈して出土している事などから人工的な造成面であった可能性を検討していた。結果的には、調査終盤に実施した断面調査により、部分的には厚い堆積があり、堆積の仕方が一様ではない事、面的な堆積ではなく、3 褐色土との間で混ざり合っている様に見える部分(第8図左)が見られる事、礫層中に含まれる遺物には古墳時代から平安時代末頃までのものが混ざり合い、時期が一定しない事、などの理由から自然堆積であると判断した。この礫層は、遺物の入り方から大舍原地区の遺構面直上に見られる礫群と同じものと見られ、含まれる最新の遺物が白磁IV類範であることから、平安時代終わり頃に堆積したものと考えられる。礫層の堆積は、調査区東側で厚く、西、北へ向かうほど薄くなる。また、礫層上面は西に傾斜しており、W62では標高8.5mを測るが、W66では8.0mで、W68より西では礫層を認識できない。W68より西側では3 褐色土下層に8 青灰色砂層が厚く堆積している。昭和44年一貫尻調査区では古墳時代の土坑2基が検出されているが、この土坑の検出面が8 青灰色砂層である。砂層面が生活面であったとは考えられないことから、礫層を形成した水流によって上面が大きく削平されていると考えられ、深い遺構のみが残存したと考えられる。

3 褐色土下層には、別の石の堆積を見る事ができる。一貫尻I区のW66付近ではN58からN76までの間に人頭大の礫を積み重ねた部分があり、人工的な護岸状施設と判断した。また、護岸状施設下層からW62までの間には拳大の円礫を薄く敷き詰めた状況が見られる。この範囲は、南北は調査区南端から始まって昭和44年調査区北まで、東西は、W62付近から護岸状施設直下まで続いている。護岸状施設より西は礫層を形成したと見られる5 暗灰色粘質土によって切られており、西に延びていたかどうかは判断できない。この円礫面は、薄く均一に敷かれているように見える事、礫堆積中に遺物を含んでいない事などから遺構と判断し、石敷き遺構と呼ぶことにする。この石敷き遺構には、南北方向に続く緩やかな溝状に窪む部分が見られ、その部分には7 灰色の砂の堆積が見られる事から水が流れていた可能性が考えられるが、窪みの肩は非常に緩やかで、断面箱形になる部分は検出できない。この石敷き遺構は昭和45年に検出された石敷きと同一のもので、『概報』では宮の後地区SD034が北に折れる延長線上に位置することから、何らかの区画を示すと考えられていた。昭和44年の調査で検出した石敷きは、石敷き遺構の溝状に落ち込む部分東肩を検出したものと考えられる。

当初、上面の礫層が人工的な池であった可能性があったため、その対岸を探す目的で、西側にトレチを延ばせる場所を検討した。一貫尻I・II区間に位置する昭和44年のトレチは、道路を越えた西まで延びているが、その間に對岸と思われるような立ち上がりは検出できていない。よって、一貫尻I区南西側にトレチを拡張したが、このトレチでは礫層そのものを検出できなかつた(第9図)。面的な調査を行った一貫尻I・II区では、礫層からの連続面(3 層下面)がわずかに西に傾斜していたが、このトレチでは基本的に水平堆積で、トレチ東西の高低差は10cm程度しか無く、対岸と考えられる立ち上がりは確認できなかつた。最終的に、礫層が自然堆積と判断された事によって、一貫尻地区的地形は、流路が向きを変えた事によって形成されたと判断された。したがつて、礫層の堆積は流路攻撃面による堆積であり、トレチ設定部分は、流路の内側に入ってしまったものと想像される。





第9図 一貫尻地区抜張部土層断面図  
(S=1:60)

このトレンチでは、耕作土（1・2）直下に、遺物包含層である3 暗褐色土が約20cmの厚さで堆積する。トレンチ東側では、わずかに礫が見られるが、西に行くほど礫が少なくなり、それと同時に遺物の出土も減少した。発掘停止面は、東側の石敷き遺構検出面からの連続面で、発掘停止面には遺構は見られなかった。なお、トレンチ西端では3 暗褐色土上面近くで備前焼擂鉢の破片（36-4）が出土している。平安時代末以降の遺物量は、大倉原地区でも極端に減少しており、一貫尻地区全体を見ても備前焼擂鉢と同じ時期と考えられる遺物はほとんど見られない。36-4も単独で出土しており、中世後半から近世の遺構は確認できない。

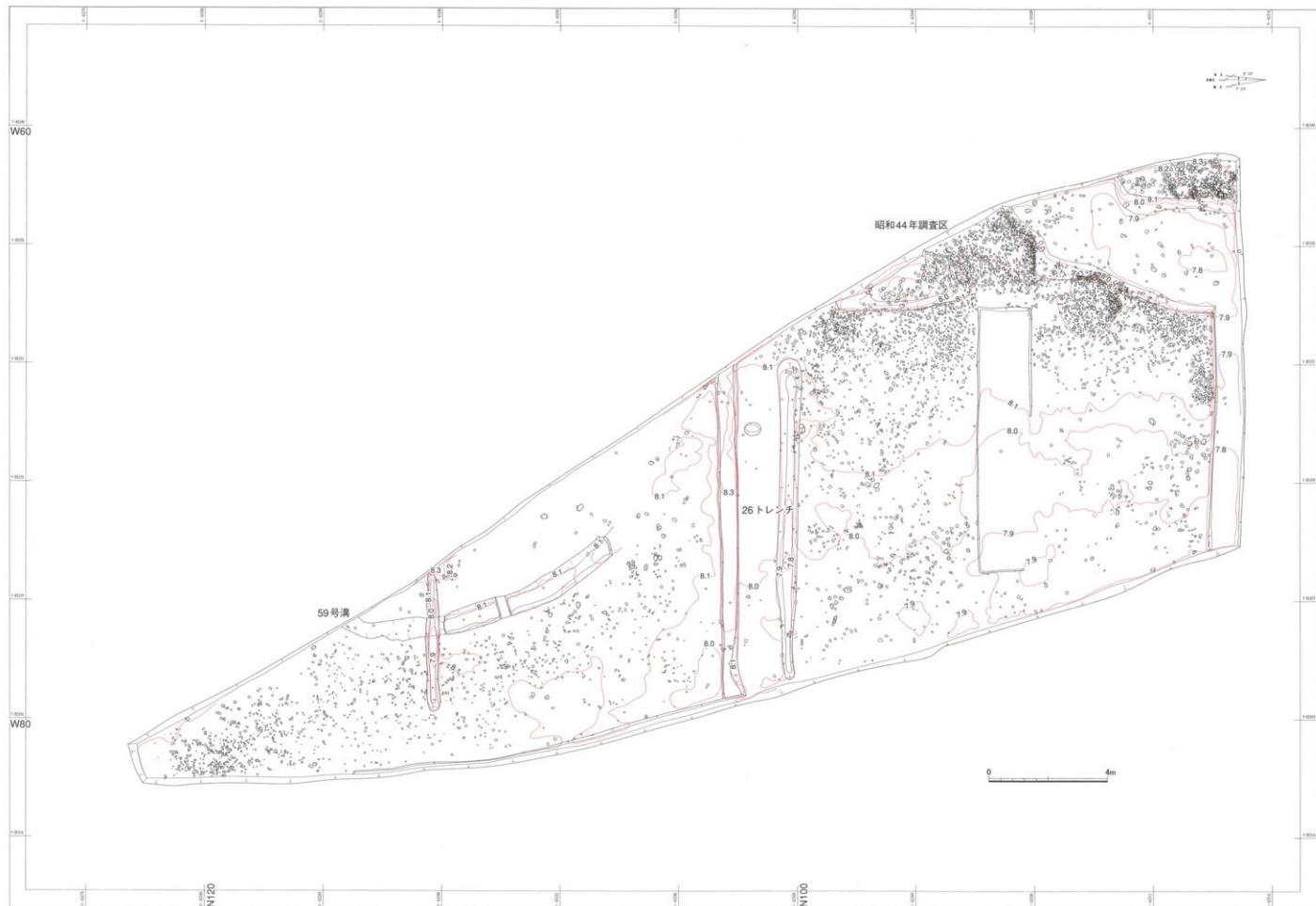
## 2. 一貫尻Ⅱ区の遺構

一貫尻Ⅱ区は三日月形の地割りである字一貫尻の北半部で、東西約13m、南北約37mの三角形の調査区である。調査区南東側の一角に昭和44年の一貫尻調査区を含んでいる他、調査区中央に平成15年度26トレンチが東西方向に横断している。昭和44年一貫尻調査区の周囲では礫層が厚く堆積しているが、北、西へ向かうほど礫層が薄くなり、W70より西では、人頭大の礫が点在するのみとなる。礫層からの連続面は、南西へ向かうほど標高が低くなり、調査区北端の標高が約8.1mであるのに対し、南西隅の標高は約7.7mである。

### ① 昭和44年調査区（第10・11図）

一貫尻Ⅱ区南東部は昭和44年に発掘調査が実施されており、表上掘削直後にその痕跡が確認された。一貫尻Ⅱ区内での状況は南北12m、東西4.5mの三角形部分が当たっており、中程を南西—北東に深い溝が通っている。『概報』によれば、新しい時期の溝と報告されている。この溝については連続するであろう大倉原地区2区北調査区や一貫尻Ⅰ区では認識できなかった。溝底部は青灰色砂層を切り込んでおり、溝の両側には石の堆積が見られる。これらの石の内、南東側の一角（第11図右下）は、一貫尻Ⅰ区で検出した石敷き遺構からの連続面と見られ、拳大の凹凸が敷き詰められた状態になっている。一方、溝北西側の石は、拳大からやや大きな石まで様々なものが含まれ、古代末の土師器や古代の須恵器、瓦片など多くの遺物を含んでいる。W66より西の一貫尻Ⅱ区発掘停止面と連続する事から、上面の礫層であることが確認できた。なお、第11図中程の石が集中して見られる部分は、面的な堆積ではなく、約30cm下方まで石の堆積が見られ、遺構の可能性も検討したが、礫層を形成した水流によるものであろう。

昭和45年調査区では礫層堆積が残された部分の北側にも落ち込みが掘られており（第10図）、最



第10図 一貫尾Ⅱ区実測図 (S=1:120)

深部は深さ約40cmになる。青灰色砂層を切り込んで掘られていることが断面から判る。この落込みは、『概報』にも図示されているが、全体形状や時期・性格は不明で、大倉原地区2区北調査区でも落ち込みの続きを検出することはできなかった。

#### ② 一貫戸Ⅱ区北側の状況（第12図）

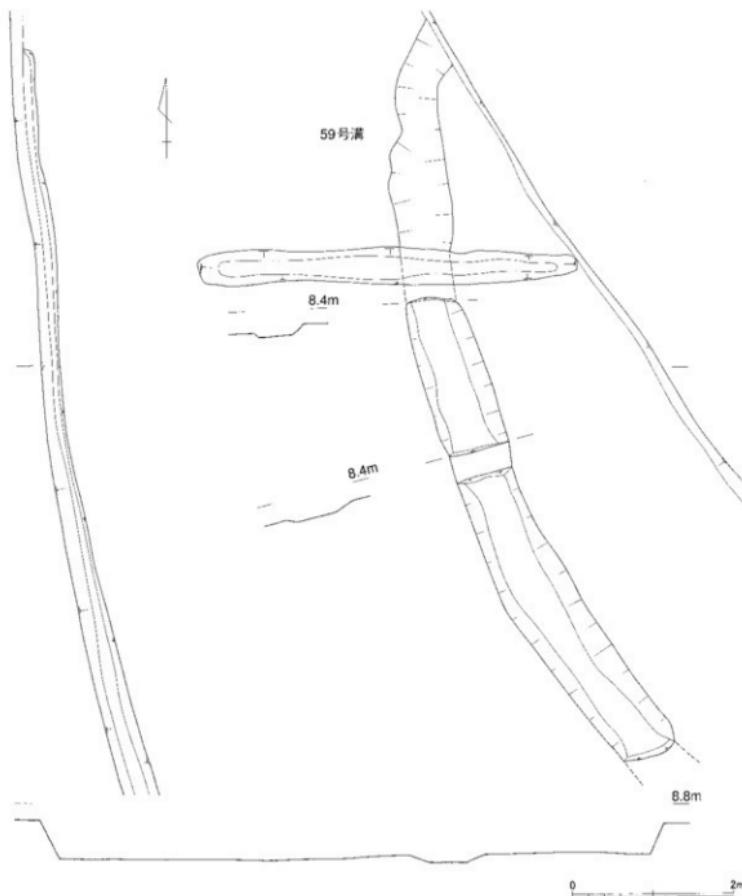
II区北端のN122～N102では、前出の礫層がほとんど見られない。遺物包含層である3褐色上層の堆積も薄く、地表面より約40cm下からは、赤褐色粘質土の地山面が検出される。大倉原地区的黄褐色の地山や、南側の青灰色砂質土とは土質・色調が異なる。この土は、当初は埋土の可能性もあるとして断割を行ったが、少なくとも40cm以上に渡って、無遺物の單一層として堆積しており、地山と判断した。N100付近より南側では明青灰色の細砂層が無遺物層として展開しているが、その間に明確な差ではなく、同一の堆積物による還元状態の差であろうと思われる。地表面の標高は8.7mで、耕作土が30cm堆積しており、遺構検出面までの高低差が極めて少ない。耕作土から地山面直上までの遺物の出土も、他の調査地に比べて極端に少ないが、少量の古代の須恵器が出土している。

調査区東壁N115付近からN100付近にかけて、円弧を描く溝（第12図）を検出した。この溝は検出長10.2mで、部分的な掘削によると、幅約90cm、深さ10～15cmとなる。板に円形に巡るとすれば溝の内接円の直径は約16mとなる。溝の埋土は暗褐色粘質土である。溝内からは古墳時代と考え



第11図 一貫戸Ⅱ区昭和44年調査区溝実測図 (S=1:60)

られる土師器片が出土しているが、いずれも細片で本来の形状を確認できる大きさではなかった。平成14年度以前の大舍原地区の発掘調査では古墳時代の遺物を出土する溝を多く検出しているが、いずれも水路と考えられる直線的なもので、円弧を描く溝は検出されていない。この溝は非常に浅く、溝の東西両岸の標高が一定で、高低差が無いことから、上面を削平されている可能性が高い。また、溝の時期は、付近の地山面直上から奈良時代の須恵器片が出土するのに対し、溝の内部からは古墳時代と考えられる土師器片が出土することから、古墳時代もしくはそれ以前に造られ、奈良時代以降に削平されたものと推定される。大舍原・日岸田地区の調査では、古墳時代と考えられる直線的な溝や土坑、堅穴建物跡などは確認されているが、円弧を描く溝は検出されていないことから、削平された小型の円墳の周溝であった可能性も考えられる。水路を挟んだ大舍原2区北調査区



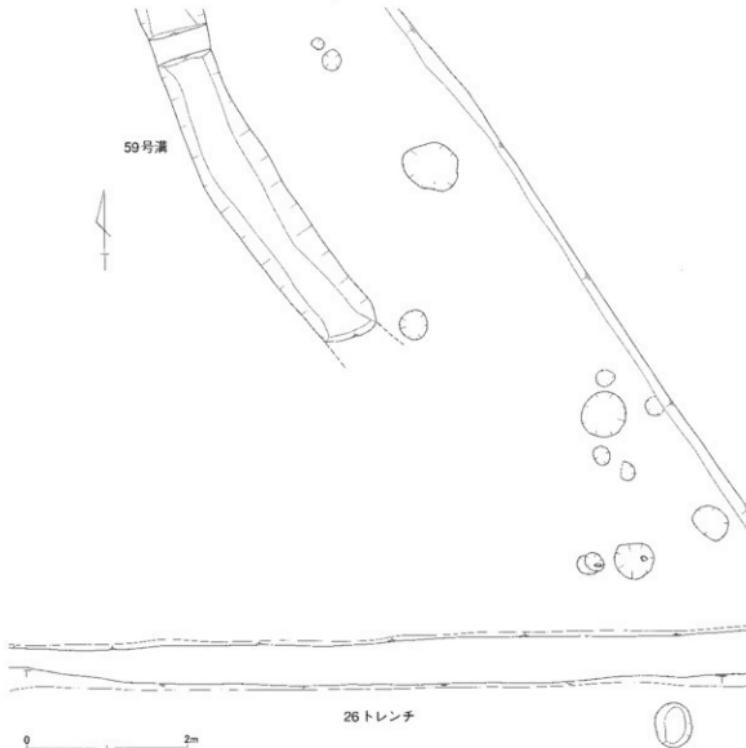
第12図 一貫房II区59号溝実測図 (S=1:60)

では、連続する溝の延長を確認できなかった。

### ③ N100付近の状況

N100線上では平成14年に26トレンチが設定されており、柱穴1基と落ち込みが確認されているが、N100より北側で、柱穴と考えられるピット14穴を検出している。ピットは不規則に展開しており、建物跡と考えられるような並びは確認できなかった。いずれも土器細片がわずかに含まれているのみで、時期・性格を推定できるような資料は得られなかった。しかし、検出面の表面観察から、ピットの内少なくとも2穴は前出の円弧を描く溝によって切られているように見え、溝よりも古い可能性がある。他のピットの埋土も同様の上である事から、いずれのピットも古墳時代かそれ以前のものと考えられる。

W70より西側は、西に向かって傾斜しており、明確な遺構は見られない。26トレンチの調査では、「軟質で、停滞した水付の堆積土」と報告されており、トレンチ外側でも同様の状況を確認した。疊層の広がりは、この付近には及んでいない。また、奈良・平安時代の遺構と考えられるものはこの付近では検出できなかった。



第13図 一貫房Ⅱ区N100付近遺構配置図 (S=1:60)

#### ④ N100以南の状況

N100に設定された26トレンチ以南では、西に傾斜して薄くなる礫層を確認している。礫層上面で、上部器柱状高台付皿が完形品に近い形状で、複数出土したことから、礫層を人工面と考えたが、礫層中にも同時期の遺物が多数含まれ、最終的には自然堆積と判断した。

N100以南では、明確な遺構を確認していない。後述するⅠ区で検出した護岸状施設は、Ⅱ区まで達しておらず、石敷き遺構も昭和44年調査区内でしか確認できなかった。昭和44年調査区に残されていた石敷き遺構は東西約1.3m、南北約5.3mの範囲で、調査区南東隅が標高8.3m、石敷き検出西端で8.1mとなっており、西に傾斜している。

26トレンチでは、トレンチ中程で地山面の落ち込みを確認しているが、平面的には明瞭ではない。第10図の標高8.0m線が26トレンチ検出の落ち込みにはほぼ一致するが、埋土も一定で変化が見られなかった。また、一貫尻Ⅰ区側の昭和44年調査区で検出されている西偏する南北方向の溝は、Ⅱ区南壁の土層堆積から、砂層中のレンズ状の堆積と認識できるものの、平面的には検出できなかった。

石敷き面より上面には古墳～中世に至る各時代の遺物が見られるが、石敷き面からの連続面である5暗灰色粘質土層下面出土遺物は、大半が古墳時代のものとなる。

### 3. 一貫尻Ⅰ区の遺構

#### ① 過去のトレンチの状況

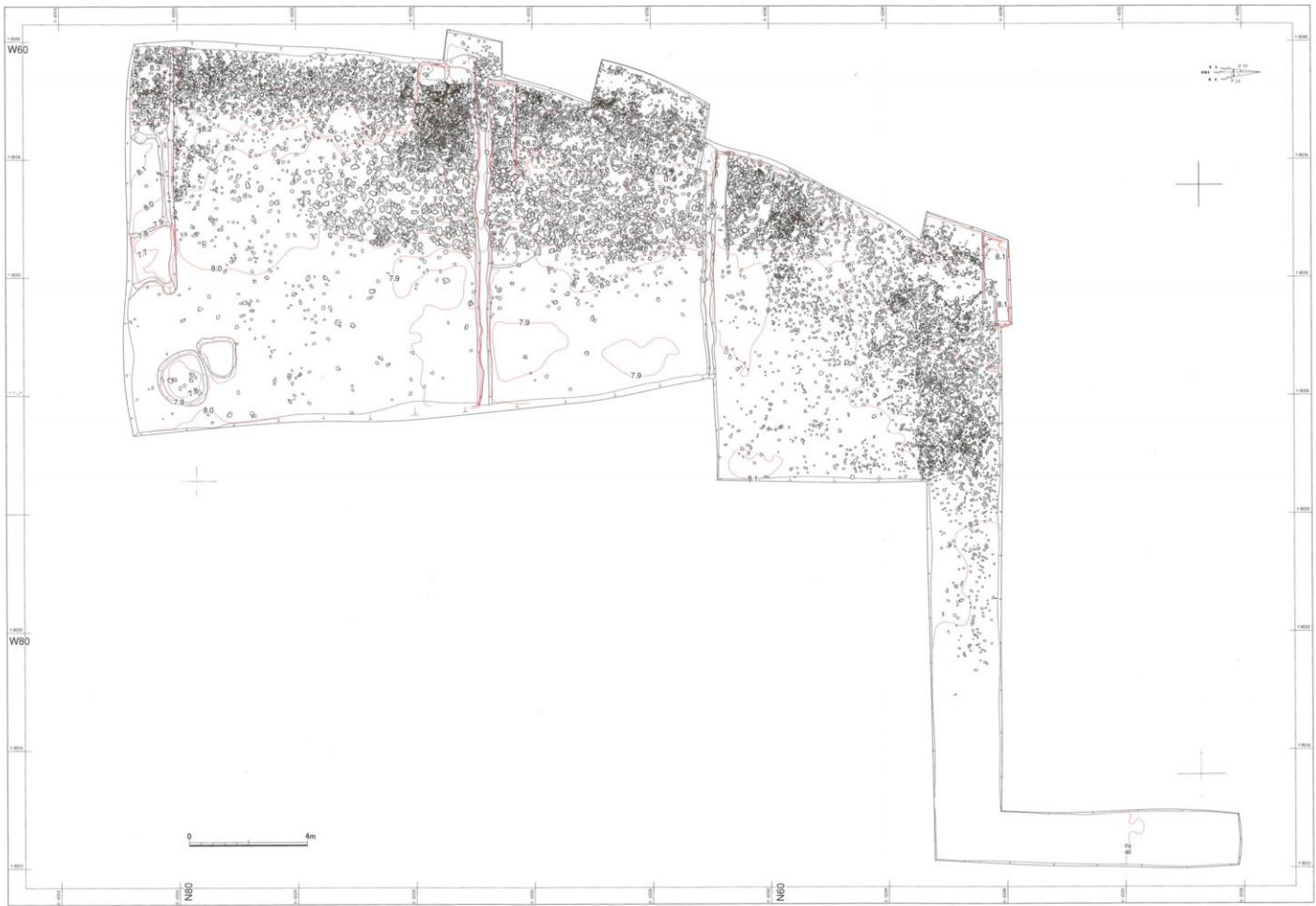
一貫尻Ⅰ区は、字一貫尻の南半に当たる部分で、当初は、東西約12m、南北約30mの三角形の調査区を設定した。耕作土直下で検出した礫層が、南端近くで西に廻っているように見えた事から、礫層を平面的に追いかけるために、南端から西へ8mのトレンチを、更にそのトレンチ西端から南へ6mのトレンチを拡張した。また、東側で2箇所、南東隅を一部拡張し、石の連続範囲を確認した。調査区中程のN62・N72には平成13年度19・20トレンチを、調査区北壁付近に昭和44年一貫尻調査区を含んでいる。

第15図の北壁沿いに見られるトレンチは、昭和44年の一貫尻調査区である。東側に石敷き面が残され、W68付近の等高線の落ち込みは溝である。この溝は下面の8暗灰色砂層を掘り込んで掘られており、Ⅱ区南壁土層図に見られる5暗灰色粘質土のレンズ状の堆積に続くものと見られる。調査区西隅には、土坑2基が見られる。この土坑は、『概報』に「古墳時代の土器が堆積する土坑」と記されているものと思われ、直径約190cm、深さ約20cmのものと、直径約120cm、深さ約20cmのものが接して掘られている。昭和44年のトレンチは、Ⅰ区西壁より更に26m西まで延びており、『概報』には「低湿地の窪地となる。そこからは土器、木器などが発見されたが、建物はまったくなかった。」と記されている。

平成13年度の19・20トレンチでは、「石敷き」を検出し、護岸状施設の可能性を記している。トレンチ周辺を確認したところ、『報告書1』で「石敷き」としたものは、本報告で護岸状施設とした遺構と、後述する石敷き遺構に分離できる事が確認できた<sup>(40)</sup>。また、『報告書1』ではN70W60の位置に土坑があると報告されていたが、耕作上面から掘り込まれている浅い溝状の、遺構ではないものは確認できたが、報告されている土坑は発見できなかった。大倉原地区16号土坑の西縁が伸びていた可能性もあったが、16号土坑の西端は一貫尻地区までは達していない可能性が高い。



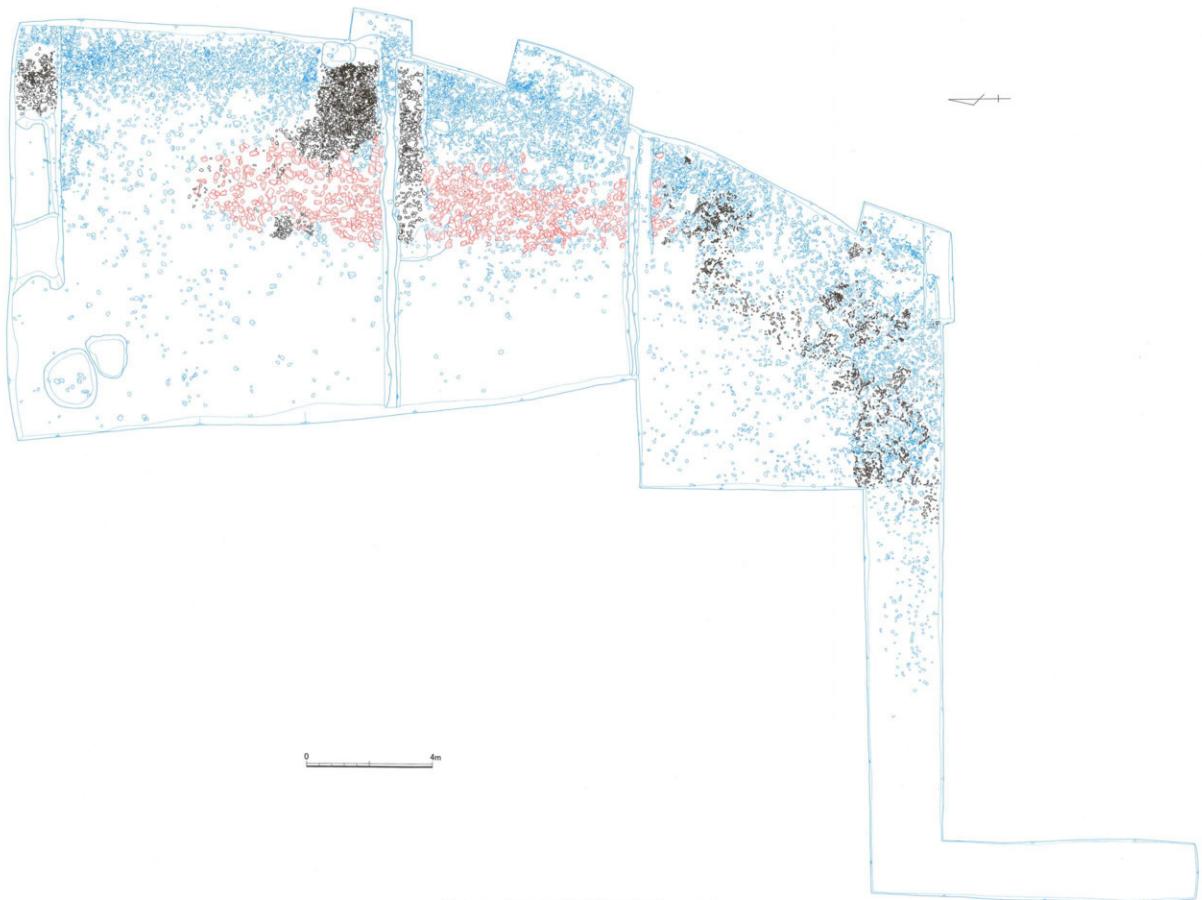
第14図 一貫房 II 区石敷き造構実測図 (S=1:120)



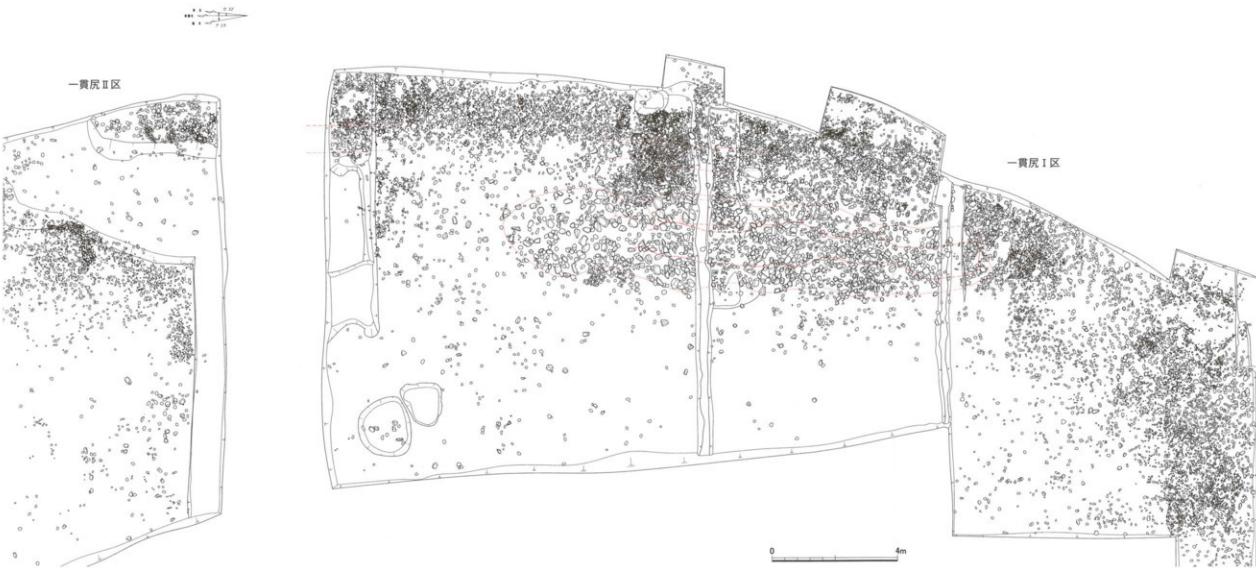
第15図 一貫尻 I 区実測図 (S=1:120)



第16図 一貫房Ⅰ区護岸状施設実測図 (S=1:120)



第117図 一貴房Ⅰ区石敷き遺構実測図 (S=1:120)



第18図 一貫尻地区護岸状施設・石敷き造構実測図 (S=1:120)

## ② 護岸状施設

N60~80、W65~67の間にかけては人頭大の石を蒲鉾形に積み上げた施設を確認した。この施設は南北17.6mで、東西幅は広いところでは3m近くにもなる。

N62付近で断割を行ったところ水平な基底面に石だけで積み上げたものではなく、下層の6褐色細砂層面が蒲鉾形に盛り上がっており、その上に更に高く積み上げたものであった（第8図）。6褐色細砂層面より護岸状施設最高所までの高さは15cm、西側の護岸状施設最低所と中程の最高所との高低差は17cmである。この護岸状施設より東は5暗灰色粘質土が入っており、人為的に埋め戻された土である可能性が高い。護岸状施設上面の標高は8.0m、5暗灰色粘質土上面の標高が7.8mで大倉原地区の遺構面検出標高7.8mにはほぼ一致する。この事から、元々低かった一貫尻地区において、大倉原地区の施設整備にかかるいすれかの段階に、大倉原地区施設群の敷地拡大のために造られたものと思われる。

大倉原地区の遺構との関係で言えば、ある時期の北限と考えられる9号建物・1号柵列の位置は、N85付近であり、護岸状施設検出北端のN80はわずかに届いていない。護岸状施設中程は、礫が密に詰まっており、本来の形状を留めているものと思われるが、北端側は、石が散在しており、次第に石が減っていって消滅する。N80より北については、上面礫層も深く入っており、堆積時に破壊されている事も考えられる。一方、検出南端のN60付近では、基底部標高が約8.3mであり、上面礫層も散在的になっている事から、元々護岸する必要がなかった可能性がある。

護岸状施設の石組み内に遺物は見られなかった。また、護岸状施設上面遺物も確認する事ができなかった。一方、護岸状施設東側の遺物包含層には多量の遺物が入っており、上面の礫が落ち込んでいる事から、上面礫層の遺物と分離できない。護岸状施設東側が、埋め戻しによる造成であるならば、包含層出土の一部は、護岸状施設設置に関わる可能性がある。

## ③ 石敷き遺構

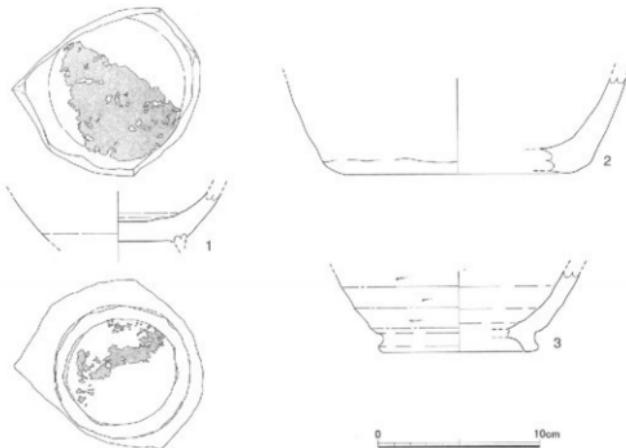
石敷き遺構は、19・20トレンチ周辺で確認した小礫を敷き詰めた面で、部分的な確認のため、全体の形状や範囲は不明である。調査区南端側に展開する石は、石の大きさや並び具合から石敷き遺構に伴うものと推定しているが、上面礫層とは明確には区別できない。

護岸状施設に断ち割を入れて確認した、N62付近では、護岸状施設下面まで石敷き遺構が展開しており、護岸状施設との間層には7灰色砂層が堆積している（第8図）。7灰色砂層は、遺物や石を含まないきれいな層で、水が流れていたものと考えられる。石敷き遺構は、W62付近で幅約2m、深さ約5cmほど窪んでいる。この事より、石敷き遺構は、玉石を敷き詰めて南北方向の溝状に窪んだ遺構と判断され、一貫尻II区・昭和45年調査区でわずかに見られる西に傾斜した石敷きも溝状に窪んだ部分の東肩と判断される。溝状に窪んだ部分は、検出状況からは一直線に南北方向に延びると判断され、南へ延長すると公園内北側東西溝であるSD034の北へ折れ曲がる部分に一致する。SD034は、公園内での調査範囲では、素掘りの溝であるため、連続性の可否や玉石を貼られる範囲は不明である。

## 4. 一貫尻地区出土遺物

### ① 石敷き遺構上面出土遺物

一貫尻地区では確実に遺物を伴う遺構は見られなかったが、伴う可能性が高いものとしては、右



第19図 一貫尻I区石敷き造構上面出土土器実測図 (S=1:3)

敷き造構上面の須恵器3点がある(第19図)。いずれも壺類で、坏・蓋は見られない。破片のみで、完形に近いものが見られないことから、石敷き造構を埋め戻した護岸状施設の設置に関わる可能性が高い。

19-1は高台を欠く須恵器壺の底部で、長頸瓶と思われる。内外面共に漆が付着している。高台部分はきれいに剥落しており、残された漆の状況から高台部分にも漆が付着していた可能性が高い。体部の破断面に漆の付着は無い。漆容器として使用されたものと思われるが、底部外面にまで漆が厚く付着する理由は判らない。

19-2は、無高台の壺か鉢と考えられる須恵器底部である。磨滅が著しく調整は不明である。

19-3は、高台付きの須恵器壺と思われるもので、長頸瓶であろうか。高台は強く太く張り出し、体部下半には回転ケズリが残る。底部の切り離しは不明である。

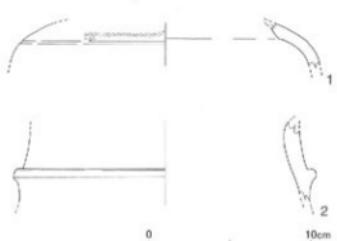
平成13年度の20トレンチでは、石敷き造構直上から須恵器高台付き壺の底部2点が出土している。この内1点は、内面に漆が付着し、底面は転用硯として使用されたと報告されている。

## ② 遺構に伴わない遺物

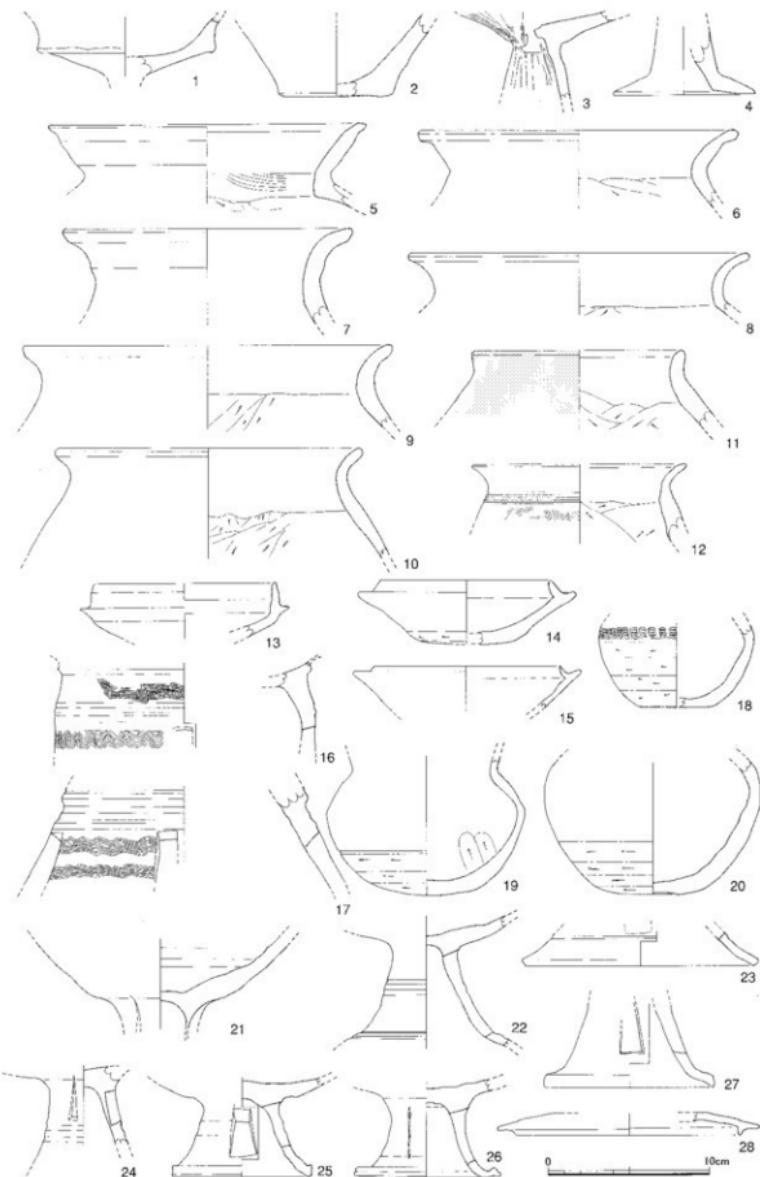
### 土器・陶磁器・土製品

第20図には、一貫尻I区で出土した古墳時代以前のものと思われる土器を図示した。

20-1は、弥生土器壺と思われるものの肩部である。櫛による列点文が見られるが、列点の内部には赤色顔料が残っている。20-2は山陰系瓶形土器の小片と思われるものである。いずれも磨滅が著しく細部の調整は不明である。



第20図 一貫尻I区出土弥生土器実測図 (S=1:3) 第21~25図は、一貫尻II区から出土した土器・土



第21図 一貴尻Ⅱ区出土土器実測図（1）(S=1:3)

製品である。

21-1・2は弥生土器と思われるものである。21-1は高坏である。坏部下方に稜があり口縁部は外反させるようである。脚部の形状は不明である。21-2は、底部の破片である。いずれも磨滅が著しく、細部の調整は不明である。

21-3・4は、土師器高坏の脚部である。古墳時代のものと思われる。

21-5~12は、土師器壺である。21-11は、短頸のものである。21-12は、小型の壺で頭部に櫛書きの沈線を施す。

21-13~15は、須恵器壺である。21-13は高く直立するカエリを持つものである。小片から反転復元図のため口径が小さく出たが、出雲4期<sup>(20)</sup>に含まれるものか。21-14・15は、カエリを内傾させるもので、21-15はカエリが非常に低い。出雲5~6期のものであろう。

21-16・17は、須恵器器蓋と思われるものである。脚部外面に櫛書き波状文を施し、長方形のスカシを四方向に開けるものと思われる。21-16・17は、文様が似ており、同一個体の可能性も考えられるが、色調は異なる。包含層上であり元位置は不明だが、一貫尻II区には、古墳周溝の可能性もある溝がある事から、そうしたものに伴うものかもしれない。一貫尻I区では、朝顔形埴輪の可能性がある土製品(26-9)も出土している。

21-18は須恵器壺である。胴部中程に刺突文を施し、胴部下半までヘラケズリを施している。出雲5期のものか。

21-19・20は、小型の須恵器壺である。いずれも高台は無く、胴部下半までヘラケズリを施す。

21-21~26は、須恵器高坏の内、脚部にスカシを開けるものである。スカシが2段に聞くものは確認できない。21-21・24は三角形の、21-25は四角形のスカシを開ける。21-26は線のみである。

21-28は、カエリを持つ須恵器蓋である。つまみの形状は判らない。

22-4は、口縁端部を大きく垂下させる須恵器蓋で、輪状つまみが付くものと思われる。回転編年の第3形式<sup>(21)</sup>に含まれるものと思われる。

22-2~5は、須恵器蓋である。22-2は宝珠状つまみの破片である。22-3~5は、口縁端部をほとんど垂下させないので、扁平なもの(22-3)、高さのあるもの(22-4)、端部近くに強い屈曲の見られるもの(22-5)がある。22-3・5は宝珠状つまみを持つものと思われるが、22-4は、高い輪状つまみを持つ可能性がある。いずれも第4~5形式に含まれるものと思われる。

22-6~8は、須恵器高台縁部である。口縁端部を屈曲させるもの(22-6・7)と、丸くおさめるもの(22-8)がある。第4~5形式に含まれるものと思われる。

22-9・10は、無高台の須恵器高台底部である。底部に回転糸切り痕を残している。

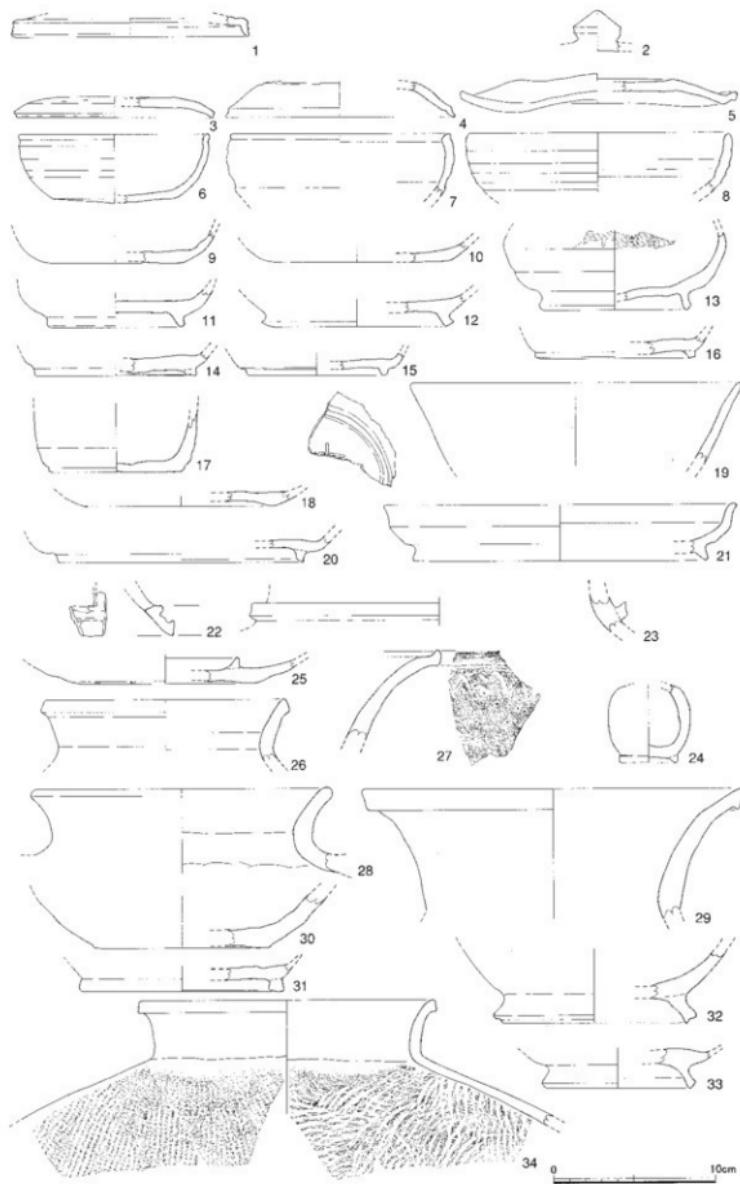
22-11~13は、須恵器高台付帯の内、高台の高いものである。22-13の口縁部には油煙が付着しており、灯明に使用された事が判る。22-11は、静止糸切りの可能性がある。

22-14~16は、低い高台を持つ須恵器高台である。22-15の底部外面にはヘラ書き「□」が見られる。22-14は、底部切り離しがヘラ切りである。

22-17は、須恵器の体部が直立するもので、内面に強い調整を残していないことから壺と判断されるものである。酸化炎焼成され、明赤褐色を呈しているが、硬質である。

22-18は、無高台の須恵器皿である。回転糸切り後にナデ調整を行っている。

22-19は、大型の須恵器高台縁部である。体部を直線的に延ばし、口縁部をわずかに外反させ



第22図 一貫房Ⅱ区出土土器実測図(2) (S=1:3)

る。国府編年の第5形式かそれ以降のものである。

22-20・21は、須恵器高台付皿である。22-21は、体部中程で屈曲する大型の皿で、第4～5形式のものと思われる。

22-22・23は円面碗である。22-22には方形のスカシが見られる。一貫尻IIbでは、転用碗を含めても確認できた硯はこの2点のみで、大倉原地区を含む他の調査区と比べ硯の出土が少ない。

22-24は、小型の須恵器壺である。ヘラ切りによって切り離しを行い、ナデ調整する。

22-25は、焼き垂みの大きな蓋にも見えるが、高台の無い托と判断した。受部は短く断面三角形を呈す。磨滅が進んでおり、細部の調整は不明である。出雲国府跡では托は珍しくないが、ほとんどが高台の付くもので、無高台のものは少ない。

22-26～29・34は、須恵器壺の口縁部である。22-26は口縁部の短いものである。内面にわずかに自然釉の付着が見られる。22-27は、口縁部外面にヘラによる波状文を施すものである。同様のものは小松古窯跡群<sup>20</sup>などに見られ、9世紀代のものであろうか。22-29は、頭部から口縁部が長く延びるもので、口縁部を垂下させる。口縁部外面には文様は見られない。

22-30・31は、須恵器壺の底部である。22-30は無高台で、体部が大きく開くものである。底部にはヘラ起こしと思われる痕跡を残す。22-31には、しっかりした高台が貼り付く。底径の大きさと、内面調整の難しさから壺と判断したが、体部の器壁が薄く、大型の壺の可能性も否定できない。

22-32・33は、須恵器長頸瓶と考えられるものの底部である。いずれも高台が大きく張り出す。22-33外面にはわずかに自然釉が付着する。

23-1は、大型の土師器高台付き皿である。磨滅が著しく調整は不明である。

23-2～67は、平安時代中頃から後半の土師器と考えられる。

23-2・3・5～7は、無高台の土師器壺で、確認できたものはすべて回転糸切りによって切り離される。いずれも底部に明確な段を持ち、円盤高台状に仕上げるものである。23-3は、体部が内湾気味に立ち上がる。23-7は底部断面に接合痕が見られる。

23-4は、黒色土器碗である。回転糸切り痕を残し、黒色化処理を施された内面には丁寧なヘラミガキが見える。外面は淡黄褐色を呈する。過去の大倉原地区の調査では、土師器内面を黒色化処理し、ヘラミガキを行わないもの（『報告書2』24-10、27-12、42-48）が出土している。ヘラミガキのある黒色土器は、宮の後地区出土遺物に含まれている可能性が高い。

23-8～10は、土師器高台付き壺の内、底径の小さいものである。いずれも高台を強く張り出している。

23-11は、大型の土師器高台付き壺である。厚い器壁を持ち、体部は直線的に延びる。

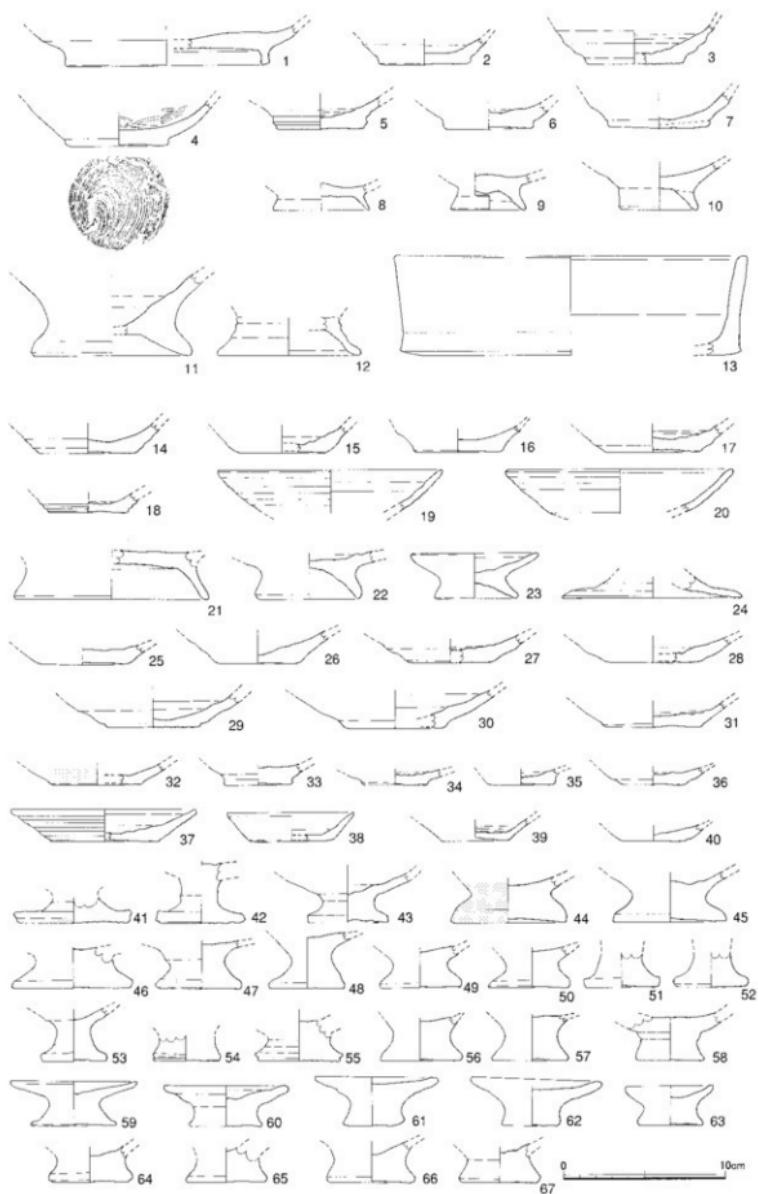
23-12は、土師器壺の高台部分であるが、別作りの壺部が剥離したものである。

23-13は、大型の壺であろうか。復元底径が21cmと大きく、体部は垂直に近い。底面は丁寧にナデされており、口縁部は丸くおさめる。器種の上下も明らかでない。

23-14～18は、無高台の土師器壺と考えられるものの内、底部外面に段を持たないものである。確認できるものは、いずれも底部に回転糸切り痕を残している。

23-19・20は、土師器皿の口縁部である。体部がわずかに内湾し、口縁部は外側にわずかに面を持つ。外面には、回転ナデの痕跡を強く残す。

23-21は、高い高台を持つもので、壺と判断した。磨滅のため切り離しは不明である。内面に煤



第23図 一貫房Ⅱ区出土土器実測図(3)(S=1:3)

が付着している。

23-22・23は、いわゆる足高高台の皿である。高台を「ハ」字形に強く張り出し、全面ナデ調整される。23-22は、扁平な皿部を持つと思われるものであるが、23-23は、見込みがやや深い。

23-24は、断面形状から脚部と判断したが、器種は不明である。脚端部を尖らせ、基部に向けて急激に厚く作る。

23-25~31は、無高台の土師器皿と判断したものである。底部外面に段を持つもの（23-29・30）も見られる。

23-32~37・39・40は、土師器小皿である。底部に段を持つもの（23-25~35）が見られる。23-37の外面には強い回転ナデの痕跡を残している。23-32は、体部外面に赤彩の痕跡が見られる。23-38は器高の低い坏形態のもので、内面に煤が付着している。

23-41~67は、柱状高台付皿で、確認できるものは底部に回転糸切り痕を残している。43-23などの足高高台付皿を祖形に作られたものと想像されるもの（23-59）も見られるが、細部の器形は多種に分かれており、分類は困難である。皿部の形態を留めるものはほとんどないが、見込み部分の状況からは、深い椀形を呈するもの（23-43~45）と、扁平な皿形を呈すもの（23-59~62）があり、脚端部の形状には、外へ大きく張り出し外面に明瞭な面を持つもの（23-41~43）、端部の面が明瞭でないもの（23-44~47）、柱状部から脚端部が連続的に延びるもの（23-48~67）、が見られる。また、柱状部は比較的長いもの（23-42）と、短いもの、中間的なものがあり、皿部の形状や、脚端部の形状との相関関係は見い出しづらい<sup>(25)</sup>。全体形状の判るものは23-59~63があり、いずれも脚端部は柱状部から連続するが、23-63だけが皿部の形状が異なる。いずれも柱状部が短いもので、脚端部が張り出すものとは時期か製作地が異なると思われる。23-44の皿部内面には、赤彩の痕跡が見られる。23-48は雑に作られており、皿部が曲がって取り付く。23-59は皿部・脚端部共に薄く丁寧に仕上げられている。

第24図には、一貫尻II区出土の上製品を示した。いずれも時期は不明である。

24-1~3は、瓶の把手である。24-3には煤の付着が見られる。24-1は、把手が傾斜して取り付けられる短いもので、24-2・3は水平に延びる長いものである。

24-4は、土製支脚の受部である。一部が被熱して赤変している。

24-5~7は、土製支脚の脚部である。24-6には、煤が付着する。

24-8~11は、移動式竈である。24-9の外面にはハケメが残る。24-8は、焚き口の底と考えられる。24-9・10は基部である。24-11は、焚き口右側の鰭部分と思われる。いずれも磨滅しており、被熱痕は確認できない。

24-12は、断面長方形の棒状を呈した土製品で、把手もしくは三足鍋の脚部であろうか。黄褐色を呈し、強い指ナデの痕跡を多く残す。被熱痕は見えない。

24-13・14は、土錘である。24-13は球形を呈し、直径約8mmの穴を開ける。約85gである。

24-14は、紡錘形を呈すもので、直径約6mmの穴を開ける。約10gである。

25-1は、中世須恵器の壺の体部である。外面には格子状タキ貝の痕跡を明瞭に残し、カキメが見える。内面は横方向のハケメで調整される。

25-2は、胴部中程に突帯を巡らす須恵器壺である。胴部下半にはケズリを残している。内面調整は、ナデである。



第24図 一貴戸II区出土土器品実測図 (S=1:3)

25-6は、東海系の山茶碗<sup>(26)</sup>と思われるものである。復元口径22cmにもなる大型品で、片口鉢であろうか。体部から口縁部にかけて直線的に開くもので、底部近くの器壁が厚い。体部外面下半には削りの痕跡を強く残している。黄灰色の釉を薄くかけられたと思われるが、内外面とも口縁部をわずかに残し、体部上半には残っていない。11世紀後半から12世紀代のものと考えられる。内面の釉は、帯状に削り落ちている部分が見られ、横方向の強い摩擦を受けている事が判る。砂粒が外れた器面の小さな窪み部分には、赤色顔料が見られる。この赤色顔料は、ケイ光X線分析により、水銀朱である事が判明した<sup>(27)</sup>。山茶碗片口鉢を使用して、水銀朱を磨り潰したものであろうか。

25-3~5・7は、古墳時代の須恵器類である。

25-3・4は、頂部にケズリを持つ古墳時代の須恵器蓋で、頂部にヘラ記号「/」がある。いずれも銳利な工具で付けられている。

25-5は、還元炎焼成された角状のもので、把手と考えられる。本体側に穿孔して差し込んだ痕

跡が見られ、軟質土器の鉢であろうか。大倉原地区では把手を欠損したカップ形の鉢（『報告書1』31-11）が出土しており、同様のものと考えられる。

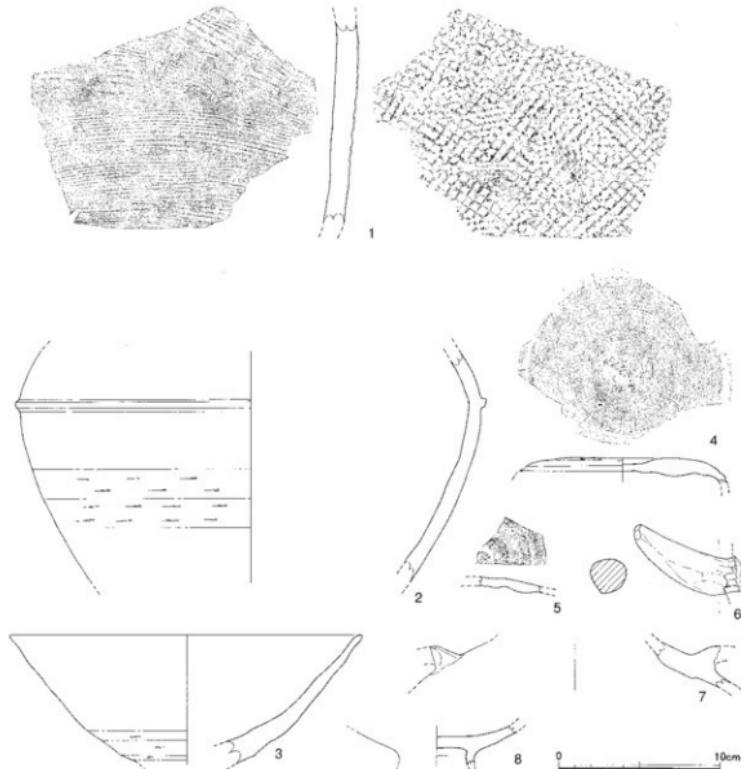
25-7は、須恵器提瓶の小片である。

25-8は、土師器の高环であるか。時期は不明である。

第26~31・36図には、一貫戸I区から出土した土器・陶磁器・土製品を図示した。

26-1~5は、古墳時代の土師器高环である。26-1は明確な稜を持つ直線的な坏部で、内面に放射状のヘラミガキを施している。磨滅により明瞭でないが、脚部外面にもミガキが施される。26-1は、筒部が円筒形を呈する脚部で、外面にヘラミガキが見える。26-3は、内湾する坏部を持つものである。坏部外面下方に、わずかにハケメを残し、脚部もナデ調整である。26-4は直線的に聞く脚壠部の小片である。外面に横方向のハケメが残る。26-5は、脚部のみの破片である。磨滅により外面調整は不明である。26-1は松山編年の2期新相<sup>280</sup>、26-3は同3~4期に含まれる。

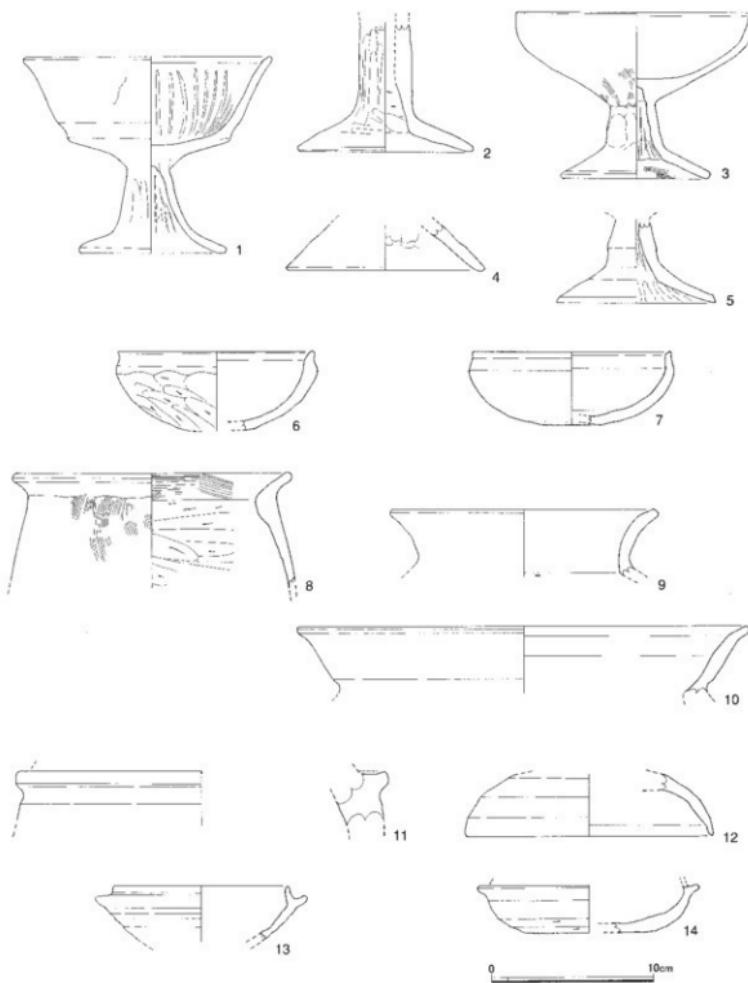
26-6・7は、丸底の土師器坏である。体部に丸みを持ち、口縁部を屈曲させる。口縁部は、丁



第25図 一貫戸II区出土土器実測図(4) (S=1:3)

寧にヨコナデされる。口縁部を除く外面には手持ちハラケズリの痕跡が顯著に残る。28-30は赤彩していると思われる。5世紀代のものと考えられる。

26-8~10は、土師器壺である。26-8は、頸部を強く折り曲げるもので、体部外面と口縁部内面にはハケメを残す。口縁端部にはわずかに面を持つ。外面に煤が付着している。26-9は頸部を屈曲させるものである。磨滅のため外面調整は不明である。26-10は、口縁部を直線的に延ばすものである。口縁端部近くを緩く折り曲げ、端部には小さな面を持つ。



第26図 一貴尻I区出土土器実測図(1) (S=1:3)

26-9は、酸化炎焼成された突帯を持つ土製品である。突帯部分のみが残存しており、器壁が厚く緩やかに内湾する器形と言う事以上の形状は判らない。胎土中に白色の砂粒を多く含んでいることから、朝顔形埴輪の肩部で、突帯はタガの可能性がある。

26-10は、古墳時代の須恵器蓋である。頂部に削りの痕跡は見えない。小片のため、口径が大きく出ている可能性がある。出雲5期のものと思われる。

26-11・12は、古墳時代の須恵器坏である。26-11は、低いカエリを内傾して付けるもので、口径が小さい。出雲6期のものであろう。26-12は、底部外面にケズリを残すものである。カエリは破断しているが、直立気味に付くものと思われる。出雲4期に含まれるか。

27-1~5は、輪状つまみを持つ須恵器蓋である。いずれも、輪状つまみは外傾し、低い。つまみの外側には回転ヘラケズリを施している。27-1~3は、扁平な体部を持ち、口縁部を明確に垂下させるものである。27-4の内面には墨痕が、24-5内面には研磨痕が見られ、転用硯として使用されたものと思われる。

27-6は、小型の須恵器蓋である。口縁端部を短く垂下させるもので、宝珠状つまみを持つものであろうか。

27-7~9は、宝珠状つまみを持つ須恵器蓋である。つまみの形状には、紡錘形を呈すもの(27-7)、高さの低いもの(27-9)などがある。27-7・9の内面には、研磨痕が見られ、転用硯として使用された可能性がある。

27-10~14は、口縁端部をわずかに垂下させる須恵器蓋である。27-14は、器高が高く、頂部が半らになるもので、第4~5形式に含まれるものだろうか。27-12・14の内面には研磨痕が見られ、転用硯に使用された可能性がある。

27-15は、口縁端部を垂下させない須恵器蓋である。つまみの形状は判らない。口縁部は、体部から直線的に横方向へ延ばすもので、口縁端部は尖り気味になる。

27-16は、大型の須恵器蓋である。口縁端部は外面にわずかに面を持つが、垂下は非常に短く、断面三角形を呈す。

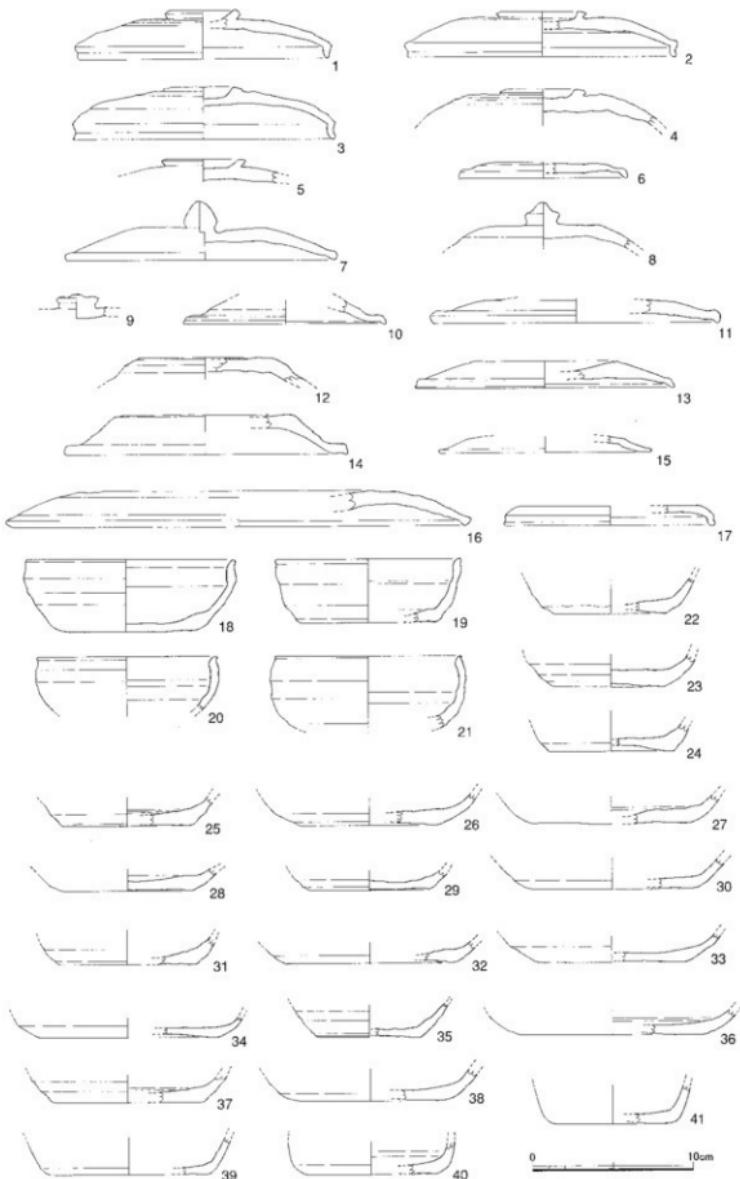
27-17は、口縁部を緩やかに折り曲げる須恵器蓋である。壺に伴うものであろうか。

27-18~41は、無高台の須恵器坏である。体部上方に屈曲のあるもの(17-18)、口縁部を屈曲させるもの(27-19・20)、口縁部内面に面を持つもの(27-21)などが見られる。また、27-39は、やや直線的に体部が延び、器壁が薄い。27-40・41は、体部が直立する。確認できるものはすべて回転糸切り痕を残しており、静止糸切りは見られない。

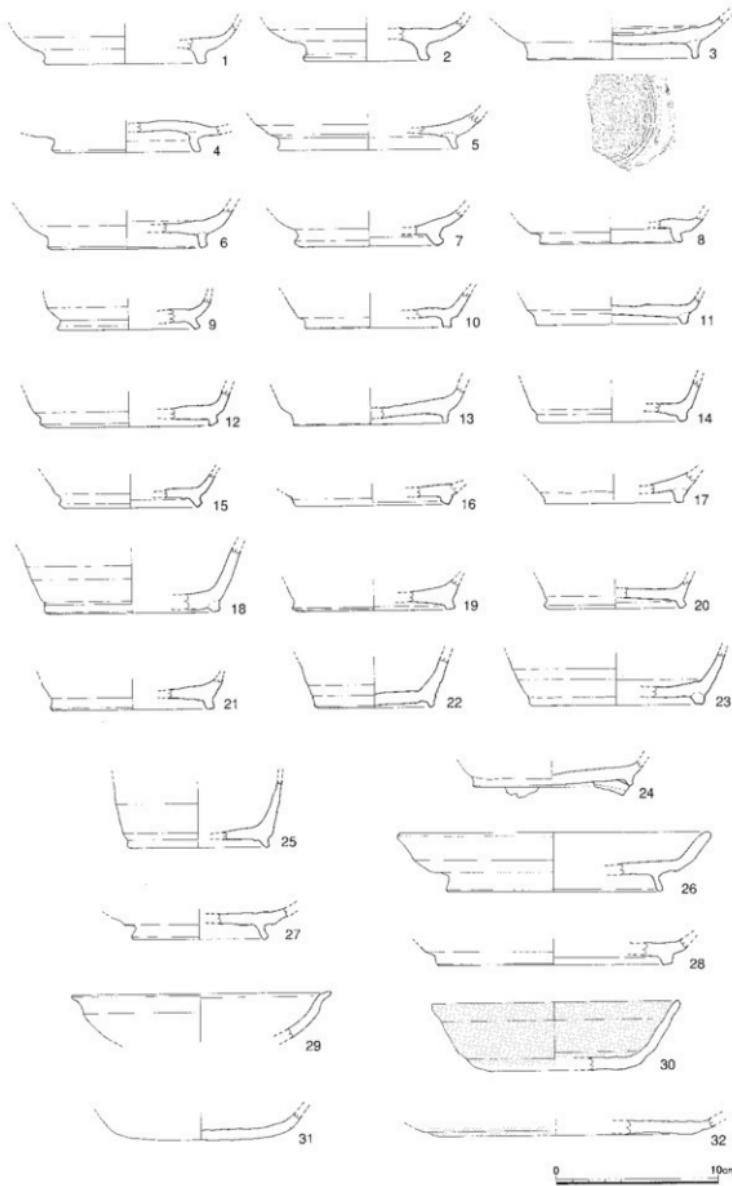
28-1~3・5~25は、高台付きの須恵器坏である。高台が高く、体部が内湾気味に立ち上がるものの(28-1~3・5~9)と、低い高台を持ち直線的な体部のもの(28-10~25)がある。確認できるものはすべて回転糸切りによって底部の切り離しを行っている。28-3は、高台取り付け時に、回転を利用してヘラで押さえつけたものと思われ、高台内側に沈線が巡る。28-24は、黒灰色を呈し、底部に他の土器が窓着している。

28-4・26~28は、須恵器高台付き皿である。28-26は、体部中程で折り曲げるもので、口縁部の屈曲は小さい。

28-29は、土師器の坏であろうか。口縁部を外側に強く屈曲させるものである。内面に煤が付着している。



第27図 一貫房1区出土土器実測図(2) (S=1:3)



第28図 一貫尻I区出土土器実測図(3) (S=1:3)

28-30・31は、器壁が薄く、平らな底部を持つ土師器坏である。28-30は、体部が直線的に立ち上がるるものである。いずれも磨滅しており、底部切り離しは不明である。28-31は、赤彩している可能性がある。

28-32は、土師器の皿である。底部には回転糸切り痕が観察される。

29-1～7は、無高台の須恵器坏の内、体部が直線的に立ち上がるものである。小型のもの（29-1・2）や、大型のもの（29-3・7）などが見られ、法量の差が大きい。29-6・7の体部中程には突帯が巡る。突帯の巡る坏は、大倉原地区の過去の調査では16号土坑から出土しているほか、包含層中からは少量が出土しており、高台が付くものと思われる。9世紀後半代のものであろうか。

29-8は、須恵器壺の胴部である。丸みを持つ体部を持ち、体部中程に突帯が貼り付けられるものである。突帯が巡るという特徴から、29-6・7と同時期のものであろうか。

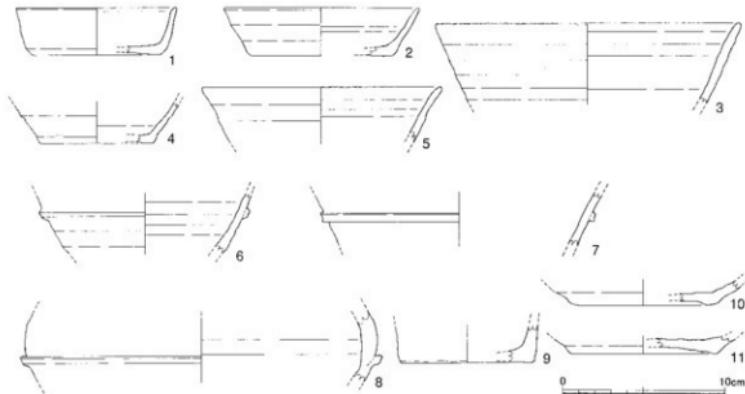
29-9は、器壁が厚く、体部が直立するものである。淡灰色を呈し、底部には回転糸切り痕が観察される。細身の壺と考えられる。明灰色を呈し、硬質に焼成されるもので、内面には、回転によるナデの痕跡を強く残している。

29-10・11は、無高台の須恵器皿である。底部に回転糸切り痕を残し、体部が直線的に延びるもので、体部の開き方以外には、坏との形態差がないものである。灰色を呈し、焼成がやや甘い。同様のものは古曾志平廻田4号窯などで出土しており<sup>20)</sup>、9世紀末から10世紀初頭のものと思われる。29-10の内面には墨痕が見られ、転用観の可能性がある。

30-1は、小型の須恵器壺と考えられるものである。器壁が厚く、高台は断面方形である。体部は内湾しながら立ち上がり、外面にはケズリの痕跡を残す。

30-2は、器壁が厚く高台の付くものであるが、内面に指ナデの痕跡を強く残すことから、壺と判断した。底部最外周に、細い高台を外傾させて取り付けている。

30-3は、須恵器長頸瓶の頸部である。内面に漆が厚く付着しており、漆容器に使用されていたものである。



第29図 一戸居I区出土土器実測図(4) (S=1:3)

30-4は、体部下半の外面にタタキ痕を残す壺である。外に張り出す高台を持ち、体部下方の外面には、木目の目立つ平行タタキを施している。体部下方には、回転ヘラケズリが施されるが、タタキ痕を消しきれていない。見込み部には漆が厚く残っており、破断面にも付着している。一部では、破断面の途中まで漆が染み込んだ状態になっており、ひび割れ内に漆が浸透した様子が見える。破断面まで漆の付着が見られる資料は、大倉原地区3号溝出土の壺(51-1)があり、大倉原地区や宮の後地区では、壺に木栓をして漆容器とした例も知られている。破断面の漆の付着は、長頸瓶や壺などを漆容器として使用し、その容器を破壊して漆を取り出していた状況を示すものと思われる。大倉原地区的調査では、4号溝出土遺物などで、壺内面の漆の付着が目立っており、漆紙文書も出土していることから、木製品製作との関係が推定されているが、一貫尻地区においては確認できたすべてが破碎された壺類で、漆を集積した様子しか確認できない。

30-5~10は、長頸瓶と思われるものである。30-5は、内面にわずかに漆の付着が認められる。30-6は、底部外面に静止糸切りの痕跡を残すもので、高台が剥離している。

30-11・12は、高台を持つ須恵器壺の内、体部が直線的に立ち上がるものである。30-12は外面にはヘラケズリの痕跡を多く残す。

30-13~17は、無高台の須恵器壺か鉢である。30-17は、小片ではあるが、大型の鉢である可能性が高い。

30-18は、須恵器鉢である。壺類と同様のタタキ痕を残し、口縁部外面に1条の沈線が引かれ、端部は丸く収める。内面の同心円押さえ具痕は、口縁部近くのみナデ消される。

31-1は、須恵器壺の体部である。肩部外面には細かい平行タタキをナデ消し、下半にはカキメを施した様子が見える。内面に押さえ具の痕跡は見えない。

31-2は、須恵器壺の口縁部と思われるもので、端部をわずかにつまみ出している。口縁部外面には文様は見えない。

31-3は、口縁部外面を玉縁状に膨らませるもので、須恵器壺の口縁部であろうか。

31-4は、高台の付く小型の須恵器壺で、壺であろうか。底部には回転糸切り痕を残し、貼り付けた高台が欠損する。体部下半にはヘラケズリの痕跡を残している。穿孔は見られない。

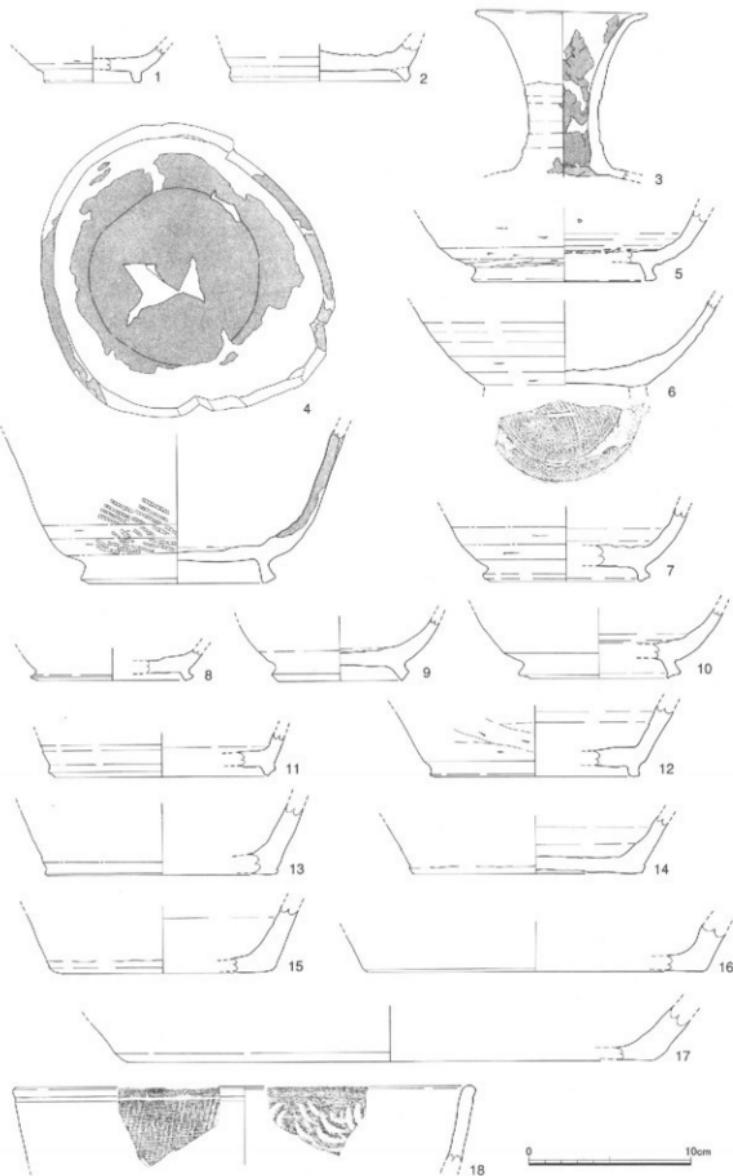
31-5は、須恵器の双耳壺と思われるものの耳である。外周をヘラで粗く面取りし、直径8mmの円孔を開ける。内面はナデ調整される。暗青灰色を呈し、硬質に焼成される。

31-6・7は、須恵器の把手で、鉢に付くものであろうか。31-6の内面には壺類と同様の同心円文の押さえ具痕を残しており、把手の取り付け痕跡を残していない。把手は外面側から貼り付けられており、強いナデを残す。31-7内面はナデ調整され、押さえ具の痕跡を残さない。外面には平行タタキの痕跡を多く残している。

31-8は、須恵器高壺である。脚部にスカシは無く、壺部は扁平な皿状になると思われる。

31-9~11は、円面硯である。いずれも長方形のスカシが開くと思われる。31-11はスカシの一辺しか残存していないが、スカシが閉かない部分が少なくとも4cm続いている、スカシの間隔が広い。

31-12は、風字硯と思われるものである。底部から外面はヘラケズリによって整形されている。底部の形状から、斜めに接合した海部分の破片と思われる。使用痕は明瞭ではない。明灰白色を呈し、硬質に焼成されている。

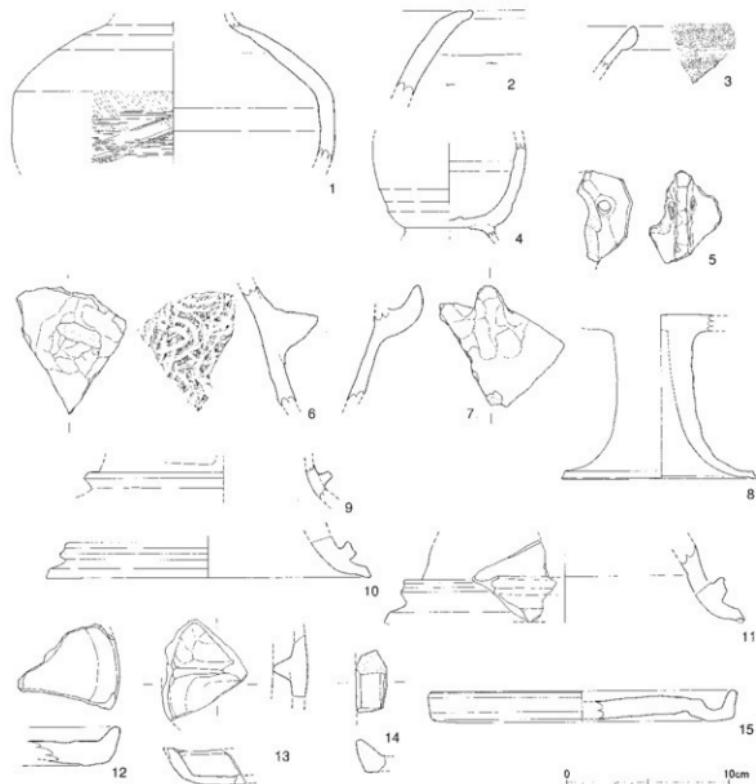


第30図 一貫房 I 区出土土器実測図 (5) (S=1:3)

31-13は、2面の風字硯であろう。小片のため、全体形状が不明だが、二面に分けられた海部分と考えられる。面の境は撫でつけて貼られており、外面にはケズリの痕跡を残す。淡青灰色を呈し、硬質に焼成されている。

31-14は、長方硯の一部と考えられる細片である。丁寧に整形されており、調整痕を残していない。暗青灰色を呈し、硬質に焼成されている。

31-15は、非常に丁寧な作りの円面硯である。大倉原地区4号溝下層で出土したもの（『報告書1』58-132）と接合した事により、脚が付く事が判った。硯面の陸の部分の外周には重ね焼きの痕跡が明瞭に残っており、硯面に灰が被らないように配慮して焼成されている。『報告書1』58-132は、破片2点があり、高さ約2cmの脚が2点共に残っている。その内の1点と接合し、脚の付かない部分が、円周の1/4を越えた事から、脚は3本であったと考えられる。『報告書1』58-132の脚は、底部が平らで、側部と背部が面となり、外周に面した部分のみが丸く面取りされている。脚端部が外側へ張り出すように加工されているが、指などの表現は無い。



第31図 一ノ丸I区出土土器実測図(6) (S=1:3)

大倉原地区4号溝と一貫尻地区は、直線距離でも80m以上離れている。一貫尻地区でのこの円面硯の出土位置はN77E65グリッドの疊層中で、護岸状施設の東側に当たる。前述のように、護岸状施設東側の埋土は上面疊層と区別できないため、護岸状施設に伴う可能性もある。一方、大倉原地区4号溝は人為的に埋め戻されている可能性が高く、平安時代末頃の堆積と考えられる上面疊層の遺物が下層にまで入り込む可能性は低い。よって、31-14は、護岸状施設によって下面の石敷き造構を埋め戻した時点で入り込んだ可能性があり、護岸状施設の設置と4号溝の埋め戻しが同時に行われた可能性を示すと思われる。

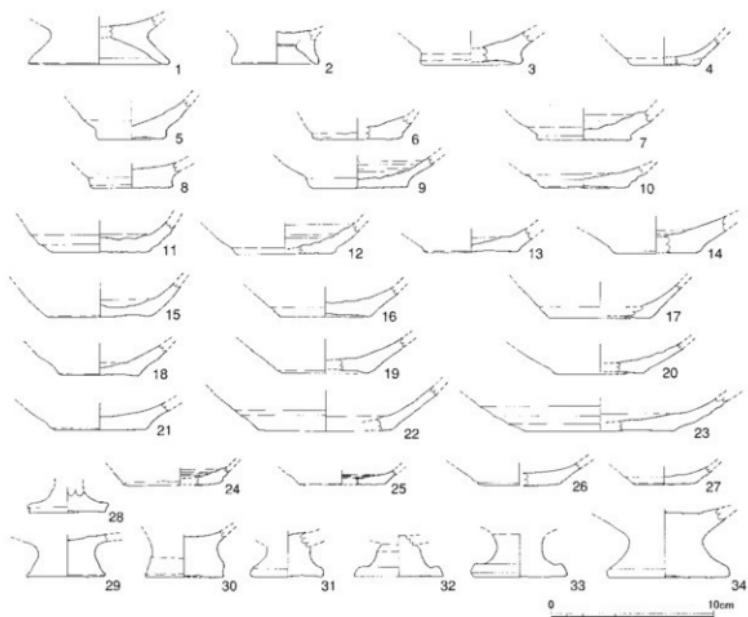
第32図には、古代末から中世の土器を示した。この時期の遺物は一貫尻Ⅱ区に比べ少なく、破片も小さいものが多い。

32-1・2は、土師器高台付坏である。31-1は、高台が高く大きく張り出するもので、坏部の形状は不明である。大型品と思われる。32-2は断面三角形の高台が直立気味に付くものである。いずれも磨滅が著しく調整は不明である。

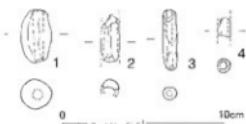
32-3~23は、土師器坏か皿と思われるものである。32-3~14には底部外面に高台状の段を持ち、この内32-4の底部には、接合痕が観察される。

32-24~27は上器小皿で、いずれも底部に回転糸切り痕を残している。

32-28~34は柱状高台付皿である。32-28・32・33は、脚端部を外へ大きく張り出し、外側に面を持つ。これらは柱状部が短い可能性が高く、皿部は楕形になると想像される。32-29・30は、脚



第32図 一貫尻I区出土土器実測図(7) (S=1:3)



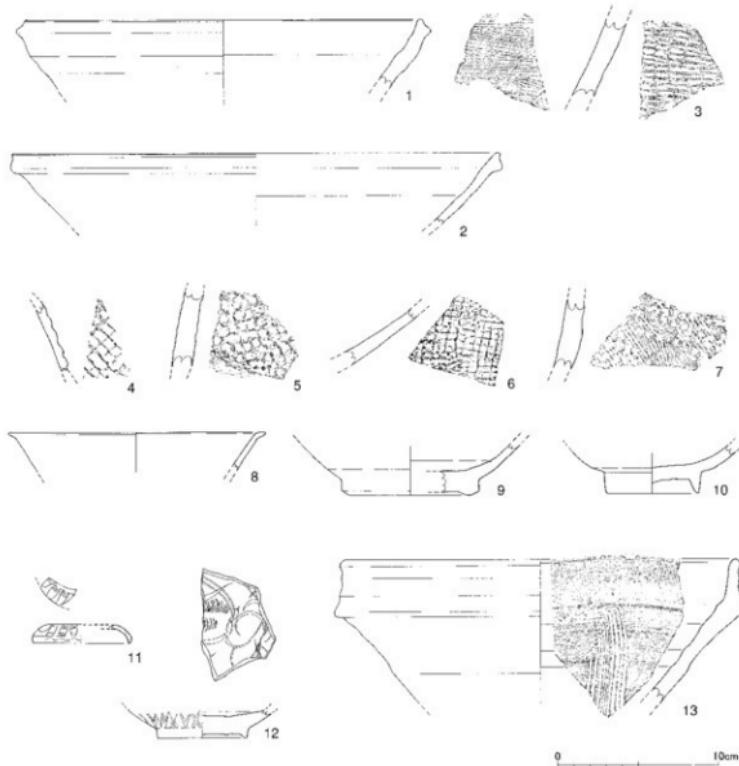
第33図 一貴尻I区出土土錘実測図 (S=1:3)

端部に面を持たないものである。32-34は、やや大型で端部の面が明瞭でないが、皿部には扁平な皿が乗るものと思われる。

第33図は、土錘としたものである。33-1は、7.9gの紡錘形を呈すもので、直径約7mmのやや大きな穴が開けられるものである。33-2は、円筒形の土錘の破片である。33-4も同様の細片で、非常に細い。

33-3は、軟質に焼成され、赤彩されたものである。円筒形に近い形状で、器壁が薄く、指押さえの痕跡を全面に残す。ほぼ完形に近いと思われるが、わずか2gしかない。形状は土錘に似るが、祭祀関係の遺物であろうか。

34-1・2は、中世須恵器の鉢で、体部が直線的に開き、口縁部外側に面を持つものである。口縁部の面は下端をわずかにつまみ出しており、34-2は直立気味になる。内外面ともナデ調整され、擂り目は見えない。いずれもやや軟質に焼成され、淡灰色を呈す。34-2には重ね焼きの痕跡が見られる。片口鉢であろうか。



第34図 一貴尻I区出土土器・陶磁器実測図 (S=1:3)

34-3は、須恵器甕の胴部の小片である。外面には細かい長方形のタタキ痕が見られ、内面は横方向のハケメによって調整される。中世須恵器であろうか。

34-4~7は、須恵器甕と考えられるものである。いずれも細かく深い格子タタキを施し、内面はナデ調整される。34-4は、一辺約7mmの正方形の格子で、非常に深いタタキの重なりは見られない。34-5は、一辺5mm以下の正方形で、斜め方向にタタキの重なりが見られ、横方向から扇形に叩かれたものと思われる。34-6は、細かい長方形の格子である。34-7は、細かい格子であるが、格子の間隔がやや広い。外面にカキメが見られる。いずれも中世須恵器と考えられる。

34-8~10は、白磁である。34-8が太宰府分類によるV類かⅢ類碗、34-9がIV類碗、34-10がV類碗と考えられる。

34-11は、青白磁合子である。側面に菊弁文が入るもので、淡青色の釉を外面のみ施している。内面は露胎である。外面口縁部近くに釉溜まりが見られる。疊層上面から出土した。

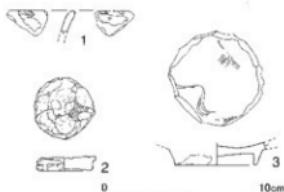
34-12は、青白磁の碗であろうか。外面に片切り彫りの連弁下端が見える。内面は草花文である。黄白色から淡緑色の釉を厚くかけている。

34-13は、一貫尻I区南西の拡張トレチで出土した備前焼擂鉢である。口縁部が高く直立するもので、近世初頭のものと思われる。出雲国府跡の発掘調査では、古代から12世紀後半の遺物は各時期を通じて見られるが、13世紀以降の遺物は急激に減少している。34-13も疊層からの連続面より上の堆積からの出土で、遺物自体が極めて少ない層からの出土である。13世紀以降に急速に水田化が進むことを示す可能性がある。

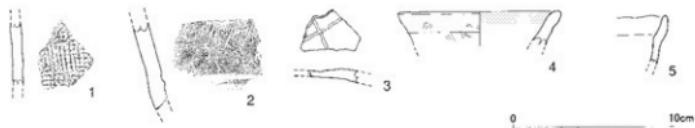
35-1は、二彩である。小片のため器形は判らない。全面に濃い緑色を呈する綠釉が掛かり、口縁部に褐釉が見える。

35-2・3は、磁器底部であるが、底部外周を意図的に丸く打ち欠いたと考えられる。35-2は、天目碗の円盤高台部分を使用しており、高台の周囲と上面を打ち欠いている。見込み部の天目釉がわずかに残っている。35-3は、白磁のV類碗を使用している。高台周囲を打ち欠いたのみで、見込み部の釉は、そのままに残されている。35-3の高台内側は、薄く墨が付着している。狭い磁器碗の高台内側を転用硯に使用するとは考えにくく、磨滅も見られない。墨の付着原因は不明であるが、これら磁器を使用する円盤の使用方法に関わるものかもしれない。

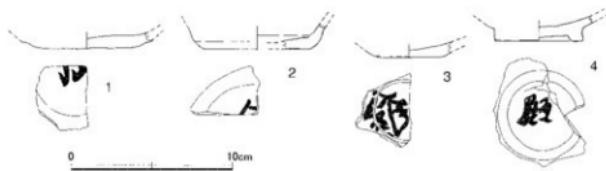
36-1は、軟質土器甕と考えられるものである。外面に細かい格子タタキが施され、内面側は無文の押さえ具を使用したものであろうか。淡灰褐色を呈す。



第35図 一貫尻地区出土陶磁器実測図  
(S=1:3)



第36図 一貫尻I区出土土器実測図(8)(S=1:3)



第37図 一貫尻地区出土墨書き土器実測図 (S=1:3)

36-2は、須恵器台の胸部と考えられる破片である。揮書き波状文が密に見られ、破片下端には2条の沈線と方形のスカ

シが観察される。淡灰色を呈し、波状文の様子や焼成が一貫尻II区出土の21-17に似る。

36-3は、古墳時代の須恵器蓋と思われるものの頂部にヘラ記号「×」を施したものである。厚みのあるヘラによって施されており、鋭利な工具による25-3・4とは異なる。

36-5は、小型の土師器蓋であろうか。口径が小さいのに器壁が厚い。外向には不定方向のハケメが見られる。

36-6は、製塩土器と思われるもの的小片である。手捏ねで整形されており、布目等は見えない。

第37図には、一貫尻I区で出土した墨書き土器を図示した。一貫尻地区の文字資料は、墨書き・ヘラ書き土器のみで、墨書き・ヘラ書き土器も大倉原地区に比べて少ない。

37-1・2は、回転糸切り痕を残す無高台の須恵器底底部に記されたものであるが、いずれも文字の一部が残存するのみで判読できない。

37-3は、土師器皿底部に記されたもので、墨痕自体は鮮明だが、複雑な文字で判読できない。赤褐色を呈すが、硬く焼成されており、回転糸切り痕を残している。

37-4は、白磁II類碗と思われるものの底部に記されたもので、「殿」と読める。高台の一部が黒ずみ、釉にひび割れが見られることから、二次焼成を受けている可能性がある。

38-2・3は、内面に摺り目状の平行線を持つ土師質の土器片である。器壁が薄い。淡褐色を呈すが、硬質である。38-3外面には煤が付着している。

#### 瓦類

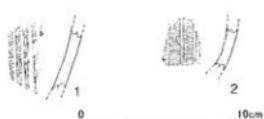
第39・40図に示したものは、一貫尻地区で出土した瓦類である。いずれも疊崩・造物包含層からの出土で遺構に伴うものはない。

39-1は、出雲国分寺跡第2形式軒丸瓦である。丸瓦部を欠損し、瓦当面も磨滅が進んでいる。

39-2は、平瓦広端面に格子タタキを施したもので、軒平瓦に使用されたものであろうか。端面で厚さ43mmあり、通常の平瓦より厚手であるが、額部整形が無く、通常の平瓦と大きく異なるものではない。凸面には、菱形に見える格子タタキが施される。

39-3~8は、丸瓦で、いずれも凸面はナデ調整され、タタキ痕を残さない。側部は、39-4に

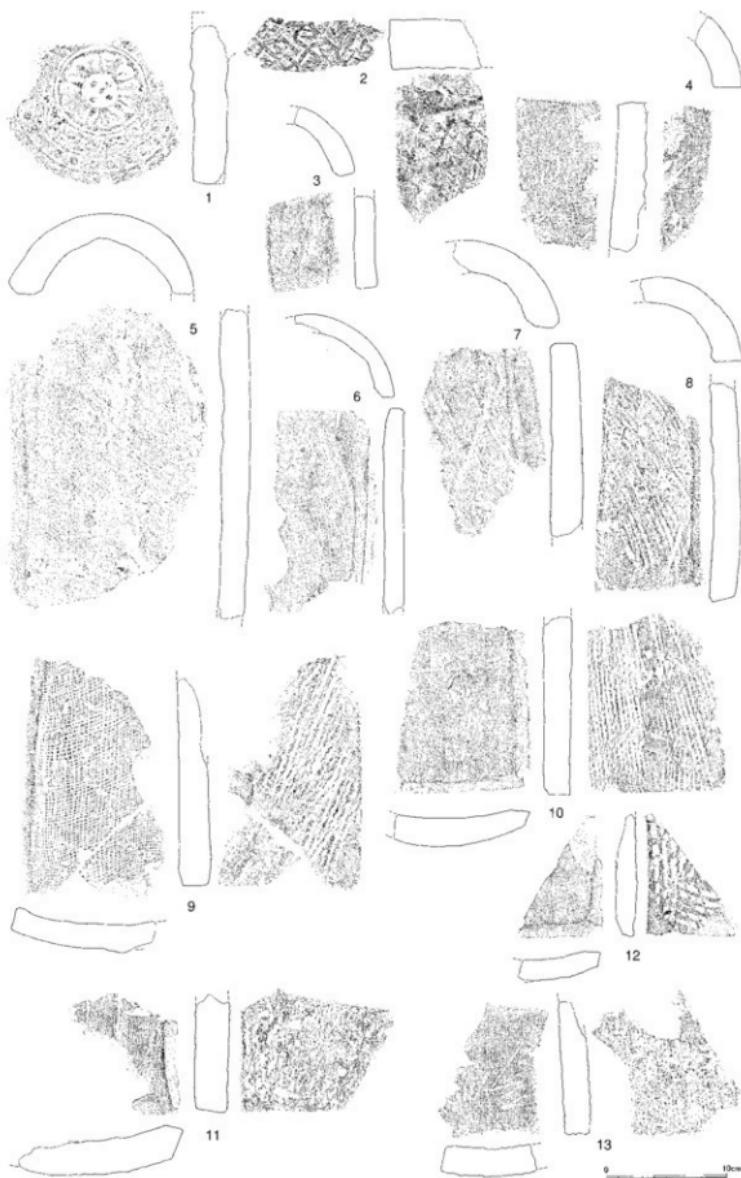
は面取りが見られないが、39-3・6~8は、凹面側を2面取りする。また、39-5は、3面取りしている。39-6・7は、行基式と思われるが、他の丸瓦は不明である。



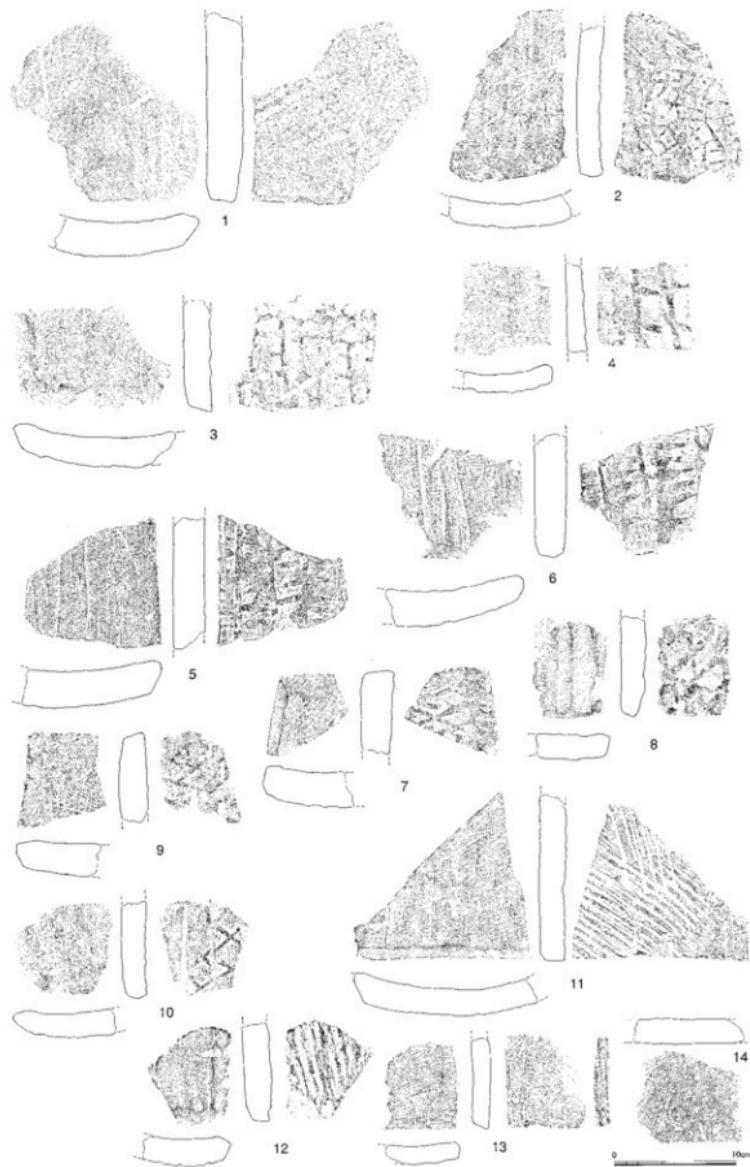
第38図 一貫尻地区出土土器実測図 (5)  
(S=1:3)

39-9~13、40-1~14は、平瓦である。

39-9・10は、網目タタキを施すものである。いずれ



第39図 一貫尻地区出土瓦実測図（1）(S=1:4)



第40図 一貫戸地区出土瓦実測図(2) (S=1:4)

も側部・端部共に凹面側を面取りしている。

39-11・12は、細い格子タタキに見えるものであるが、平行タタキを方向を変えて施したものであろうか。いずれも側部・端部共に凹面側を面取りしている。39-12は、布目の縁がやや盛り上がりており、一枚造り整形台によるものと思われる。

39-13凸面は、磨滅が進んでおり明瞭でないが、無文タタキの可能性がある。

40-1は、凸面に離れ砂を使用するもので、タタキ原体は格子であろうか。凹面側には板状の圧痕が見えるが、弧深が浅く、側部の断面形も凹面側を鋭角にしている事から、桶巻き作りの可能性は低い。

40-2は、変則的な格子タタキを施すもので、39-2の端面のタタキと同様のものと考えられる。凹面には模倣状の圧痕が見られるが、側部の形状が不明なため断定できない。

40-3～8は、幅の広い格子タタキを施したものと思われ、タタキの重なり方によって様々な形状に見えると考えられる。側部の断面形状は凹面側を鋭角にするものが多いが、40-4のみが、ほぼ直角となる。

40-7・9は、菱形に見えるタタキ痕を持つものであるが、幅の広い平行タタキを、方向を変えて施したものであろうか。40-8も同様のタタキ原体である可能性がある。

40-10は、菱形に見える斜格子タタキの中に木目を残すものである。端面は中程で二面取りしている。

40-11・12は、深い平行タタキを施すものである。40-11は、斜めに欠損しており、隅切り瓦の可能性がある。

40-13は無文タタキのものである。厚さ16mmで、他の瓦に比べて薄く、側面のケズリも丁寧である。熨斗瓦か。

40-14は、弧深のほとんど無い扁平なもので、両面ともナデ調整される。片面に線刻文様が見られるが、線刻の全体形状は不明である。敷き埠であろうか。

#### 木製品

一貫尻地区は、水付きの遺構と推定されていたため、木製品の出土が期待されたが、調査では木製品と断定できるものは、ほとんど出土していない。

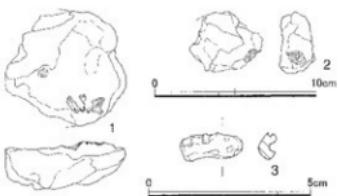
41-1～3は、いずれも細い板状のものの一辺に、わずかに加工の痕跡が見られるもので、用途は不明である。

41-1はヘラ状のもので、先端部が焼けている。41-20は、柾目(櫛目)の板材が裂けたものと思われる。側部・端部共に破損している。41-3もヘラ状のものである。

41-4・5は、桟皮である。大倉原地区の調査では、4号溝から出土しており、曲物の製作が想定されている。



第41図 一貫尻I区出土木製品実測図 (S=1:3)



第42図 一貫尻地区出土金属関係遺物実測図  
(S=1:3、3のみ2:3)

#### 金属関係遺物

42-1は、楕円錐治溝である。メタル度は0で、炉床の土や炭が付着している。

42-2も鍛冶溝である。楕円溝の破片と思われ、炭がわずかに付着している。

42-3は、銅滴と思われるもので、砂を抱き込んだ緑青の固まりで、坩堝片であろうか。大倉原地区でも銅製品鋳造に関わる遺物(77-3)は出土している。

#### 玉作関係遺物

43-1~19には、玉と玉作関係遺物を図示した。完成品は白玉(43-19)1点しかなく、他は原石か未製品である。石材には碧玉と水晶が見られる。過去に大倉原地区の調査で出土している玉未製品の石材では、通称カド石<sup>[23]</sup>と呼ばれるものがあるが、一貫尻地区の調査では小さな剥片しか出土していない。製作用具としては、平砥石と考えられる研磨された石が少量見られたが、筋砥石は出土していない。

43-1~3は碧玉・緑色凝灰岩である。一貫尻地区出土遺物には、碧玉・緑色凝灰岩は少ない。また、瑪瑙は確認していない。

43-1は大きな原石で、部分的に皮剥が行われているが、一面は自然面である。石材は不純物の多い黒みがかったもので、良質とは言えない。

43-3は、何らかの素材と考えられる碧玉である。両端を切断し、円柱形に加工しようとした意図が伺えるもので、管玉素材だろうか。

43-2は、緑色凝灰岩の剥片である。淡緑色を呈し、良質な石材ではない。剥離方向も一定していない。

43-4~18は水晶である。いずれも透明度の高い石材で、透明度の低い石英は含まれていない。一貫尻地区で出土した水晶の剥片には、無色透明なもの他、黒水晶や紫水晶が少量含まれている。

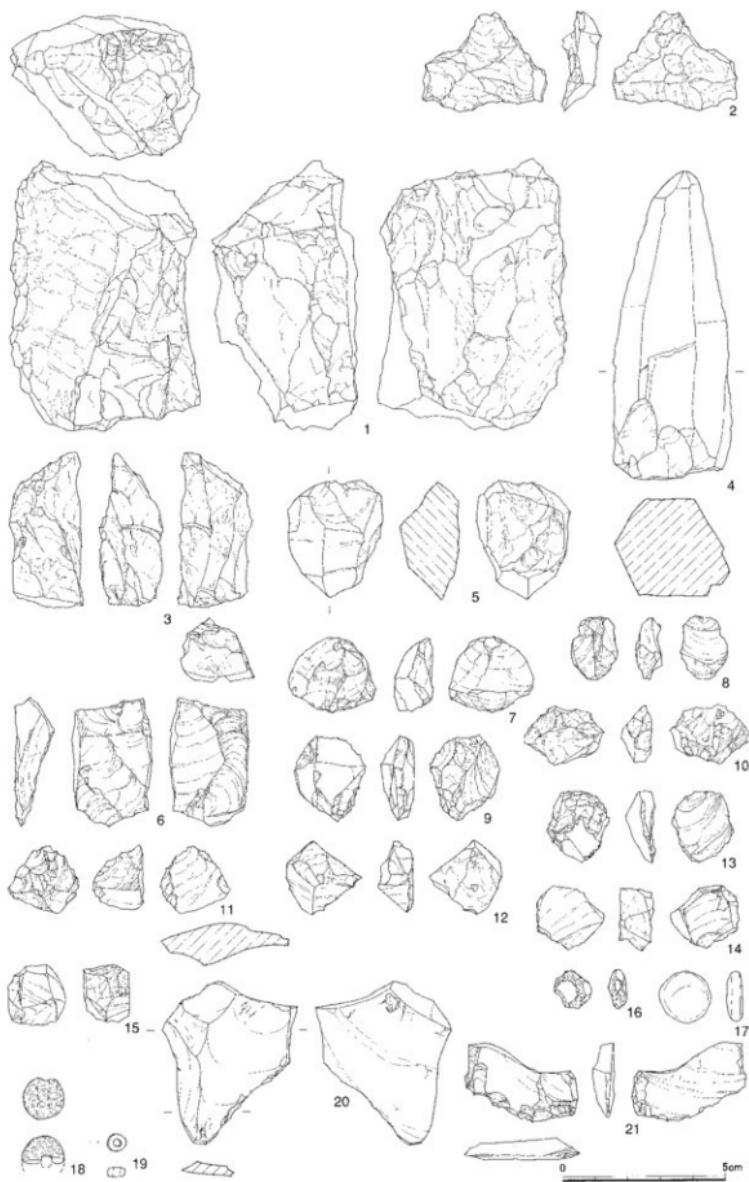
43-4は、水晶原石で、成長した結晶を折り取ってきたものである。結晶基部に、一定方向から打撃して折っている。細かい加工は見られない。

43-5・6は、平玉素材と考えられる荒削段階のものである。43-5は結晶先端を半分に割ったもの、43-6は大きな原石を荒削りしたもので、平らな素材を作り出そうとしている。いずれも自然面を多く残す。

43-7~14は、平玉の二次調整段階のもので、素材を薄く、丸く整形するための二次調整が周囲に見られるものである。43-12~14には、わずかに敲打痕が見られる。

43-15は、丸玉の二次調整段階と考えられるものである。ほぼ、形状が整い、敲打に入る直前のものと思われるが、一部に自然面を残している。

43-16は、仕上げ段階の平玉未製品であるが、二次調整の剥離が深く入り過ぎて、放棄されたものと思われる。二次調整によると思われる深い剥離部分には敲打が及んでいないが、他の面は全面的に敲打が入り、研磨もなされている。剥離の深い部分は、3箇所に見られる事から、研磨による破損ではない。既に直径12mmしかなく、剥離の深い部分にまで研磨が及んだ場合には、最大でも



第43图 一殷墟地区出土玉·石器实测图 (S=2:3)

直径8mm以下の平玉しか完成できない。

43-17は、平玉の仕上げ段階のものと思われる。敲打痕は残していないが、表面は粗い研磨によって歴りガラス状になっており、透明度が低い。直径16mmで、外周部に小さな面を持つ。完成品と思われる半玉は、大倉原地区で墨水晶のもの（78-17）が出土しており、丁寧に研磨され透明度が高いものである。

43-18は、穿孔された丸玉の仕上げ段階のもので、穿孔時に割れたものと思われる。ほぼ球形を呈し、表面には敲打痕が残っている。研磨痕は全く見えない。同様のものは大倉原地区でも出土しており（78-16）、敲打によって完全に球形に整形した状態で穿孔する。穿孔時に破損する場合が多くあったと言える。研磨後に穿孔する可能性のあるものには大倉原1区出土品（『報告書2』39-39）がある。

43-19は、滑石製白玉である。直径5.5mmで、2mmの穿孔が行われる。

#### 石器（43-20・21）

43-20・21は黒曜石である。県内の玉作遺跡からは、少量の黒曜石が出土する事が知られており<sup>(31)</sup>、粉碎して穿孔や研磨に使用する様な状況も想定していた。出雲国府跡の発掘調査では縄文上器が確認されていないため、調査時には、玉材と石器の区別をしていなかったが、日岸田地区的調査で、明らかに石器が含まれることが判明し、黒曜石の多くが縄文時代に含まれる可能性が出てきた。一貫尻地区の出土物で、同様に石器の可能性があるものに玉體の剥片<sup>(31)</sup>が出土しているが、小片のため図示していない。

43-20は黒曜石剥片である。各面とも大きな剥片を割り取られている。細部の割れは新しいもので、刃部は作られていない。

43-21は基部の大半を欠損した黒曜石製石器の刃部である。片面から刃部を作り出しており、エンドスクレーパーと思われるものであるが、全体形状は不明である。刃部には使用痕と思われる擦痕が見られる。

## 5. 小 結

一貫尻地区的調査では、多量の石を出土する面が三面見られた。最上面に見られる疊層は平安時代終わり頃の流路の移動に伴うものと考えられ、自然地形と判断された。疊層から連続する西側の面は、この流路中に含まれている可能性が高く、削り残された古墳時代の遺構の下半が残っているのみで、古代の遺構は残存していない。一貫尻地区的北側・西側については、古代の遺構面が残存していないと言う事で、古代に使用されていないと言う事ではない。

一貫尻II区北側には、古墳時代かそれ以前の遺構がわずかに見られる。その中には、古墳周溝が含まれている可能性もあり、須恵器器台や朝顔形埴輪と考えられるものも出土している。

古墳時代のものを除く遺物の出土類向で言えば、北側の一貫尻II区では、平安時代後半の遺物割合が高く、南側の一貫尻I区では、奈良～平安時代前葉のものが多い。

一貫尻地区での古代の遺構と考えられるものでは、護岸状施設と石敷き遺構を検出した。いずれも直接伴う遺物が少なく、所属時期が明確ではないが以下の点が考えられる。

護岸状施設は直接遺物を作っていないが、石敷き遺構を埋め、大倉原地区の敷地面積を拡大する意図が伺える。その造成に伴う可能性のある円面鏡（31-14）が、人為的に埋め戻された大倉原地

区4号溝下層出土遺物と接合した事は、その可能性を裏付けると思われる。

石敷き遺構上面出土遺物は、漆付着土器や壺底部など大倉原地区4号溝と似たものが見られ、護岸状施設による埋め戻しの状況からも、大倉原地区4号溝に対応する可能性がある。石敷き遺構は、南北方向に溝状に窪みが見られ、砂の堆積から水が流れていた事が考えられる。この窪みは、昭和40年代の調査で確認された公園北側大溝（SD034）の北に折れ曲がる部分の延長線上に一致する。SD034は素掘りであるので、仮に連続するとしても、どこから構造が変わるかは確認できない。大倉原地区の建物群との関係で溝の形状が異なるとすれば、同時期の大倉原地区的建物群の性格を示す可能性があり注意される。

護岸状施設の存在は、大倉原地区の4号溝→56号溝の区画の変更に対応する可能性があるほか、国府周辺の水路の水量が変化した可能性を示している。現在の一貫尻地区東側の弧状に廻る水路や公園北側を蛇行して東流する水路は、疊層を堆積させた平安時代末の水流の痕跡と捉える事ができるが、それ以前にも、南北方向から一貫尻地区へ向かう流路が存在し、一貫尻地区で北へ向きを変えている可能性が高い。護岸状施設は、その流路の水量増加に対応して造られた可能性がある。

一貫尻地区においては、珪藻化石分析を行い、その報告は第7章にまとめた。現地での堆積状況の観察から、一貫尻地区の堆積が河川流路に伴うものと推定されたため、珪藻化石を分析すれば、流水であったか止水であったかが判明するはずであった。結果は、珪藻化石自体を捉える事ができず、流路の存在を確認できなかった。珪藻化石が検出できなかった原因として考えられる事については、第7章で検討されているが、それ以外の可能性としては、洪水などによる一時に堆積したもので、珪藻が繁殖しにくい状況であったとも考えられないだろうか。いずれにせよ、一貫尻・大倉原地区で検出される疊層の堆積理由は、この場所での施設群の衰退に関わるものと思われる上、意宇平野の地形・地割りの形成に関わる可能性が高く、今後も様々な方法で、解明して行かなければならない。

註1 「報告書1」では、場所による石の大きさの違いが指摘されており、分離できる可能性を既に示していた。

註2 古墳時代の須恵器編年は大谷晃司「出雲地域の須恵器編年と地域色」『島根考古学誌』第11集1994年を参考にし、出雲〇期と呼称する。

註3 1971年に刊行された『縦報』には上器編年が示されており、国庁編年と呼ばれている。資料としての一括性に疑問がふされていて、『報告書1』での分類等を参考に当てはめている。各形式を代表する土器については編集者の判断によるもので、決定したものではない。

註4 『小松古窯跡群範囲調査報告書』宍道町教育委員会1983年

註5 脚端部を外へ大きく張り出し脚端部外面に明瞭な面を持つものについては、中間的要素が少なく、2種に分かれるものと思われる。扁平な皿が乗る可能性が高いもの（23-42）に比べ、楕円になるもの（22-43）が柱状部が短くなる。よって、23-41も楕形の皿部になるものと思われる。

註6 離沢氏より指導を受けた。

註7 宮内序正命院事務所成瀬正氏に依頼し、ケイ光X線、X線回折、電子顕微鏡観察によって水銀朱と断定した。

註8 古墳時代土器編年については松山智宏「出雲における古墳時代前半期の土器の様相」『島根考古学会誌』第8集1991年を参考にし、松山編年〇期と呼称する。

註9 「朝日ヶ丘古墳建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」島根県教育委員会1985年

註10 松江市大湯町などで、煙草・メノウの小品物の多い縁辺部の石材を通称カド石と呼んでいる。カド石を使用した点では、過去の大倉原地区的調査で赤カド石を使用した丸手未製品が出土している。

註11 古墳時代などの工作跡から少量の黒曜石が出土している事は、岡山県立古代吉備文化財センター米田克己氏から御教授を受けた。確実に石器が含まれている事は確認できたが、縞文土器が確認できないと言う事実もあり、思躍

石が玉作に関わるとすれば、その供給先が黒曜石产地とは限らない、と言う想像もできる。よって出雲國府跡で出土する黒曜石の全てが縄文時代のものと断定する根拠はなく、今後とも正作との関わりを検討する必要がある。

- 註12 日岸田地区の調査では非常に多くの黒曜石剥片が出土しており、スクレーバーなどの石器も含まれている。玉髓も少量が出土しており、縄文時代か旧石器時代のものである可能性もある。仮に玉髓製石器が存在した場合には、碧玉・メノウに齧しても全て玉材と考えられるかどうか疑問が生じる可能性があり、包含層出土の玉材と石器の区別は検討をする。意宇平野西側の团原丘陵上には、玉髓製石器のユニットを検出した下黒田遺跡が知られており、卡體・メノウの剥片の扱いは注意を要する。日岸田地区的調査状況については次年度以降に報告予定である。

## 第4章 大倉原地区の発掘調査

大倉原地区は、史跡公園北側に広がる水田部で、平成11年の再開以来、毎年調査を行ってきた地区である。平成14年度までに「国司館」とも推定される東西2棟の礎石建物跡（1・4号建物跡）や墨書き器などを始めとする多量の遺物を出土した南北方向の溝（4号溝）、八脚門と考えられる掘立柱建物跡（9号建物跡）などが検出されている。平成15年度の第9回指導委員会において、「9号建物跡から東へ延びる4号柵列が施設群北側境界であるならば、施設群東側境界と考えられている4号溝との関係を明らかにせよ。」との宿題が出され、両者が交わると推定される位置に南北5m、東西15mのトレンチ（37トレンチ）を設定し、平成15年10月から掘削した。37トレンチ付近は削平が及んでおり、4号柵列の延長を検出する事はできなかったが、以前に知られていなかつた56号溝を発見した。56号溝は現道西側に隣接し、現道と同様に南北方向に延びていた。検出地点では溝の両岸に石を配して護岸している事から、素掘りの溝しか確認されていない大倉原地区においては極めて重要な溝である可能性が出てきたため、平成16年度には、この溝の平面的な検出を目指して調査区を設定した。平成16年度に設定した調査区は、37トレンチ東側、平成13年度の大倉原4区、平成11年度の7トレンチ、平成14年度の28・29トレンチの再発掘を含む南北35m、東西4～7mの範囲である。

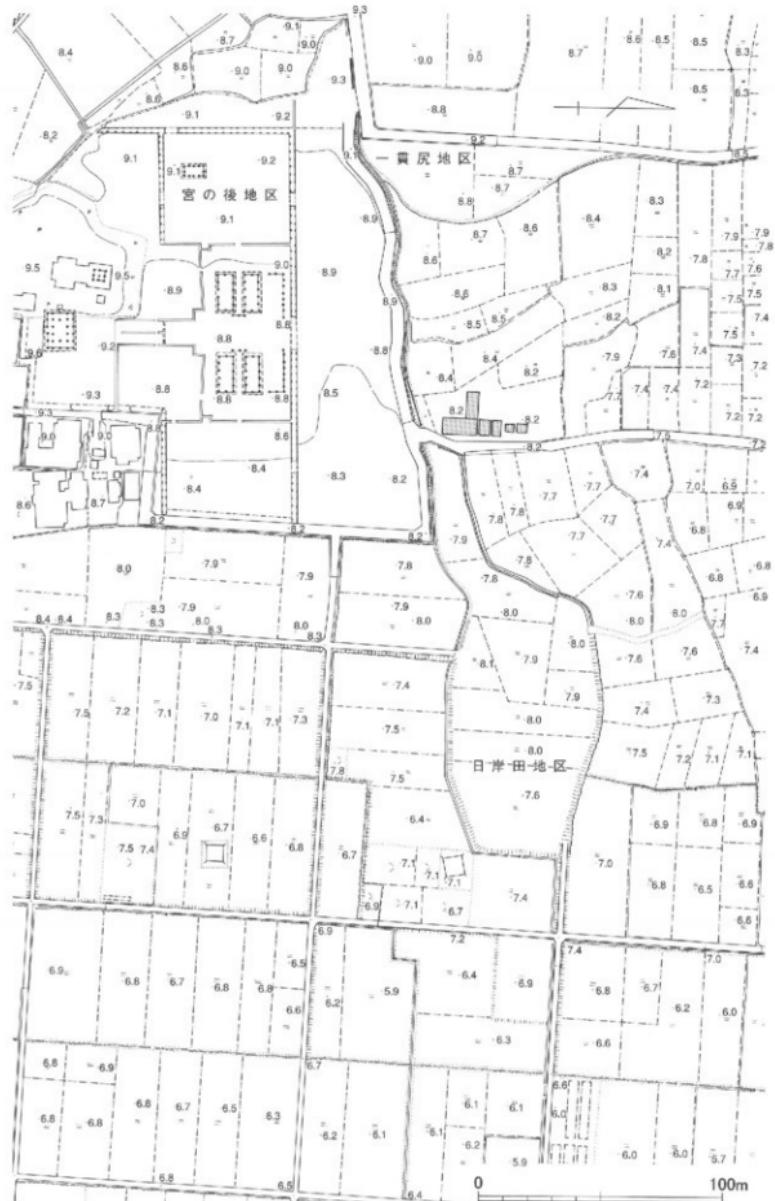
調査区は、平成11年度の調査再開以来、水田区画毎に1～4区と呼んでいた調査区の内、4区に含まれる。また、グリッドの名称は過去の調査を踏襲し、旧測地系の第III座標系X=-63400m、Y=85400mの交点を原点として北○m（N○）、東○m（E○）と表記した。

調査地の標高は8.2mであるが、調査地より北側の水田は7.9m、現道を挟んだ東側の水田は7.8mと北東方向に下がり始める場所である。大倉原地区の遺構検出面が標高約8mである事から、北へ向かうほど遺構の検出が困難になる事は予想されていた。

### 1. 37トレンチの調査

37トレンチは、平成14年検出の4号柵列の延長線が推定されるN82と、平成13年までに確認されていた4号溝が位置するE24を含むよう、N85E10を基点に東へ15m、南へ2mのトレンチを設定した（第45図）。このトレンチ位置は平成13年大倉原4区と平成11年7トレンチの間に位置する計画であったが、測量のミスにより南壁近くで平成13年大倉原4区に掛かってしまっている（第45図左側の段）。当初は、37トレンチの東端をE25に設定していたが、後述する56号溝の西肩を検出してしまったために、急遽東へ約2m拡張し、56号溝の両肩の検出を行った。第45図は、拡張後の実測図である。

37トレンチでは、地表面から耕作土（3黄褐色土）下面までは30cm近くあり、その下面に石が入っている。4暗黄褐色土層中には瓦片や土器が多く含まれる。同年に調査した大倉原1区では地表面から20cm未満でこの層に達しており、北東に向かうほど遺構検出面が下がっている事が判る。平成13年大倉原4区では、この下に遺物包含層である5黄色土の堆積がある程度の厚みを持って見られるが、37トレンチではそれがほとんどなく、石と瓦片を除去すると、明黄褐色の遺構検出面に達する。

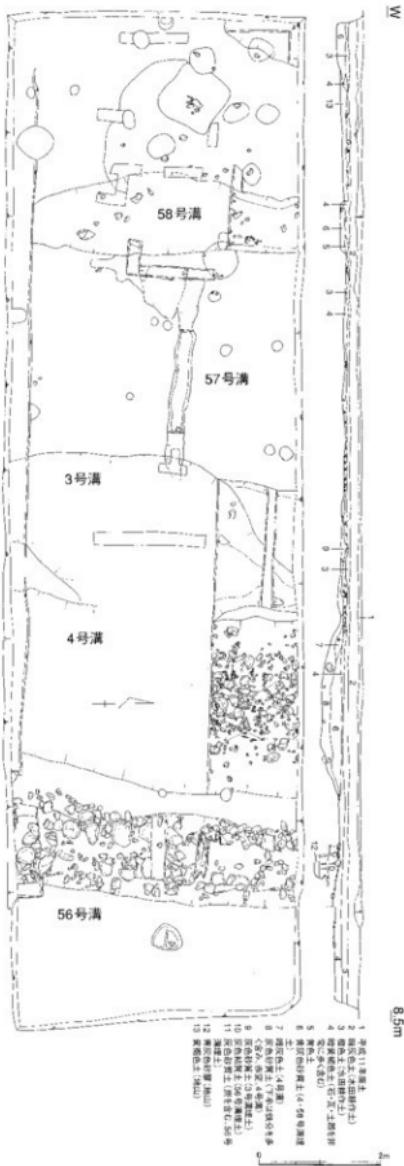


第44図 大倉原地区調査区配置図 (S=1:2,000)

遺構検出面に達すると、4号溝の東肩と1号溝に接して掘られていたはずの3号溝西肩がすぐに検出できたが、両溝の切り合いは平面的には判別できない。後述する57~58号溝など、多くの遺構が見える一方、精査を繰り返しても4号柵列から続くと見られるピット列は検出できなかつた。

北壁で作製した土層断面図(第45図)では、遺構検出面が東へ向かって傾斜している様子が見える。最上層の黒色土は、平成11年6トレンチ掘削時の廃土の残りだが、その下層の耕作土層も、東側が厚く見られ、地表面で水平を保っている。3 橙色土は、水田の床土と思われるもので、2 暗灰色土と明瞭に区別できない部分もあるが、酸化状態の差から色が大きく異なっているものと思われる。遺物包含層である4 暗黄褐色土は、トレンチ西側ではほとんど検出できないが、東へ向かうほど厚くなり、遺物量も増える。遺構内埋土では、3号溝埋土の9灰色砂質土が、10cmに満たない厚みしかない。これは、3号溝が浅いだけでなく、上面が削平された結果であると思われる。3号溝埋土の9灰色砂質土を切り込んで、8灰色砂質土が堆積しており、4号溝が新しい事を示している。4号溝上層の6黄灰色砂質土は、58号溝埋土と視覚的には区別できないが、連続する部分は無く、同時に堆積したと言う根拠はない。東側の56号溝上面には、遺物包含層である4暗黄褐色土が直接乗っており、37トレンチ内では3・4号溝との先後関係は判断できなかった。

37トレンチ西側からは、炭溜まり、ピット12基を検出したほか、トレンチ北西隅が大きく落ち込む様子が確認できた。炭溜まりは、第16図のアミカケ範囲であるが、赤変している範囲は、アミカケ右上の隅丸四角形の範囲であり、炭化物の細片が散らばっている。この焼土面や炭の広がりは、耕作上直下に展開



第45図 第37トレンチ実測図 (S=1:80)



第46図 第37号トレンチ西側遺構実測図  
(S=1:60)

すると思われ、古代の遺構検出面よりやや高く、4暗黄褐色土層に含まれる石が混入している。炭の広がりの中には瓦片と土師器細片が含まれており、古代末以降のものであろう。

4号坑列に続くと考えられる直線的に並ぶピット列は検出できなかっただため、他のピットも掘削は行っていないが、平成13年度4区に掛かったピットは、検出面が平成13年調査区間が5cm程度低かったため、一部を掘削した。このピット中からは須恵器壺底部(48-3)が出土した。

トレンチ北西隅は西に向かって大きく傾斜している。この溝は、平成11年の7トレンチで検出された北東-南西方に向の溝の一部と考えられるが、出土遺物が無く時期・性格は不明である。

#### 58号溝 (第47図)

E15付近では、南北方向に延びる溝状の落ち込みを確認し、58号溝と呼んだ。幅0.7~1.3m、深さ8cmの浅いもので、土層断面では両肩が強く立ち上がり、断面箱形を呈

するが、前出の炭溜まりなどの擾乱を受け、特に西肩は明瞭ではない。極めて浅い溝であった事もあり、隣接する平成13年度以前の大倉原4区、平成11年度7トレンチでは検出されていないが、4区南側には細い溝の存在が確認されており、それに繋がって更に南へ延びていた可能性がある。仮に南へ直線的に延びていた場合には、7・8号建物の中心近くを通過していた事になる。埋土は、拳大の石を少量含んだ黄褐色の砂質土が堆積しており、水路であった可能性も考えられる。

58号溝については、北側約1.2mを掘削し、少量の土器片が出土したが、いずれも小片のため、58号溝の時期は不明である。

#### 58号溝・ピット出土遺物 (第48図)

48-1・2は58号溝北側で出土した須恵器である。

48-1は須恵器蓋で、口縁端部を強く折り曲げるものである。つまみの形状は判らない。外面には重ね焼きの痕跡を残している。

48-2は壺底部である。回転糸切りと思われ、体部は内湾気味に立ち上がる。極めて薄く作られている。

48-3はピットから出土した須恵器壺底部である。回転糸切り痕を残し、体部は内湾気味に立ち上がる。

#### 57号溝 (第49図)

37トレンチ中程の3号溝と58号溝に挟まれた間では、東西に延びる細い溝を検出し、57号溝と呼んだ。58号溝東肩付近から始まり3号溝にぶつかるまでは平面的に確認できるが、両側の続きが確認できない。埋土は、明褐色土で、



第47図 58号溝実測図 (S=1:60)

3号溝上に開けたサブトレンチで、わずかに断面の切り合いで見えるものの、その先のサブトレンチでは、3・4号溝の埋土の中で全く判別できず、東側の延長は不明である。また、西側についても58号溝に切られている事は確認できたが、58号溝より西側では検出できていなかった。

57号溝は、幅約30cm、深さ7cmの断面箱形の溝で、東西約3.2mを検出した。57号溝は、完全な東西方向ではなく、真東より約5°南へ振っている。このトレンチの調査目的の一つであった4号柵列も同様に約4°振っているが、両者の延長は一致しない。57号溝の埋土は固く締まった明褐色粘質土で、砂などの堆積は見られず、水が流れた可能性は低い。床面には、小さな凹凸は見られるが、ピットなどは確認できなかった。

57号溝は切り合ひ関係から、3号溝より新しく、58号溝より古い。

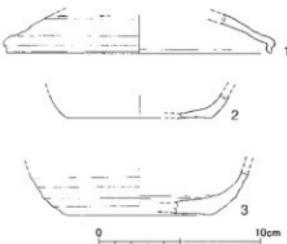
57号溝の南北にも小堀のピットが見られるが、建物や樹となるような規則性は見られず、平成11年度7トレンチで検出したピット群と関連するものも認められない。

### 3・4号溝（第50図）

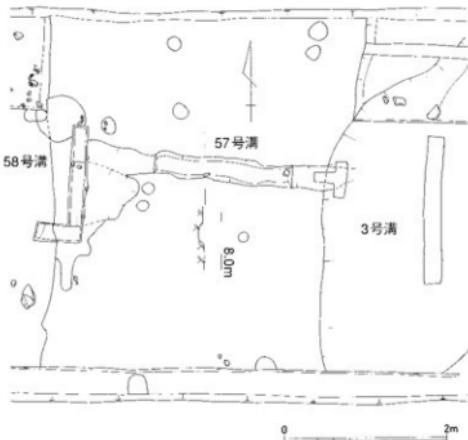
E20付近では、南北方向に延びる溝を検出し、位置関係から平成13年大倉原4区で検出した3・4号溝と断定した。トレンチ南壁近くでは両溝は離れているが、トレンチ中程より北は重なっており、平面的には両者を分離できない。トレンチ北壁沿いに幅1.2mのサブトレンチを設定して確認したところ、4号溝が3号溝を切っており、3号溝の方が古いと判明した。

3号溝は、検出最大幅約2mの素掘りの溝であるが、サブトレンチ内での最も深いところでも、深さ20cmしかなく、トレンチ北壁では深さ10cmに満たない。平成11年度の7トレンチでは検出できていない事から、北に向かうほど浅くなり、N85以北では消滅していると思われる。

4号溝は、3号溝と平行してトレンチを南北に横断しており、幅約2.8m、深さ約40cmの断面V字形を呈する素掘りの溝である。既に『報告書1』で人為的に埋め戻されている可能性がある事が報告されており、埋土には多量の遺物を含んでいる。埋土は、基本的には2層と思われ、最下層に堆積する灰色砂質土は、下半が鉄分を含んで赤変している。上層を埋める黄灰色砂質土中から遺物が含まれており、下層の灰色砂質土中からは、石に混じっ



第48図 58号溝・ピット出土土器実測図  
(S=1:3)



第49図 57号溝実測図 (S=1:60)



第50図 3・4号溝実測図 (S=1:60)

整備<sup>(30)</sup>に伴う発掘調査では、注口に木栓をした磁を漆容器に使用している例があり、平成14年度調査の1号横列出土磁も木栓が残ったまま出土している事から、一般的に行われていたと思われる。

51-2は凸面底の脚部と思われる。小片のためスカシは確認できない。器壁が薄い。

#### 4号溝出土遺物（第52～55図）

4号溝の調査は、3号溝との切り合い関係を明らかにするための最小限の掘削だったにも関わらず、大量の遺物が出土した。

52-1～3は、輪状つまみを持つ須恵器蓋である。52-1・3の内面には墨痕があり、転用鏡の可能性がある。

52-4は、扁平な蓋の口縁部である。端部の垂下は短い。

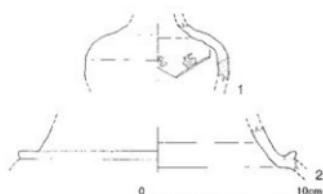
52-5は口縁端部が大きく垂下する須恵器蓋で、壺に伴うものと思われる。

52-6～14・16は、宝珠状つまみを持つと思われる須恵器蓋である。口径は様々だが、口縁部の垂下はほとんどない。52-6～8は、口径の小さいものである。頂部近くに回転ヘラケズリが見ら

れる。52-16も同様のものであるが、口縁端部の垂下がほとんど見られない。52-8・16は、内面側が磨滅しており、転用鏡として使用された可能性がある。

52-15は、口縁部がほとんど垂下しない須恵器蓋である。つまみ部が欠損するが、取り付け部が広いことが考えられ、高い輪状つまみを持つと考えられる。

52-17～34は、無高台で体部に丸みを持つ須恵器坏と思われるものである。口縁部には明確な屈曲を持つ



第51図 3号溝出土土器実測図 (S=1:3)

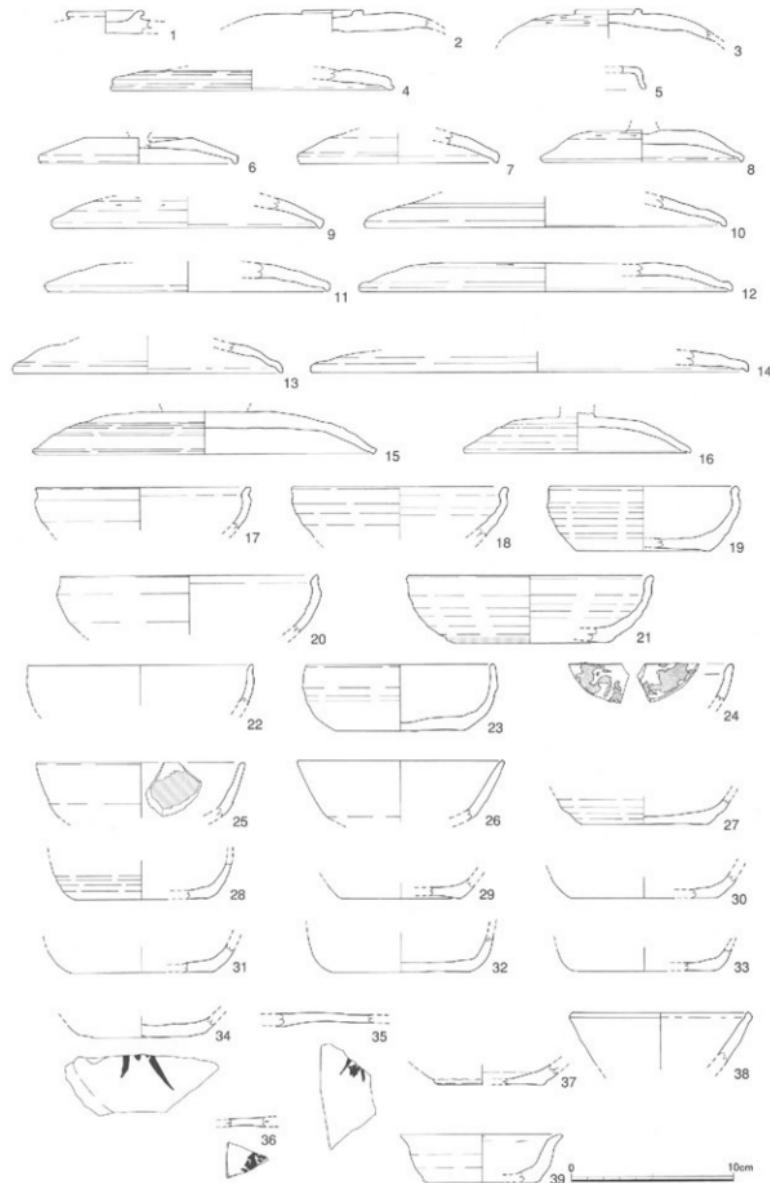
て多量の遺物が出土した。検出面直上には、石を含んだ暗黄褐色土が薄く堆積しており、上面を削られているものと思われる。36トレンチ内では、蛇行しているように検出されたが、過去の調査成果を合成した図面（第99図）では、ほぼ南北に続いている。

4号溝の東肩部には、小さなピットが見られるが、褐色の柔らかい土が入っており、新しいものであろう。

#### 3号溝出土遺物（第51図）

3号溝からは少量の須恵器が出土している。

51-1は、須恵器蓋と思われる壺形土器の小片である。漆容器に使用されたと思われ、内面の下半と破断面に漆が付着している。注口を持つ壺は、液体の容器には適さないように思われるが、昭和49年の公則化



第52図 4号溝出土土器実測図（1）(S=1:3)

もの（52-17～20）、外面にわずかに窪みを持つもの（52-21・22）、丸くおさめるものがある。52-24は、内外面に漆が付着し、漆塗りのパレットとして使用された可能性がある。52-21・25の内面には油煙が見られ、灯明皿に使用されていたものと思われる。52-26には煤が付着している。52-27～34は底部の破片で、いずれも回転糸切り痕を調整しない。

52-34～36には墨書きが見られる。52-35は「厨」と読めるが、他の2点は判読できない。いずれも坏底部に記されたものと思われる。

52-37は須恵器坏底部の小片である。回転糸切り痕を残し、底部外面にわずかに段を持つ。体部が大きく開く。

52-38は、須恵器坏であろうか。厚く直線的な体部を持ち、口縁部を内面側に向けて尖らせる。

52-39は、口縁部を外側に屈曲させる小型の須恵器坏である。同様のものは来美魔寺<sup>(2)</sup>など、仏教関係の遺跡から多く出土するもので、それらの遺跡出土品には油煙が付いていることが多い。

53-1は、体部が内湾して立ち上がる須恵器高台付坏である。口縁部を丸く収め、くびれは見られない。53-2・3は底部の小片であるが、53-1と同様のものであろう。53-3は、静止糸切りの可能性がある。

53-4は、体部が直線的に立ち上がる無高台の須恵器坏である。53-5も同様の器形と思われるが、やや大きい。高台の有無は不明である。

53-8は、体部が直線的に延びる須恵器高台付坏で、大型のものである。断面台形の高台を底部最外周に取り付けている。53-6・7も同様のものと思われる。

53-9～11は、体部が直線的に立ち上がる高台付きの須恵器坏の内、小型のものである。53-9は、底径に対し、器高が低いものである。53-9の内面には漆が付着している。

53-12～17は、無高台の須恵器皿である。底部と体部の境を強く折り曲げる（53-12～15）と、内湾気味になるもの（53-16・17）がある。確認できるものは底部に回転糸切り痕を残している。52-17は、内面が磨滅し墨痕が見られる。

53-18～21は、高台付きの須恵器皿である。53-18は、口縁部内面に小さな窪みをもつ。53-19は、口縁端部を尖り気味にし、高台がやや小さい。

53-22～24は、須恵器高坏である。いずれも脚部にスカシは見られない。53-22は、扁平な皿に乗るもので、53-23にはやや深さのある坏が乗る。

54-1は、円面観の脚部である。長方形のスカシを、間隔を開けて入れる。54-2は、圓脚が脱落した円面観の観部である。観面には墨痕を残し、磨滅が見られる。

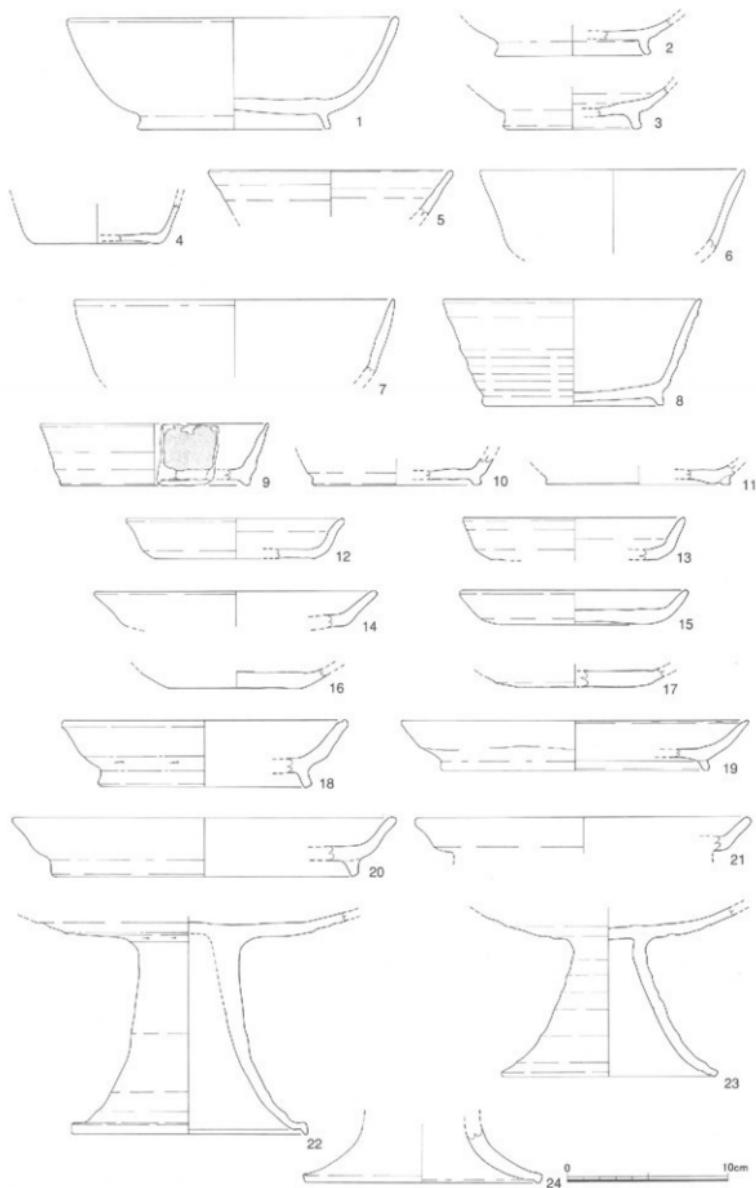
54-3は、須恵器鉢である。頸部を強く屈曲させ、口縁部が短い。体部はナデ調整され、タタキ痕を残していない。

54-4は、須恵器壺の口縁部か、器台などの脚端部と判断した。

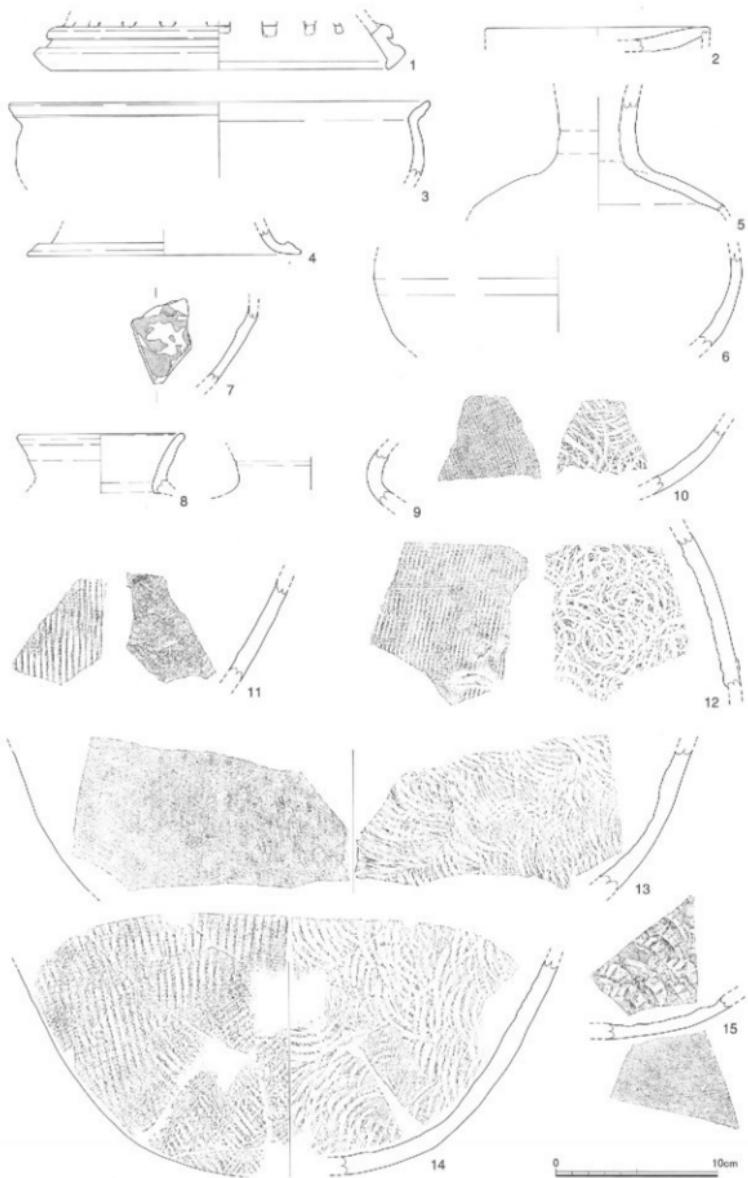
54-5・6は、須恵器長頸瓶である。体部が丸く、肩が張らない。

54-7は、須恵器壺の体部の小片であるが、内面に漆の付着が見られる。器形は不明である。

54-8～15は、須恵器壺と思われるものである。54-8・9は、口縁部から頸部の破片で、口径が小さい。54-11は内面の押さえ具の痕跡をナデ消しているもので、鉢であろうか。54-12の外面には小さな窓着が見える。54-15は、内面に車輪状の押さえ具の痕跡が見られ、外側は平行タタキである。



第53図 4号溝出土土器実測図(2) (S=1:3)



第54図 4号溝出土土器実測図(3) (S=1:3)

55-1は、土師器の高坏であろうか。薄く扁平な皿状のもので、断面形状からは脚部が取り付くものと思われる。体部中程で折れ曲がり、口縁部は尖り気味にしている。

55-2は、土師器皿である。底部には回転糸切り痕を残している。器壁が厚く、口縁部は丸く収める。内面は磨滅が著しく調整は不明である。

55-3～5は、土師器壺である。55-3は小型のもので、外面にはハケメが見える。55-4は短頭のものである。外面には煤が付着している。

55-6は、製塙土器と思われるものである。手捏ねで整形されており、布目压痕などは見えない。製塙土器と思われるものの細片は、複数が出土している。

55-7は、土鍤である。円筒形を呈すもので、還元炎で固く焼成されている。

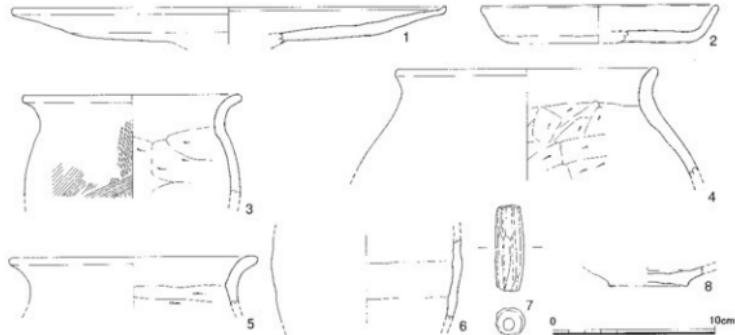
55-8は、土師器皿である。回転糸切り痕を残し、底部外側に高台状の段を持つ。古代末のものと思われ、4号溝の出土遺物としては例外的に新しい。小片であり、混入であろう。

## 2. 大倉原4区の調査

37トレンチで検出した56号溝を平面的に検出するために、平成16年度は大倉原4区で調査を行った。調査の目的である56号溝は、E25の線上に東肩が一致すると見られた事から、N85E25を基点に東へ4m、西へ3m、南へ15mの調査区を設定し、更に北側へ土壠観察用畦を残して幅5mのトレンチ2箇所を設定した。56号溝東肩がE25の線上に一致する事を確認した後は、トレンチの東西幅を4mに短縮して、更に北へ5m毎のトレンチ2箇所を掘削し、北側の延長確認に努めた。また、この発掘調査では、4・56号溝の他に土坑状の落ち込み4基、溝3条を確認している。

耕作土（1黒褐色土、2明黄色土）を取り除くと疊層が現れるが、この疊層の検出位置は、北へ向かうほどDがっており、N70では標高8.8mであるが、N105では8.3mとなり、35m間で約50cm下がる。疊層の厚みも北へ向かうほど薄くなる。疊層・遺物包含層（3褐色土）下層は、N85以南では黄褐色の基盤層に当たるが、N90以北では水を含んだ橙灰色砂質土となり、遺構検出も困難になる。

N100付近では、平成14年の28トレンチで4号溝に直交して東へ向かう26号溝を検出しているが、今次調査では確認できない。一部で断ち割を行い追跡したが、確認できなかった。平成14年の26号溝検出は、4号溝隣接地での平面的な検出で、後述する56号溝の消失地点に一致する事から、56号



第55図 4号溝出土土器実測図(4) (S=1:3)

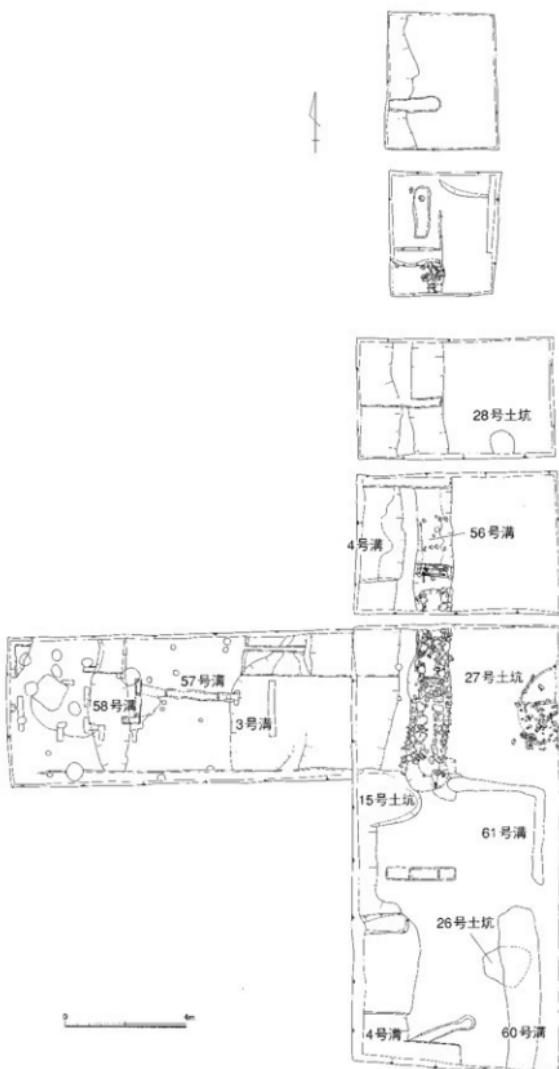
溝のわずかに残った床面を検出したものと思われる。

#### 56号溝

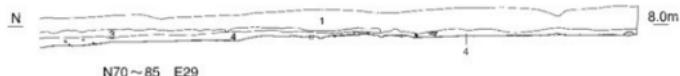
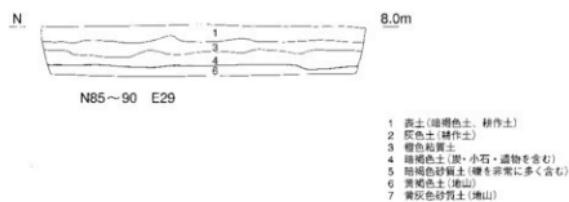
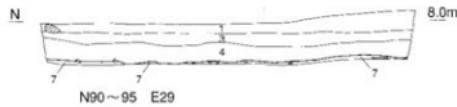
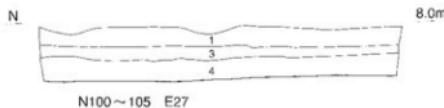
平成15年度に37トレンチで検出した56号溝の範囲は、N80~85の5m間であったが、それより南の平成13年度調査区を再発掘すると、56号溝は全く検出できなかった。調査区南端とN75付近で断

ち割を行い、下層を確認したが、その痕跡は認められないため、N80付近で消滅し、その南少なくとも10m間には56号溝の延長が存在しない事になる。北側の延長に関しては、N95付近までは確実に追えるものの、その先是確認できなかった。よって、56号溝の検出長は約17mとなる。確認できる場所では、4号溝とは約60cmの間隔で平行に延びている。

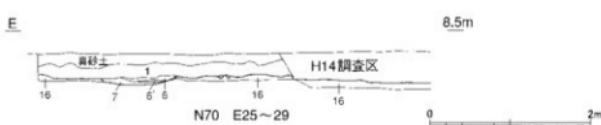
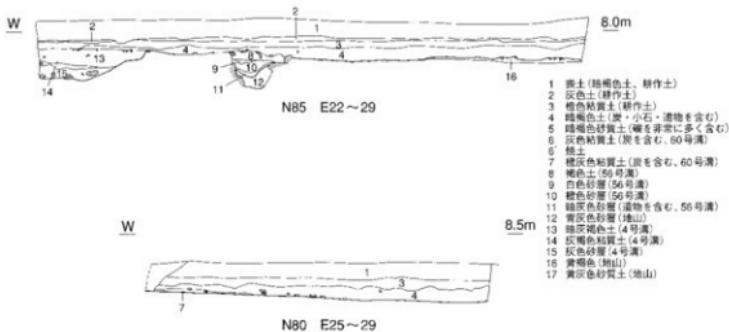
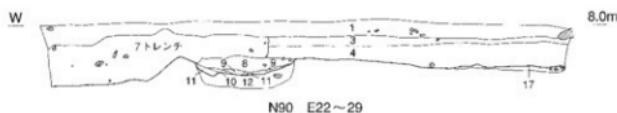
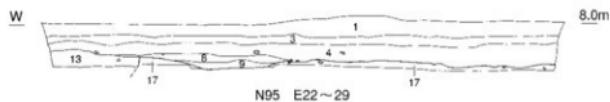
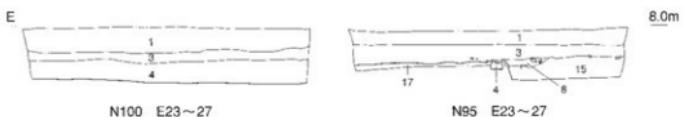
56号溝は、N80付近から真北に向かって続く溝で、幅約1.2m、検出長約17mで、N83付近で深さ25cmを測る。検出面そのものが北へ向かうと下がることもある、N95付近では深さ10cmにまで浅くなる。N80~87の約7mの間は、両岸を石で護岸しているが、N90付近より北は素掘りであった。N95以北では、56号溝を検出できなかつたが、N96付近の56号溝延長線上で人頭大の石が溜まっている場所があり、流された護岸状施設の一部かもしれない。



第56図 平成15・16年度大倉原4区遺構配置図 (S=1:160)



第57図 大倉原4区土層断面図(1) (S=1:80)



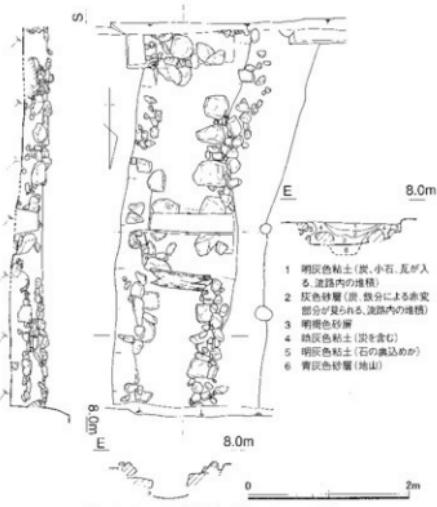
第58図 大倉原4区土層断面図(2) (S=1:80)

56号溝は、3褐色土とその下面の石によって埋められており、N85付近での56号溝の内側では、砂質土が3層前後に分かれて堆積している。石による護岸が見られる範囲では、溝の内側の幅は約70cmであるが、石の護岸が見られないN90付近では、約1.2mまで広がる。平面的に確認できなくなるN95以北では、壁面にかろうじて4暗灰色粘砂層のレンズ状の堆積が見られ、56号溝基底部であった可能性がある。4暗灰色粘砂層は、4号溝堤上である5明灰色砂層を切っている一方、平面的には4号溝東肩の位置に一致し、56号溝が4号溝を共有していた可能性がある。

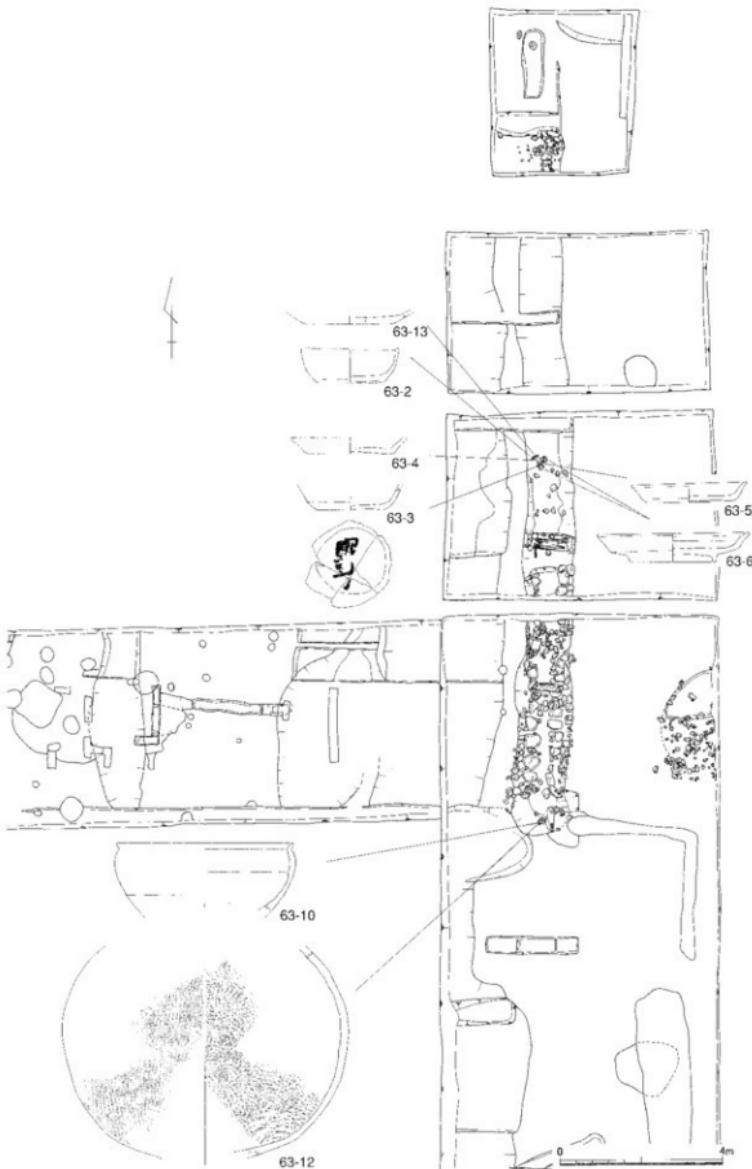
第59図には、石による護岸の内側の土層を示した。最上層を埋める1明灰色粘土は、遺物包含層の褐色土が水分を含んだものと思われ、炭や小石の他、完形に近い平瓦(74-1)が入っている。石の内側には、砂層が二面に渡って堆積し、水が流れていることを伺わせる。当初、溝床面は少なくとも護岸の石の下面より下にあるはずと考え、断ち割ったが、3明褐色砂層より下層には還元された6青灰色砂層が続いており床面が存在しない。よって、3明褐色砂層下面が、56号溝の床面であると判断した。両岸の護岸状施設は丁寧に造られるが、床面は疊敷きでなく、素掘りのままだったようである。3明褐色砂層下面は、護岸の石の下端よりも高い位置になるが、石の自重により3cm程度は沈んでいるものと思われる。護岸の石の周囲には、明灰色粘土が挟まれており、石の裏込め土と思われる。

護岸状施設の内部では少量の須恵器壺片と土師器皿の小片が出土した。また、後述する56号溝南端では、床面に貼り付くように須恵器鉢・甕(63-10・12)が出土した。一方、護岸施設の見られないN89付近では、須恵器壺・皿がまとまって出土している。この中には墨書き土器(63-3)も含まれている。

56号溝は、N80より南には残存しておらず、検出面ではN80が溝の南端となる。平成13年度調査の15号土坑が掛かっていたため両側の形状は明らかでないが、56号溝南端は半円形の窪みとなって検出された。溝南端から約50cmの間の傾斜面には石は貼られていない。溝南端より50cmの位置から両岸の護岸状施設が始まり、少なくともN87までは連続するを確認している。護岸状施設の石は階段状の断面形を呈しており、上段の石を壁面に添えて立て掛け、10-15cm下がったところに下段の石を水平方向に置き、その内法の幅約30cmが溝床面となる。下段の石は、比較的大きなものが多く、上面側が平らになるように揃えられている。上段側は、やや小振りな板石状のものが多く使用されており、隙間に凹縫を挟むようである。検出面が低くなるN85より北側では、下段側の石のみで、上段側の石は、ほとんど残存していないかった。後述する木柱が出土したN87付



第59図 56号溝検出状況 (S=1:60)

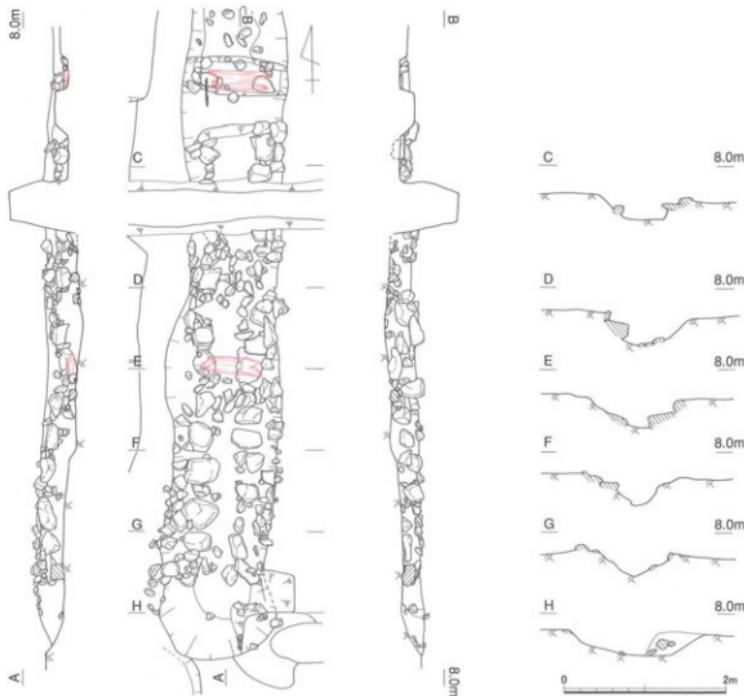


第60図 56号溝遺物出土状況 (S=1:120)

近では、木材を取り上げるために掘削し、下段の石が残存していることを確認したが、N90での断ち割では石が検出できなかった。よって、N87からN90の間で、石による護岸が終わっており、護岸された部分の長さは6.5m以上、9.3m以下である。

N95~100の間では、約1m四方の範囲に拳大から人頭大の石が集まつた状態（第60図上）で出土している。このグリッドでは56号溝東肩しか検出できていないが、石の集積は56号溝推定線の内側におさまっており、56号溝の護岸状施設の石である可能性がある。木材の出土したN87付近では、下段側の石しか残存しておらず、その付近の上段側の石が崩落して、流された可能性があるものと思われる。このグリッドでの56号溝西肩は、4号溝埋土中で検出できなかった。4号溝が、東へ蛇行している可能性があり、この付近より北では、56号溝が4号溝の流路を共有している可能性があり、N105グリッドでは4号溝と56号溝が完全に一体化している可能性が高い。N100グリッドは、平成14年度の28トレンチに掛かっており、28トレンチで検出したピットを再検出したが、4号溝に直交する29号溝は存在しなかった<sup>(注)</sup>。28トレンチの東壁が、56号溝東肩推定線と、ほぼ一致しており、56号溝基底部を直交する溝として検出したと考えられる。

56号溝のN83付近、N87付近からは、護岸状施設下段に掛かった状態で、木材2点（第64図）が出土している。いずれも両端に切り込みのある、長さ約75cmの栗材<sup>(注)</sup>で、溝の流路方向に対し直



第61図 56号溝護岸状施設実測図 (S=1:60)

交して出土していることから、溝を跨いで架けられていたものと判断した。2点の木材出土地点の間隔は約3.7mである。

56号溝の下層の堆積は基本的に砂質で、濾んでいたような状況は観察されないことから、流水の水路であったと思われる。よって、56号溝南端部は、溝の開始点（終点？）ではなく、一段高い位置から流れてきた溝が、階段状に落ちて北へ流れていると考えられる。56号溝南端部は、15号土坑や平成13年度の柱の関係から西半側の上層堆積状況が不明である。南端部の土層（第62図）は、基本的には3層で、下面の7明灰色砂層が東西方向では水平堆積に近いが、南北方向では、北に落ち込む様子が観察される。西半の土層が不明なため、西から流れ込む可能性は全く否定されるものは無いが、他の遺構との関係から、南側から一段高い位置を流れてきた溝が、N80付近で階段状に落ち込み、護岸状施設の間を通過し、木材の下を通って北へ流れたと考えられる。また、南端部のほとんどを埋める3明褐色砂質土中には礫が多く落ち込んでおり、南側にも護岸状施設が在った可能性がある。3明褐色砂質土下面には須恵器片が入っていた。

#### 56号溝出土遺物

第63・64図には、56号溝出土遺物を図示した。



第62図 56号溝南端土層断面図 (S=1:60)

63-1は、須恵器蓋である。頂部が平らで、口縁端部をわずかに垂下させる。宝珠状つまみが付くものと思われる。

63-2・3は、須恵器坏である。底部に回転糸切り痕を残し、体部は丸みを持つ。63-2の口縁部は内側をわずかに肥厚させるものである。63-3の底部には墨書きが見られる。墨書きは「駅△□(駅か)」と見られるものである。最初の文字は、昭和45年宮の後地区的調査で「駅」とされる墨書きと字体<sup>(45)</sup>が似ている。

63-4は、無高台の須恵器皿である。底部に回転糸切り痕を残している。63-5は、同様の器形であるが、土師器である。

63-6は、高台付きの須恵器皿である。

63-7は、高台付きの須恵器坏で、体部が直立するものである。

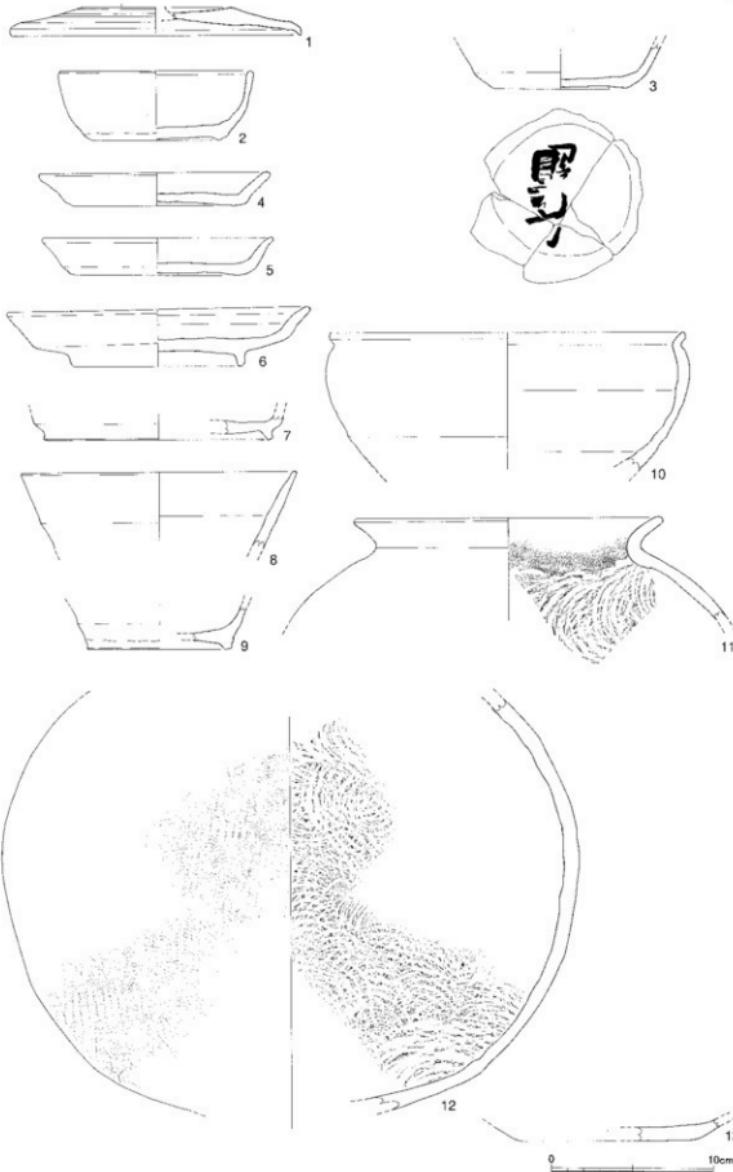
63-8・9は、体部が直線的に開く須恵器坏である。

63-10は、須恵器鉢である。

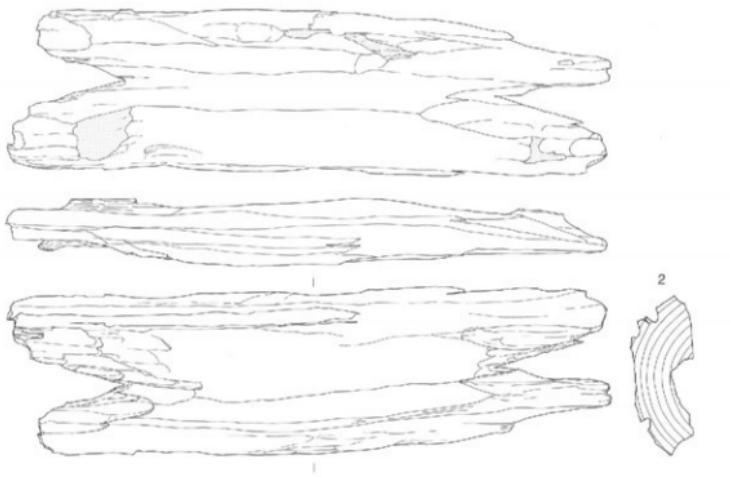
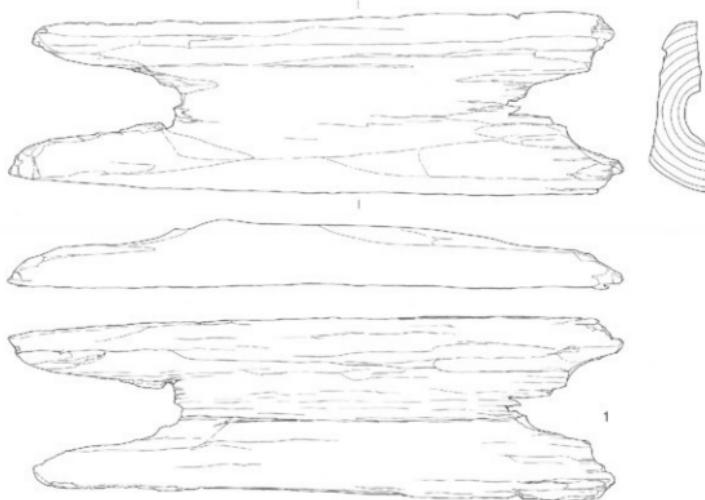
63-11・12は、須恵器蓋である。

63-13は、土師器皿である。磨滅しており、調整は不明である。63-5と同様のものか。

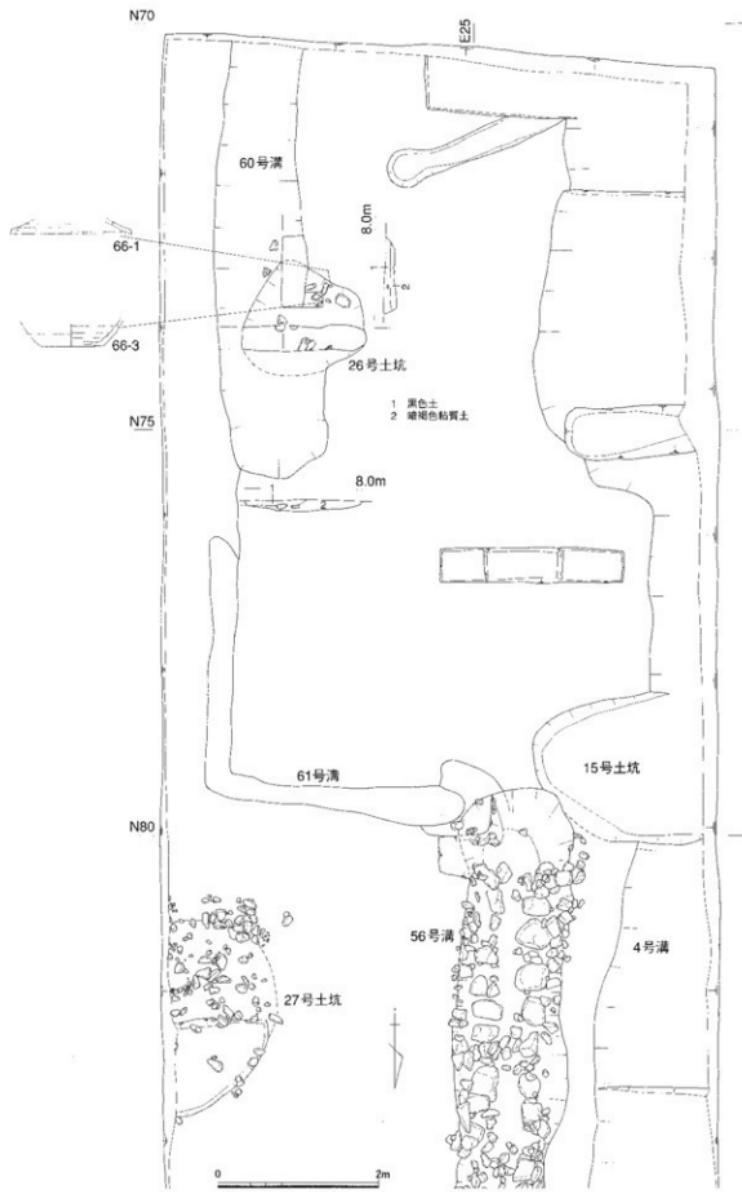
64-1・2は、56号溝に直交して架けられていた木材で、64-1が北側から、64-2が南側から出土した。いずれも残存長約75cmの薬材で、両端に深い削り込みが見られる。64-2下面には平らな部分（アミカケ部分）が残っ



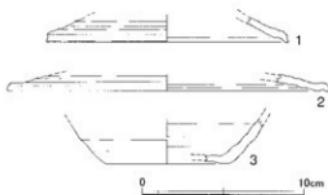
第63圖 56號溝出土土器實測圖 ( $S=1:3$ )



第64図 56号溝出土木材実測図 (S=1:6)



第65図 60号溝付近実測図 (S=1:60)



第66図 26号土坑出土土器実測図 (S=1:13)

能性が高い。

この材から想像される橋の構造としては、同様の材を隙間無く多数並べたか、2材（もしくはそれ以上）の材の上に横材を敷いた構造が考えられるが、横材を敷く構造であった場合は、横材を固定する繩<sup>(16)</sup>が確認<sup>(17)</sup>できない。

64-1・2が橋の部材である可能性が出てきたため、56号溝が、部分的に石による護岸を施している理由としても、構造物を壊さないように、水量によって溝幅が変わる可能性のある素掘りの溝を避けた事が考えられる。

検出地点に橋があった場合は、平成14年度に調査された八脚門と推定される9号建物の中心と、64-1の出土地点が近く、9号建物の北側に取り付く道が想定される他、56号溝自体が北へ延びることから、南北方向に延びる道の存在が推定される。

64-2について、放射性炭素による年代測定を実施<sup>(18)</sup>したところ、6世紀後半から7世紀末と言う結果が出た。4号溝との関係や出土土器の様相からは、56号溝が7世紀まで遡る可能性は考えにくい。大倉原地区の建物跡群からは、栗の柱根が多く出土しており、出雲国府跡で栗を使用した建築は一般的であったと思われる事から転用材であった可能性は高い。

### ③ その他の遺構

#### 60・61号溝、26号土坑

第65図には大倉原4区南側の状況を示した。調査区西壁には4号溝が南北に横断しており、北側では4号溝に平行して56号溝が見られる。56号溝南端から東へ向かって61号溝があり、61号溝は、

調査区東壁付近で直角に折れ曲がり、南へ向かいN76付近で消滅する。

61号溝は、検出長約5.8m、幅約30cm、深さ5cmほどの浅い溝で、遺物は伴っていない。埋土は暗褐色の粘質土で、砂などの堆積は見られない。61号溝消失地点から南へは、わずかに土色の異なる部分が見られるが、延長を確認する事はできなかった。

61号溝の南延長上には、60号溝が南北方向に見られる。60号溝は、検出長約5.3m、幅約1m、深さ約6cmの浅い溝で、断面箱形である。炭を含んだ黒色粘質土が詰まる溝で、

26号土坑と切り合っている。表面観察では一部に26号土坑の東肩と思われる土色の違いが見えたため、60号溝が古いと考



第67図 27号土坑実測図 (S=1:60)

ており、本来の面はこの部分のみで、他の部分は表面が腐食してしまっていると思われる。64-2は、取り上げまでに時間が掛かり、一部が乾燥したために反っているが、64-1から元の形状を推定すると、底面側が平らで、木目に沿って芯に近い部分と表皮に近い部分が脱落している可能性がある。側面形状はアーチ形で上面は削られている。出土状況から、56号溝上面に架け渡していたものと考えられ、橋の一部であった可能性が高い。

この材から想像される橋の構造としては、同様の材を隙間無く多数並べたか、2材（もしくはそれ以上）の材の上に横材を敷いた構造が考えられるが、横材を敷く構造であった場合は、横材を固定する繩<sup>(16)</sup>が確認<sup>(17)</sup>できない。

64-1・2が橋の部材である可能性が出てきたため、56号溝が、部分的に石による護岸を施している理由としても、構造物を壊さないように、水量によって溝幅が変わる可能性のある素掘りの溝を避けた事が考えられる。

検出地点に橋があった場合は、平成14年度に調査された八脚門と推定される9号建物の中心と、64-1の出土地点が近く、9号建物の北側に取り付く道が想定される他、56号溝自体が北へ延びることから、南北方向に延びる道の存在が推定される。

64-2について、放射性炭素による年代測定を実施<sup>(18)</sup>したところ、6世紀後半から7世紀末と言う結果が出た。4号溝との関係や出土土器の様相からは、56号溝が7世紀まで遡る可能性は考えにくい。大倉原地区の建物跡群からは、栗の柱根が多く出土しており、出雲国府跡で栗を使用した建築は一般的であったと思われる事から転用材であった可能性は高い。

### ③ その他の遺構

#### 60・61号溝、26号土坑

第65図には大倉原4区南側の状況を示した。調査区西壁には4号溝が南北に横断しており、北側では4号溝に平行して56号溝が見られる。56号溝南端から東へ向かって61号溝があり、61号溝は、

調査区東壁付近で直角に折れ曲がり、南へ向かいN76付近で消滅する。

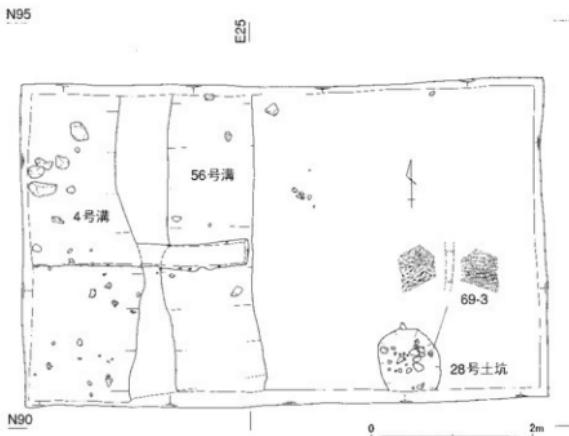
61号溝は、検出長約5.8m、幅約30cm、深さ5cmほどの浅い溝で、遺物は伴っていない。埋土は暗褐色の粘質土で、砂などの堆積は見られない。61号溝消失地点から南へは、わずかに土色の異なる部分が見られるが、延長を確認する事はできなかった。

61号溝の南延長上には、60号溝が南北方向に見られる。60号溝は、検出長約5.3m、幅約1m、深さ約6cmの浅い溝で、断面箱形である。炭を含んだ黒色粘質土が詰まる溝で、

26号土坑と切り合っている。表面観察では一部に26号土坑の東肩と思われる土色の違いが見えたため、60号溝が古いと考

えていたが、土層断面では26号土坑を切って掘られているようである。

26号土坑は直径約1.4m、深さ約15cmの土坑で、60号溝によって切られている。土層断面の1黑色上は60号溝の埋土であり、26号土坑の埋土は2暗褐色粘質土である。土坑内部には石や土器片が多く入っており、石の先端は60号溝埋土内まで及んでいる。26号土坑からは須恵器蓋、坏の小片



第68図 28号土坑付近実測図 (S=1:60)

(第66図)が出上した他、筋砥石(78-18)が出土している。出土した土器は小片のため、26号土坑の時期を示すとは言えないが、過去の大倉原地区の調査で、筋砥石を伴う遺構としては、3号建物・4号溝がある。3号建物では3基の柱穴で根巻き石に筋砥石が使用されていた。また、9号建物でも砥石が出土している。

第66図には、26号土坑出土土器を図示した。

66-1・2は須恵器蓋である。66-1は、口縁端部をわずかに垂下させ、外面に面を持つものである。66-2は、20cmと口径が大きい。口縁端部の垂下はわずかで、体部下端の口縁部に近い部分を屈曲させるものである。

66-3は、須恵器坏である。器壁が薄く、体部が直線的に延びるものである。底部に糸切り痕を残している。

## 27・28号土坑

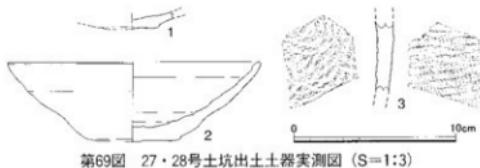
56号溝から東へ2mの位置で、石が詰まった半円形の落ち込みを検出し、27号土坑とした。土層としては、上面の礫層がそのまま流れ込んでおり、礫層堆積時に開いていたものと言える。検出面では直径約2.4m、深さ15cmの半円形の土坑状であるが、水流によって礫層が流れ込んでいると思われる事から、調査区外の東側は水流が抜け落ちて開いた形状になっているかもしれない。

土坑中からは、礫に混じって瓦片や土師器が出土している。

28号土坑は、N90付近で検出した小型の土坑である。直径約80cm、深さ5cmの浅いもので、礫が多く含まれる点は27号土坑と同様

である。須恵器片1点が出土した。

27号土坑からは土師器が出土している。69-1は、土師器小皿である。回転糸切り痕を残している。69



第69図 27・28号土坑出土土器実測図 (S=1:3)

—2は、土師器坏である。底径が小さく、体部は直線的に開き、口縁部外面にわずかに面を持つ。69—1・2は、いずれも他の遺構においては白磁IV類碗などが伴うもので、12世紀後半頃のものと考えられる。

69—3は、28号上坑から出土した須恵器壺片である。木日の日立つ平行タタキが施され、内面に同心円文の押さえ具の痕跡を明瞭に残す。

#### 遺構に伴わない遺物

70—1・2は、輪状つまみを持つ須恵器蓋である。70—1は口縁端部を大きく垂下させる。70—2の内面には、研磨痕が見られ転用硯と思われる。

70—3は口縁部を大きく垂下させる須恵器蓋で、輪状つまみが付くものであろう。

70—4は、口縁端部の垂下がわずかで、宝珠状つまみを持つ須恵器蓋で、40—5も同様のものと思われる。口径の大きな70—6も同様のものと思われるが、口縁部の垂下が非常に小さい。

70—7～9は、体部に丸みを持ち、高台の付かない須恵器坏である。口縁部を丸く收めるもので、大きく屈曲させるものの出上は少なかった。70—8は、内外面に漆が付着している。

70—10・11は、須恵器高台付坏の内、体部中程に丸みを持つものである。70—13も同様のものだろうか。

70—12は、体部が直線的に延びる須恵器高台付坏と思われるが、底部外面に墨書「駅」が見える。「駅」と訛読できるものは、過去の大倉原地区での調査では出土していないが、56号溝出土須恵器（63—3）にその可能性がある他、昭和40年代の宮の後地区の発掘調査でも「駅」1点が出土している。『出雲国風上記』によれば、「黒田駅」が付近にあったことが想定されている。70—14も同様の器形と思われるもので、ヘラ記号「×」が見える。

70—15・16は、体部が直線的に延びる須恵器高台付坏である。いずれも底部に回転糸切り痕を残している。

70—17・18は、坏底部と思われるものの破片に墨書を残すものである。70—17は「大□」、70—18は「高」と読める。「高」の意味は不明であるが、過去の大倉原地区の調査では3点が出土しているほか、「高上」が2点出土している。宮の後地区では確認できないものであり、大倉原地区に在った施設の性格を表す可能性がある。70—18は回転糸切り痕を残している。

70—19は、大型の須恵器坏で、体部中程に突帯を巡らすものである。体部が直立気味に立ち上がり、器高が高い。

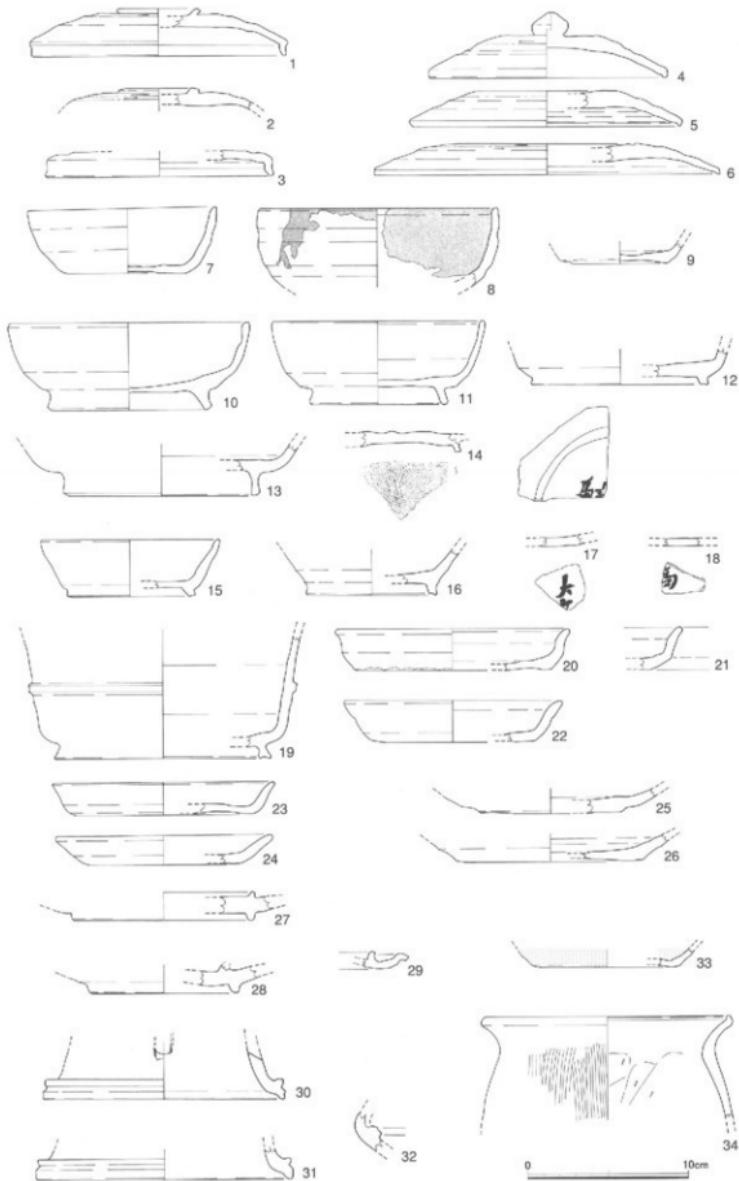
70—20～24は、須恵器皿である。70—20は体部が直立気味に立ち上がり、口縁部への屈曲が大きいものである。底部の切り離しは、静止糸切りと思われる。70—21は高台が付くかもしれない。70—22・23は、70—20に比べて体部の傾斜が大きいもので、底部に回転糸切り痕を残している。

70—25・26は、須恵器皿の内、体部が大きく開くものである。底部には回転糸切り痕を残し、底部外面に小さな段を持つ。70—26は内面が削減しており、転用硯の可能性がある。

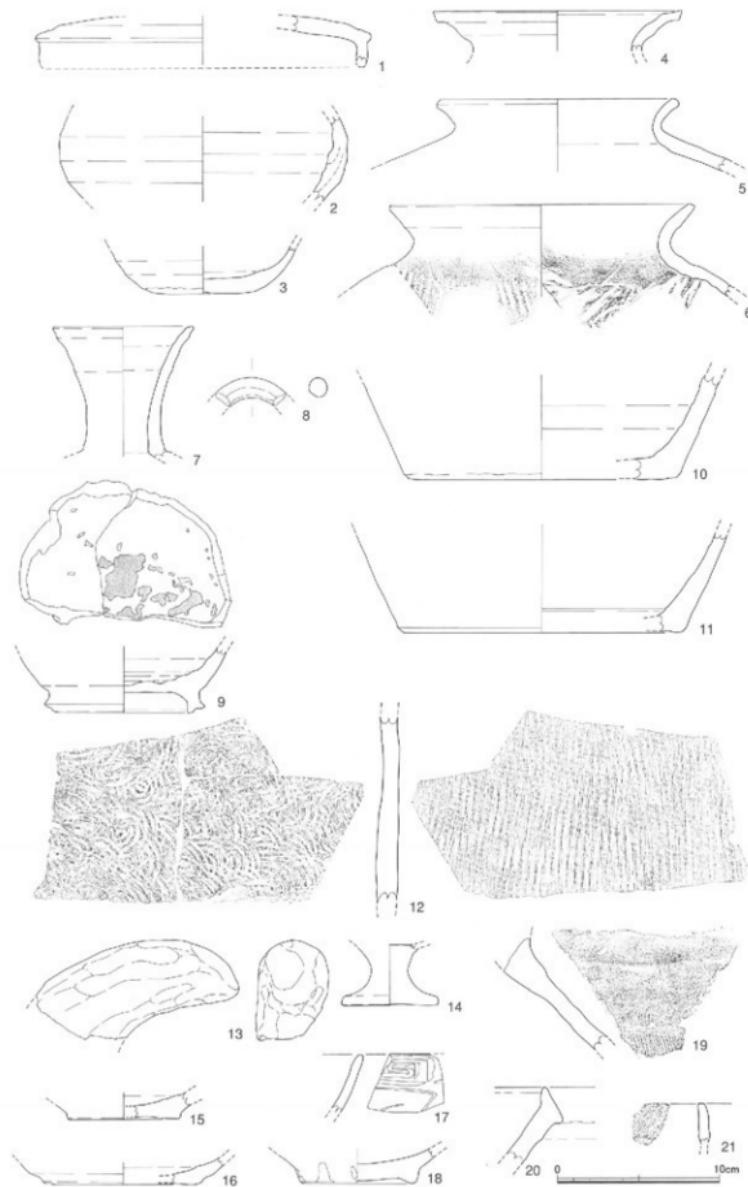
70—27・28は、須恵器托である。70—29は、高台が無く、端部が大きく反り返るものであるが、托と判断した。

70—30～32は、円面硯である。小片のためスカシ位置は特定できないが、長方形のスカシを密に入れるものであろう。70—30は、底径に対して器高が高い。

70—33は、土師器坏である。内外面共に赤彩が見られる。外面に煤が付着している。



第70図 大倉原4区出土土器実測図 (S=1:3)



第71図 大倉原地出土土器・磁器実測図 (S=1:3)

70-34は、土師器壺である。外面にハケメを残し、口縁端部を上方につまみ出している。

71-1は、須恵器蓋である。口縁部が大きく垂下し、体部と口縁部の境を鶴状に張り出す。つまみの形状は不明である。壺に伴うものであろうか。

71-2・3は、須恵器壺である。71-3は回転糸切り痕を残している。

71-4～6は、須恵器壺である。71-5は外面に自然釉が付着している。

71-7は、須恵器長頸瓶の頭部である。頭部に文様などは見られない。

71-8は、断面円形の把手である。器種は不明である。

71-9は、長頸瓶の底部と思われるものである。

底部には回転糸切り痕を残している。内面に漆が付着しており、漆容器として使用されている。

71-10・11は、須恵器の壺か鉢の底部である。高台はなく、器壁が厚い。底部はナデ調整される。

71-12は、須恵器壺である。大型品と思われ、湾曲が少ない。暗灰色を呈し、硬く焼成される。

71-13は、土製支脚の受部である。一部に被熱痕が見られる。

71-14は、柱状高台付皿である。底部には回転糸切り痕を残し、皿部には扁平な皿が乗るものと思われる。黄褐色を呈し、焼成はやや軟質である。

71-15・16は土器の坏か皿である。底部に回転糸切り痕を残し、体部が大きく開く形状で、いずれも底部外面に高台状の段を持つ。71-15の外面には煤が付着している。

71-17は、龍泉窯系青磁碗と思われるものである。文様は見られないが、底部を除いて暗緑色の釉が厚く掛かる。

71-18は、白磁IV類碗と思われるものである。文様は見られない。釉は高台外面まで流れ落ちている。

71-19は、中世須恵器壺の肩部である。頭部の接合痕を残しており、別作りの頭部が脱落したことが判る。内面はナデ調整され、肩部外面にはハケメが見える。

71-20は、中世須恵器の片口鉢と考えられるものである。口縁部は上下に拡張され、外面に面を持つ。拡張された口縁部下方には強い横方向のナデが見える。破片の範囲以内では撻り目は見られない。明灰色を呈すもので東播系か。

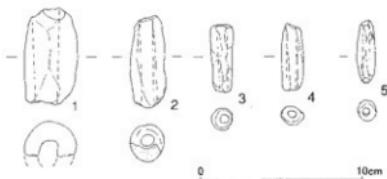
71-21は、製塙土器と考えられるものの小片である。内面側には布目が見え、外面には指頭圧痕が残る。淡褐色を呈している。

第72図には、上鍤を示した。やや大型のもの（72-1・2）と、小型のもの（72-3～5）がある。72-1・5は紡錘形を呈し、72-3は円筒形である。いずれも残りが悪い。

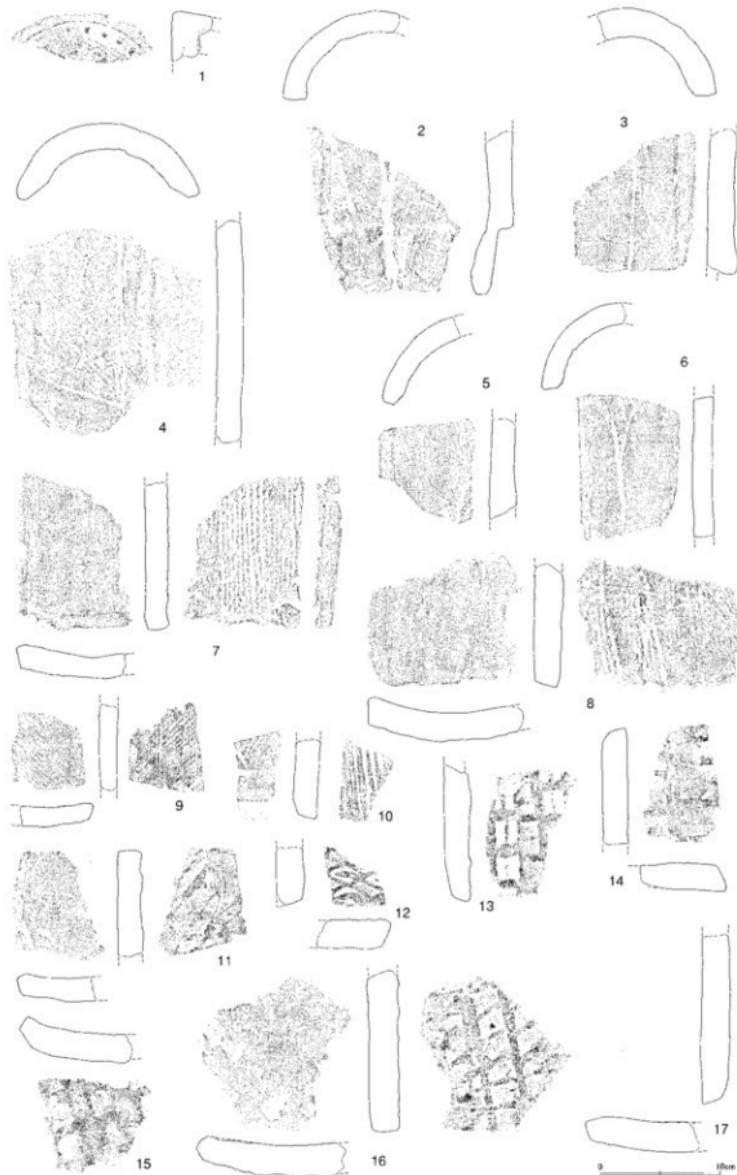
#### 瓦類（第73・74図）

瓦類は、上面の礫層中から出土している。遺構直上では、礫層もやや下がるようで、74-1は、56号溝検出面で、56号溝内側に挟まるような状況で出土した。過去の大倉原地区的調査では掘立柱柱穴内から瓦が出土した例があるが、今回の調査では遺構に伴うものは見られない。

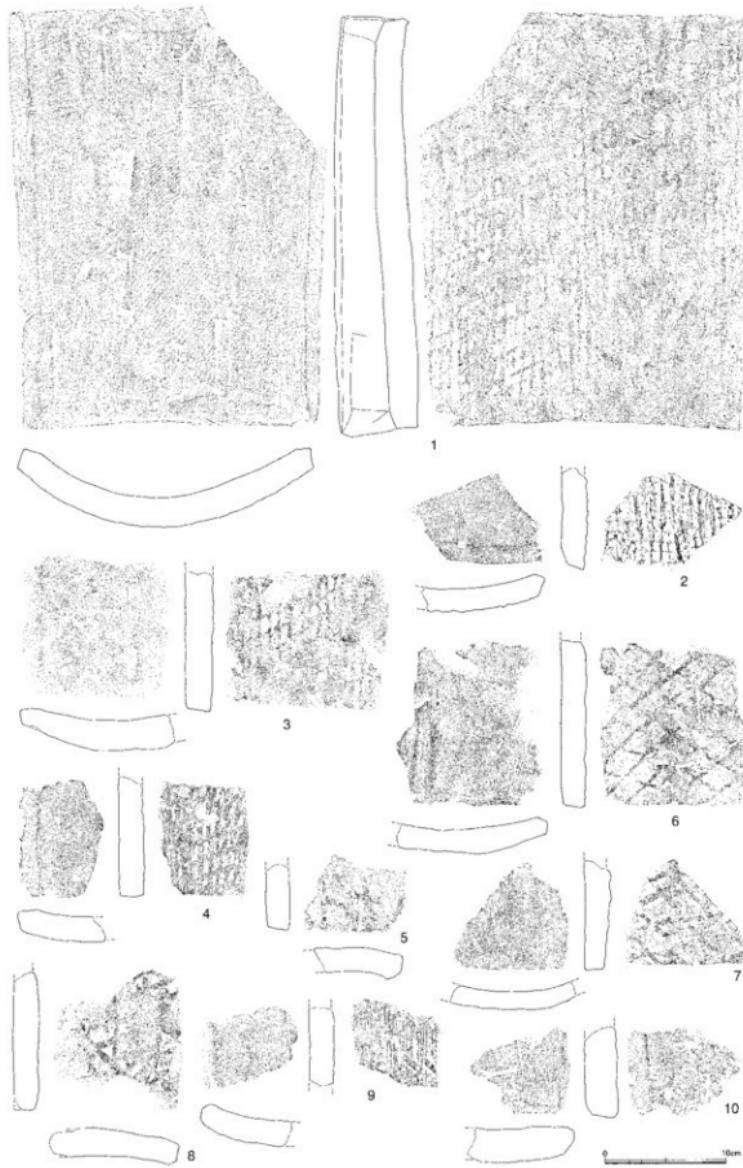
大倉原地区での瓦類の出土は少くないが、出土状況から、これらの瓦類は大倉原地区的建物群



第72図 大倉原4区出土土鍤実測図 (S=1:3)



第73図 大谷原4区出土瓦実測図(1) (S=1:4)



第74図 大舍原4区出土瓦実測図(2) (S=1:4)



第75図 大倉原地区4号溝出土木製品実測図 (S=1:3)

平瓦は、タタキ痕を中心に分類した。粘土板の剥離痕などは全く確認できず、いずれも一枚造りと考えられるもので、桶巻き造りの平瓦は見られない。また、隅切り瓦と考えられるものが少量見られる。

73-7～9は、縄目タタキを残す平瓦である。いずれも弧深が浅く、一枚造りによるものである。

73-10は、細く深い平行タタキを施すものである。須恵質で硬く焼成され、端部を凹面側で二面取りする。個体数は少ない。

73-11・12は、菱形に見える格子タタキを施すものである。73-11は離れ砂を使用している。

73-13～17は、正方形のタタキを施すものである。73-16は一隅が斜めに割れており、隅切り瓦の可能性がある。

74-1～4は、細い斜格子タタキを施すものである。74-1の凹面には板状の圧痕が多く見え、弧深も深いが、側部の形状から、短冊状の板材を使用した一枚作りが想定される。

74-5は、幅の広い格子タタキであろうか、側部は断面三角形になるように二面取りされている。磨滅が著しい。

74-6・7は菱形に見える斜格子タタキを施すものである。74-6の凹面には板状の圧痕が見えるが、弧深は浅い。

74-8はタタキが重なっており、原体が見えにくいか74-1・2と同様の斜格子タタキと思われる。凸面には離れ砂が見える。

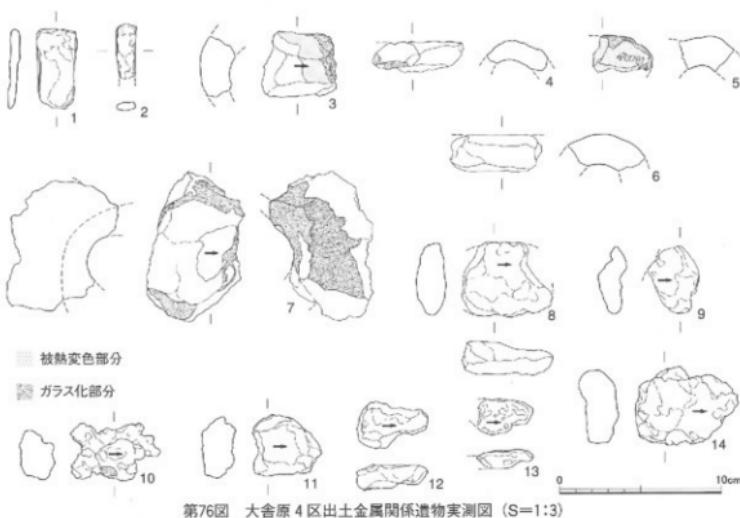
78-9は、斜格子の内側に多くの木目痕を残すタタキを使用したもので、78-6・7と同様の原体と思われる。

78-10は無文タタキであろうか。凸面に離れ砂が使用されるものである。

に伴うものではないと考えられ、付近にまだ確認されていない瓦葺き建物が存在すると考えられる。軒瓦については、出雲国分寺第2形式軒丸瓦が多く見られ、第3形式軒丸瓦も過去には出土しているが、軒平瓦の出土が極めて少ないと注意される。

73-1は、出雲国分寺跡第2形式と思われる軒丸瓦の瓦当部である。丸瓦接合部と朱文帯の一部を残している。軟質で残りが悪い。

73-2～6は丸瓦である。73-1・3は玉縁部の痕跡を残すものであるが、他の丸瓦については判らない。いずれも凸面をナデ調整し、タタキ痕を残さない。側部は凹面側を二面取りするものが多い。73-4の凹面には布の綴じ合わせが見える。



#### 木製品（第75図）

橋の部材と考えられる56号溝の木材（64-1・2）以外には、少量の木製品が出土している。いずれも用途は不明で、木簡などは確認できていない。図示したものは、いずれも4号溝下層から出土したものである。

75-1は、針葉樹の板目材で、側部・端部共に欠損している。建築材であろうか。

75-2は棒状のもので、柾目の板材が裂けたものと思われる。墨痕等は見えない。

75-3は、針葉樹板目材を使用した、小さな板である。面取りは見られない。

75-4は細い棒状のもので、下端のみをわずかに残し、上方に向かってやや細くなる。75-5も同様に太さが変わる棒状のもので、箸の可能性も考えられる。

#### 鉄製品（76-1・2）

鉄製品は2点が出土した。いずれも包含層出土で、遺構には伴わない。

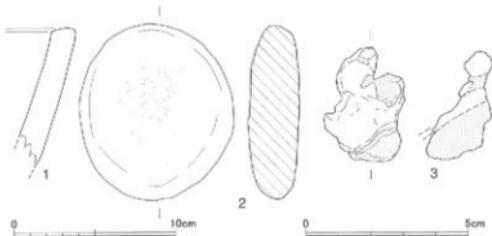
76-1は、柾状のもので、用途は不明である。長さ49mm、幅25mmで、基部側が厚さ5mmで、下端に向けて薄くなる。

76-2は、薄い柾状のもので、刃部は見られない。幅12mm、厚さ5mmを測る。

#### 鉄器生産関連遺物（76-3～14）

鞴の羽口や鍛冶滓などの鉄器生産に関わる遺物は、少量が出土しており、特に4号溝下層からの出土が目立った。

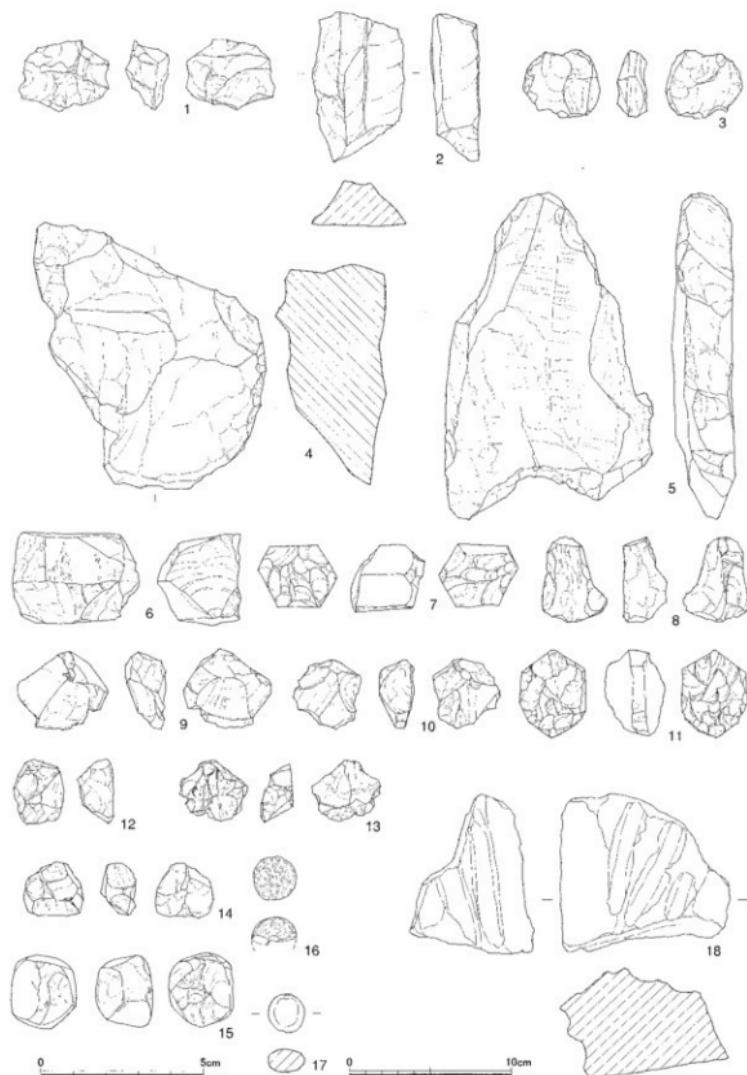
76-3～7は、鞴の羽口であ



77図 大倉原4区出土石製品・銅生産関係遺物実測図  
(S=1:3, 3のみ2:3)

る。いずれも先端部がガラス化している。色調から鉄製品に使用されたと思われる。76-4~6は、4号溝下層から出土した。

76-8~14は、鍛冶滓である。76-10は、全面破面で炉壁の可能性がある。76-12はメタル度が



第78図 大倉原4区出土工作遺物実測図 (17のみS=1:3、他はS=2:3)

高い。72-13は風化が進んでいる。72-14には羽口の先端が溶融したものが付着している。76-10・12は、4号溝下層から出土した。

#### 石製品その他（第77図）

77-1は、滑石製石鍋の口縁部である。口縁端部は内面側にわずかに傾斜させて切り落とされ、内面側にかすかに稜を持つ。口縁部から体部にかけては真っ直ぐで、剥離痕は見えない。内面には煤が付着している。石鍋と思われる破片は他に2点が出土しているが、いずれも体部小片で底部は見られない。3点は接合しないが、器壁や煤の付着の様子が似ており、同一個体の可能性が高い。77-1には、滑石製石鍋に特徴的な口縁部外面の鋸が見られない。把手の付く破片は出土していないが、鋸付きの石鍋が出現する以前のものと思われる<sup>(38)</sup>。同様のものは、県内では、浜田市の下府庵寺<sup>(39)</sup>で出土している他、鳥取県の秋里遺跡BII区造構外<sup>(40)</sup>に見られる。

77-2は、磨石である。両面の中央に打痕が見られる他、周縁部も擦痕・打痕が見られる。

77-3は銅滴である。坩堝の可能性がある焼土塊に含まれ、周辺で銅製品が鋳造されていた可能性を示すものである。

#### 玉作関係遺物（第78図）

第78図には大倉原4区で出土した玉作関係遺物を示した。多くは包含層出土であるが、4号溝下層からはまとまった量が出土している。

78-1・2は、碧玉の右核である。周囲の粗削が行われており、何かの素材と考えられる。いずれも、4号溝下層から出土している。

78-3は4号溝下層から出土したメノウである。平玉素材状に、丸く薄い素材を割り取ろうとしているが、剥離は大きく、調整剥離には及んでいない。

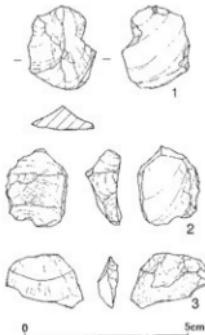
78-4～17は水晶を使用したものである。水晶は多くが平玉・丸玉の未製品と考えられるもので、原石から荒削→二次調整→敲打→（穿孔）→研磨の行程が想定されるが、自然面を残したまま敲打に及んでいるものが見られ、形が整った素材であれば、行程を飛ばして先に進んでいるものも多くあると思われる。石材はほとんどが透明度の高い水晶で、一部に黒水晶が含まれる。透明度の低い石英は使用していない。

78-4～6は、原石から荒削段階のものと思われる。78-4は自然面を残す原石である。78-5は板状の原石の周囲を割ったものである。78-6は六角錐の結晶を分割したものであり、強い打撃で折り取られるのみで、小さな剥離はない。

78-7は自然面を残したまま、丸玉の調整剥離段階に入ったと考えられるものである。形態としては78-6と差がないが、切断面には小さな剥離が見られる。原石を切断後に二次調整を思わせる細かい剥離に入っており、行程を飛ばした様子が伺える。この状態から敲打・研磨に進むと78-15の状態になると思われる。

78-8は、わずかに敲打が行われるものである。平玉とするとやや不自然な形態であり、勾玉の可能性も否定できない。

78-9は二次調整が行われる平玉未製品と考えられるものである。敲打は見られない。3号溝から出土している。



第79図 大倉原4区出土石器  
実測図 (S=2:3)

78-10は自然面を残す半玉素材と考えられるものであるが、わずかに敲打が見られる。

78-11は、黒水晶を使用した平玉素材と考えられるものである。平面六角形に見える部分は、結晶の自然面そのままで、結晶を輪切りにし、その切断面のみを調整剥離する。周囲には自然面を多く残している。

78-12は丸玉素材と思われるものだが、敲打は見られず、細かい調整剥離は少ない。

78-13は自然面を残したまま、二次調整に及んだと思われる平玉未製品である。わずかに敲打痕が見られる。4号溝下層から出土している。

78-14は丸玉の二次調整段階のもので、わずかに敲打が見られる。剥離は大きく、二次調整の細かい剥離が少ない。

78-15は大玉の仕上げ段階のものと思われる。稜が高く、球形にはほど遠い形状であるが、全面的に研磨が及んでおり、敲打痕は全く残していない。二次調整の剥離で窪んだ部分は、そのまま残されており、研磨によって丸く仕上げようとしている。穿孔は見られない。

78-16は丸玉の仕上げ段階のもので、半分近くが割れ落ちている。

完全な球形を呈するもので、両面穿孔され、全面に敲打痕を残している。研磨痕は見られないでの、穿孔時に破損したと思われる。

穿孔される丸玉と穿孔のない大玉の違いはあるが、78-15が敲打をほとんど行わないまま研磨されるのに対し、完全な球形を呈す78-16に研磨が全く見られない。穿孔の有無や目的とする玉の大きさによって、行程が異なることも考えられる。

78-17は、黒水晶による平玉で、完成品と思われる。直径12mm、厚さ8mmを測る。丁寧に研磨され、透明度が高い。

78-18は、26号土坑から出土した砂岩製の筋砥石である。3面が破断しているが、2面に筋状の砥面が、1面に平坦な砥面が残る。各砥面には研磨痕が残っている。

#### 石器（第79図）

第79図に示したものは黒曜石・安山岩である。今年度の大倉原地区の調査では確実な石器は77-2を除いて出土していないが、過去の調査では石鋤や石鎌が出上している他、一貫尻地区では黒曜石製スクレーパーが見られる。

79-1・2は、黒曜石の剥片である。79-3は安山岩製の剥片である。一面には自然風化面を残している。

出雲国府跡の発掘調査では、縄文土器や縄文時代の遺構と断定できるものは発見されていないが、日岸田地区の調査では黒曜石剥片がまとまって出土しており、石器も含まれている。剥片の割合が高いことから、付近に石器製作地の存在が推定できる。

### 3. 小 結

大倉原4区では56号溝の存在を確認した。56号溝はN80より南では消滅するが、階段状になって更に南へ続いている可能性<sup>(1)</sup>がある。大倉原地区の建物群の多くは、礎石建物の根石部分が検出面となっており、少なくとも礎石の厚さ分は削平が及んでいる事が判っている。

56号溝は、大倉原地区的建物群のある時期の区画であった可能性が有るが、同様の可能性があるものに3・4号溝がある。切り合い関係から3号溝→4号溝→56号溝の順に作られた事が判り、区

画としては、徐々に東に移動していったと考えられる。56号溝には高台付の須恵器皿や、体部が直線的に延びる大型の須恵器壺が入っており、『概報』の第5形式に近いと思われる。埋め戻された形成が無く、9世紀前半代には使用されていたものと思われる。

37トレンチでは、9号建物から延びると推定される4号柵列を検出する事はできなかったが、ほぼ同じ方向を向く57号溝を検出している。57号溝に水が流れた形跡はなく、堀の基部であった可能性も否定できない。9号建物から延びる遮蔽施設は、西側では非常にしっかりした掘方を持つ1号柵列が候補となっているが、東側の4号柵列は、1号柵列に比べて掘方が小さく、柱間も短いと言う点で異なっている。56号溝の発見により、9号建物東側に道が通っていた可能性が高まった事から、東側の遮蔽施設をより丁寧に造ったと考えられ、9号建物に続く遮蔽施設の可能性としては、4号柵列よりも57号溝を使用した堀の方が相応しいようと思われる。いずれにしても4・56号溝との関係は不明であり、推定国司館を区画する遮蔽施設<sup>註1</sup>についても判らない。

56号溝の護岸は7~10mの部分的な範囲であった事が判った。部分的に護岸を施す理由には、橋の存在が考えられ、構造物が乗る部分だけに、大雨などによる溝の浸食を防ぐ細工が施されたと考えられる。また、北側部分では、南側を埋め戻した4号溝の続きを流用している可能性が高い。大倉原地区の施設群の東の区画としては、南方では約1m拡張されているが、北方では以前からの区画が踏襲されていたと言える。

56号溝には、橋が架かっていた事が推定された。木材検出点間の幅が、橋の幅であるとすると、約3.5mとなる。橋は道よりやや狭くなっている場合が多いことから<sup>註13</sup>、幅4~5mの道が西に延びると思われ、その場合、道の南側に57号溝が通り、9号建物の北側の壁に当たる<sup>註14</sup>事になる。

一方、56号溝自体も道の側溝であった可能性が高い。東側が確認できていないため、道の詳細は不明だが、南北方向に一直線に伸びるとすると、北側は推定十字街に達する事になる。

平成14年度の28トレンチで検出し4号溝から直交して東へ向かう26号溝は、N100グリッドの調査で、存在しない事が判明した。N100グリッドの遺構検出面は、28トレンチ発掘停止面よりわずかに高いが、東壁では断ち割を行っており、少なくとも東側へ向かう溝は、存在しない事が確定的である。28トレンチで検出した26号溝は、4号溝を越え西側にも延びているが、西側の溝の存在は否定できない。4号溝と切り合いの無い東西溝の存在は、大倉原地区の施設の区画に直接的に関わるものであり、検討を要する。

註1 「史蹟出雲國府跡 環濠整備報告書」島根県教育委員会1975年

註2 「来美魔守」島根県教育委員会2002年

註3 29号溝の確認できない部分は、東半のみで、西側は存在するものと思われる。

註4 次文化財調査コンサルタントに依頼した樹種鑑定で栗と鑑定された。第6章参照。

註5 読説は古代文化センター平石充に依頼した。判読し難い字であるが、「駅」と誤読されている宮の後地区出土の墨書きに似る。偏が馬偏であるのは確定であろうが、旁は不確定である。宮の後地区のものが「駅」であるならば、この墨書きも「駅」とするべきだが、宮の後地区出土墨書きが「駅」と読めるかどうかは論議が必要である、とされた。『山陰古代出土文字資料集成 I』島根県古代文化センター~2003年。

註6 アーチ形を呈し横材を數いた構造の、溝に架かる橋は、「一過上人絵伝」に描かれており、その構造を念頭に復元案を検討していたが、京都大学上原真氏より「横材を固定する綱」が見られない以上、複雑な構造は考えにくい」と指摘を受けた。上原氏からは、橋である可能性や材の腐食過程などの御教授も受けている。

註7 放射性炭素による年代測定は次文化財調査コンサルタントに依頼した。第6章参照。

註8 石鍋の年代観については以下の論文を参考にした。

- 木戸邪寿「13.石鍋」『真説中世の土器陶磁器』中井土器研究会1995年
- 註9 『下府城守跡』浜田市教育委員会1993年
- 註10 『伏里遺跡』神島取市教育福社振興会
- 註11 砂の堆積や土器・罐の出土状況から南へ続く可能性を考えたが、途切れている事を積極的に評価すべき、との指摘もある。門などを構えず、直接進入できる施設であれば、施設の性格にも大きく関わるものである。なお、この場合は、橋の存在が問題となる。
- 註12 埼玉県埋蔵文化財満充事業団の田中広明氏によれば、全國での国司館の調査で、強固な遮蔽施設が検出されているものは意外に少なく、国司と任地との間で緊張関係が無ければ、区画は在っても遮蔽まではしない可能性がある。
- 註13 橋と道との関係については以下の論文を参考にした。
- 山中草「古代都城の橋と道路」『丹沢考古学ジャーナルNo.332』1991年
- 註14 56号溝木材出土地点を基準に西に向かう道を設定すると、9号建物の北側柱に当たる。佐藤委員他から、八脚門を回り込んで進入することはあり得る、との指導を受けているが、9号建物自体の時期が確定できないため、同時に存在したかどうかは疑問もある。

# 第5章 試掘調査

## 1. 38トレンチの調査

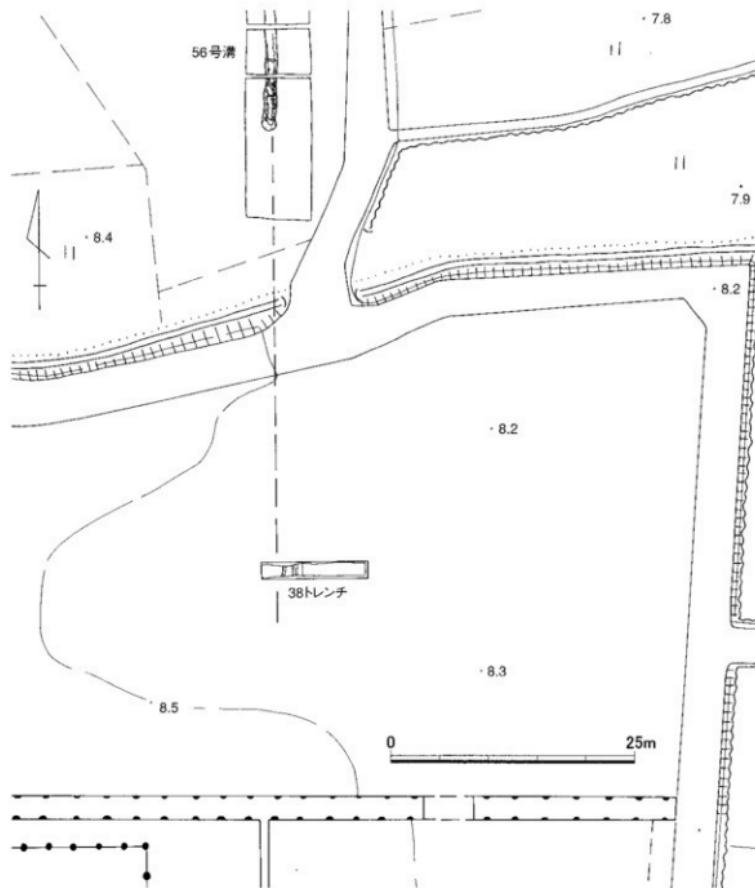
平成16年度には、公園内で56号溝検出を目指して、試掘調査（38トレンチ）を行った。平成15年度に大舎原地区で検出した56号溝は、国府政府への進入路の側溝となる可能性が検討され、56号溝の東側で、対になる溝の検出を目的とした。しかし、仮に道路幅を9m前後と考えた場合、56号溝検出位置から東9mの位置は現道法面中に当たってしまうため、掘削できない。公園直北の現道が西へ屈曲した部分では9mラインを確保できるものの、その位置の標高は7.9mと低い。大舎原地区の遺構検出面が標高約8mである事を考えると、遺構が残存していない可能性も考えられるため、56号溝より9m東の延長線上で遺構検出可能と考えられる候補地は、公園内以外に選択できなかった。

56号溝の検出位置が、ほぼE25の線上を通過することからE25と、それより東に9mのE34を含む、N25E23～N25E35の点を設定し、南へ約2m（N23）の幅でトレンチ（38トレンチ）を掘削した。

38トレンチでは、公園に貼られた芝生を除去すると、真砂土による整地上が現れる。この整地上はE26付近より西側については20cmほどの厚みしかないが、E26以東では60cmもの厚さに盛られており、公園造成以前には元の水田面が大きく下がっていた事が解った。この位置は、公園北側の現道西肩延長線に一致し、公園造成前の空中写真などに見られる畦道東側に当たると思われる。従って、現水田面の標高が低いためにトレンチ設定を断念した公園北側の状況と同様であり、この時点で、56号溝と対になる東側の溝の検出は絶望的となった。

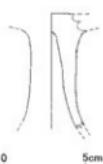


第80図 第38トレンチ位置図 (S=1:4,000)



第81図 第38トレンチと56号溝の位置 (S=1:500)

真砂土内出土であることから、公園造成時に真砂土採掘地から持ち込まれたと考えられる。淡青灰色を呈し、やや軟質に焼成されているもので、磨滅が進んでおり、細部の調整は見えない。脚部のスカシは見えない。公園造成土中からは、他に遺物は出土しなかった。



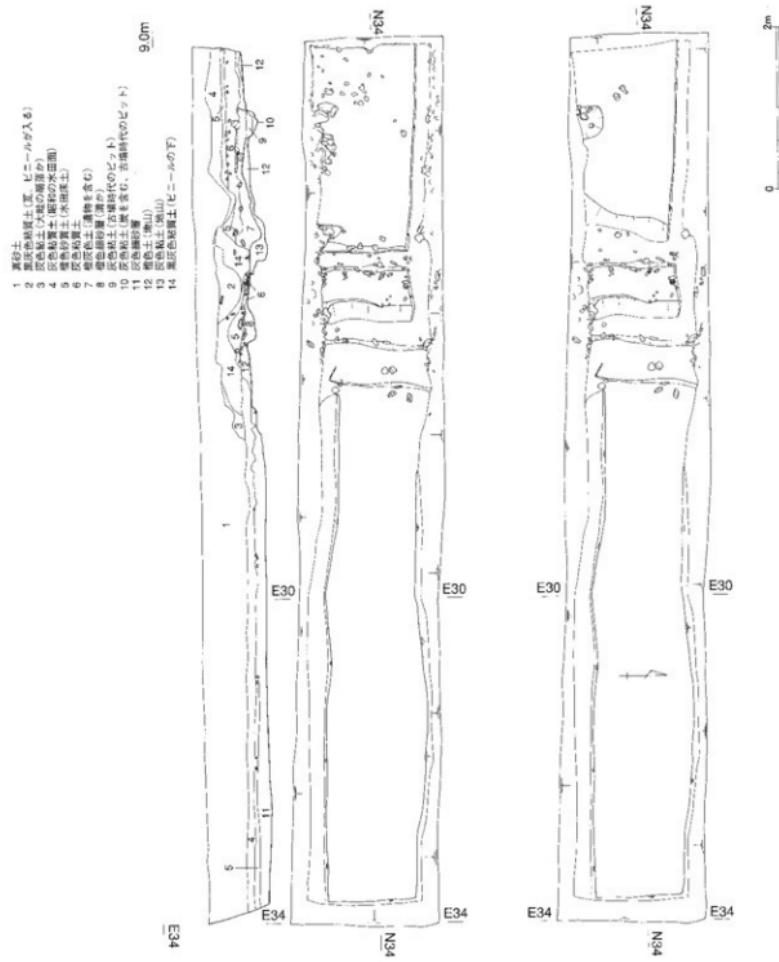
第82図 第38トレンチ造成土出土土器実測図 (S=1:3)

## 2. 38トレンチの状況

造成土を除去すると、E26付近より東側は、標高7.9m付近に水田面と考えられる4灰色粘質土、5橙色砂質土が現れる。5橙色砂質土の下面には少量の石が見られる。それより下層は11灰色の砂層となり、無遺物層である。耕作土中においても土器小片がわずかに見られるのみで、遺構は、確認できなかった。

E25付近には南北方向に走る溝が複雑に切り合っているが、2 黒灰色粘質土下面是ビニールシートが挟まれており、昭和19年の公囲造成直前に使用されていた溝そのものであることがわかる。最下層の7 棕灰色土で埋没している溝も、その上面に瓦類の堆積が見られることから、大倉原地区の遺構面上面埋土である褐色土と同様のものと考えられ、古代末頃のものと考えられる。

溝検出面からは、石・瓦が点在した状況（第38図中央）が見られる。それらを除去するとE24南側に直径約40cm、深さ約15cmのピットが現れた。ピット内からは土師器と思われる土器小片が出土したが、形状は判別できない。



第38図 第38トレンチ実測図 (S=1:60)

### 3. 出土遺物

#### 土器類（第84図）

84-1は、須恵器高台付き坏である。回転糸切りで切り離しを行い、高台を底部最外周に取り付けている。体部は直立気味で、直線的に立ち上がる。

84-2は、須恵器の小型の坏である。口縁部近くを大きく外側に折り曲げるもので、油杯であろうか。底部は残存していない。

84-3は中世の陶器壺の肩部であろう。褐色を呈し、固く焼き占められている。外面に細い平行タタキが見られる。内面調整は横方向のナデである。

84-4は、土師器壺である。折り曲げた頭部から口縁部が直線的に延びるもので、口縁端部に明瞭なアクセントは無い。

84-5は土師器坏である。底部には回転糸切り痕を残し、凹面には強い指ナデによる螺旋が描かれている。

#### 瓦類（第85図）

38トレンチ出土遺物の様相は、大倉原地区と大きな変化は見られないが、瓦類の破片が大きい印象があり、政府北側に展開する大倉原地区よりも瓦葺き建物があった場所に近づいた可能性がある。瓦類のほとんどはトレンチ南西の壁近くで出土しており、E26以東の砂層面では出土していない。また、平瓦の大きな破片は、トレンチ南壁に刺さった状態で検出したが、深く入り込んでいるものが多く、取り上げなかった。

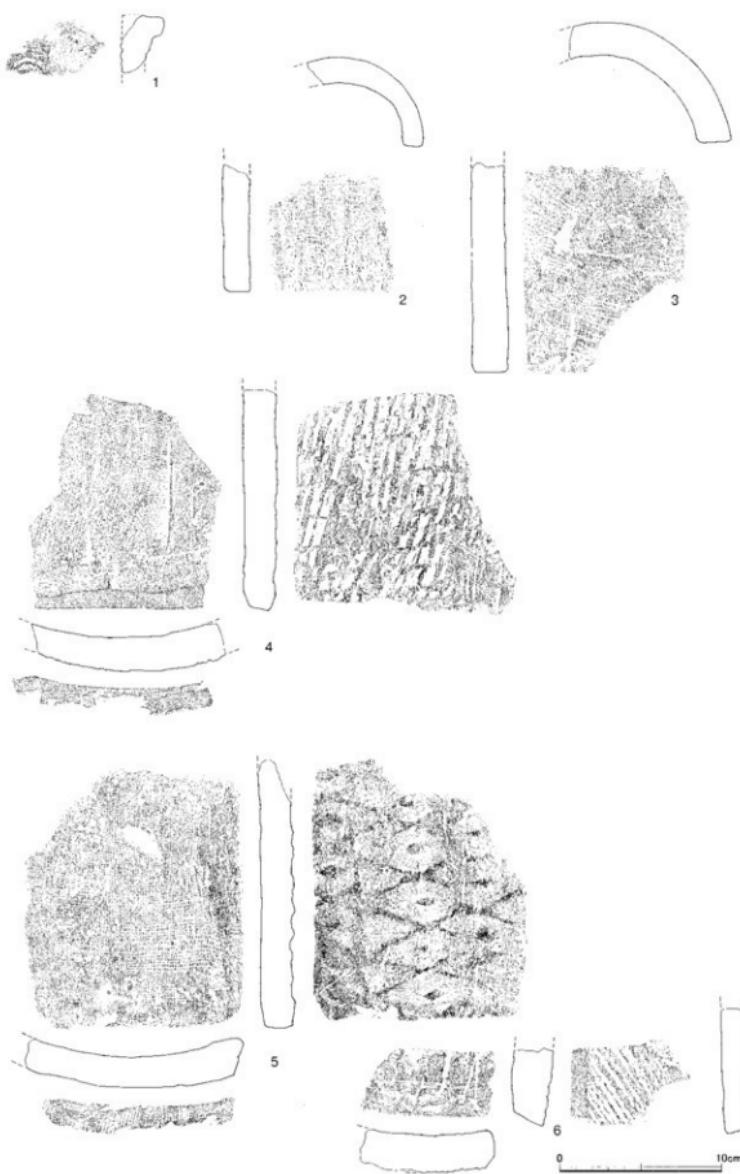
85-1は軒丸瓦当面上部の小片である。瓦当面にはわずかに唐草文帯の一部が残っており、出雲国分寺跡第3形式軒丸瓦と認識される。丸瓦部取り付け時の補強粘土が厚く見られる。瓦当裏面にはナデの痕跡がわずかに確認できるのみで、特別な調整は見られない。

85-2・3は丸瓦で、いずれも広端側であろう。端面は1面で面取りは見られない。凸面は調整されており、タタキ痕を残していない。85-2の凹面は全面に布目圧痕が見え、糸切り痕が見えない。側面も1面で面取りが見られない。85-3は凹面に布目圧痕と共に糸切り痕を明瞭に残している。側部は凹面側をわずかに面取りしている。

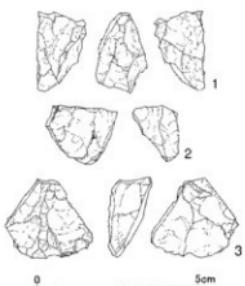
85-4~7は平瓦である。85-4は細長い斜格子のタタキを施すものである。側部が残存していないため、端部の方向は不明である。端面は強いケズリで調整され、凹面側を大きく面取りしている。比較的弧深が深い上、模骨痕状の板の圧痕が凹面に残っている。還元炎焼成され、硬質である。85-5は菱形に見える斜格子のタタキを施すもので、広端側と思われる。凹面は端部まで布目が残り布には伸びが認められる。端面には板目状の圧痕を残し、凸面側に浅く面取りを施している。側面は調整しており、凹面側に面取りを行う。褐色を呈しやや軟質である。85-6は斜め方向



第84図 第38トレンチ出土土器実測図 (S=1:3)



第85図 第38トレンチ出土瓦実測図 (S=1:3)



第38図 第38トレンチ出土玉作遺物  
出 (S=2:3)

に向かう縄目タタキを施すものである。小片のため端部の方向は不明である。端部は傾斜した形で調整されており、凹面側を薄く面取りしている。側面は中程から二面取りしている。凹面には板状の压痕が見られるが、弧深は比較的浅い。85-7は端部の小片である。厚さ1.2cmしかなく、極めて薄い。側面は残存していない。磨滅が進んでおり、調整は不明である。

#### 玉作関係遺物（第86図）

38トレンチでも少量の水晶が出土している。多くは剥片であるが、第86図には平玉素材と考えられるものを図示した。いずれも不定方向から剥離を行い、平たく丸い形状に整形しようとする意図が感じられる。図示していない剥片類を含め、透明度の高い良質の水晶が多く見られる。

## 4. 小 結

38トレンチでは56号溝及びそれと対になる溝を検出することはできなかったが、以下の事が確認された。

公園造成以前に道であったE26より東は、砂層の堆積が見られるのみで造構面が残存していない。公園北側についても、現道を挟んだ東西で標高差があり、E26より東側の多くの部分が地形的に低いと考えられる。一方、E26の線上を通る道は、数次に渡って作り替えられている事が確認でき、古い地割りを伝えている可能性がある。

E26より西からは、瓦類の比較的大きな破片が出土しており、瓦葺き建物が近くに存在した可能性が考えられる。大倉原地区においては一部造構に伴うものを除いて小片が多い事から、より南側に瓦葺き建物が存在した可能性が想像される。

E26より西については、大倉原地区の地山と同様の黄褐色を呈す面が見られる。大倉原地区南側と同様に、56号溝は検出できなかったが、E26以西には古代の造構が残存している可能性が高い。

38トレンチの発掘調査によって、56号溝の延長及び対になる溝を検出することはできなかったが、調査前においては、56号溝が「石を貼った溝」という認識であったため、過去に周囲で検出した素掘りの溝についての検討を行わなかった。しかし、56号溝での石による護岸施設が一部分であったことが確かめられ、北側では素掘りの溝となる事が判った。現道を隔てた東側では、平成11年度の6トレンチで南北方向に延びる素掘りの溝（2号溝）が検出されている。2号溝は素掘りで、白磁を含む溝と報告されており、16年度調査開始時まで全く注目しなかったが、対になる溝の候補として位置関係からは大きな矛盾はない。また、現道東側の造構の展開が明確ではないために、白磁が含まれる理由も様々な可能性が考えられ、56号溝と時期が異なるとは現状では断定できない。よって、次年度以降に2号溝の面的な検出を行い、時期・性格を検討する必要が生じた。仮に、2号溝が56号溝と対になると判断された場合には、溝芯芯距離は約14mになり、肩が崩れているものとすると、その間の路面幅は約12mが想定される。

# 第6章 自然科学的分析

## 1. 出雲国府跡発掘調査に伴う珪藻分析

文化財調査コンサルタント(株)

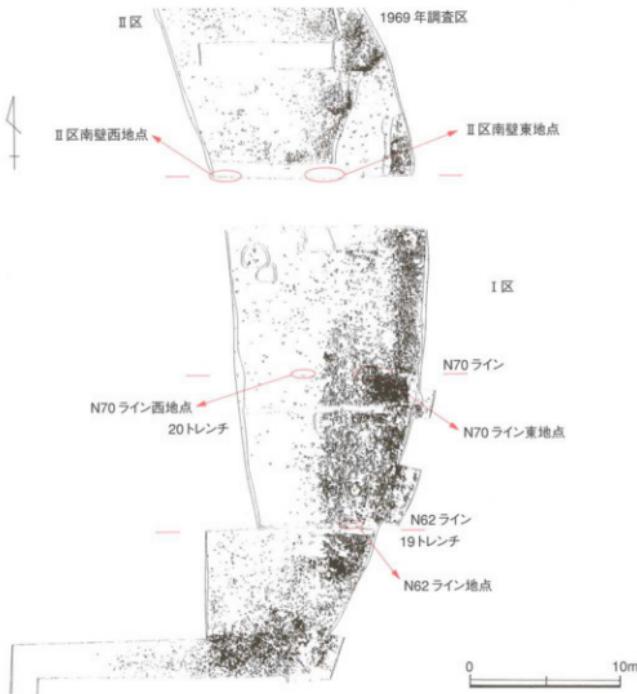
渡辺正巳

### はじめに

本報告では、遺跡発掘調査とともに、遺構の堆積環境推定の目的で珪藻分析を行った。また本報告は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した委託業務報告書を簡略化したものである。

### 分析試料について

土層図は島根県教育委員会より提供を受けた原図をもとに作成し、説明も同教育委員会の観察に従った。また、今回分析した試料はすべて島根県教育委員会により採取され、提供を受けたものである。第87図に試料採取地点を示す。

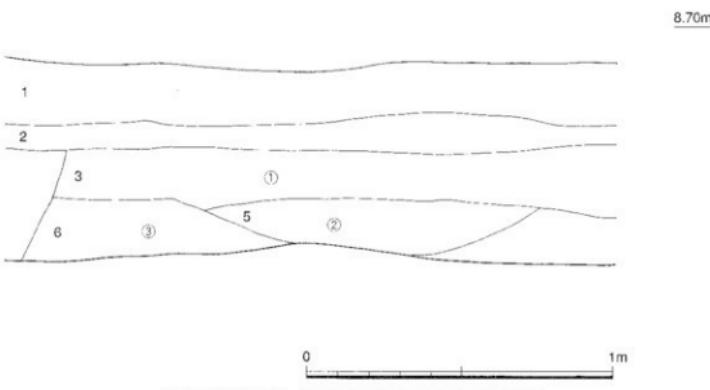


第87図 試料採取地点

試料採取層準

(1) II区南壁東

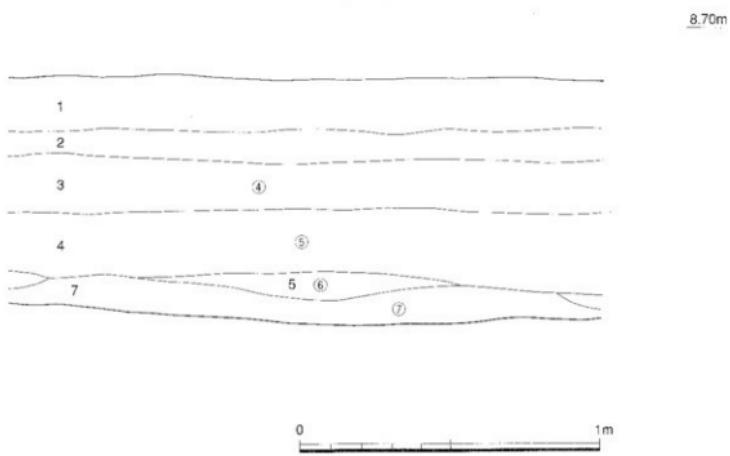
第88図にII区南壁東地点の土層図を示す。①～③で試料を採取した。



第88図 II区南壁東地点の土層図

(2) II区南壁西地点

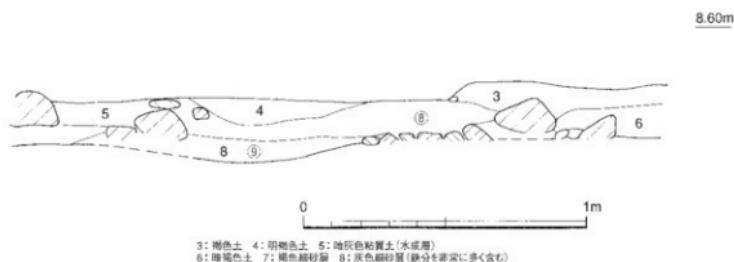
第89図にII区南壁西地点の土層図を示す。④～⑦で試料を採取した。



第89図 II区南壁西地点の土層図

(3) N62ライン地点

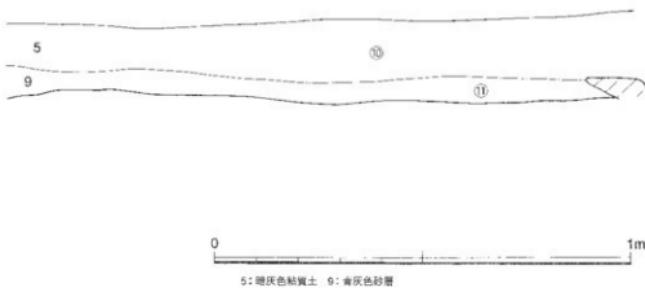
第90図にN62ライン地点の土層図を示す。⑧、⑨で試料を採取した。



第90図 地点N62ライン地点の土層図

#### (4) N70ライン東地点

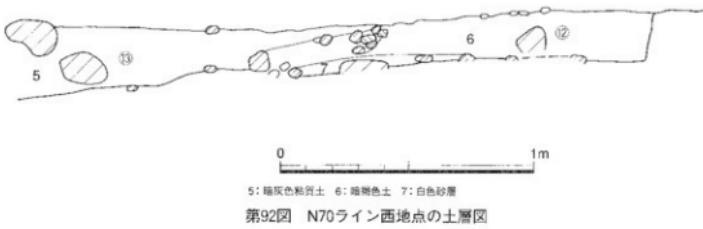
第91図にN70ライン東地点の土層図を示す。⑩、⑪で試料を採取した。



第91図 N70ライン東地点の土層図

#### (5) N70ライン西地点

第92図にN70ライン西地点の土層図を示す。⑫、⑬で試料を採取した。



第92図 N70ライン西地点の土層図

### 分析方法

#### 珪藻分析方法

##### (1) 原理

珪藻は珪質の殻をもつ单細胞の植物プランクトンの一種で、主に河川や湖沼などの淡水域と河口、湾、大洋などの汽水もしくは海水域に生息する。珪藻分析は堆積物の中に含まれている珪藻化石を物理・科学的処理によって抽出し、堆積物生成当時の水域の環境を推定し、あるいは年代に関する検討を行う方法である。

珪藻は水域の水温、塩分濃度、酸性度などの環境要因に対応した種類が各々の環境許容範囲をもって生息する。抽出された珪藻化石が堆積物生成当時その水域に生息したものであれば、その種類構成や相対量とその変化から当時の水域の環境を復元することができる。

### (2) 分析処理法

分析処理の手順は以下に示すとおりである。

- ① 試料を湿潤重量で約1g程度取り出し、秤量する。
- ② 秤量した試料をトルビーカーに移し、30%過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行う。
- ③ 反応終了後水を加え、1時間経過してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てる。  
(この作業は上澄み液が透明になるまで7回以上繰り返し行う。)
- ④ ビーカーに残った残渣を遠沈管に回収する。
- ⑤ マイクロビペットを用い遠沈管から適量を取り、カバーガラスに滴下・乾燥する。
- ⑥ 乾燥後にマウントメディア(封入剤)で封入し、プレパラートを作成する。

### (3) 顕微鏡による検定

珪藻プレパラートを光学顕微鏡(400~1000倍)で観察し、帶分析して通常100個から250個の珪藻化石の検定、計数を行う。

### (4) 解析方法

珪藻ダイアグラムを作成して、各珪藻種類の変遷傾向から、分帶と堆積環境変遷の推定を行う。推定できる堆積環境要素は以下のようである。

- ① 全種類について

生息域

海水域～汽水域～淡水域

- ② 淡水種について

塩分濃度

好塩～不定～嫌塩

pH

好酸塩～不定～好アルカリ性

流水

好止水～不定～好流水

生活

浮遊～不定～底生、陸生

## 分析結果

### 珪藻分析結果

#### (1) 硅藻化石の含有状況

13試料の珪藻分析を行った結果、ほとんどの試料で珪藻化石が含有されないか、極少量しか含有されていなかった。

また、今回の分析で検出された珪藻化石の種類は表1-1に粗雑12種類である。

表1-1 検出された珪藻化石の種類一覧表

コード	種	名	生息域コード				
			水域	好塩	pH	流水	生活
63	<i>Grammatophora</i>	<i>macilenta</i>	1	0	0	0	0
260	<i>Achnantes</i>	spp.	4	17	24	34	43
318	<i>Caloneis</i>	spp.	4	17	24	34	43
364	<i>Cymbella</i>	<i>aspera</i>	4	15	23	32	43
404	<i>Cymbella</i>	spp.	4	17	24	34	43
700	<i>Melosira</i>	spp.	4	17	24	34	41
854	<i>Nitzschia</i>	spp.	4	17	24	34	42
876	<i>Pinnularia</i>	<i>borealis</i>	4	15	22	32	44
932	<i>Pinnularia</i>	spp.	4	17	24	34	43
937	<i>Rhopalodia</i>	<i>gibberula</i>	4	14	23	32	43
945	<i>Stauroneis</i>	spp.	4	17	24	34	43
980	<i>Synedra</i>	<i>ulna</i>	4	15	23	32	41

生息域凡例					
水 域	塩分濃度	pH	流 水	生 活	
1 海水	15 好塩	21 酸性	31 止水	41	浮遊
2 海～汽水	16 不定	22 不定	32 不定	42	不定
3 汽水	17 嫌塩	23 アルカリ性	33 流水	43	底生
4 淡水	18 不明	24 不明	34 不明	44	陸生
				45	不明

## (2) 分析結果

珪藻分析の結果を、下記の珪藻ダイアグラムならびに巻末の検出珪藻化石数量表に示す。全ての地点で珪藻化石の含有量が少なく、珪藻化石の検出量がわずかであったことから、珪藻ダイアグラムでは検出した種類を「\*」で示した。また通常、珪藻総合ダイアグラムを示すが、検出量が極めて少ない事から省略した。

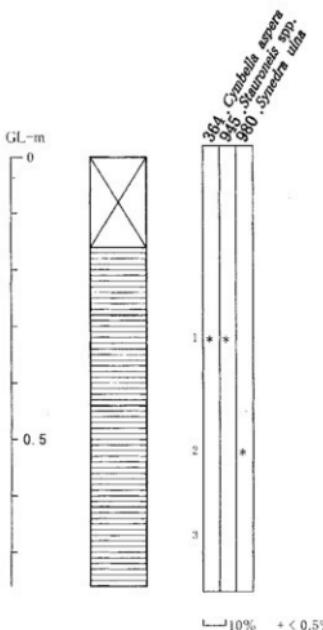
### [珪藻ダイアグラム]

- II区南壁東地点の珪藻ダイアグラム
- II区南壁西地点の珪藻ダイアグラム
- N62ライン地点の珪藻ダイアグラム
- N70ライン東地点の珪藻ダイアグラム
- N70ライン西地点の珪藻ダイアグラム

### [珪藻分析結果表]

- II区南壁東地点の珪藻化石組成表
- II区南壁西地点の珪藻化石組成表
- N62ライン地点の珪藻化石組成表
- N70ライン東地点の珪藻化石組成表
- N70ライン西地点の珪藻化石組成表

出雲国府5 II区南壁東

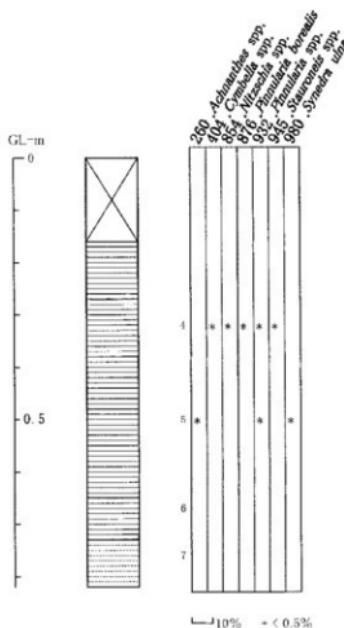


第93図 II区南壁東地点の珪藻ダイアグラム

表1-2 II区南壁東地点の珪藻化石組成表

コード	学名	生 息 域					試料番号		
		水域	塩分濃度	Ph	流水	生活	1	2	3
364	<i>Cymbella aspera</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	底生	1		
945	<i>Stauroncis</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生		1	
980	<i>Synedra ulna</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	浮遊			1
海水生種合計									
海～汽水生種合計									
汽水生種合計									
淡水生種合計									
合 計								2	1 0

出雲国府5. II区南壁西

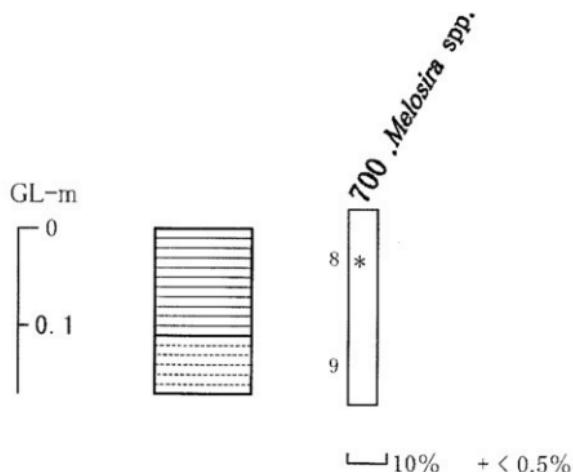


第94図 II区南壁西地点の珪藻ダイアグラム

表1-3 N70ライン西地点の珪藻化石組成表

コード	学名	生 息 域					試料番号			
		水域	塩分濃度	Ph	流水	生活	4	5	6	7
260	<i>Achnantes</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生			1	
404	<i>Cymbella</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生		3		
854	<i>Nitzschia</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	不定	1			
876	<i>Pinnularia borcalis</i>	淡水	不定	不定	不定	陸生	1			
932	<i>Pinnularia</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	5	1		
945	<i>Stauroneis</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	1			
980	<i>Synebra ulna</i>	淡水	不定	アルカリ	不定	浮遊			1	
		海水生種合計								
		海～汽水生種合計								
		汽水生合計種								
		淡水生種合計					11	3		
		合 計					11	3	0	0

出雲国府5 N62ライン

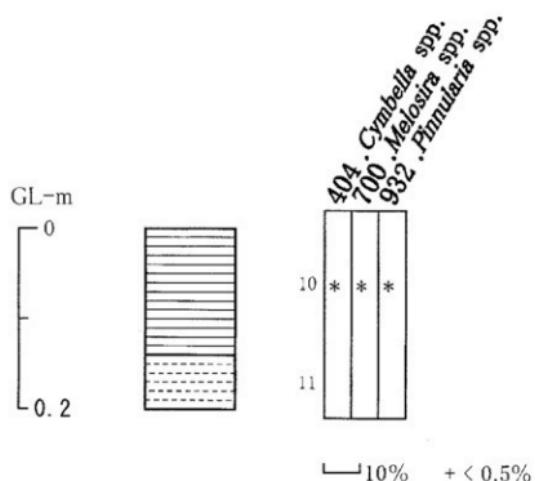


第95図 N62ライン地点の珪藻ダイアグラム

表1-4 N62ライン地点の珪藻化石組成表

コード	学名	生 息 域					試料番号	
		水域	塩分濃度	Ph	流水	生活	1	2
700	<i>Melosira</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	浮遊	1	
		海水生種合計						
		海～汽水生種合計						
		汽水生合計種						
		淡水生種合計					1	
		合 計					1	0

出雲国府5 N70ライン西

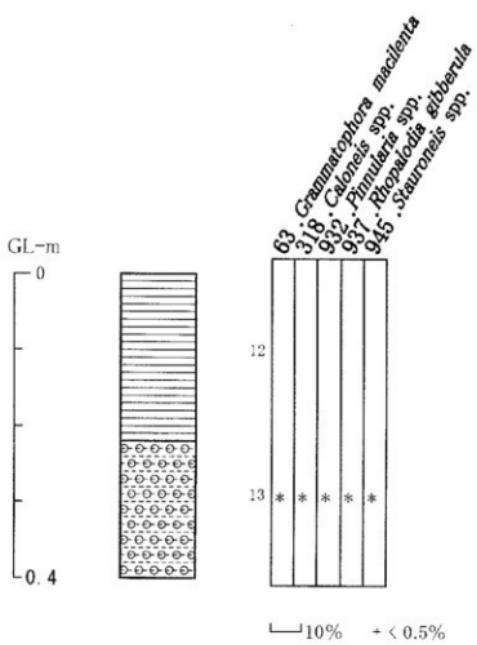


第96図 N70ライン西地点の珪藻ダイアグラム

表1-5 N70ライン西地点の珪藻化石組成表

コード	学名	生 息 域					試料番号	
		水域	塩分濃度	Ph	流水	生活	10	11
404	<i>Cymbella</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	1	
700	<i>Melosira</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	浮遊	2	
932	<i>Pinnularia</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	1	
		海水生種合計						
		海～汽水生種合計						
		汽水生合計種						
		淡水生種合計					4	
		合 計					4	0

出雲国府5 N70ライン東



第97図 N70ライン東地点の珪藻ダイアグラム

表1-6 N70ライン東地点の珪藻化石組成表

コード	学名	生 息 域					試料番号	
		水域	塩分濃度	Ph	流水	生活	12	13
63	<i>Grammatophora macilenta</i>	海水	*	不明	不明	不明	1	
318	<i>Caloneis</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	1	
932	<i>Pinnularia</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	1	
937	<i>Rhopalodia gibberula</i>	淡水	好塩	アルカリ	不定	底生	1	
945	<i>Stauroneis</i> spp.	淡水	不明	不明	不明	底生	1	
		海水生種合計					1	
		海～汽水生種合計						
		汽水生合計種						
		淡水生種合計					4	
		合 計					0	5

### (3) 珪藻組成の特徴

検出された珪藻化石のほとんどは、淡水生種と考えられるものであったが、N70ライン東地点で検出された *Grammatophora macilenta* は、内湾指標種群に含まれるものであった。

## 1 考察

### 珪藻化石の含有量が少なかった原因について

一般に、珪藻類は水分の存在するあらゆる環境に適応して分布しているが、湿地周辺であっても完全に離水した環境では群落を形成しない場合が多い (Nelson and Kashima, 1993; Hemphill-Haley, 1995)。これに加え、乾燥環境下では珪藻殻の酸化が促進され珪藻殻の保存が極端に悪くなる。以上の理由から、堆積物中に珪藻化石が全く見られない場合、当時の水理環境が悪く珪藻類の生産・保存が十分に行われなかつたと考えられることが多い。(Denys, 1999)。このほか、当時の珪藻生産性が十分であつても、堆積後の圧密作用によって物理的に破砕が進む場合や (Beyens and Denys, 1982)、地下茎などの作用によって酸化が促進され殻の溶解が行われることが考えられる。

今回の調査では、採取試料の提供を受けており、試料採取時の状況が不明である。このため、上記のどれが原因であったかを推測することができなかつた。今後、試料採取時には上記の事柄を踏まえて作業をする必要がある。

### 体積環境推定

ほとんどの試料で珪藻化石の含有量が少なく、統計処理に十分な量の珪藻化石を検出することができなかつた。また検出できた珪藻化石のほとんどは破片であり、種レベルで同定できた個体もほとんどなかつた。現地形から、淡水環境での堆積が推定できるが、それ以上のことはわからなかつた。

## まとめ

珪藻分析では、ほとんどの試料で珪藻化石の含有量が少なく、堆積環境を推定することができなかつた。

## 2 引用文献

- Beyens, L., Denys, L.(1982) Problems in diatom analysis of deposits: allo chthonous valves and fragmentation. Geologie en Mijnbouw61, 159-162.
- Denys, L.(1999) A diatom and radiocarbon perspective of the palaeoenvironmental history and stratigraphy of holocene deposits between Oostende and Nieuwpoort (western coastal plain, Belgium). Geologica Belgica2, 111-140. Hemphill-Haley, E.(1995) Intertidal diatoms from Willapa Bay, Washington: Application to studies of small-scale sea-level changes. Northwest Science69, 29-45
- Nelson, A. R., Kashima, K.(1993) Diatom zonation in southern Oregon tidalmarshes relative to vascular plants, foraminifera, and sea level. Journal of Coastal Research9, 673-698.





*Pinnularia  
borealis*



*Melosira* sp.



*Rhopalodia  
gibberula*



*Synedra ulna*



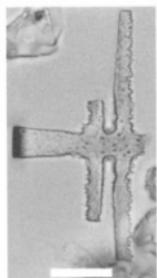
*Grammatophora  
macilenta*



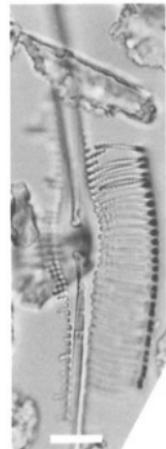
*Nitzschia* sp.



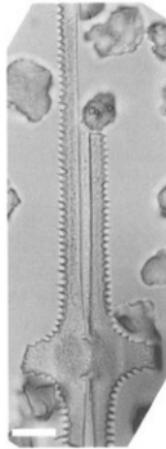
*Caloneis* sp.



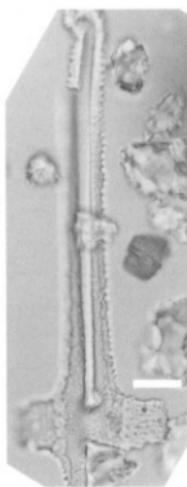
*Stauroneis* spp.



*Cymbella aspera*



*Pinnularia* sp.



*Pinnularia* sp.



*Cymbella* sp.

スケールバーは全て0.01mm



## 2. 出雲国府跡出土木製品の樹種鑑定及びAMS年代測定

文化財調査コンサルタント株

渡辺 正巳

### はじめに

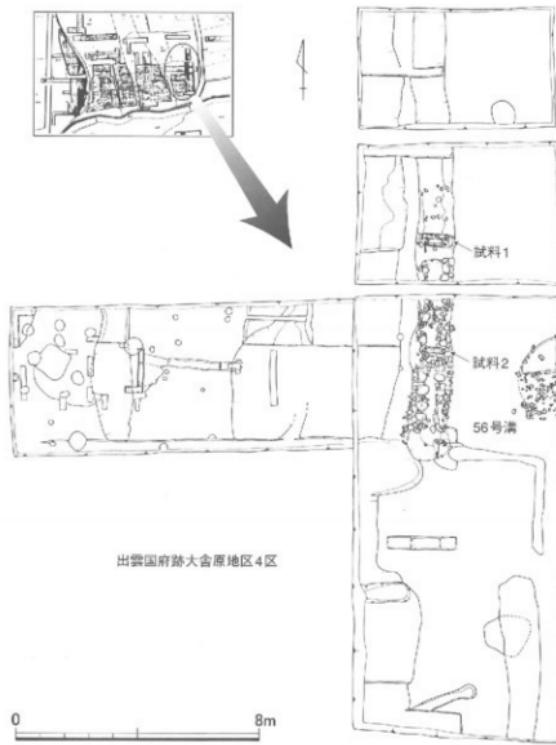
本報告では、出雲国府跡発掘調査に伴って出土した建築部材（橋の部材？）の樹種同定（鑑定）を行うとともに、部材そのものを対象に年代測定を行い、溝の時期推定の一助とする。また本報告は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターが文化財調査コンサルタント株式会社に委託して実施した委託業務報告書を簡略化したものである。

### 分析試料について

各分析試料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センターより提供された試料を対象に樹種鑑定およびAMS年代測定を実施した。平面図は、島根県教育庁埋蔵文化財調査センターより提供を受けた原図をもとに作成した。

#### 1 調査区の配置および資料採取地点

第98図に分析試料が採取された調査区平面図を示す。



第98図 調査区配置および試料採取地点

## 2 年代測定試料

### 試料の概要

試料名：IK04-01（試料1）

重量:0.159g

試料の種類：木片（試料1の破片を1年輪幅に整形）

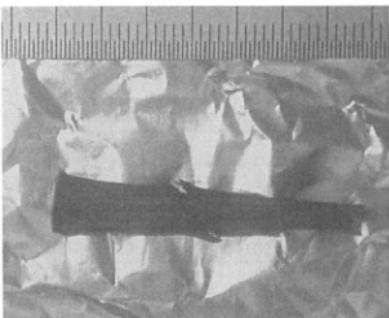


写真1 年代測定試料 (IK04-01)

## 分析方法

### 1 木材樹種鑑定方法

#### (1) 原理

木々は、その発生学的な理由により、種あるいは属、科ごとに独自の形態をとる。その形態の違いは、樹木、葉形にとどまらず、生殖細部である花粉や、木々を直接形作る幹の木部組織にも及んでいる。

木材樹種鑑定とは、対象とする木材（試料）の木材解剖学的な特徴を明らかにするとともに、既知の資料との比較検討から試料の樹種を同定することである。

#### (2) 観察方法

木部組織が軸方向に配列する細胞と、髓から放射状に配列する細胞（放射組織）とから構成されていることから、木材の横断面（木口面）、放射断面（まさ目面）、接線断面（板目面）の3断面を光学顕微鏡下で観察する。

##### ①プレパラート作成

光学顕微鏡下での観察を行うため、木材の横断面（木口面）、放射断面（まさ目面）、接線断面（板目面）の3断面からミクロトームあるいは剃刀を使用して切片を切り出し、永久プレパラートとして封入する。永久プレパラートを作成する手順を表2-1（破壊法）のフローチャートに示す。また試料の整形のために、のこぎり、カッターナイフなどを使用しても良い。

##### ②顕微鏡による観察および記載

上記の手順で作成したプレパラートを、光学顕微鏡下で4～600倍の倍率で観察、記載する。記載に当たっては3断面の顕微鏡写真を付け、用語などは基本的には島地ほか（1985）に従う。

##### ③樹種の同定

樹種の同定に当たっては、現生標本および資料（鳥根大学総合理工学部古野研究室蔵）との顕微鏡下での比較を基本とする。また、鳥根大学総合理工学部古野毅教授にはご助言をいただいている。

[処理手順]	[処理手順]
試料整形	適当な大きさに3断面に配慮して行う
切片(薄片)作成	ミクロトームあるいは剃刀を利用
染色	サフラニンによる
有機溶媒への置換	試料中の水分を有機溶媒に置換
標本作製	カナダバルサムにてプレパラートに封入

表2-1 樹種鑑定用プレパラート作成フローチャート(破壊法)

## 2 AMS年代測定方法

### (1) 原理

大気圏上界で熱中性子化した宇宙線が窒素原子と原子核反応 ( $^{14}\text{N} + \text{n} \rightarrow ^{14}\text{C} + \text{H}$ ) を起こして生成される放射性炭素 ( $^{14}\text{C}$ ) はCO<sub>2</sub>として炭素リザーバー(大気1.6%、腐食2.6%、生物圈0.8%、浅海2.0%、深海93%)に貯蔵され、一方では5568(5730)年の半減期で $\beta^-$ 破壊をおこす。光合成当の生命活動を通じて生物体に固定される。

$^{14}\text{C}$ の初期量は、それぞれの生命活動の行われたリザーバーにおける $^{14}\text{C}$ の閉状態における量と同じと考えられ、生物体の死滅とともに、閉じた系の中で減衰していくと考えられる。つまり、生物遺体中の $^{14}\text{C}$ 濃度と比べることにより、その生物が死んでから現在(ただし、1950年を現在とみなし)までの経過年数が分かる。

### (2) 前処理および測定方法

#### ① 前処理

酸洗浄

#### ② 試料の調整

石墨に調整

#### ③ 測定

AMS(加速器質量分析)法による。

タンデム型イオン加速器を用い $^{14}\text{C}$ 濃度を測定する。

#### ④ 年代計算

年代計算を行う際には、 $^{14}\text{C}$ 濃度の半減期を5568年として行う。

#### ⑤ 補正計算

$\delta^{14}\text{C}$ を測定・算出し、④で得られた年代値を補正する。

#### ⑥ 曆年代補正

既知の補正曲線と⑥の補正計算値より算出する。

## 分析結果

### 1 樹種の鑑定結果と記載

表2-2に鑑定結果を示した。以下に各試料毎に記載し、巻末に顕微鏡写真を示す。

#### (1) 試料No1;W04090601

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc

記載：長径200~300 $\mu\text{m}$ 程度まで急激に減ずる。道管せん孔は単せん孔である。また、道管にはチロースが顯著に認められる。孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列するのが認められる。放射組織は平伏細胞からなる單列同性型である。以上の組織上の特徴からクリと同定した。

#### (2) 試料No2;W04090602

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc

記載：長径200~350 $\mu\text{m}$ 程度の円形ないし梢円形の道管が多列に配列する環孔材である。孔圈外せは徑を急激に減じ最小で20 $\mu\text{m}$ 程度となる。道管せん孔は単せん孔である。また、道管にはチロースが顯著に認められる。孔圈道管の周りには周囲仮道管が存在する。軸方向柔細胞は単接線状に配列するのが認められる。放射組織は平伏細胞からなる單列同性型である。以上の組織上の特徴からクリと同定した。

表2-2 樹種鑑定結果一覧表

試料番号	整理番号	遮構（グリッド）	種別	備考
1	W04090601	SD56 (N85E25)	クリ	建築部材（橋の部材？）
2	W04090602	SD56 (N90E25)	クリ	建築部材（橋の部材？）

### 2 AMS年代測定結果

測定結果を表2-3に示す。

表2-3 年代測定結果

試料NO.	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 ${}^14\text{C}$ (yrBP)	曆年代 <sup>a)</sup> (CAL y.)	測定番号 (PLD-)
IK04-01	1,480±40	-29.9	1,400±40	AD560-690	3049

<sup>a)</sup>:2sigma, 95% probability

## 考察

### 1 用材についての特徴

同様の形態を示す2個の部材について樹種鑑定を行った結果、いずれもクリであった。他に同様の部材が検出されていないが、選択的にクリを用いたと考えられる。伊東ほか(1987)、山田(1993)で見る限り、クリの用例として「建築部材」としては多い傾向にある。しかし「橋」の部材としての用例記載はなく、この試料が「橋」に関わるものとすれば貴重な資料となる。

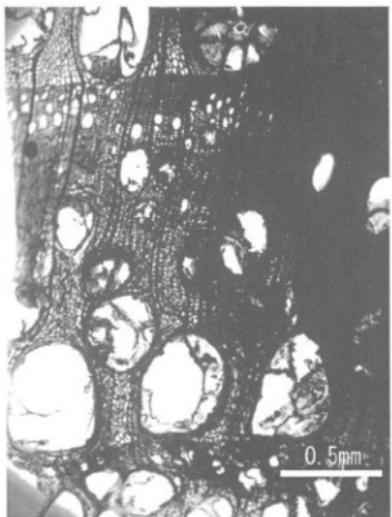
### 2 AMS年代測定値について

56号溝は8世紀後半に掘られたと考えられている。一方、得られた年代値は6世紀後半～7世紀末を示すものであった。

年代測定用試料は、試料1の建築部材最外層の年輪から採取したものであるが、樹皮は確認されていなかった。推定年代と測定年代におよそ100～200年の差が生じたことから、転用の可能性も示唆される。

### 2 引用文献

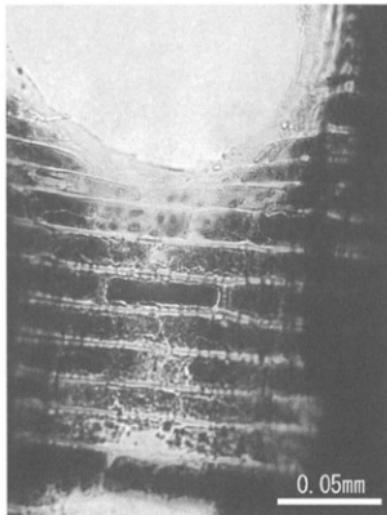
- 伊東隆夫・山口和穂・林 明三・布谷知夫・島地 謙(1987)日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途、木材研究,23, 42-210.  
島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司(1985)木材の構造,276p. 文永堂, 東京.  
山田昌久(1993)日本列島における木質遺物出土文献集成—用材から見た人間・植物関係史,242p. 横生史研究特別第1号, 横生史研究会, 大阪.



横断面

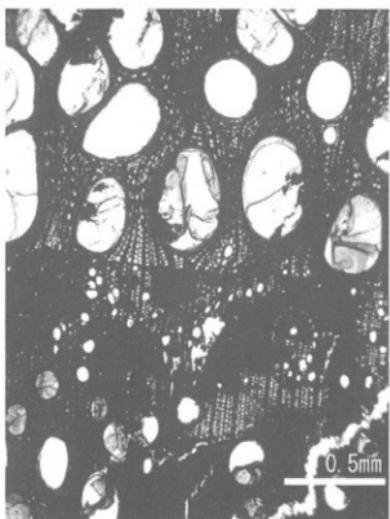


接線断面

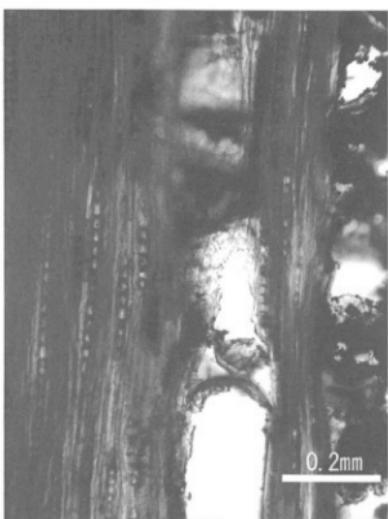


放射断面

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc.  
試料No.2 (W04090602)



横断面



接線断面



放射断面

## 第7章 まとめ

### 1. 繩文から古墳時代の状況について

今回の調査では、スクレーパーや、黒曜石剥片が出土しており、過去の調査でも石錘や石鎌が出土している。遺構や縄文土器は確認していないが、付近に縄文時代の遺跡が存在した可能性は高い。

弥生～古墳時代と考えられる遺構には一貫戸II区で検出した溝・ピットがある。昭和44年調査区にも古墳時代の土坑が見られ、古代以前に遡る可能性のある遺構は、広範囲に展開していたことが伺われる。

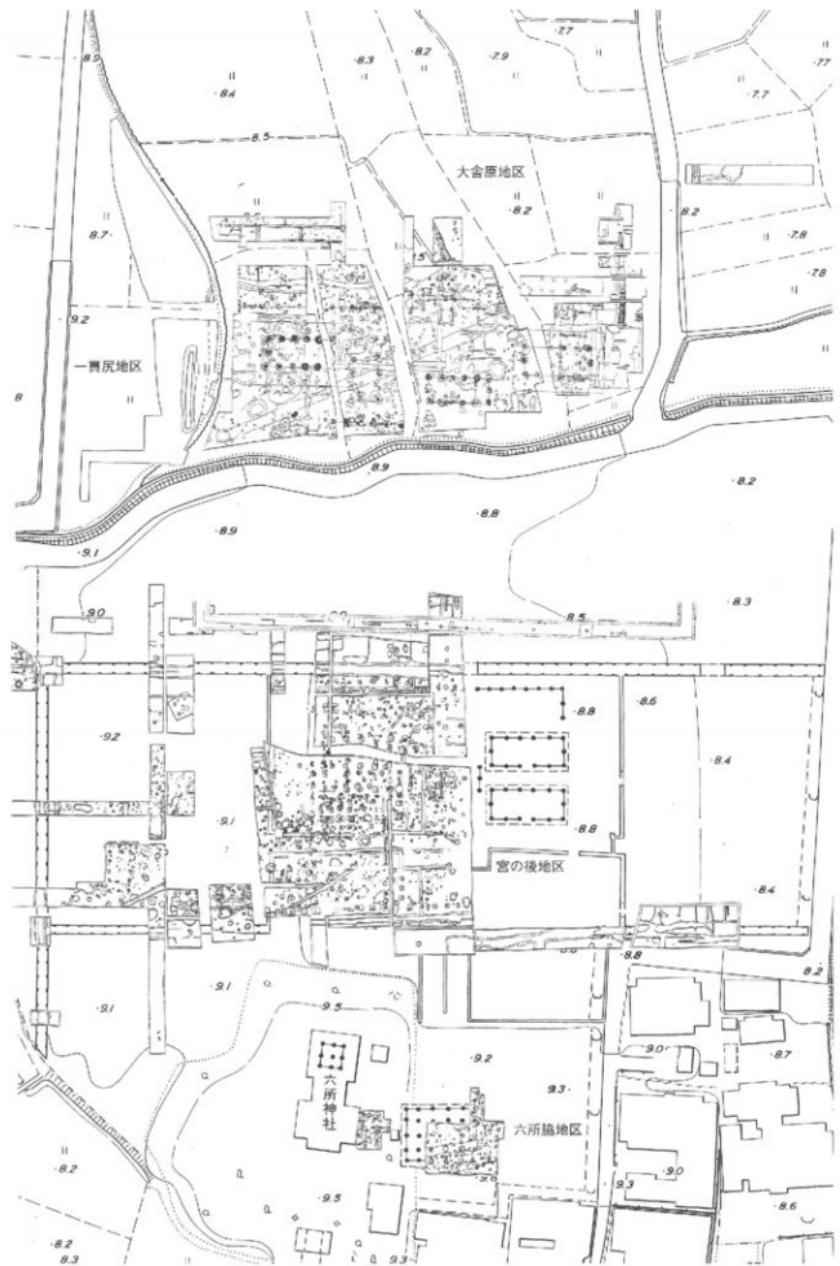
### 2. 古代の遺構・遺物について

今回の調査で、最も大きな発見は56号溝の存在と橋と思われる部材の確認である。56号溝を跨ぐ橋の存在が確定的となった事により、9号建物とそれに連続する区画施設がある時期の区画北限を表すことが決定的となった。また、橋の対岸である東側についても道である可能性が高まり、56号溝の東側に南北に延びる道が存在した可能性も同時に高まった。以下、過去の報告内容と併せ、遺構変遷を検討する。

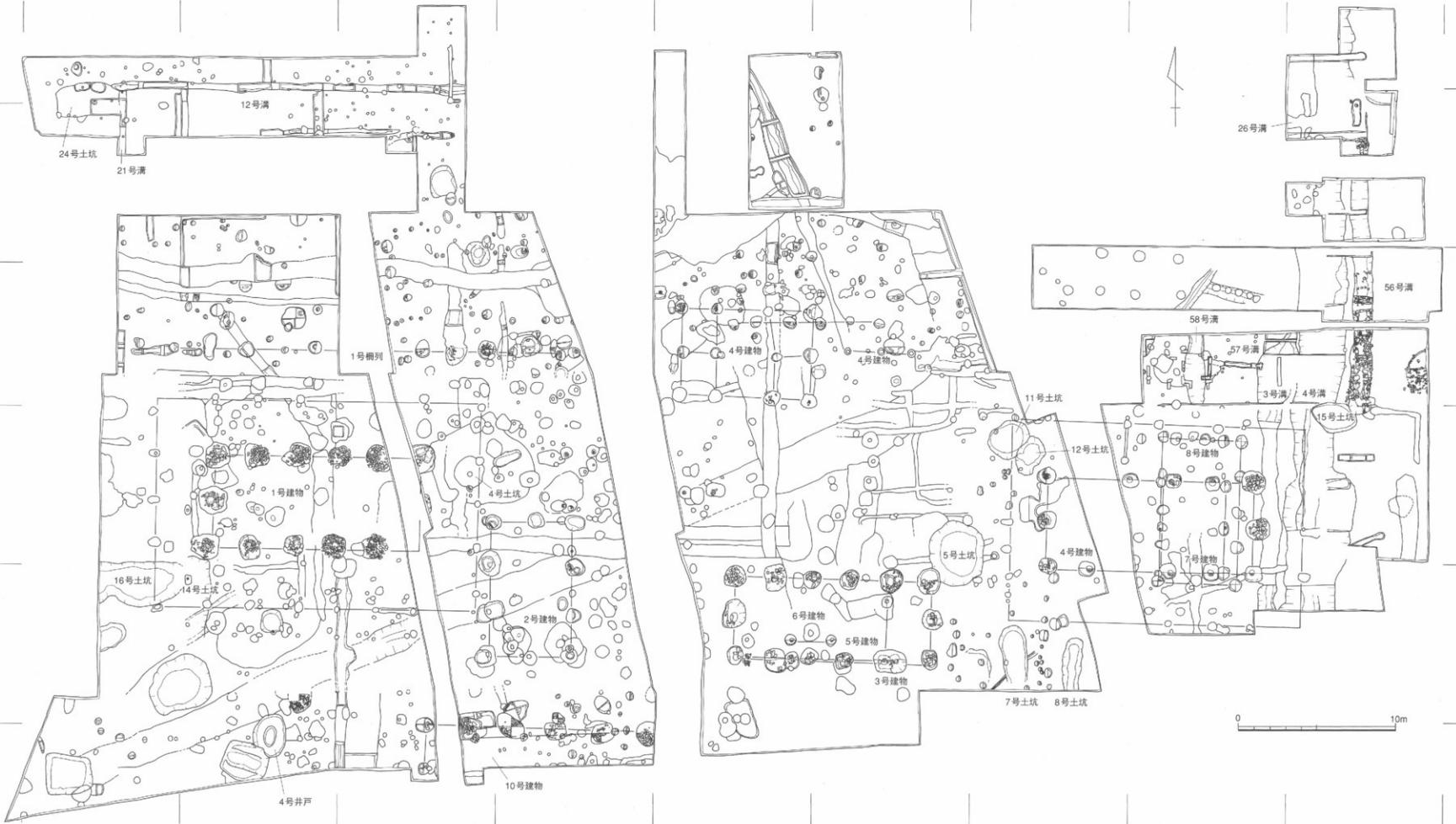
須恵器編年に関しては、「概報」で、いわゆる国府編年<sup>(註)</sup>が示されているが、形状変化が一様でなく、資料の紛れ混みが予想されている。過去の大倉原地区での遺構出土遺物からは、国府編年のような詳細な編年作業を行える状況ではないが、以下の点が確認できる。須恵器壺蓋には、輪状つまみを持ち口縁端部を大きく垂下させるものと、宝珠状つまみを持ち口縁端部の垂下が小さいものが見られ、少なくとも大倉原地区においては両者は共伴しない。上記の状況を元に、国府編年に当てはめると<sup>(註)</sup>、輪状つまみを持つものが第3形式に、宝珠状つまみを持つものが第4・5形式に相当すると思われる。第4形式と第5形式の差は明確ではないが、高台付きの大型の皿や、体部が直線的になる大型の壺を伴わない遺構が見られ、細分できる可能性もあるが、今回は見送る事にする。大倉原地区で第3形式の須恵器を出土する遺構には14号土坑、7・8号建物、3号溝などがある。最も古い建物跡は7号建物であり、切り合ひ関係から7号建物を取り壊した後に8号建物が建てられる事が確認できる。14号土坑出土遺物に転用侃が多く、墨書き土器や灯明皿が見られる事から官衙的施設であったことは想定できるが、後に多くの建物が衍行き5間の大型建物になるに比べるとやや小さい。後に建てられる3号建物の根巻き石に筋石が使用されていたり、4号溝中から鉄生産関係遺物が出土したりしている事から手工業生産との関わりも推定できる。8号建物が建てられていた時期に3号溝を埋め戻しているものと思われ、同時に4号溝を設置している可能性が高い。

他の多くの遺構からは宝珠状つまみを持つ須恵器蓋が出土しており、土器形式からは時期を細分できない。しかし、2号建物が1号建物と近接しており同時併存は考えにくく、1・4号建物は同所で礎石建ちに建て替えられ、長期間の使用が想定される事から、1号建物廃絶後に2号建物が建てられる事は考えにくい。よって、1・4号建物よりも2号建物が先行する可能性が高い。2号建物が先行していた場合には、8号建物も存続していた可能性があり、2棟の南北建物が建っていた可能性はある。

5号土坑下層からは第4形式の須恵器が出土しており、第4形式の時期に5号土坑の祭祀行為が



第99図 出雲国府跡遺構配置図 (S=1:1,000)



第100図 大倉原地区遺構配置図 (S=1:200)

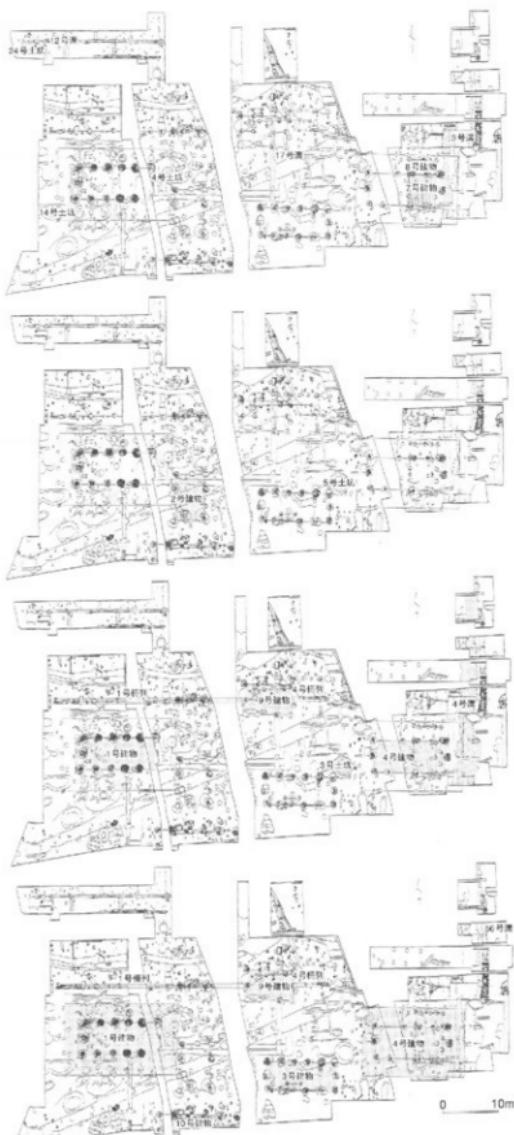
終了した事を示す。1・4号建物に近い時期であるが、どちらが先行するかは、土器からは断定できない。仮に、1・4号建物に先行した場合は、2号建物が併存していた可能性も考えられる。

56号溝の設置は4号溝の埋め戻しに伴う可能性が高く、同時に西側でも護岸状施設が設置され、石敷き造構が埋め戻されたものと思われる。既存の溝に護岸工事が施されたというような痕跡は見られないで、56号溝の設置は56号溝を跨ぐ橋の設置と同時であろう。この時点では9号建物・1号柵列が存在したものと考えられる。

石敷き造構が4号溝に対応すると仮定した場合、東西約80mの区画が想定される。確認されている内側の建物は同時併存しない7・8号建物しか無く、2号建物を含んだとしても開放とした状況となっている。後の造構によって壊されている可能性もあり、全体の様相は不明である。

一貫尻地区の護岸状施設が56号溝・1号柵列に伴うとした場合は、護岸状施設が石敷き造構を埋め戻していかなければならず、それに連続すると思われる公園北側大溝についても付け替えがあったことを想定する必要がある。その場合北限が1号柵列となり、南限は不明である。東西約87mで、仮に南限をSD034付近とすると南北約65mとなる。

なお、今回の大倉原地区の調査では、N100付近で、4号溝と直



第101図 大倉原地区遺構変遷図 (S=1:800)

交する26号溝の内、東へ向かう部分は存在しないことが判ったが、西に向かう部分については存在した可能性が高く、3・4号溝が使用されていた時点での区画北限を表す可能性もあり、検討が必要である。

### 3. 文字資料

今回の調査で出土した文字資料は、第3表の通りである。判読できるものは全て墨書き器・磁器であり、木簡は出土していない。過去の調査では「館」「介」など、大倉原地区の施設を示唆する資料が出土しており、大倉原地区の施設群を中心とした施設群が国司館である可能性が高い事を指摘している。今回の調査でそれらは出土しなかったが、特徴的な資料としては、大倉原地区から「駅」が2点が出土している。『出雲國風土記』では、「黒田駅」は「意宇郡家に属けり」となっており、風上記記載の「十字街」近くにあったものと想定される。「駅」墨書き器の出土地は、大倉原地区北側に位置しており、黒田駅に一步近づいたものと考えられる。

今回の調査では、白磁の底部に「殿」と記した墨書き器が出土したほか、37-3上師器も古代末のものと考えられる。過去の調査では、廐棄土坑の土師器や漆紙文書など平安時代前半代の文字資料は確認されていたが、古代末の文字資料は初めての確認である。大倉原地区推定国司館の中心的建物と考えられる1・4号建物は10世紀代に廃絶すると考えられるが、12世紀に至っても「殿」の名称や墨書きを記す上器が使用される機能が残っていた事が考えられる。

硯は、確認できたものの半数近くが圓脚円面硯で、転用硯に対して円面硯の割合が極めて高い点

第3表 墨書き土器一覧

件名	件番号	文文	種類	文種	施設	出土場所	取上番号
1	22-13	「殿」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00001
2	26-1	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00002
3	26-4	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00003
4	36-5	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00004
5	37-1	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00005
6	37-2	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00006
7	37-3	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00007
8	37-4	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00008
9	38-25	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00009
10	39-22	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00010
11	43-3	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00011
12	43-3	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00012
13	70-12	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00013
13	70-14	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00014
13	70-17	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00015
13	70-18	「」	墨書き	土器	施設	施設	大和古ノUN78790-00016

第4表 観一覧表

件名	出土場所	時代	各種	調査	分類	備考
20-22	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-23	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-24	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-25	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-26	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-27	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-28	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-29	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-30	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-31	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-32	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-33	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-34	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-35	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-36	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-37	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-38	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-39	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-40	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-41	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-42	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-43	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-44	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-45	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-46	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-47	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-48	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-49	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-50	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-51	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-52	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-53	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-54	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-55	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-56	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-57	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-58	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-59	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-60	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-61	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-62	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-63	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-64	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-65	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-66	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-67	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-68	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-69	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-70	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-71	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-72	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-73	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-74	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-75	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-76	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-77	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-78	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-79	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-80	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-81	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-82	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-83	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-84	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-85	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-86	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-87	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-88	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-89	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-90	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-91	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-92	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-93	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-94	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-95	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-96	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-97	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-98	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-99	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-100	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-101	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-102	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-103	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-104	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-105	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-106	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-107	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-108	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-109	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-110	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-111	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-112	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-113	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-114	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-115	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-116	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-117	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-118	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-119	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-120	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-121	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-122	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-123	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-124	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-125	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-126	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-127	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-128	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-129	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-130	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-131	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-132	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-133	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-134	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-135	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-136	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-137	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-138	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-139	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-140	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-141	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-142	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-143	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-144	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-145	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-146	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-147	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-148	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-149	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-150	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-151	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-152	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-153	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-154	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-155	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-156	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-157	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-158	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-159	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-160	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-161	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-162	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-163	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-164	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-165	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-166	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-167	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-168	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-169	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-170	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-171	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-172	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-173	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-174	「西風主」区	奈良時代	圓脚器	圓脚円面硯	硯	
20-175	「西風主」区	奈良時代				

#### 4. 瓦類について

・貴尾地区・大倉原4区で出土した瓦類については、第5表に集計した。

軒瓦は、一貫尻地区で出雲国分寺跡第2類軒丸瓦が1点、大倉原4区で1点が出土しており、軒平瓦は、一貫尻地区で出雲国分寺跡第4類軒平瓦が1点出土しているのみである。過去の大倉原地区の調査でも第2類軒丸瓦が10点、第3類軒丸瓦2点出土しているが、軒平瓦の出土は稀である。

丸瓦は、基本的に凸面のタタキをナデ消すもので、縄目のタタキをわずかに残すものも見られる。他のタタキ痕は確認できない。狭端部の形状が判るものでは、約18パーセントが玉縁式、82パーセントが行基式となりこの比率は一貫尻地区、大倉原地区とも変化がない。

一方、平瓦は、純目タタキを使用するものが大多数で、少量の各種タタキが見られる。タタキの種類を問わず、一定割合の離れ砂の使用が認められる。確実に桶巻き作りと断定できるものは無く、多くが一枚造りによるものである。

過去の大倉原地区的調査では、大量の遺物が出土した4号溝からは瓦瓶の出土はない。4号建物から第2類軒丸瓦の瓦当部が1点出土しているほか、3号建物・5号上坑上面からまとまった量が出土している。3号建物は5号土坑を埋め戻して建てていると思われる事から、5号土坑による軟弱部分の整地に瓦が使用されたと思われる。北門と推定される9号建物からも平瓦片1点が出土している。第3形式の須恵器

第5表 丸瓦・平瓦分類表

一貫丸瓦				大倉丸瓦			
板模	凸面調整	溝底	重量	板模	凸面調整	溝底	重量
原形瓦 凹面ナナメ	上端	1.4		原形瓦 凹面ナナメ	上端	3	
+	行差	11		+	行差	4	
+	不明	32		+	不明	14	
原形瓦 凹面ナナメ	上端	1.4		土師管 凹面ナナメ	行差	8	
+	行差	3		+	不明	17	
+	不明	8		+	溝口ナナメ	行差	2
上斜瓦 凸面ナナメ	上端	3		+	不明	3	
上斜瓦 凸面ナナメ	行差	13		板模 凸面ナナメ	上端	3	
+	不明	62		+	行差	3	板模厚度
原形瓦 凹面ナナメ	小端	5		+	行差	3	
原形瓦 凹面ナナメ	行差	9		+	不明	16	
+	不明	32					
鶴嘴瓦 純平ナナメ	行差	2					

一橫屋平瓦

黄虎干式				大吉原干式			
タキシ	後成	凸面調整	重量	タキシ	後成	凸面調整	重量
前脚	折衷型	繩引跡	6	後脚	後足型	繩引跡	6
+	+	タキシのみ	27	+	+	タキシのみ	27
+	折衷	繩引跡	3	+	+	タキシのみ	2
+	+	タキシのみ	30	+	折衷	タキシのみ	2
+	上脚型	繩引跡	9	+	「脚部」	繩引跡	4
+	+	タキシのみ	27	+	+	タキシのみ	23
下行タキシ	折衷型	-	3	+	+	タキシのみ	1
+	折衷	-	3	平行干タキシ	折衷型	-	2
方弓干タキシ	折衷型	繩引跡	2	方角干タキシ	折衷	タキシのみ	3
+	折衷型	-	3	变形干タキシ	折衷型	タキシのみ	1
+	折衷	-	2	+	風足型	繩引跡	2
+	歯貫	繩引跡	2	+	+	タキシのみ	3
+	歯貫	タキシのみ	9	+	上脚型	繩引跡	1
+	歯貫	繩引跡	3	+	+	タキシのみ	8
七脚型	タキシのみ	4	+	繩引跡	折衷型	タキシのみ	4
變形タキシ	後足型	繩引跡	2	+	+	タキシのみ	2
+	タキシのみ	2	+	不明	折衷型	タキシのみ	28
+	歯貫	繩引跡	6				
+	歯貫	タキシのみ	35				
+	土脚型	繩引跡	35				
+	タキシのみ	10					
+	タキシのみ	1	原从任型				
細い椅子	後足型	繩引跡	3				
+	後足型	タキシのみ	28				
+	+	タキシのみ	1				
+	歯貫	繩引跡	3				
+	土脚型	タキシのみ	3				
不規			341				

は、大倉原地区の建物が瓦葺きではなかった可能性を示すものと思われる。

大倉原地区、一貫尻地区で出土する瓦には、軒平瓦の割合が少ない点が特徴的である。軒丸瓦・軒平瓦の割合がほぼ同量となる縦瓦葺きの施設が想像できない。また、茅葺などの可能性も、瓦全体に占める軒丸瓦の割合が少ない事から考えにくい。大半のものが包含層出土であるが、過去の大倉原地区の調査で遺構に伴うものについては、いずれも柱穴の根巻きとして使用され、建築補助材としての使用痕跡しか確認できない。厚く重たい軒平瓦が建築補助材に向かないと言うことを考え併せると、屋根材だけではなく、道路敷きや根固めなどの建築材としても使用されたものが多く含まれているものと思われる。38トレンチでの動向から、一貫尻・大倉原地区で出土する瓦の多くは、より南に位置する施設で使用されたものが流されてきたと考えられ、大倉原地区においては屋根材には使用されていなかったと思われる。

## 5. 平安時代の土器・陶磁器類について

今回の調査では、平安時代後半以降の遺構は調査していないが、一貫尻地区疊層や大倉原地区的遺物包含層からは白磁を中心に陶磁器類が出土しており、第6表にまとめた。

一貫尻・大倉原両地区間に出土傾向の差は見られず、白磁II・IV・V・VII類碗の出土が多く、青磁類が少ない傾向がある。青磁類は多くが龍泉窯系と思われ、越州窯系青磁は確認できない。龍泉窯系青磁についても鎬運舟のものは見られず、15世紀代と考えられる雷文の碗(71-14)が出土している。また、青白磁合子が一貫尻地区から出土している。

第6表 陶磁器一覧表

	大倉原	一貫尻
白磁碗	26	—
白磁碗(II類)	6	6
白磁碗(IV類)	7	2
白磁碗(V或VII類)	5	14
白磁(広東系)	—	15
白磁(広東系以外)	—	21
白磁壺(袋物)	—	1
白磁甕(斗笠水注口類)	—	3
白磁甕(VI類)	—	2
白磁皿	2	4
白磁	5	—
合子	—	1
青磁	5	9
不削埴器	—	1
青花	3	—
灰釉	2	7
綠釉	—	2
常滑	1?	—
備前	—	—
備前(壺)	—	2
備前(擂鉢)	—	1
蜀釉	1	—
天目	1	1
中国陶器	1?	3
中国陶器C群盤T類	1	1
舟付陶器近世以降	38	21
陶器碗(V類)	—	—
陶器碗(II類)	—	—
不削陶器	—	2
山茶碗	—	1
合計	104	123

国産陶器類では京都産と考えられる緑釉陶器が見られるが、近江産緑釉陶器は確認できない。10世紀前半代までは豊富な資料が見られるものの、11世紀代の資料がほとんど無く、白磁II類碗、白磁IV・V・VII類碗を最後に衰退に向かう様に見える。

過去の調査では、12世紀代と考えられる井戸が検出されている他、遺跡全面で検出される多くの小型の柱穴が12世紀代のものと考えられている。一方、10世紀代の遺構と考えられるものは廃棄土坑のみで、11世紀代については確認できていないと言う調査状況があり、陶磁器類の出土傾向はこれに一致する。しかし、中世須恵器が一定量出土する事が判つており、土師器についても検討が必要なことから、未確認の遺構が存在する可能性はある。

## 6. 手工業生産に関わる遺物について

### 漆付着土器

一貫尻地区石敷き造構や疊層、大倉原地区4号溝などからは、漆付着土器が多く出土している。坏類の漆の付着は、漆塗り製品の生産が考えられるが、

それ以上に注意されるのは、破損した壺類の漆の付着である。今回の調査では、ひび割れ部分にも漆が浸透している様子が見られる壺が出土しており、壺類で搬入された漆を他の容器に移し替える際に、容器を破碎して漆を取り出したものと考えられる。過去の調査

第7表 漆付着土器一覧表

番号	拂回番号	出土場所	種別	器種	付着部位	出土遺物名
1	19-1	貢尾I区	須恵器	高台付壺	漆付査	石敷き造形査
3	30-4	貢尾I区	須恵器	高台付壺	内面・断面に漆付査	石敷き造形査
2	30-3	貢尾I区	須恵器	長颈壺	外面部・と内面部に漆付査、NO.9	石敷き造形査
4	30-5	貢尾I区	須恵器	壺	底部内面に漆付査	
8	71-9	37Ir	須恵器	壺	内面漆付査	
5	31-1	37Ir	須恵器	壺	内面漆付査	3号壺
6	52-24	37Ir	須恵器	壺	外面部漆付査	4号壺
7	70-8	37Ir	須恵器	壺	内面漆付査	

第8表 玉素材別重量集計表（単位：g）

	碧玉	カド石	黒曜石	メノウ	水晶	自然石	安山岩	玉髓	珪化木	緑色闇灰岩	合計
一貫尾Ⅰ区	293.45	6.84	6.83	0	1851.03	4.69	0	0	0	0	2162.84
一貫尾Ⅱ区	38.91	51.57	10.47	0	266.21	0.00	0	0	0	0	367.16
総合計	322.36	58.41	17.30	0	2117.24	4.69	0	0	0	0	2530.00
大余量地区	124.76	15.50	52.32	306.11	2407.68	0	1.81	104.21	62.4	26.89	2880.94
総合計	457.12	73.91	69.62	306.11	4324.92	4.69	1.81	104.21	62.4	26.89	5388.95

第9表 玉素材別点数集計表（単位：個）

	碧玉	カド石	黒耀石	メモウ	水晶	自然石	安山岩	玉筋	珪化木	綠色凝灰岩	合計
一貫尾Ⅰ区	11	2	3	0	209	2	0	0	0	0	227
一貫尾Ⅱ区	2	4	2	0	19	0	0	0	0	0	27
調査区計	13	6	5	0	228	2	0	0	0	0	254
大金星地区	29	1	11	11	206	0	1	12	5	1	280
総合計	42	7	16	11	436	2	1	12	5	1	533

第10表 水晶製作段階別集計表

第11表 碧玉製作別段階別集計表

測量		充填		基材大		平玉		基材		平玉(ニ次調整あり 銀歯)		合計	
点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
一層死T区	7	18.3	1	250.26	1	1.06	2	12.83	0	0	11	29.53	
一層死D区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
防護T	1	4.18	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4.18	
調査区計	8	22.48	1	250.26	1	1.06	2	12.83	0	0	12	297.63	
大顎導正区	25	84.36	1	15.21	1	19	0	0	1	5.96	29	124.76	
総合計	32	107.04	2	265.5	2	20.06	2	12.83	0	5.96	41	422.39	

第12表 メノウ製作別段階別集計表

	割片		原石		空削		平玉		準材		平玉		仕上げ		合計 点数 重量(g)
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	
一貫尻I区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
一貫尻II区	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
調査区計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
大舍原地区	3	6.06	3*	94.19*	3	180.51	2	25.33	0	0	11	25.33	0	0	25.33
総合計	3	6.06	3	94.19	3	180.51	2	25.33	0	0	11	25.33	0	0	25.33

\*大舍原地区的原石には石核も含まれる

第13表 玉髓製作別段階別集計表

	割片		原石		空削		合計	
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
一貫尻I区	0	0	0	0	0	0	0	0
一貫尻II区	0	0	0	0	0	0	0	0
調査区計	0	0	0	0	0	0	0	0
大舍原地区	11	83.98	0	0	1	20.63	12	104.21
総合計	11	83.98	0	0	1	20.63	12	104.21

第14表 カド石製作別段階別集計表

	割片		原石		空削		合計	
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
一貫尻I区	2	6.84	0	0	2	6.84	0	0
一貫尻II区	3	13.88	1	37.69	4	31.57	0	0
調査区計	5	20.72	1	37.69	6	58.41	0	0
大舍原地区	0	0	0	0	0	0	0	0
総合計	5	20.72	0	37.69	6	58.41	0	0

第15表 黒曜石製作段階別集計表

	割片		原石		合計	
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
一貫尻I区	3	6.84	0	0.00	3	6.84
一貫尻II区	3	10.47	0	0.00	3	10.47
調査区計	6	17.31	0	0.00	6	17.30
大舍原地区	10	40.45	1*	11.86*	11	52.32
総合計	16	57.76	1	11.86	17	69.62

\*大舍原地区的原石は石核

第16表 安山岩製作段階別集計表

	割片		原石		合計	
	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)
一貫尻I区	0	0	0	0	0	0
一貫尻II区	0	0	0	0	0	0
調査区計	0	0	0	0	0	0
大舍原地区	1	1.81	0	0	1	1.81
総合計	1	1.81	0	0	1	1.81

である事が判る。

なお、確実に平安時代と考えられる土器に漆の付着は見られないが、14号土坑出土物には漆紙文書（『報告書1』写真図版106-3）があり、平安時代前半の書風と考えられている。同時代と考えられる廐棄土坑などからは漆付着土器は出上していない。

#### 玉作関係遺物

玉作関係遺物の出土は第8~14表の通りである。重量・単数共に水晶が約8割を占める数量割合は過去の調査実績と同様で、大舍原・一貫尻地区での玉作の主要な石材は水晶であった事が判る。昭和40年代の宮の後・六所脇地区の出土物では碧玉が4割を占め、大舍原・一貫尻地区とは、数量割合が異なる点が注意される。

で出上している間に木縁をして塗容器とした例（『報告書2』14-18）は、容器として使用した事が確実な例である。断面に漆が付着しているものは、多くが長頸瓶であり、壊類の断面に漆付着が見られない事から、破損した須恵器を漆塗りのパレットとしたものではなく、漆容器そのものであろう。漆製品を生産した状況は、確かに見えるが、むしろ漆そのものを集積していた可能性が見られる。

遺構に伴う漆付着土器は、一貫尻地区石敷き造構上面と大舍原地区3・4号溝があり、同時期に人為的に埋め戻したと考えられる一貫尻地区石敷き造構上面・大舍原地区4号溝に共通して含まれる事が注意される。過去の調査での漆付着土器の出土は、24号土坑・3号井戸など第3形式の須恵器が含まれる遺構から出土しているほか、4号建物柱穴出土壺にも見られ、第3形式須恵器の時刻から4号建物建設までの間に活発に行われたもの

製作工程は、荒削一調整剥離一敲打一研磨と言う基本的な流れは、従来からの指摘通りであるが、穿孔する丸玉と穿孔しない大玉に製作工程が異なる可能性が出てきたほか、平玉に関しては製作工程を飛ばすものがあることが観察される。工程の細部の差異が、製品による差なのか、時期差があるのかは更に検討を要する。

従来、使用目的が不明なまま、玉作関係遺物に含まれる可能性を検討してきた黒曜石については、縄文時代の石器類が確実に含まれる事が明らかになった。水晶や砥石と異なり、遺構に確実に伴うものが見られず、全て包含層出土である事も水晶とは時期が異なるものであった可能性を示している。現在調査中の日岸田地区では、黒曜石の削合が非常に高く、石器類も多く含まれており、日岸他地区での報告によって何らかの性格付けが可能と思われる。

玉作関係遺物は、大半が包含層出土で、遺構に伴うものでは3・4号溝出土の他は、過去の調査で、3号建物の根巻き石に筋砥石が使用されている例が目立っている。4号溝の埋め戻し時や3号建物建設時に、大量にあったものと想定され、7・8号建物や2号建物などが玉生産を始めとする手工業生産に関わっていた可能性も考えられる。

古墳時代に全国各地で行われていた玉生産は、古墳時代の終焉と共に衰退する事が明らかになっている

が、岩手県久慈市周

第18表 水晶製作段階別集計表(第33トレンチ)

辺の琥珀製玉生産と 出雲の玉生産は、奈	水晶製作段階別集計表(第33トレンチ)											
	剥片		原石		荒削		粗削大		平玉 敲打あり		合計	
点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	点数	重量(g)	
33T	16	20.83	0	0	15	299.32	4	24.03	1	3.23	36	347.41

良時代以降も継続さ

れている事が判っている。蛇喰遺跡の発掘調査では、大量の玉作関係遺物と共にヘラ書き土器が出土しており、玉作に関わる官衙的な施設の存在が想定されている。出雲国府跡での玉作も国や郡が関与している可能性が高い上に、出雲国府での玉作関係遺物が出土しなくなる時期から蛇喰遺跡での本格的な操業が開始される点は注意を要する。発掘調査された8世紀後半以降の玉作遺跡は、他に岩屋遺跡・平床II遺跡が知られているが、8世紀前半代の様相は必ずしも明らかでない。『出雲国計会帳』には天平八年の水晶進上記事<sup>(33)</sup>があり、8世紀前半代にも出雲において水晶製玉が生産されていた事は明らかである。出雲国府での水晶製玉生産は、こうした時期に行われていた可能性もあり、文献に登場する出雲産水晶玉との関わりを検討する必要がある。

第17・18表には、平成15年度第33トレンチでの出土水晶一覧表を示した。本来『報告書2』に掲

第17表 第33トレンチ(旧5Tr)玉観察表

No.	石材	製作段階	重量(g)
1	水晶	剥片	1.71
2	水晶	剥片	0.68
3	水晶	剥片	3.17
4	水晶	剥片	3.50
5	水晶	剥片	1.72
6	水晶	剥片	0.38
7	水晶	剥片	1.64
8	水晶	剥片	1.24
9	水晶	剥片	1.15
10	水晶	剥片	0.79
11	水晶	剥片	0.28
12	水晶	剥片	0.69
13	水晶	剥片	0.41
14	水晶	剥片	1.73
15	水晶	剥片	1.24
16	水晶	剥片	0.50
17	水晶	荒削	23.15
18	水晶	荒削	67.07
19	水晶	荒削	29.29
20	水晶	荒削	12.29
21	水晶	荒削	9.36
22	水晶	荒削	37.85
23	水晶	荒削	10.50
24	水晶	荒削	13.69
25	水晶	荒削	23.29
26	水晶	荒削	3.07
27	水晶	荒削	6.70
28	水晶	荒削	20.59
29	水晶	荒削	7.58
30	水晶	荒削	9.00
31	水晶	荒削	25.62
32	水晶	素材大	3.23
33	水晶	素材大	8.88
34	水晶	素材大	3.18
35	水晶	素材大	8.74
36	水晶	平玉・敲打あり	3.23

載すべき内容だったが、都合により今回報告する。第33トレンチで玉材として確認したものは全て水晶で、碧玉・メノウや瑪瑙類は確認していない。36点あり、工程の進んだものはほとんど見られない。1点のみ平玉の二次調整段階のものが見られる。第33トレンチには奈良・平安時代の遺構は残存しておらず、時期が確認された遺構は、全て古墳時代である。水晶は遺物包含層からの出土であり、周辺から流れてきたものと考えられる。

#### 金属器生産

金属器生産に関わる遺物は、4号溝を中心に出土しており、56号溝からの出土はない。4号溝の埋め戻し直前に活発に金属器生産が行われた状況を示すものと思われる。4号溝より古いと考えられる7・8号建物や2号建物が金属器生産に関わる施設であった可能性も考えられるが、大倉原地区では施設群が整備される時期に当たり、1・4号建物を中心とする国司館と考えられる施設建設や周辺の施設の整備に関わるものかもしれない。現在調査中の日岸田地区では、大倉原地区以上に金属器生産関係遺物が出土しており、その所属時期と性格の解明が期待される。

### 7. 今後の課題

56号溝と橋の部材を発見した事により、56号溝の東側が道である可能性が高まったが、道の東端の状況が確認できない以上推定の域を出ないものである。また、56号溝南側が途絶えている点<sup>(22)</sup>についても、南に延長するという根拠に乏しく、実体を解明していく必要がある。

大倉原地区4号溝下層出土円面鏡が一貫尻地区出土遺物と接合したことは、単に区画溝の変遷過程を表すのみでなく、公園内北側大溝(SD034)と大倉原地区4号溝、一貫尻地区右敷き遺構の関係を表す可能性がある。昭和49年度調査では、SD034の東側が確認されておらず、3・4号溝との関わりで言えば、SD034が左右対称にならない可能性がある。56号溝の位置関係を考えても、政庁東側の遺構は、現在の想定と必ずしも一致しない可能性があり、公園内の調査などによって解明していく必要がある。

一貫尻・大倉原地区では手工業生産に関わる遺物が多く出土しているが、遺構に伴うものが少なく、手工業生産が活発に行われる時期やその性格が確定できないでいる。平成15年度から開始した日岸山地区的発掘調査では、手工業生産に関わる遺物が一貫尻・大倉原地区よりも多く出土しており、その所属時期や、性格が明らかにされる事を期待する。

註1 「山雲国行跡発掘調査概報」松江市教育委員会1971年

註2 「概報」の図16編年の第2・3形式とされているものの中には、宝珠状つまみを持ち口縁端部を明確に垂下させるものが見られる。この種の蓋は古い要素といえる口縁端部の垂下と、新しい要素といえる宝珠状つまみを併せ持つもので、両者の間に位置する可能性があることから、牛座地間による供給先の違いでなければ、大倉原地区ではある時期が抜け落ちている可能性もあり、図16編年を当てはめにくい状況もある。

註3 『延喜式』には出雲國造の神賀詞奏上や宇摩郡神戸が進する「高岐駕六十連」が規定されているほか、『出雲國計会帳』などによって8世紀から11世紀初頭に至るまで出雲から中央への水晶の進上があったことが知られている。水晶は『続紀』に入唐・入宋僧が献上品として持ち出している記事が見え、出雲以外の水晶產地が文献に見えないところから、そうした水晶も出雲產であった可能性がある。

田中史生氏は、蛇喰遺跡の検討から、金属器生産、須恵器生産、壺蓋、木工のネットワークが存在した可能性を指摘し、8世紀半ばに生産体制の変遷があった可能性を検討している。

『蛇喰遺跡』玉湯町教育委員会1999年

「岩屋遺跡・平床Ⅱ遺跡」鳥取県教育委員会2001年

田中史生「奈良・平安時代の出雲の工作」『出雲古代史研究』第11号2001年

- 註4 国司館の廐蔵施設については、田中広明氏によれば、「城櫓や、国司競争事件などの極端な緊張関係にあった場合を除き、強岡などは無かったかもしれない。」との御教授を受けている。全国の国司館と推定されている遺構には、清などの廐蔵施設は作っているものの、明確な廐蔵施設は確認されていない例が多い。



第19表 出雲国府跡遺物観察表

碑四番号	弓真田版	出土遺物名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	削面(cm)	削痕	手法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
5-1	7	探査品	泡包器	甕	(18.0)	-	-	刃	刃	1mm以下の白色砂粒含む	良好	青灰色		
5-2	7	探査品	土器類	高台付壺	-	5.6	-	-	滑	良好	鐵褐色			
5-3	7	探査品	土器類	壺	-	6.0	-	系切り	滑、石英少々含む	良好	鉄褐色			
5-4	7	探査品	土器類	高台付壺	-	-	-	-	やや滑、2mm以下の砂粒含む	良好	斑白褐色			
5-5	7	13mm厚 2尺4寸周	土器類	土器	-	-	-	-	白色微細沙塵含む	良好	褐色			
19-1	7	1尺4寸1区 石井跡	土器類	高台付壺	-	-	(7.0)	-	1mm以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	輝青		
19-2	7	1尺4寸1区 石井跡	土器類	甕	-	14.0	-	-	滑、黑色微少々含む	やや不良	深灰色～深灰色	風化著しい		
19-3	7	1尺4寸1区 石井跡	土器類	甕	-	9.0	-	阿縫ヘラ削り	滑、白色砂粒多く含む	良好	明灰白色			
20-1	7	1尺4寸1区 2層	土器類	甕	-	-	-	鍛打文	滑、細砂粒含む	良好	明灰白色	風化、外側赤褐色 軽行者		
20-2	7	1尺4寸1区 2層	土器類	山腹瓶	高台付壺	-	-	-	滑、細砂粒含む	良好	白褐色	类型、風化		
21-1	8	1尺4寸1区 2層	土器類	高台付壺	-	-	-	-	滑、白色微細沙塵含む	良好	深褐色～白褐色	風化著しい		
21-2	8	1尺4寸1区 4層	土器類	甕	-	6.8	-	-	粗、2mm以下の砂粒含む	良好	暗白褐色	黒化著しい、外側 に斑駁有		
21-3	8	1尺4寸1区 5層	土器類	高台付壺	-	-	-	ヘラ削り、ハケ目、 鋸り目	滑、2mm以下の砂粒含む	良好	青褐色～暗褐色	風化		
21-4	8	1尺4寸1区 5層	土器類	高台付壺	-	8.8	-	-	やや滑、白色砂粒含む	やや不良	青褐色～暗褐色	風化著しい		
21-5	8	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	18.5	-	-	ヘラ削り、ハケ目	やや滑、2mm以下の砂粒 多く含む	良好	暗白褐色			
21-6	8	1尺4寸1区 4層	土器類	甕	19.4	-	-	ヘラ削り	やや滑、陶粒多く含む	良好	青褐色	風化		
21-7	8	1尺4寸1区 5層	土器類	甕	(17.8)	-	-	-	やや滑、1～2mmの砂粒 多く含む	やや不良	白褐色	風化著しい		
21-8	8	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	20.6	-	-	ヘラ削り	やや滑、2mm以下の砂粒 含む	良好	白褐色			
21-9	8	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	22.8	-	-	ヘラ削り、ハケ目	やや滑、陶粒多く含む	良好	深褐色	風化		
21-10	8	1尺4寸1区 1層	土器類	甕	16.5	-	-	ヘラ削り、ハケ目	やや滑、陶粒多く含む	良好	暗白褐色	外側赤褐色付着		
21-11	8	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	18.8	-	-	ヘラ削り	やや滑、1mm大的の砂粒多 く含む	良好	明灰黃褐色	風化		
21-12	8	1尺4寸1区	土器類	甕	11.2	-	-	ヘラ削り、ハケ目、 3条の凹線	やや滑、陶粒多く含む	良好	淡黃褐色	7C前半		
21-13	8	1尺4寸1区	土器類	甕	11.2	-	-	阿縫ヘラ削り	滑、1～3mmの砂粒含む	良好	古灰色			
21-14	8	1尺4寸1区 4層	土器類	甕	10.6	-	-	四輪ヘラ削り	1mm以下の白色砂粒含む	良好	明青灰色			
21-15	8	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	11.4	-	-	-	1mm以下の白色砂粒含む	良好	暗青灰褐色			
21-16	8	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	-	-	-	淡灰灰	1mm以下の白色砂粒含む	良好	灰褐色～暗褐色	透孔		
21-17	8	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	-	-	-	放状文	滑、1mm以下の砂粒少し 含む	良好	青褐色	方形透孔		
21-18	8	1尺4寸1区	土器類	甕	-	4.8	-	阿縫ヘラ削り、荷葉 文、凹窓、ヘラ削り	1mm以下の白色砂粒多く 含む	良好	淡褐色	底部内面に陶粒 付着		
21-19	7	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	-	-	-	阿縫ヘラ削り	滑、3mm以下の砂粒多く 含む	良好	青褐色			
21-20	8	1尺4寸1区 4層	土器類	甕	-	6.0	-	圓輪ヘラ削り、藤原 式切引	1mm以下の砂粒少し 含む	良好	暗灰褐色			
21-21	8	1尺4寸1区 4層	土器類	甕	-	-	-	門縫	滑、淡褐色と白色斑駁多く 含む	良好	暗褐色～暗褐色	△孔		
21-22	7	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	-	-	-	-	滑、1mm以下の白色砂粒 多く含む	良好	青褐色	△孔状不明透孔		
21-23	8	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	-	14.1	-	-	1mm以下の白色砂粒やや 多く含む	やや不良	青褐色	方形透孔		
21-24	8	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	-	-	-	-	滑、2mm以下の砂粒多く 含む	良好	青褐色	△方・三角と鋭の み孔		
21-25	7	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	-	8.4	-	ヘラ削り後ナカ	やや滑、1mm大的の砂粒含 む	良好	暗褐色	三方方孔透孔		
21-26	8	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	-	9.0	-	-	滑、2mm以下の白色砂粒 多く含む	良好	青褐色	△孔		
21-27	8	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	-	10.4	-	-	滑、2mm以下の白色砂粒 多く含む	良好	淡褐色	方孔？透孔		
21-28	8	1尺4寸1区	土器類	甕	13.8	-	-	-	1mm以下の白色砂粒少し 含む	良好	淡褐色			
22-1	9	1尺4寸1区	土器類	甕	14.4	-	-	圓輪ヘラ削り	滑、3mm以下の砂粒含む	良好	青褐色～赤褐色			
22-2	9	1尺4寸1区	土器類	甕	-	-	-	-	滑、2mm以下の砂粒含む	良好	灰褐色	つまみ孔3.0cm		
22-3	9	1尺4寸1区 0.6m調査区	土器類	甕	12.2	-	-	ヘラ削り後圓輪ナカ	1mm以下の白色砂粒含む	やや不良	青褐色			
22-4	9	1尺4寸1区 4層	土器類	甕	12.1	-	-	-	1mm以下の白色砂粒含む	やや不良	青褐色			
22-5	9	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	15.6	-	-	圓輪ヘラ削り	滑、3mm以下の砂粒含む	良好	青褐色～赤褐色	燒き立呑み孔		
22-6	9	1尺4寸1区 4層	土器類	甕	11.6	7.6	4.3	あ切り	滑、1mm以下の砂粒含む	良好	青褐色			
22-7	9	1尺4寸1区	土器類	甕	12.4	-	-	-	滑、淡褐色含む	良好	灰褐色	小片		
22-8	9	1尺4寸1区	土器類	甕	16.0	-	-	圓輪ヘラ削り	滑、淡褐色含む	やや不良	青褐色			
22-9	9	1尺4寸1区 3層	土器類	甕	8.2	-	-	ヘラ切り	白色断続的白含む	良好	青褐色			

特許番号	芳賀園場	出土遺構名	発 現	器 様	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	形態・手法の特徴	地 土	發 成	色 質	備 考
22-10	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	环	-	11.0	-	圓底余切り	1mm以下の白色砂粒含む 密、1mm以下の砂粒多く含む	良好	淡灰色	
22-11	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	-	8.2	-	縦止余切り	密、1mm以下の砂粒多く含む	良好	青灰色	
22-12	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	-	10.8	-	素切り無ナメ	1mm以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
22-13	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	-	9.0	-	ヘラ削り	密、白い微細な粒含む	やや不良	暗褐色	内側面油焼付着
22-14	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	-	9.8	-	ヘラ切り	白色微細な粒含む	良好	灰褐色	
22-15	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	-	8.9	-	圓底ヘラ削り	密、微細な砂多く含む	良好	青灰色	底部外面ヘラ彫記「丁」あり
22-16	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	-	9.2	-	圓底余切り	白色砂粒少しある	良好	青灰色	
22-17	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	环	-	8.0	-	圓底余切り	密、1mm以下の砂粒含む	良好	濃褐色	
22-18	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	环	-	11.6	-	圓底余切り後ナメ	1mm以下の白色砂粒含む	良好	淡青灰色	
22-19	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	环	-	20.4	-		1mm以下の白色砂粒含む	良好	墨灰色	
22-20	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	-	15.2	-		1mm以下の白色砂粒含む	良好	明青灰色	
22-21	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	21.2	18.0	2.5	円軌へラ削り	密、微細な粒含む	良好	青灰色	
22-22	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	-	-	-		密、白色砂粒含む	良好	碧青灰色	露孔
22-23	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	-	-	-		1mm以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
22-24	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	环	-	3.4	-	ヘラ切り後ナメ	1mm以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
22-25	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	环	-	10.3	-	圓軌へラ削り、ヘラ 削り	1mm以下の白色砂粒多く含む	良好	青灰色	
22-26	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	环	14.8	-	-		密、2mm以下の白色砂粒 と1mm以上の黄水色	良好	淡青灰色-灰褐色	内側面かぶり
22-27	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	环	-	-	-		1mm以下の砂粒含む	良好	暗青灰色	
22-28	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	环	15.0	-	-	あて具無	密、1mm以下の砂粒少し含む	良好	青灰色	
22-29	9 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	环	23.3	-	-		1mm以下の砂粒少しある	良好	淡灰褐色	
22-30	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	环	-	11.0	-	ヘラ削り	1~2mm大の白色砂粒含む	良好	青灰色	
22-31	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	环	-	12.0	-	素切り無ナメ	白色砂粒少しある	良好	青灰色	
22-32	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	11.4	-	-	タキ	1mm以下の白色砂粒少しある	良好	淡灰褐色	
22-33	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	-	8.9	-		密、1mmの大粒含む	良好	淡灰褐色-灰褐色	外側面かぶり
22-34	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	須恵器	高台付环	18.2	-	-	あて具無、タキ	密、3mm以上の砂粒多く含む	良好	青灰色	
22-35	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	高台付环	-	12.0	-		やや粗、4mm以下の砂粒 含む	中や小良	淡青灰色-淡 青灰色	風化化し
22-36	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	环	-	(6.0)	-	あて切り	密、微細な砂少しある	良好	淡青灰色	外側面行者
22-37	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	环	-	6.0	-	圓底余切り	やや密、1mmの大粒含む	中や不良	淡青褐色	探査坑a
22-38	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	环	-	6.3	-	ヘラ削り後黑色化 修理、3mmの沈泡、回 転式切り	密、7~10mmの砂粒少しある	良好	淡青褐色	
22-39	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	环	-	5.4	-	圓底余切り	密、微細な砂少しある	良好	淡青褐色	保付着
22-40	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	高台付环	-	(4.7)	-		密、微細な砂少しある	良好	淡青褐色	
22-41	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	高台付环	-	9.8	-		粗密	やや不良	暗褐色	風化化し
22-42	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	高台付环	-	8.4	-		やや密、2mm以上の砂粒 含む	良好	深褐色-灰褐色	
22-43	11 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	环	(21.6)	-	(6.1)		密、2mm以下の白色砂粒 含む	良好	明褐色	風化化し
22-44	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	高台付环	-	6.0	-	圓底余切り	密、微細な砂含む	やや不良	淡青褐色	
22-45	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	环	-	5.4	-	圓底余切り	密、1mmの大粒含む	良好	淡青褐色	外側面付着
22-46	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	环	-	5.9	-	圓底余切り	密、微細な砂多く含む	良好	淡青褐色	内部保付着
22-47	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	环	-	4.8	-	粗ねじ切り、2条の 凹線	密、微細な砂少しある	良好	淡青褐色	金作保付着
22-48	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	环	-	7.0	-		密、微細な砂少しある	やや不良	暗褐色	
22-49	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	环	-	(15.0)	-		密、微細な砂多く含む	良好	淡青褐色	
22-50	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	高台付环	-	12.0	-		密、微細な砂多く含む	良好	暗褐色	見落石質
22-51	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	高台付环	-	(6.0)	-		密、微細な砂多く含む	良好	明褐色	
22-52	10 3巻	一貫尾Ⅱ区 3巻	土師器	环	-	7.6	5.0	2.8	密、微細な砂含む	良好	明褐色	見落石質

地図番号	写真撮影場	出土遺構名	種別	古 種	口径 (cm)	直径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
23-24	11	一貫院Ⅱ区 土師器	土器	(保証器)	-	19.0	-	密	良好	洪積褐色	柱状凸台x	
23-25	11	一貫院Ⅱ区 土師器	器	-	5.4	-	同前赤切り	少々密、2mm以下の砂粒少々含む	良好	洪積褐色	-	
23-26	11	一貫院Ⅱ区 3号	土師器	器+	-	5.0	-	同軸赤切り	密、微砂粒多く含む	やや不良	洪白褐色	底部削面
23-27	11	一貫院Ⅱ区 土師器	器+	-	5.0	-	同軸赤切り	密、微砂粒少々含む	良好	洪積褐色	-	
23-28	11	一貫院Ⅱ区 土師器	器	-	(6.0)	-	-	密、微砂粒少々含む	良好	洪積褐色	-	
23-29	11	一貫院Ⅱ区 3号	土加脂	器+	-	5.8	-	同軸赤切り	密、4mm以下の砂粒含む	やや不良	洪積褐色	-
23-30	11	一貫院Ⅱ区 3号	土加脂	器	-	(6.0)	-	-	密、微砂粒少々含む	良好	柱白色	外側風化
23-31	11	一貫院Ⅱ区 土師器	器	-	5.8	-	同軸赤切り	やや密、微砂粒含む	やや不良	菊黄色	直面風化	
23-32	11	一貫院Ⅱ区 土加脂	小瓶	-	5.4	-	赤切	やや密、微砂粒含む	良好	暗白褐色	水痕面、外側風化面無く付着	
23-33	11	一貫院Ⅱ区 3号	土加脂	小瓶	-	4.2	-	同軸赤切り	密、3mm以下の砂粒含む	不良	褐褐色	風化者x
23-34	11	一貫院Ⅱ区 土加脂	小瓶	-	4.0	-	同軸赤切り	密	良好	洪積褐色	直面風化	
23-35	11	一貫院Ⅱ区 3号	土加脂	小瓶	-	4.0	-	同軸赤切り	やや密、微砂粒含む	やや不良	暗褐色	直面風化
23-36	11	一貫院Ⅱ区 土加脂	小瓶	-	3.8	-	同軸赤切り	やや密、微砂粒多く含む	やや不良	白褐色	風化者x	
23-37	11	一貫院Ⅱ区 1号	土加脂	小瓶	11.0	6.8	2.0	同軸赤切り	密、1mm以下の砂粒含む	やや不良	洪積褐色+堆積物	-
23-38	11	一貫院Ⅱ区 土加脂	耳	-	7.8	4.6	1.8	-	精密	やや不良	白褐色	直面風化
23-39	11	一貫院Ⅱ区 土加脂	小瓶	-	4.2	-	同軸赤切り	密、微砂粒含む	良好	灰褐色	直面風化	
23-40	11	一貫院Ⅱ区 土加脂	小瓶	-	6.0	-	同軸赤切り	密	良好	淡褐色	直面風化	
23-41	12	一貫院Ⅱ区 3号	土師器	器	-	7.0	-	同軸赤切り	密、1mm以下の砂粒含む	洪積褐色+堆積物	柱状凸台x、赤色風化物付着	
23-42	12	一貫院Ⅱ区 1号	土加脂	器	-	5.2	-	同軸赤切り	密、1mm以下の砂粒多く含む	洪積褐色	柱状凸台付着	
23-43	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	器	-	5.0	-	同軸ヘラ削り、同軸 赤切	密、微砂粒含む	やや不良	洪積褐色	柱状高凸台、保付	
23-44	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	器	-	6.7	-	同軸赤切り	やや密、微砂粒含む	やや不良	淡白褐色	柱状高凸台、風化者x、赤色風化物付着	
23-45	12	一貫院Ⅱ区 3号	土師器	器	-	7.0	-	同軸赤切り	密、微砂粒多く含む	やや不良	淡白褐色+淡 褐色	柱状高凸台、保付
23-46	12	一貫院Ⅱ区 1号	土加脂	器	-	7.2	-	同軸赤切り	密、1mm以下の砂粒多く含む	洪積褐色	柱状凸台付着	
23-47	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	器	-	5.0	-	同軸ヘラ削り、同軸 赤切	やや密、2mm以下の砂粒含む	明黄色	柱状凸台付着	-	
23-48	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	器	-	5.5	-	同軸赤切り	やや密、2mm以下の砂粒 含む	やや不良	洪積褐色	柱状高凸台、風化 者x	
23-49	12	一貫院Ⅱ区 3号	土加脂	器	-	5.0	-	同軸赤切り	やや密、微砂粒多く含む	柱白色	柱状高凸台、直面 風化	
23-50	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	器	-	6.9	-	-	密、2mm以下の砂粒含む	やや不良	洪積褐色+淡 褐色	柱状高凸台付着	
23-51	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	器	-	4.6	-	同軸赤切り	密、微砂粒少々含む	洪积褐色	柱状高凸台		
23-52	12	一貫院Ⅱ区 1号	土加脂	器	-	4.2	-	同軸赤切り	密	やや不良	洪積褐色	柱状高凸台、風化 者x
23-53	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	器	-	4.0	-	同軸赤切り	精密	洪積褐色	柱状高凸台		
23-54	12	一貫院Ⅱ区 65号(土加脂)	土師器	器	-	3.9	-	同軸赤切り	密、微砂粒少々含む	やや不良	洪積褐色+堆 積物	柱状高凸台、保付
23-55	12	一貫院Ⅱ区 3号	土加脂	器	-	5.0	-	同軸赤切り	密、1mm以下の砂粒少々 含む	洪積褐色	柱状高凸台付着	
23-56	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	器	-	5.0	-	同軸赤切り	密、微砂粒多く含む	柱白色	柱状高凸台		
23-57	12	一貫院Ⅱ区 1号	土加脂	器	-	4.5	-	-	密	白褐色	柱状高凸台、直面 風化	
23-58	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	土加脂	器	-	4.2	-	同軸ヘラ削り、同軸 赤切	密、1mm以下の砂粒含む	やや不良	洪積褐色	柱状高凸台、保付
23-59	12	一貫院Ⅱ区 2号	土加脂	器	(8.0)	5.2	(2.5)	同軸赤切り	密、微砂粒少々含む	やや不良	白褐色	柱状高凸台
23-60	12	一貫院Ⅱ区 3号	土加脂	器	7.4	4.4	2.5	同軸赤切り	密、微砂粒少々含む	洪積褐色	柱状高凸台	
23-61	12	一貫院Ⅱ区 3号	土加脂	器	7.3	2.8	3.2	同軸赤切り	密、微砂粒少々含む	白褐色	柱状高凸台、NO.1	
23-62	12	一貫院Ⅱ区 3号	土加脂	器	7.6	3.3	3.0	同軸赤切り	やや密、2mm以下の砂粒 多く含む	柱状高凸台	柱状高凸台、NO.1	
23-63	12	一貫院Ⅱ区 1号	土加脂	器	5.3	3.8	2.5	同軸赤切り	やや密、1mm以下の砂粒 少々含む	やや不良	白褐色	柱状高凸台、表面 風化
23-64	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	器	-	4.7	-	-	密、微砂粒多く含む	洪積褐色	柱状高凸台、直面 風化		
23-65	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	器	-	4.6	-	-	微密	やや不良	洪積褐色	柱状高凸台、直面 風化	
23-66	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	器	-	5.0	-	-	密	やや不良	洪積褐色	柱状高凸台、直面 風化	
23-67	12	一貫院Ⅱ区 土加脂	器	-	4.8	-	同軸赤切り	密、1~3mm人の砂粒含む	良好	白褐色	柱状高凸台	
24-1	13	一貫院Ⅱ区 3号	土加脂	器	-	-	-	ヘラ削り、ハケ目	-	良好	洪積褐色	把手
24-2	13	一貫院Ⅱ区 3号	土加脂	器	-	-	-	同軸、1mm人の砂粒 多く含む	-	良好	白褐色	把手
24-3	13	一貫院Ⅱ区 3号	土加脂	器	-	-	-	同軸、1mm人の砂粒 多く含む	-	良好	白褐色	把手、媒材着

種別	写真図版	出土場所名	種別	種類	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	胎	土	焼成	色調	備考
24-4	13	貴宮1区 6年鉄器	土解品	土解支脚	-	-	-	やや細、1mm以下の砂粒多く含む	良好	暗白色～淡褐色	浅色		
24-5	13	貴宮1区 2年	土解品	土解支脚	-	-	-	やや細、1mm以下の砂粒多く含む	良好	暗白色～淡褐色	褐色		
24-6	13	貴宮1区 3年	土解品	土解支脚	-	-	-	やや細、2mm以下の砂粒多く含む	良好	暗白色～淡褐色	褐色	堅物	
24-7	13	貴宮1区 2年	土解品	土解支脚	-	-	-	やや細、3mm以下の砂粒多く含む	良好	暗白色			
24-8	13	貴宮1区 3年	土解品	移動式底	-	-	-	やや粗、1mm以下の砂粒多く含む	良好	淡青褐色	褐色		
24-9	13	貴宮1区 4年	土解品	移動式底	-	-	-	やや粗、1mm以下の砂粒多く含む	良好	暗褐色	褐色		
24-10	13	貴宮1区 3年	土解品	移動式底	-	-	-	やや粗、3mm以下の砂粒多く含む	良好	淡青褐色	褐色		
24-11	12	貴宮1区 2年	土解品	移動式底	-	-	-	やや粗、1mm以下の砂粒多く含む	良好	淡青褐色	褐色		
24-12	12	貴宮1区 3年	土解品	不明	長合 (7.1)	短 2.4	幅 1.9	やや粗、2mm以下の砂粒多く含む	良好	淡青褐色	褐色	起平二三足鼎脚部	
24-13	13	貴宮1区 3年	土解品	土堆	長合 5.3	短 4.5	幅 3.9	やや粗、3mm以下の砂粒多く含む	良好	淡灰褐色	褐色	外側一帯に付石等乳化現象	
24-14	13	貴宮1区 3年	土解品	土堆	長合 3.95	短 1.8	幅 1.85	やや粗、微細少し含む	良好	白褐色	褐色	付石等乳化現象	
25-1	14	貴宮1区 3年	土解品	中量級底 蓋	-	-	-	柄子目タッカ、カサギ 雲	良好	青灰色	褐色		
25-2	14	貴宮1区 3年	鉢底器	直	-	-	-	1mm以下の砂粒少し含む	良好	青灰色	褐色		
25-3	14	貴宮1区 3年	鉢底器	錐子	(22.0)	-	-	やや粗、1mm以下の砂粒少し含む	良好	明灰白色	褐色		
25-4	14	貴宮1区 2年	鉢底器	錐子	6.3	-	-	圓軸やハリ振り	良好	青灰色	褐色	外側灰白色帶に上部ハリ振りあり	
25-5	14	貴宮1区 2年	鉢底器	錐子	-	-	-	1mm以下の白陶砂粒少し含む	良好	青灰色	褐色	内面腹周による跡は、赤陶色質、淡灰褐色斑状、古風な「匂」	
25-6	14	貴宮1区 2年	陶片	陶片	-	-	-	白色無鉢紋や多く含む	良好	明灰白色	褐色	扇形瓦脱落される部分や軟鉄、5cm程	
25-7	14	貴宮1区 2年	鉢底器	錐子	-	-	-	タクタ、てて貝痕	良好	明灰白色	褐色		
25-8	14	貴宮1区 2年	土解品	凸印	-	-	-	密、微細粒含む	良好	淡青褐色	褐色	風化者らしい	
26-1	14	貴宮1区 3年	土解品	高环 (15.1)	8.9	12.1	ヘラ巻き、ハケ付、 縦裂口	やや粗、2mm以下の砂粒多く含む	良好	明褐色	褐色	一層風化	
26-2	14	貴宮1区 4年	土解品	高环	-	(10.4)	-	ヘラ巻き、ヘラ張り	やや粗、2mm以下の砂粒多く含む	良好	明褐色	褐色	
26-3	14	貴宮1区 4年	土解品	高环	(14.6)	(8.8)	(10.3)	ハケ付、破れ口	やや粗、2mm以下の砂粒多く含む	良好	白褐色	褐色	
26-4	14	貴宮1区 4年	土解品	高环	-	(12.0)	-	頭部圧扁	密、微細粒少し含む	良好	淡青褐色	褐色	
26-5	14	貴宮1区 3年	土解品	高环	-	9.9	-	ヘラ巻き、続口	良好	淡青褐色	褐色	表面風化	
26-6	14	貴宮1区 3年	土解品	高环	-	-	-	ヘラ巻き、ハケ付	やや粗、2mm以下の砂粒少し含む	良好	淡青褐色	褐色	
26-7	14	貴宮1区 3年	土解品	高环	17.0	-	-	ヘラ巻き、ハケ付	やや粗、2mm以下の砂粒少し含む	良好	淡青褐色	褐色	
26-8	17	貴宮1区 3年	土解品	環	16.2	-	-	ヘラ巻き	良好	淡青褐色	褐色	暗褐色帶	
26-9	17	貴宮1区 3年	土解品	環	12.0	-	-	ヘラ巻き	やや粗、3mm以下の砂粒少し含む	良好	明褐色	褐色	
26-10	14	貴宮1区 3年	土解品	環	28.0	-	-	ヘラ巻き	やや粗、微細粒多く含む	良好	淡青褐色	褐色	
26-11	14	貴宮1区 3年	土解品	網状型埴輪	-	-	-	網状多く含む	良好	淡青褐色	褐色		
26-12	14	貴宮1区 3年	土解品	環唇	15.2	-	-	密、2mmの大粒含む	良好	淡青褐色	褐色		
26-13	14	貴宮1区 3年	土解品	環唇	10.8	-	-	密、黑色微細粒紋と石質含む	良好	淡灰褐色	褐色	外側自然剥着	
26-14	13	貴宮1区 6年鉄器	土解品	环唇	-	-	-	ヘラ巻き	やや粗、1mm以下の砂粒含む	良好	淡褐色	褐色	
27-1	16	貴宮1区 6年鉄器	土解品	环唇	15.3	6.2	3.0	圓軸やハリ振り	密、2mm以下の白色砂粒と石質含む	良好	褐色	褐色	
27-2	16	貴宮1区 5年	土解品	环唇	16.4	-	2.6	圓軸やハリ振り	密、2mm以下の砂粒含む	良好	灰褐色	褐色	
27-3	16	貴宮1区 5年	土解品	环唇	16.0	-	3.2	圓軸やハリ振り	密、2mm以下の砂粒含む	良好	淡褐色	つまみ壁3.7cm	
27-4	15	貴宮1区 5年	土解品	环唇	-	-	-	圓軸やハリ振り	密、2mm以下の白色砂粒含む	やや粗	褐色	つまみ壁3.0cm、 器底あり、鉛用板	
27-5	15	貴宮1区 6年鉄器	土解品	环唇	-	-	-	ヘラ巻き後ナダ	密、白色砂粒少し含む	良好	淡灰褐色	つまみ壁3.5cm、 器底あり、鉛用板	
27-6	15	貴宮1区 5年	土解品	环唇	10.4	-	-	ヘラ巻き後ナダ	密	淡灰褐色	褐色		
27-7	15	貴宮1区 5年	土解品	环唇	(16.6)	-	(3.6)	ヘラ巻き後ナダ	密、微細砂粒少し含む	良好	淡灰褐色	つまみ壁3.0cm、 器底あり、鉛用板	
27-8	15	貴宮1区 5年	土解品	环唇	-	-	-	圓軸やハリ振り	密、1mm以下の白色砂粒と石質含む	不良	淡灰褐色	つまみ壁2.1cm、 器底あり、鉛用板	
27-9	15	貴宮1区 5年	土解品	环唇	-	-	-	密	良好	淡灰褐色	褐色	つまみ壁2.5cm、 器底あり、鉛用板	
27-10	15	貴宮1区 5年	土解品	环唇	12.5	-	-	密、1mm以下の白色砂粒含む	良好	青褐色	褐色	青褐色～褐色	
27-11	15	貴宮1区 5年	土解品	环唇	17.6	-	-	圓軸やハリ振り	密、1mm以下の白色砂粒含む	不良	淡青褐色		
27-12	15	貴宮1区 5年	土解品	环唇	-	-	-	圓軸やハリ振り	密、微細砂粒少し含む	良好	青褐色	褐色	
27-13	15	貴宮1区 5年	土解品	环唇	16.0	-	-	1条の沈澱	密、白色砂粒少し含む	良好	淡青褐色		

標印番号	発育段階	出土遺物名	種 別	器 形	口径 (mm)	底径 (mm)	脚高 (mm)	形態・手法の特徴	施 工	焼 成	色 調	備 考
27-14	15	直尻工区 3号	須恵器	壺	17.4	-	-	ヘラ削り	擦摩削少し含む	良好	青灰色	軽用器
27-15	15	直尻工区	須恵器	壺	(13.2)	-	-		窓	良好	灰白色	
27-16	15	直尻工区	須恵器	壺	26.2	-	-	圓軸ヘラ削り	小や窓、1mm大の白色砂粒少含む	やや不良	黄灰也～暗灰也	
27-17	15	直尻工区	須恵器	壺	13.0	-	-		窓、白砂粒含む	良好	暗灰也	
27-18	16	直尻工区 3号	須恵器	壺	(12.8)	8.0	4.5	圓軸糸切り	窓、3mm以下の白色砂粒多く含む	良好	暗青灰色～淡灰褐色	
27-19	15	直尻工区	須恵器	壺	11.4	8.4	3.95	圓軸糸切り	窓、砂粒少し含む	良好	暗灰也～褐色	
27-20	15	直尻工区 3号	須恵器	壺	-	7.0	-	圓軸糸切り後ナメ	小や窓、薄擦摩削少し含む	やや不良	暗青褐色	
27-21	15	直尻工区	須恵器	壺	11.4	-	-		窓、4mm以下の白色砂粒含む	良好	暗灰也～灰也	
27-22	15	直尻工区 3号調査区	須恵器	壺	11.0	-	-		留、黒色擦摩削粒含む	良好	暗灰色～灰色	
27-23	15	直尻工区 3号	須恵器	壺	-	6.9	-	圓軸糸切り	窓、白色砂粒含む	良好	灰	
27-24	15	直尻工区 3号	須恵器	壺	-	7.8	-	圓軸糸切り	窓、1mm以下の白色砂粒含む	やや不良	青灰色	
27-25	15	直尻工区 3号	須恵器	壺	-	8.0	-	圓軸糸切り	窓	良好	暗灰色	
27-26	15	直尻工区 3号	須恵器	壺	-	8.6	-	圓軸糸切り	窓、黑色擦摩削粒含む	良好	暗灰也	
27-27	15	直尻工区 3号	須恵器	耳	-	(10.0)	-	条切引	窓	良好	船底色	
27-28	15	直尻工区 3号	須恵器	耳	-	16.0	-	圓軸糸切り後ナメ	窓、白色砂粒含む	良好	暗灰也～銀灰色	
27-29	15	直尻工区	須恵器	耳	-	7.5	-	圓軸糸切り	小や窓、1mm大の白色砂粒含む	やや小瓦	暗灰也	
27-30	15	直尻工区	須恵器	耳	-	(10.0)	-	圓軸糸切り	窓、白色砂粒含む	良好	淡青灰色	
27-31	15	直尻工区 3号	須恵器	耳	-	8.6	-	圓軸糸切り	小や窓、白色擦摩削粒含む	やや不良	暗灰也	
27-32	15	直尻工区 3号	須恵器	耳	-	10.7	-	圓軸糸切り	窓、白色擦摩削粒含む	良好	暗灰也	
27-33	15	直尻工区 3号	須恵器	耳	-	(9.0)	-	圓軸糸切り	窓、白色砂粒含む	良好	暗青褐色	
27-34	16	直尻工区 3号	須恵器	耳	-	11.2	-	圓軸糸切り	窓	やや不良	暗青褐色	
27-35	16	直尻工区 3号	須恵器	耳	-	6.5	-	圓軸糸切り	窓、黑色擦摩削粒含む	良好	暗灰也	
27-36	16	直尻工区 3号	須恵器	耳	-	11.4	-	圓軸糸切り	窓、白色砂粒含む	良好	暗灰也	
27-37	16	直尻工区	須恵器	耳	-	(9.0)	-	圓軸糸切り	窓、白色擦摩削粒含む	良好	暗灰也	
27-38	16	直尻工区 3号	須恵器	耳	-	(8.6)	-	糸切り後ナメ	窓、白色砂粒少々含む	良好	暗灰也	
27-39	16	直尻工区 3号	須恵器	耳	-	9.8	-	糸切り後ナメ	窓、白色擦摩削粒含む	良好	淡青灰色	
27-40	16	直尻工区 3号	須恵器	耳	-	8.4	-	圓軸糸切り	窓、白色擦摩削粒少含む	やや不良	暗灰也	
27-41	16	直尻工区 3号	須恵器	耳	-	7.0	-		小窓、2mm以下の白色砂粒多く含む	良好	暗青灰色	
28-1	17	直尻工区	須恵器	高台付耳	-	10.0	-		窓、2mm以下の白色砂粒含む	良好	灰	
28-2	17	直尻工区 3号	須恵器	高台付耳	-	7.6	-		窓、1mm以下の砂粒含む	良好	暗灰也～灰色	
28-3	17	直尻工区 3号	須恵器	高台付耳	-	10.4	-	工具によるナメ	小や窓、白色砂粒多く含む	良好	淡灰也～淡青灰色	外表面白色の自然剥離
28-4	17	直尻工区 3号	須恵器	高台付耳	-	9.0	-	糸切り後ナメ	窓、1mmの白色砂粒含む	良好	暗灰也～淡灰也	
28-5	17	直尻工区 3号	須恵器	高台付耳	-	11.0	-	糸切り後ナメ	窓、白色擦摩削粒含む	やや不良	青灰色	
28-6	17	直尻工区 3号	須恵器	高台付耳	-	9.4	-		窓、白色擦摩削粒含む	良好	暗青灰色～暗青褐色	
28-7	17	直尻工区 3号	須恵器	高台付耳	-	8.6	-		透	良好	淡灰也	
28-8	17	直尻工区 3号	須恵器	高台付耳	-	8.6	-		透	良好	暗灰也	
28-9	17	直尻工区 3号	須恵器	高台付耳	-	8.5	-		窓、2mm以下の白色砂粒含む	良好	暗青灰色	
28-10	17	直尻工区	須恵器	高台付耳	-	10.0	-	糸切り後ナメ	窓、白色砂粒少含む	良好	暗灰也	
28-11	17	直尻工区 3号	須恵器	高台付耳	-	9.4	-	圓軸糸切り後ナメ	窓、5mm以下の白色砂粒少含む	小瓦	赤褐色	
28-12	17	直尻工区	須恵器	高台付耳	-	10.0	-	糸切り	透	良好	淡灰也	
28-13	17	直尻工区 3号	須恵器	高台付耳	-	9.4	-	圓軸糸切り	窓、白色砂粒多く含む	良好	暗灰也	
28-14	17	直尻工区	須恵器	高台付耳	-	8.8	-		窓、1mmの白色砂粒少含む	やや不良	灰	
28-15	17	直尻工区 3号	須恵器	高台付耳	-	8.8	-	圓軸糸切り	透	良好	暗灰也	
28-16	17	直尻工区 3号	須恵器	高台付耳	-	9.6	-		小窓、白色砂粒多く含む	良好	淡青灰色	
28-17	17	直尻工区	須恵器	高台付耳	-	8.6	-	糸切り	窓、白色砂粒少し含む	良好	淡灰也	
28-18	17	直尻工区	須恵器	高台付耳	-	10.2	-		窓、白色砂粒少含む	良好	暗青灰色	
28-19	17	直尻工区	須恵器	高台付耳	-	9.2	-	圓軸糸切り	窓、面部砂粒多く含む	良好	淡青灰色	
28-20	17	直尻工区	須恵器	高台付耳	-	10.2	-	ヘラ切り後ナメ	透	良好	暗灰也～灰白	

井図番号	写真回数	出土遺物名	種 棒	器 形	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	胎 土	施 成	色 質	備 考
28-21	17	一貫瓦 I 期	須志器	高台付环	-	10.0	-	系切り	灰、白色砂粒少し含む	良好	暗灰色	
28-22	17	一貫瓦 I 期	須志器	高台付环	-	8.8	-	同軸赤絞り後ナギ	灰	良好	暗灰色～灰黑色	
28-23	17	一貫瓦 I 期	須志器	高台付环	-	10.5	-	同軸、同軸赤絞り	灰、黑色砂粒含む	良好	深灰色	
28-24	17	一貫瓦 I 期	須志器	高台付环	-	9.5	-	同軸赤絞り	灰、白色砂粒含む	良好	暗灰色～墨灰色 破片が嵩着	
28-25	17	一貫瓦 I 期	須志器	高台付环	-	8.1	-	同軸赤絞り後ナギ	灰、2mm以下の石英多く含む	不良	墨灰色	外側深付灰
28-26	17	一貫瓦 I 期	須志器	高台付环	19.2	13.2	3.7	同軸赤絞り後ナギ	灰、白色砂粒多く含む	良好	暗灰色	
28-27	17	一貫瓦 I 期	須志器	高台付环	-	8.2	-	同軸	灰	良好	淡青灰色	
28-28	17	一貫瓦 I 期	須志器	高台付环	-	11.6	-	同軸	灰、白色砂粒含む	良好	淡青灰色～灰黑色	
28-29	17	一貫瓦 I 期	土器器	环	16.0	-	-	同軸	灰、難纏砂粒少し含む	良好	淡褐色	内面薄く僅付灰、古代灰
28-30	17	一貫瓦 I 期	土器器	环	-	(6.0)	-	同軸	灰、1mm以下の石英多く含む	やや不良	淡白褐色	風化著しい
28-31	17	一貫瓦 I 期	土器器	环	15.2	8.1	4.2	同軸	灰、2mm以下の石英多く含む	良好	暗褐色～淡褐色	底部風化、内外面に褐色鉄物付着
28-32	17	一貫瓦 I 期	土器器	环	-	13.4	-	系切り	灰	良好	白褐色～淡青灰色	中間付灰
29-1	19	一貫瓦 I 期	須志器	环	9.8	8.0	2.95	同軸赤絞り	灰	良好	淡灰色	
29-2	19	一貫瓦 I 期	須志器	环	11.8	8.8	2.95	同軸赤絞り	灰	やや不良	淡白色	
29-3	19	一貫瓦 I 期	須志器	环	-	18.5	-	同軸	灰	良好	淡灰色	
29-4	19	一貫瓦 I 期	須志器	环	-	7.0	-	同軸、同軸赤絞り	灰、黑色砂粒含む	良好	淡褐色	
29-5	19	一貫瓦 I 期	須志器	环	-	11.8	-	同軸	灰、1mm以下の石英含む	不良	深灰色～淡灰色	
29-6	19	一貫瓦 I 期	須志器	环	-	-	-	同軸	灰	良好	阴灰白色	会帶
29-7	19	一貫瓦 I 期	須志器	环	-	-	-	同軸	難纏砂粒多く含む	良好	淡白色	会帶
29-8	19	一貫瓦 I 期	須志器	环	-	-	-	同軸	難纏砂粒と石英含む	良好	淡灰色	会帶
29-9	19	一貫瓦 I 期	須志器	环	-	8.2	-	同軸	難纏砂粒と石英含む	やや不良	淡灰色	
29-10	19	一貫瓦 I 期	須志器	环	-	8.0	-	系切り	灰、1mm以下の砂粒少し含む	小良	淡白色	革張あり、私用被
29-11	19	一貫瓦 I 期	須志器	环	-	9.0	-	同軸赤絞り	灰、2mm以下の砂粒含む	良好	灰色	
30-1	18	一貫瓦 I 期	須志器	环	-	5.8	-	ヘラ削り後ナギ	灰	良好	淡灰色	
30-2	18	一貫瓦 I 期	須志器	环	-	10.6	-	ヘラ削り後ナギ、静止止め切り	灰、白色砂粒多く含む	良好	暗灰色～淡褐色	
30-3	19	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	(10.5)	-	-	武鑿	灰、難纏砂粒含む	良好	暗褐色～淡褐色	外縁一部と内面に剥離
30-4	19	一貫瓦 I 期	須志器	高台付环	-	10.9	-	ヘラ削り、タキキ	灰、難纏砂粒含む	良好	暗青灰色～淡褐色	内側と両面に剥離
30-5	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	11.9	-	ヘラ削り	灰、白色砂粒と難纏砂粒含む	良好	淡青灰色	
30-6	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	8.6	-	内輪ヘラ削り後ナギ、静止止め切り	灰、白色砂粒多く含む	良好	淡青灰色	底部内面に剥離
30-7	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	9.4	-	内輪ヘラ削り後ナギ、同軸赤絞り	灰、白色砂粒と石英含む	良好	淡褐色～淡褐色	高台付環
30-8	16	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	9.2	-	内輪ヘラ削り後ナギ、同軸赤絞り	灰、白色砂粒含む	良好	淡灰色	
30-9	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	7.6	-	内輪ヘラ削り後ナギ、同軸赤絞り	灰、白色砂粒含む	良好	淡灰色	
30-10	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	8.6	-	内輪ヘラ削り後ナギ	灰	良好	淡灰色	
30-11	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	13.2	-	内輪ヘラ削り後ナギ	灰、やや灰、白色砂粒多く含む	小良	暗青灰色～淡褐色	
30-12	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	12.2	-	ヘラ削り後ナギ	灰、やや灰、2mm以下の砂粒多く含む	良好	暗灰色～明灰色	
30-13	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	14.7	-	同軸ヘラ削り	灰、5mm以下の砂粒含む	良好	暗灰色～明灰色	
30-14	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	12.2	-	内輪ヘラ削り後ナギ	灰、黑色砂粒少し含む	良好	暗褐色～淡褐色	
30-15	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	13.4	-	内輪ヘラ削り後ナギ、同軸赤絞り	灰、やや灰、微細砂粒と石英含む	良好	暗褐色～淡褐色	
30-16	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	(20.4)	-	同軸	灰	良好	淡白色	底部本調査
30-17	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	32.4	-	同軸ヘラ削り	灰、1mm以下の白色砂粒多く含む	良好	淡灰色	
30-18	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	28.0	-	内輪、横丁目状、横丁目、同軸	灰、白色砂粒含む	良好	暗灰色	
31-1	18	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	-	-	タキキ、タキキ後ナギ	灰、1mm以下の白色砂粒含む	良好	暗灰色	
31-2	20	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	-	-	ヘラ削り後ナギ	灰、白色砂粒多く含む	良好	淡褐色～淡褐色	
31-3	20	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	-	-	内輪ヘラ削り後ナギ	灰、1mm以下の白色砂粒含む	良好	灰白色～淡褐色	
31-4	20	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	-	-	同軸ヘラ削り後ナギ	灰、1mm以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
31-5	20	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	-	-	同軸ヘラ削り後ナギ	灰、1mm以下の白色砂粒含む	良好	暗青灰色	肥手
31-6	20	一貫瓦 I 期	須志器	直腹環	-	-	-	内輪	灰、白色砂粒多く含む	良好	暗灰色	肥手

標因番号	写真図版	出土遺構名	種別	基 種	口径(cm)	直徑(cm)	高さ(cm)	形態・手法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
31-7	29	一貫筑1区 砂利層	埴輪	(把手)	-	-	-	タキ	青	瓦紅	暗灰褐色～淡灰 色	
31-8	16	一貫筑1区 鐵器	埴輪	高耳	-	(12.0)	-	割り口	青、白色砂粒少し含む	良好	暗灰褐色～淡灰 色	
31-9	20	一貫筑1区 土	埴輪	圓筒内面	-	-	-	-	1mm以下の白色砂粒含む	良好	暗灰褐色	透孔
31-10	20	一貫筑1区 埴輪	埴輪	圓筒内面	-	(10.6)	-	-	青、白色砂粒少し含む	良好	暗灰褐色～淡灰 色	透孔
31-11	20	一貫筑1区 土	埴輪	圓筒内面	-	(22.2)	-	-	青、白色砂粒多く含む	良好	明灰褐色	透孔
31-12	29	一貫筑1区 鐵器	埴輪	高耳	-	8.6	2.4	円軸へラ剥り	やや青、微細砂粒と白灰 合む	良好	灰白色	
31-13	22	一貫筑1区 鐵器	埴輪	高耳	-	-	-	割り残ナメ	白色砂粒含む	良好	淡青褐色	
31-14	20	一貫筑1区 鐵器	埴輪	長方瓶	-	-	-	ヘラ剥り口	青、微細砂粒含む	良好	暗青褐色	
31-15	29	一貫筑1区 鐵器	埴輪	圓筒内面	(8.6)	(8.6)	(1.9)	-	1mm以下の白色砂粒含む	良好	青灰褐色	
32-1	20	一貫筑1区 3層	埴輪	丸台付耳	-	8.6	-	-	やや青、微細砂粒含む	やや不良	白褐褐色～淡灰 色	風化
32-2	20	一貫筑1区 土器	埴輪	丸台付耳	-	(5.4)	-	-	青、微細砂粒少し含む	瓦紅	暗淡黄褐色	
32-3	20	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	6.0	-	-	やや青、微細砂粒多く含 む	やや不良	淡青白褐色	風化美しい
32-4	20	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	4.2	-	回軸彎切り	やや青、2mm以下の砂粒 多く含む	良好	暗白褐色	
32-5	20	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	4.0	-	余取り後ナメ	2mm以下の砂粒少し 含む	瓦紅	白褐褐色～淡 褐色	
32-6	20	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	5.2	-	回軸彎切り	灰黒	やや不良	淡褐色	
32-7	29	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	5.8	-	回軸彎切り	青、1mm以下の砂粒含む	やや不良	淡褐色	
32-8	20	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	5.0	-	回軸彎切り	青、1mm以下の砂粒含む	良好	淡褐色	
32-9	20	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	6.0	-	回軸彎切り	青、微細砂粒少し含む	良好	淡褐色	
32-10	20	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	5.0	-	回軸彎切り後ナメ	やや青、微細砂粒多く含 む	やや不良	青赤褐色～寒 褐色	風化
32-11	20	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	6.2	-	ヘラ剥り、回軸彎切 り	青、1mm以下の砂粒含む	やや不良	淡褐色	保存有
32-12	20	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	5.8	-	回軸彎切り後ナメ	青、2mm以下の砂粒少し 含む	良好	从褐色～淡褐色	
32-13	20	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	5.6	-	回軸彎切り	灰黒	淡灰褐色		
32-14	21	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	5.0	-	回軸彎切り後ナメ	やや青、微細砂粒と石英 多く含む	瓦紅	白褐褐色～灰 褐色	
32-15	21	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	6.0	-	静止彎切り	青、微細砂粒多く含 む	良好	白褐褐色	
32-16	21	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	5.4	-	-	青、1mm以下の砂粒含む	良好	淡棕褐色	
32-17	21	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	6.4	-	-	やや青、茶褐色と白灰 多く含む	やや不良	羽白色	風化美しい
32-18	21	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	5.0	-	回軸彎切り後ナメ	やや青、微細砂粒と石英 多く含む	良好	淡明褐色	
32-19	21	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	(5.3)	-	-	青、微細砂粒含む	やや不良	淡褐色	底部風化
32-20	21	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	5.2	-	余取り後ナメ	青、微細砂粒多く含む	やや不良	淡褐色	風化
32-21	21	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	5.8	-	回軸彎切り	灰黒	淡灰褐色		
32-22	21	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	8.4	-	回軸彎切り	青、微細砂粒と白灰含 む	良好	胡桃斑褐色	底部内外曲面有
32-23	21	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	9.3	-	-	青、微細砂粒少し含む	やや不良	淡褐色	風化美しい
32-24	21	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	6.8	-	回軸彎切り	青、2mm以下の砂粒含む	良好	青褐色	
32-25	21	一貫筑1区 3層	埴輪	小縁	-	5.2	-	回軸彎切り	青	良好	白褐色	
32-26	21	一貫筑1区 3層	埴輪	小縁	-	5.0	-	-	青、2mm以下の砂粒少し 含む	良好	明白褐色～淡 褐色	風化美しい
32-27	21	一貫筑1区 3層	埴輪	小縁	-	3.6	-	回軸彎切り	灰黒	やや不良	白褐褐色～淡 褐色	
32-28	21	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	4.7	-	回軸彎切り後ナメ	青、2mm以下の砂粒少し 含む	良好	明白褐色	柱状窓内有
32-29	21	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	4.7	-	回軸彎切り	青、微細砂粒多く含む	やや不良	淡白褐色	柱状窓内有
32-30	21	一貫筑1区 3層	埴輪	耳	-	4.8	-	回軸彎切り後ナメ	青、1mm以下の砂粒少し 含む	良好	乳白色	柱状窓内有
32-31	21	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	4.2	-	回軸彎切り後ナメ	青、1mm以下の砂粒含む	良好	淡白褐色	柱状窓内有
32-32	21	一貫筑1区 2層	埴輪	耳	-	5.1	-	回軸彎切り	青、1mm以下の砂粒少し 含む	やや不良	淡褐褐色	柱状窓内有
32-33	21	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	5.6	-	回軸彎切り	青、1~2mm人の砂粒含 む	やや不良	淡褐褐色	柱状窓内有
32-34	21	一貫筑1区 土器	埴輪	耳	-	(7.2)	-	回軸彎切り後ナメ	青、1mm以下の砂粒少し 含む	良好	白褐色～淡青 褐色	柱状窓内有
33-1	22	一貫筑1区 2層	土器	上縁	2.3	1.95	-	-	青、微細砂粒少し含む	良好	淡褐褐色	穿孔。(7.9g)
33-2	22	一貫筑1区 土器	土器	上縁	2.9	(1.2)	0.77	-	青、微細砂粒少し含 む	良好	乳白色～淡青 褐色	穿孔。(1.9g)
33-3	22	一貫筑1区 土器	土器	上縁	2.75	0.6	0.8	-	青	良好	明白褐色～淡 褐色	土器内有骨付材、穿 孔。(2.0g)
33-4	22	一貫筑1区 土器	土器	上縁	2.8	0.6	0.85	-	青	良好	青褐色	穿孔。(2.0g)
34-1	21	一貫筑1区 内丸邊底 器	土器	上縁	2.6	-	-	-	青、白色微細砂粒多く含 む	良好	暗灰褐色～淡灰 色	

種図番号	写真図版	出土遺構名	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	形態・手法の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備考
34-2	21	一貫瓦1区	中空底盤	こねびき	30.0	-	-	素、2mm以下の砂粒含む	白灰	明灰色	藍灰色	藍灰色き締まり
34-3	21	一貫瓦1区	中空底盤	丸	-	-	-	タクキ、カキメ	青	良好	明灰色	
34-4	22	一貫瓦1区	中空底盤	丸	-	-	-	タクキ	青	良好	青灰色	
34-5	22	一貫瓦1区	中空底盤	丸	-	-	-	タクキ	青	良好	青灰色	
34-6	22	一貫瓦1区	中空底盤	丸	-	-	-	タクキ	青	良好	青灰色	
34-7	22	一貫瓦1区	中空底盤	丸	-	-	-	あて具痕等なし、タクキ、カキメ、	青	良好	青灰色	
34-8	22	一貫瓦1区	白粘土	瓶	(6.6)	-	-	内外面施釉	黒	良好	深灰色	V型・可塑
34-9	22	一貫瓦1区	白粘土	瓶	-	-	7.6	ハラ削り、内面と外 面剥離施釉	青(乳白色あり)	良好	淡黃褐色	青
34-10	22	一貫瓦1区	白粘土	瓶	-	-	5.6	ハラ削り、内面施釉	青(乳白色あり)	良好	淡黃褐色	V型
34-11	22	一貫瓦1区	白粘土	合子蓋	(6.6)	-	(1.15)	外縁施釉、内面施 釉、3枚の支条	青	良好	淡黃褐色	乳白色あり
34-12	22	一貫瓦1区	白粘土	瓶	-	-	5.4	ハラ削り、施釉	青(内面に濁かい氣 泡)	良好	淡黃褐色	内面浮花文
34-13	22	一貫瓦1区	白粘土	壺	24.2	-	-	瓶身	やや青、4mm以下の砂粒 多く含む	良好	暗褐色	系 青鐵色
35-1	22	一貫瓦1区	縫隙底盤	小洞	-	-	-	縫隙底盤、系鉢の接 触	青	良好	明灰色	二重口
35-2	22	一貫瓦1区	縫隙底盤	丸	-	-	3.1	内面黒い施釉、縫隙 部から見込み部に残る 焼付	青、微細削少し含む	良好	淡灰色	人骨焼底盤を丸く 打ちいたもの
35-3	22	一貫瓦1区	縫隙底盤	丸	2.4	-	5.1	縫隙底盤と内面焼成 の接觸	黒	良好	灰白色	V型・底部外側に 半周あり
36-1	22	一貫瓦1区	灰質土	壺	-	-	-	セア文と乳頭、2条目タリ	青、微細削少含む	良好	浅灰褐色	
36-2	22	一貫瓦1区	灰質土	壺	-	-	-	状状文、2条目上の 凹槽	青	良好	淡青灰色	孔
36-3	22	一貫瓦1区	灰質土	壺	-	-	-	-	青	良好	淡灰色	外輪縁邊の自然 軋、V口にテナ リあり
36-4	22	一貫瓦1区	灰質土	壺	10.0	-	-	ハケ口	青、微細削少含む	良好	白褐色	内面赤褐色斜材右
36-5	22	一貫瓦1区	灰質土	壺	-	-	-	直接底盤	青	良好	暗褐色	
37-1	22	一貫瓦1区	灰質土	壺	-	-	6.6	円転底辺	青、白色微細削少く含 む	良好	暗灰色	底部外側面青 口あり
37-2	22	一貫瓦1区	灰質土	壺	-	-	6.4	圓転底辺	青、白色微細削少含む	良好	灰白色	底部外側面青 口あり
37-3	22	一貫瓦1区	灰質土	壺	-	-	4.0	圓転底辺	青	良好	暗褐色	灰白色
37-4	22	一貫瓦1区	白粘土	高台付輪	-	-	5.4	圓転ハラ削り、内面 施釉	青	良好	明灰色	物質、底部外側面 青口あり
38-1	22	一貫瓦1区	十面壺	壺	-	-	-	ハケ口と振り口	白色微細削少し含む	黒	深灰色	外輪縁
38-2	22	一貫瓦1区	十面壺	壺	-	-	-	ハケ口と振り口	白色微細削少含む	やや灰質	深灰色	外輪縁
39-1	23	一貫瓦1区	丸	丸	-	-	-	側面少々削り、側面 直角文	やや青、3mm以下の砂粒 多く含む	良好	暗灰色	直角
39-2	23	一貫瓦1区	丸	丸	-	-	-	タクキ、手目、切 り、縫隙跡、ナゲ	青、3mm以下の砂粒含む	良好	淡灰色	始頭
39-3	23	一貫瓦1区	丸	丸	-	-	-	手目、手目、削り	青、2mm以下の砂粒含む	やや不規	明灰色	土加賀
39-4	23	一貫瓦1区	丸	丸	-	-	-	手目、手目、削り	青、3mm以下の砂粒含む	やや不規	乳白色	上加賀
39-5	23	一貫瓦1区	丸	丸	-	-	-	手目、手目、ナゲ	青、3mm以上の砂粒多 く含む	良好	暗褐色	乳白色
39-6	23	一貫瓦1区	丸	丸	-	-	-	手目、手目、削り、手 目、ナゲ	青、2mm以下の砂粒含む	良好	明灰色	頭頂
39-7	23	一貫瓦1区	丸	丸	-	-	-	手目、手目、削り、ナ ゲ	青、1-2mmの大砂粒多 く含む	良好	暗褐色	直角
39-8	23	一貫瓦1区	丸	丸	-	-	-	手目、手目、削り、ナ ゲ	青やや削り、微細削少含 む	やや小丸	淡灰色	直角
39-9	24	一貫瓦1区	丸	手足	-	-	-	手目、手目、削り	青、2mm以下の砂粒多 く含む	良好	淡黄色	上加賀
39-10	24	一貫瓦1区	丸	手足	-	-	-	手目、手目、削り	青、1mm以下の砂粒多 く含む	良好	淡灰色	直角
39-11	24	一貫瓦1区	丸	手足	-	-	-	手目タクキ、手目、 削り、縫隙跡	青、微細削少し含む	やや小丸	暗褐色	直角
39-12	24	一貫瓦1区	丸	手足	-	-	-	手目タクキ、手目、 削り	青、微細削少含む	良好	淡灰色	頭頂
39-13	24	一貫瓦1区	丸	手足	-	-	-	手目	2mm以上の砂粒含む	良好	青灰色	頭頂
40-1	25	一貫瓦1区	丸	手足	-	-	-	手目、手目、推 理痕	青、微細削少含む	良好	淡灰色	頭頂
40-2	25	一貫瓦1区	丸	手足	-	-	-	手目タクキ、手目、 削り、縫隙跡	青、微細削少含む	良好	暗褐色	頭頂
40-3	25	一貫瓦1区	丸	手足	-	-	-	手目タクキ、手目、 削り	青、微細削少含む	良好	淡黄色	上加賀
40-4	25	一貫瓦1区	丸	手足	-	-	-	手目タクキ、手目、 削り	青、微細削少含む	良好	淡黄色	上加賀
40-5	25	一貫瓦1区	丸	手足	-	-	-	手目タクキ、手目、 削り	青、微細削少含む	良好	淡黄色	頭頂
40-6	25	一貫瓦1区	丸	手足	-	-	-	手目タクキ、手目、 削り	青、2mm以下の白色砂 粒含む	良好	淡黄色	頭頂

種群番号	等級	出漁港名	種	年	漁場	回収率	底長 (cm)	底延 (cm)	器差 (cm)	形態・手法の特徴	地	土	底	色	調	備考
40-7	25	西京1区 潮崎港	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	筋子タキ、板目、割り、赤切り、ナツ。	青、白色砂粒含む	良好	透明灰色	灰褐色		
40-8	25	西京1区	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	筋子タキ、板目、割り、赤切り	青、1mm以下の砂粒含む	中や不良	初期灰~乳白色	土加賀		
40-9	25	西京1区	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	筋子タキ、板目、重、白砂粒含む	青や不良	乳白色~湖底色	土加賀			
40-10	25	西京1区 潮崎港	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	筋子タキ、板目、重、2mm以下の砂粒多く含む	青	乳白色~湖底色	土加賀			
40-11	25	西京1区	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	筋子タキ、板目、重、白色微細砂粒含む	青	明灰白色	灰褐色			
40-12	25	西京1区	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	タキ、板目、割り	青	浅灰白色	灰褐色			
40-13	25	西京1区 潮崎港	瓦	平瓦	-	-	-	-	-	タキ、板目、割り、赤切り	青	やや不良	乳白色	上加賀		
40-14	26	西京1区 石井港	瓦	小瓦	-	-	-	-	-	筋子タキ、板目、重、2mm以下の砂粒多く含む	青	微細砂粒多く含む	良好	透明灰~湖底色		
40-1	38	37Tr 5号 潮崎港	◆	◆	16.4	-	-	-	-	ヘル張り	青	微細砂粒少し含む	良好	明灰白色~湖底色	別区域に帯状巻き底あり	
40-2	38	37Tr 5号 潮崎港	◆	◆	16.6	-	-	-	-	赤切り?	青	青灰色				
40-3	38	37Tr 5号 潮崎港	◆	◆	16.6	-	-	-	-	同赤系切り	青	湖底色				
51-1	38	37Tr 3号 潮崎港	◆	◆	17.0	-	-	-	-	前、2mm以下の白色砂粒少し含む	青	湖底色				
51-2	38	37Tr 3号 潮崎港	◆	◆	17.1	-	-	-	-	同前	青	湖底色~湖底色	内側油付材			
52-1	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	12.0	-	-	-	-	青、白色微細砂粒含む	青	明灰白色				
52-2	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	12.0	-	-	-	-	内輪ヘラ削り後同底ナメナダ	青	青灰色	つまみ棒2.5cm			
52-3	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	12.2	-	-	-	-	内輪ヘラ削り	青	湖底色				
52-4	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	12.2	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	青灰色				
52-5	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	12.2	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	湖底色				
52-6	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	12.2	-	-	-	-	同軸ヘラ削り後同底ナメナダ	青	湖底色				
52-7	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	12.2	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	湖底色				
52-8	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	12.2	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	湖底色				
52-9	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	13.4	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	湖底色				
52-10	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	22.2	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	湖底色				
52-11	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	17.2	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	湖底色				
52-12	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	22.8	-	-	-	-	同軸ヘラ削り後ナメナダ	青	湖底色				
52-13	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	16.4	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	湖底色				
52-14	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	26.0	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	湖底色				
52-15	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	26.8	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	湖底色				
52-16	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	13.8	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	湖底色				
52-17	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	13.6	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	湖底色				
52-18	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	13.2	-	-	-	-	同軸ヘラ削り	青	湖底色				
52-19	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	11.4	8.2	4.0	-	-	赤切り	青	湖底色				
52-20	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	15.0	-	-	-	-	赤切り	青	湖底色				
52-21	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	15.0	9.2	4.2	-	-	赤切り	青	湖底色~湖底色	底面内外側油付材			
52-22	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	15.8	-	-	-	-	赤切り	青	湖底色				
52-23	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	11.5	8.0	4.1	-	-	赤切り	青	湖底色				
52-24	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	-	-	-	-	-	赤切り	青	湖底色	内外側油付材			
52-25	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	13.8	-	-	-	-	赤切り	青	湖底色	底面内外側油付材			
52-26	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	12.6	-	-	-	-	赤切り	青	湖底色				
52-27	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	-	7.6	-	-	-	赤切り	青	湖底色				
52-28	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	-	8.2	-	-	-	赤切り	青	湖底色				
52-29	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	-	7.4	-	-	-	赤切り	青	湖底色				
52-30	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	-	9.0	-	-	-	同軸赤切り	青	湖底色				
52-31	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	-	6.7	-	-	-	同軸赤切り	青	湖底色				
52-32	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	-	8.9	-	-	-	同軸赤切り	青	湖底色				
52-33	38	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	-	8.0	-	-	-	赤切り	青	湖底色				
52-34	39-61	37Tr 4号 潮崎港	◆	◆	(6.6)	-	-	-	-	同軸赤切り後ナメナダ	青	湖底色				

辨認番号	写真番号	出土遺構名	種 別	基 標	口 径 (cm)	底 径 (cm)	高 度 (cm)	形 塵・手 法 の 特 徴	地 土	性 成	色 調	備 考	
52-25	39・61	37Tr 4 号 底下部	須恵器	片口瓶	-	-	-	四軸系切り	重	良好	淡灰色	内面漆付、肩、腹 あり	
52-36	39・61	37Tr 4 号 底下部	須恵器	小口瓶	-	-	-	条切り?	調査	良好	淡灰色	内面漆付、「」あり	
52-37	39	37Tr 4 号 底下部	須恵器	鉢	-	7.4	-	四軸系切り	重、白色砂粒含む	やや不良	暗灰色		
52-38	39	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	10.8	-	-	-	1mm以下の白色砂粒含む	良好	暗灰色		
52-39	39	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	9.9	6.5	-	四軸系切り	1mm以下の白色砂粒含む	良好	古灰色		
53-1	39	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高台付环	20.2	16.6	6.9	四軸系切り	1mm以下の砂粒少し含む	良好	石灰色		
53-2	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高台付环	-	9.2	-	ハラ割り染ナゲ	1mm以下の白色砂粒含む	良好	青灰色		
53-3	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高台付环	-	7.8	-	塵止あおり?	重、1mm以下の砂粒少く含む	良好	青灰色		
53-4	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	-	7.6	-	四軸系切り	黒褐色砂粒含む	良好	古灰色		
53-5	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	15.0	-	-	-	重、白色微細網目多く含む	良好	淡灰色—黑色		
53-6	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	16.4	-	-	-	1mm以下の白色砂粒含む	良好	青灰色		
53-7	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	19.8	-	-	-	1mm以下の白色砂粒含む	良好	明灰色		
53-8	39	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高台付环	15.8	10.8	6.6	あ切り	重、2mm以下の砂粒多く含む	良好	青灰色		
53-9	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高台付环	15.0	11.1	3.7	-	重、白色微細網目多く含む	良好	淡灰色	内面漆付	
53-10	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高台付环	-	10.0	-	条切り?	重	やや不良	青灰色—青灰色		
53-11	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高台付环	-	11.4	-	四軸系切り	重、白色砂粒少し含む	良好	點着風灰		
53-12	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	13.4	10.0	2.5	四軸系切り	重、1mm以下の砂粒多く含む	良好	青灰色		
53-13	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	13.6	10.4	-	-	重、白色微細網目少く含む	良好	淡灰色		
53-14	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	17.5	-	-	-	黒褐色砂粒少し含む	良好	青灰色	肩台剥離	
53-15	41	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	13.8	8.6	2.1	条切り?	重、1mm以下の砂粒多く含む	良好	青灰色		
53-16	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	-	8.5	-	四軸系切り	1mm以下の砂粒少し含む	良好	暗灰色—深灰色		
53-17	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	-	7.6	-	-	重	良好	淡灰色	内面漆無、底丸み、私用瓶	
53-18	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高台付环	17.4	12.2	4.1	ハラ割?	重、2mm以下の砂粒多く含む	良好	青灰色		
53-19	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高台付环	21.4	16.4	3.1	-	-	1mm以下の白色砂粒含む	良好	青灰色	
53-20	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高台付环	23.7	18.3	3.65	-	-	1mm以下の白色砂粒含む	やや不良	暗褐色	
53-21	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	-	20.4	-	-	1mm以下の白色砂粒多く含む	良好	暗褐色		
53-22	41	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高环	-	14.4	-	ハラ割?	重、3mm以下の砂粒多く含む	良好	古灰色		
53-23	41	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高环	-	13.2	-	-	重、1mm以下の砂粒多く含む	良好	青灰色		
53-24	40	37Tr 4 号 底下部	須恵器	高环	-	14.5	-	-	1mm以下の砂粒少し含む	良好	武青灰色		
54-1	43	37Tr 4 号 底下部	須恵器	圓筒内面	-	11.0	-	-	前、2mm以下の砂粒多く含む	良好	青灰色	長方形透孔	
54-2	43	37Tr 4 号 底下部	須恵器	圓筒内面	-	-	-	-	白色微細網目含む	良好	暗灰色		
54-3	43	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	25.8	-	-	-	重	良好	暗青灰色		
54-4	43	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	17.0	-	-	-	重、微細砂粒少く含む	良好	灰白色—明灰色	内面剥離あり	
54-5	43	37Tr 4 号 底下部	須恵器	环	-	-	-	-	重、2mm以下の砂粒多く含む	良好	青灰色		
54-6	43	37Tr 4 号 底下部	須恵器	长颈瓶?	-	-	-	-	重、2mm以下の白色砂粒含む	良好	暗灰色—深灰色		
54-7	43	37Tr 4 号 底下部	須恵器	瓶?	-	-	-	-	1mm以下の砂粒含む	良好	青灰色	内面剥離付	
54-8	43	37Tr 4 号 底下部	須恵器	瓶?	10.6	-	-	-	重、1mm以下の砂粒少し含む	良好	青灰色		
54-9	43	37Tr 4 号 底下部	須恵器	瓶?	-	-	-	-	1mm以下の砂粒多く含む	良好	明青灰色	内面自然剥離	
54-10	43	37Tr 4 号 底下部	須恵器	瓶?	-	-	-	-	1mm以下の白色砂粒含む	良好	暗青灰色		
54-11	43	37Tr 4 号 底下部	須恵器	瓶?	-	-	-	あて其瓶後ナガ、タキナ	重、3mm以下の白色砂粒含む	良好	明灰色—暗灰色		
54-12	42	37Tr 4 号 底下部	須恵器	瓶?	-	-	-	あて其瓶、タキナ	重	良好	淡灰色—黑灰色	外側剥離有	
54-13	42	37Tr 4 号 底下部	須恵器	瓶?	-	-	-	ヘラ割り?、あて其瓶、タキナ、カキナ	重、白色砂粒少し含む	良好	暗灰色—明灰色		
54-14	42	37Tr 4 号 底下部	須恵器	瓶?	-	-	-	あて其瓶、タキナ	重	良好	淡灰色—明灰色		
54-15	42	37Tr 4 号 底下部	須恵器	蓋?	-	-	-	あて其瓶、タキナ	重	良好	暗青灰色		
55-1	43	37Tr 4 号 底下部	上置器	蓋	26.8	-	-	-	重	中や不良	明白剥離		
55-2	43	37Tr 4 号 底下部	土器類	皿	14.6	11.4	2.4	四軸系切り	重、粗面砂粒含む	やや不良	淡青灰色—深灰色		
55-3	43	37Tr 4 号 底下部	土器類	皿	13.1	-	-	ヘラ割り、ハケ付	やや重、粗面砂粒含む	良好	白灰色		
55-4	43	37Tr 4 号 底下部	土器類	皿	15.8	-	-	-	重、粗面砂粒含む	良好	淡青灰色	外側剥離付	

群区分	原真図版	出土遺物名	種別	品種	口径(cm)	底径(cm)	基高(cm)	形態・手法の特徴	施土	焼成	色調	備考	
55-3	43	37Tr 4号 表	土器器	蓋	14.8	-	-	ヘラ削り	素、微細砂多く含む	良好	淡黄褐色		
55-6	43	37Tr 4号 表	土器器	蓋	-	-	-	-	素、3mm以上の砂粒含む	良好	黄褐色		
55-7	43	37Tr 4号 表	土器器	上縁	長S 0.2	幅 1.7	厚み 1.6	ヘラ削り	素	良好	暗青灰褐色	施青灰・墨丸。 (16.4g)	
55-8	43	人骨4区 1号頭	土器器	蓋	-	6.7	-	糸切り±	素、微細砂軽含む	やや不良	白褐色～墨褐色	施化者しい	
63-1	44	37Tr 5号 表	土器器	蓋	18.0	-	-	ヘラ削り	素、白色微細砂粒含む	良好	淡灰褐色		
63-2	44	人骨4区 2号頭	土器器	蓋	11.6	7.6	4.3	四輪系切り後ナメ	素	やや不良	淡灰褐色～白褐色	施化	
63-3	44	人骨4区 2号頭	土器器	蓋	-	8.0	-	四輪系切り	素、砂粒多く含む	良好	淡灰褐色	施灰外削青 [鉢+削付]あり	
63-4	47	大骨4区 1号頭	土器器	蓋	14.1	10.0	2.1	圓錐系切り	素、微細砂軽少し含む	やや不良	淡灰褐色		
63-5	47	大骨4区 1号頭	土器器	蓋	14.1	10.5	2.4	四輪系切り	やや素、1mm以下の白色 砂粒多く含む	やや不良	明褐色	施化	
63-6	47	人骨4区 2号頭	土器器	蓋	18.4	10.5	3.7	糸切り±ヘラ削り後 ナメ	素、微細砂軽多く含む	やや不良	淡灰色		
63-7	47	大骨4区 3号頭	土器器	蓋	-	13.6	-	糸切り±ヘラ削り後 ナメ	素、白色砂軽少しきむ	良好	淡灰褐色		
63-8	44	人骨4区 3号頭	土器器	蓋	16	17.0	-	-	素、白色砂軽少しきむ	良好	淡灰褐色		
63-9	44	人骨4区 3号頭	土器器	蓋	-	8.6	-	四輪系切り	素、白色砂軽少しきむ	良好	淡灰褐色		
63-10	47	人骨4区 4号頭	土器器	蓋	21.8	-	-	-	素、微細砂軽多く含む	良好	淡灰褐色		
63-11	47	37Tr 表	土器器	蓋	18.5	-	-	あと貝繩	約、1mm以下の砂粒多く 含む	良好	青褐色		
63-12	47	大骨4区 5号頭	土器器	蓋	-	-	-	あと貝繩、タキキ、 カキモ	素、白色砂軽少しきむ	良好	青灰褐色		
63-13	44	37Tr 表	土器器	蓋	-	(10.8)	-	-	あと貝繩 と4輪系含む	やや不良	明褐色	施化者しい	
66-1	48	人骨4区 6号頭・25 号・26	土器器	蓋	15.0	-	-	-	素	良好	暗青褐色		
66-2	48	人骨4区 28号・29 号・30	土器器	蓋	19.8	-	-	-	素	良好	暗青褐色		
66-3	48	人骨4区 29号・30 号・31	土器器	蓋	-	7.6	-	轟落系切り±	素、白色微細砂粒含む	やや不良	明灰褐色		
69-1	48	大骨4区 27号・28	土器器	蓋	-	(3.2)	-	密、微細砂粒含む	良好	良好	淡青褐色		
69-2	48	大骨4区 29号・30 号・31	土器器	蓋	(15.6)	5.8	5.9	圓錐系切り	やや密、微細砂粒含む	良好	白褐色		
69-3	48	大骨4区 29号・30 号・31	土器器	蓋	-	-	-	あと貝繩、横子片状 前	白色砂軽多く含む	良好	暗青褐色～黑 褐色		
70-1	45	37Tr 表	土器器	蓋	15.8	-	2.9	ヘラ削り	素、白色砂軽含む	良好	明灰褐色		
70-2	48	37Tr 3号 表	土器器	蓋	-	-	-	ヘラ削り	素、微細砂粒含む	良好	暗青褐色～灰 褐色		
70-3	48	人骨4区 2号頭	土器器	蓋	14.0	-	-	-	素、白色砂軽少しきむ	良好	明灰褐色		
70-4	48	37Tr 1号 表	土器器	蓋	(14.6)	-	4.1	ヘラ削り後ナメ	やや密、白色砂粒多く 含む	良好	淡灰褐色	つまみ律2.5m	
70-5	48	大骨4区 3号頭	土器器	蓋	16.6	-	-	ヘラ削り後ナメ	1mm以下の白色砂粒多く 含む	良好	青灰褐色		
70-6	48	37Tr 表	土器器	蓋	23.1	-	-	ヘラ削り	素、白色砂軽少しきむ	良好	暗青褐色		
70-7	49	37Tr 表	土器器	蓋	(11.6)	7.5	4.1	-	密	不良	暗灰褐色	施化者なし	
70-8	48	37Tr 表	土器器	蓋	14.6	-	-	-	素、白色微細砂粒多く 含む	良好	淡灰褐色	内側削付付	
70-9	48	人骨4区 3号頭	土器器	蓋	-	5.9	-	四輪系切り	素、白色砂軽含む	良好	明灰褐色		
70-10	49	37Tr 3号 表	土器器	蓋	14.8	9.4	5.4	ヘラ削り後圓盤ナメ ナメ、轟落系切り後ナ メ	素、白色微細砂粒含む	良好	暗青褐色～淡 褐色		
70-11	49	37Tr 3号 表	土器器	轟落系 轟落	轟落	13.0	8.2	5.2	糸切り±ヘラ削り後 ナメ	素、3mm以下の砂粒含む	良好	淡青褐色～淡 褐色	
70-12	49	37Tr 3号 表	土器器	轟落系 轟落	轟落	-	11.0	-	四輪系切り後ナメ	やや密、1mm以下の白色 砂粒多く含む	良好	淡灰褐色	破壊圖書「鉢」 あり
70-13	49	人骨4区 3号頭	土器器	轟落系 轟落	轟落	-	11.4	-	-	素、微細砂粒含む	良好	暗青褐色	
70-14	49	大骨4区 3号頭	土器器	轟落系 轟落	轟落	-	-	-	四輪系切り	素、微細砂粒含む	良好	暗青褐色	虎斑外側へフ記 「×」あり
70-15	49	37Tr 3号 表	土器器	轟落系 轟落	轟落	11.0	7.2	3.5	圓盤系切り後ナメ	素、1mm以下の砂粒含む	良好	明灰褐色	
70-16	49	37Tr 4号 表	土器器	轟落系 轟落	轟落	-	8.0	-	四輪系切り	素、黑色砂軽少しきむ	良好	淡灰褐色	
70-17	61	37Tr 1号 表	土器器	轟落系 轟落	轟落	-	-	-	-	素、白色微細砂粒含む	良好	暗青褐色	外側削青「人」 あり
70-18	61	37Tr 1号 表	土器器	轟落系 轟落	轟落	-	-	-	-	素、白色微細砂粒含む	良好	暗灰褐色	外側削青「高」 あり
70-19	49	大骨4区 2号頭	土器器	轟落系 轟落	轟落	-	13.4	-	-	素、微細砂粒少しきむ	良好	暗灰褐色	
70-20	49	37Tr 4号 表	土器器	轟落系 轟落	轟落	11.2	12.2	2.6	轟落系切り	密	良好	暗青褐色	
70-21	49	大骨4区 1号頭	土器器	轟落系 轟落	轟落	-	-	-	-	素、微細砂粒少しきむ	良好	暗青褐色	
70-22	49	大骨4区 1号頭	土器器	轟落系 轟落	轟落	13.4	10.0	2.6	四輪系切り	素、白色微細砂粒含む	良好	淡灰褐色	
70-23	49	37Tr 3号 表	土器器	轟落系 轟落	轟落	13.6	11.0	2.0	四輪系切り	素	良好	淡青褐色	

荷園番号	写真番号	出土品構名	種	器	形	口径 (mm)	底径 (mm)	高さ (mm)	割れ・手損の特徴	地	焼成	色	調	備考
70-24	49	大谷塚4区 3層	環底器	盤	—	12.6	9.6	1.8	糸切り無ナテ。	1cm以下の白色砂粒含む	良好	青灰色		
70-25	49	37Tz3層	破底器	盤	—	—	8.6	—	底板み切り	黒色微細砂粒と石英含む	良好	明灰色		
70-26	19	大谷塚4区 山型	環底器	盤	—	—	11.4	—	糸切り無ナテ。	黒、黑色砂粒と白色砂粒 多く含む	良好	深灰色	軽用板	
70-27	49	大谷塚4区 3層	上部器	托	—	—	11.2	—		黒	やや不良	白褐色	風化	
70-28	49	人命塚4区 2層	破底器	托	—	—	9.0	—	ヘラ削り	やや黒、白色砂粒少しあ る	良好	青灰色		
70-29	49	37Tz3層	環底器	托	—	—	—	—		黒、白色微細砂粒含む	良好			
70-30	49	37Tz3層	環底器	圓筒内面	—	—	11.8	—		青	良好	暗灰褐色～暗 褐色	透孔(使用不明)	
70-31	49	37Tz3層	環底器	圓筒内面	—	—	15.8	—		青	良好	深褐色～青 褐色		
70-32	19	37Tz3層	破底器	圓筒内面	—	—	—	—		青	良好	明灰色		
70-33	49	大谷塚4区 2層	上部器	托	—	—	8.2	—		黒	良好	白褐色	外側深付青、内外 露赤褐色斜材	
70-34	49	37Tz	上部器	尖	—	15.2	—	—	ヘラ削り、ハケ口	青、白色微細砂粒含む	良好	暗灰褐色～暗 褐色		
71-1	50	37Tz1層	破底器	春	—	—	—	—		青、白色砂粒少しあ る	良好	暗灰褐色		
71-2	50	37Tz	破底器	春	—	—	—	—	ヘラ削り無ナテ。	青、白色砂粒と黑色砂 粒含む	良好	明灰色		
71-3	50	人命塚4区 1層	破底器	春	—	—	6.4	—	底板み切り	青、白色砂粒少しあ る	良好	明灰色		
71-4	50	大谷塚4区 1層	環底器	妻	—	15.4	—	—		青、微細砂粒少しあ る	良好	暗灰褐色～明灰 褐色		
71-5	50	37Tz3層	破底器	妻	—	11.6	—	—		青	良好	暗灰褐色	外側灰かぶり	
71-6	50	37Tz	破底器	妻	—	18.9	—	—	あて具板、タタキ	青、微細砂粒少しあ る	良好	暗灰褐色～暗 褐色		
71-7	50	37Tz3層	破底器	長颈瓶	—	8.6	—	—		黒	良好	深灰色		
71-8	51	大谷塚4区 1層	破底器	小口	—	—	—	—		青、白色砂粒含む	良好	深青灰色	把手	
71-9	52	37Tz3層	短底器	長颈瓶	—	8.4	—	—	糸切り無ナテ	青	良好	暗青灰色	内側付青	
71-10	51	大谷塚4区 3層	破底器	妻	—	—	16.8	—	ヘラ削り無ナテ	やや青、白色砂粒と黑色 砂粒と糸切多々含む	良好	明灰色		
71-11	51	大谷塚4区 3層	破底器	妻	—	(17.2)	—	—	ヘラ削り後ナテ	青、白色砂粒含む	良好	暗灰褐色～青 褐色		
71-12	54	37Tz3層	破底器	妻	—	—	—	—	あて具板、タタキ	青、白色砂粒多く含む	良好	暗灰色		
71-13	51	大谷塚4区 1層	土器	土型支脚	—	—	—	—		やや青、4mm以下の砂粒 多く含む	良好	白褐色～橙褐色 受部		
71-14	50	人命塚4区 1層	上部器	皿	—	5.8	—	—	糸切り無ナテ	やや青、2mm以下の砂粒 多く含む	良好	黄褐色	有孔蓋内付	
71-15	51	人命塚4区 1層	土器	皿	—	6.8	—	—	糸切り無ナテ	やや青、2mm以下の砂粒 多く含む	良好	白褐色	風化、保持基	
71-16	51	大谷塚4区 1層	土器	皿	—	9.6	—	—	糸切り無ナテ	やや青、微細砂粒含む	良好	白褐色	風化	
71-17	51	人命塚4区 1層	青磁	皿	—	—	—	—		青	良好	深綠色	青火	
71-18	51	大谷塚4区 1層	白磁	高台付瓶	—	6.6	—	—	ヘラ削り	青、微細砂粒少しあ る	良好	暗白色	外側銀部と内側白 い部分、青緑	
71-19	51	大谷塚4区 3層	中世燒造	愛	—	—	—	—	カキメ	やや青、2mm以下の砂粒 多く含む	良好	深青灰色～暗 褐色		
71-20	51	人命塚4区 1層	中世燒造	跡	—	—	—	—		やや青、3mm以下の砂粒 多く含む	良好	明灰色		
71-21	51	大谷塚4区 1層	質屋	土器	—	—	—	—		青	良好	淡青褐色		
72-1	52	大谷塚4区 1層	上部器	土器	高さ 6.6 底 2.2	—	—	—		やや青、微細砂粒含む	良好	青青褐色	穿孔。(4.96g)	
72-2	52	人命塚4区 1層	土器	土器	高さ 6.5 底 2.3	—	—	—		やや青、白色砂粒多 く含む	良好	暗褐色	穿孔。(4.30g)	
72-3	52	37Tz3層	土器	土器	高さ 4.2 底 1.35	—	—	—		青	良好	暗褐色	穿孔。(1.63g)	
72-4	52	人命塚4区 1層	上部器	土器	高さ 4.1 底 1.45	—	—	—		青	良好	白褐色	穿孔。(1.4kg)	
72-5	52	37Tz3層	土器	土器	高さ 3.95 底 1.2	—	—	—		やや青、2mm以下の砂粒 多く含む	良好	暗青褐色	穿孔。(4.87g)	
73-1	53	大谷塚4区 2層	瓦	新丸瓦	—	—	—	—	津文帶草芽文、折 りコロナ	青、微細砂粒少しあ る	良好	暗灰褐色～白褐 色		
73-2	53	人命塚4区 55号墳	瓦	丸瓦	—	—	—	—	草目、頭り、ナテ、 縫い竹筋	青、微細砂粒少しあ る	良好	深青褐色、青瓦	瓦底	
73-3	53	大谷塚4区 55号墳	瓦	丸瓦	—	—	—	—	草目、頭り、糸切、 ナテ、縫い竹筋	青、微細砂粒少しあ る	良好	乳白色～深灰 褐色		
73-4	53	大谷塚4区 60号墳	瓦	丸瓦	—	—	—	—	草目、頭り、糸切、 ナテ	青、微細砂粒少しあ る	良好	乳白色	土塗瓦	
73-5	53	大谷塚4区 29号墳	瓦	丸瓦	—	—	—	—	草目、頭り、糸切、 ナテ	青、3mm以下の砂粒多 く含む	良好	淡褐色	土塗瓦	
73-6	53	大谷塚4区 29号墳	瓦	丸瓦	—	—	—	—	草目、頭り、ナテ、 縫い竹筋	青、2人の白色砂粒多 く含む	良好	明灰色	瓦底	
73-7	53	大谷塚4区 29号墳	瓦	平瓦	—	—	—	—	綱目、草目、頭り	青、2人の白色砂粒少 く含む	良好	淡褐色	瓦底	
73-8	53	大谷塚4区 56号墳	瓦	平瓦	—	—	—	—	綱目、草目、頭り、 糸切	青、3mm以下の砂粒含む	良好	乳白色～深灰 褐色	上海青	
73-9	53	大谷塚4区 3層	瓦	平瓦	—	—	—	—	綱目、頭り、糸切、 ナテ	青、微細砂粒少しあ る	良好	淡褐色	瓦底瓦	
73-10	53	大谷塚4区 2層	瓦	平瓦	—	—	—	—	タタキ、草目、頭り	青、白鐵鋼砂粒含む	良好	淡灰色	單瓦	

掲図番号	写真図版	出土遺構名	種別	器種	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	形態・手法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
73-11	33	大曾根4区3層	丸	平丸	-	-	-	タクシ、有目、削り、 縫合跡、ナメ	密、微細砂粒含む	良好	灰灰化	信忠質
73-12	33	大曾根4区3層	瓦	平瓦	-	-	-	タクシ、削り、ナメ	やや密、微細砂粒多く含 む	良好	灰灰化色→白 褐色	上経質
73-13	54	大曾根4区3層	丸	平丸	-	-	-	タクシ、削り、ナメ	薄、微細砂粒含む	良好	明乳白色→白 褐色	土勝質
73-14	54	大曾根4区3層	丸	平丸	-	-	-	タクシ、削り、ナメ	薄、微細砂粒含む	良好	灰灰化色→灰 褐色	秋質
73-15	54	大曾根4区3層	瓦	平瓦	-	-	-	タクシ、削り、ナメ	やや密、微細砂粒多く含 む	良好	灰灰化色	秋質
73-16	54	大曾根4区3層	丸	平丸	-	-	-	削み残したタクシ、有 目、削り、余糞	やや密、3mm以下の砂粒 含む	良好	灰灰化色→灰 褐色	土勝質
73-17	54	大曾根4区3層	丸	平丸	-	-	-	削り、ナメ	やや密、3mm以下の砂粒 含む	やや不良	明乳白色	上加質
74-1	54	37Tr3層	瓦	平瓦	-	-	-	焼口、有目、削り、 縫合跡、余糞含む、ナメ	密、白色微細砂粒多く含 む	良好	青灰化	信忠質
74-2	54	大曾根4区3層	瓦	平瓦	-	-	-	削り、タクシ、削り、 ナメ	密、微細砂粒少し含む	良好	粘灰灰化色→白 褐色	信忠質
74-3	54	大曾根4区2層	瓦	平瓦	-	-	-	削り残したタクシ、有 目、削り、ナメ	密、3mm以下の砂粒 含む	やや不良	明乳白色	上経質
74-4	54	大曾根4区3層	丸	平丸	-	-	-	タクシ、有目、削り、 ナメ	薄、白色微細砂粒少し含 む	良好	灰灰化色	信忠質
74-5	54	大曾根4区3層	瓦	平瓦	-	-	-	タクシ、削り、ナメ	やや密、微細砂粒多く含 む	良好	灰灰化色→灰 褐色	上加質
74-6	54	大曾根4区3層	瓦	平瓦	-	-	-	削り残したタクシ、有 目、削り、灰灰化色	薄、微細砂粒少し含む	良好	灰灰化色	上経質
74-7	54	大曾根4区3層	丸	平丸	-	-	-	削り残したタクシ、有 目、削り	薄、微細砂粒含む	良好	灰灰化色	秋質
74-8	54	大曾根4区3層	瓦	平瓦	-	-	-	タクシ、削り、余糞 含む、ナメ	やや密、微細砂粒少し含 む	良好	灰灰化色→白 褐色	上加質
74-9	54	大曾根4区3層	丸	平丸	-	-	-	タクシ、有目、削り、 ナメ	薄、微細砂粒少し含む	良好	灰灰化色→白 褐色	秋質
74-10	54	大曾根4区3層	瓦	平瓦	-	-	-	有目、削り、余糞含 む、ナメ	密、白色微細砂粒多く含 む	良好	灰灰化色→灰 褐色	秋質
82-1	60	38Tr灰砂土 須磨部	丸环	-	-	-	-	削、白色砂粒含む	良好	青灰化		
84-1	60	38Tr3層	須磨部	青白付	8.4	-	-	あちこち残ナメ	密、白色砂粒含む	良好	灰灰化色→灰 褐色	
84-2	60	38Tr3層	須磨部	灰白頭	11.4	-	-	-	密、白色微細砂粒と黑色 砂粒混在含む	良好	灰灰化色	
84-3	60	38Tr3層	須磨部	青白	-	-	-	削、3mm以下の白色砂粒 含む	良好	灰灰化色	内側灰化かぶり	
84-4	60	38Tr3層	須磨部	青白	22.0	-	-	-	やや密、4mm以下の砂粒 含む	やや不良	青灰化	風化
84-5	60	38Tr3層	上輪置	灰	-	6.6	-	圓軸面削り	密	良好	灰灰化色	
85-1	60	38Tr3層	丸	灰丸	-	-	-	-	やや密、2mm以下の白色 砂粒含む	やや不良	青白頭	
85-2	60	38Tr3層	丸	丸瓦	-	-	-	削、有目、削り	密、3mm以下の砂粒 含む	やや不良	明乳白色	
85-3	60	38Tr3層	丸	丸瓦	-	-	-	有目、削り、ナメ	密、4mm以下の白色砂粒 含む	良好	白褐色→灰 褐色	
85-4	60	38Tr3層	丸	平丸	-	-	-	タクシ、有目、削り、 縫合跡	密、白色砂粒少し含む	良好	明乳白色	
85-5	60	38Tr3層	瓦	平瓦	-	-	-	タクシ、有目、削り、 縫合跡	密、微細砂粒少し含む	良好	灰灰化色	
85-6	60	38Tr3層	丸	平丸	-	-	-	タクシ、削り	密、3mm以下の砂粒含む	良好	青白頭色→暗 褐色	
85-7	60	38Tr3層	瓦	平瓦	-	-	-	-	密、2mm以下の砂粒含む	やや不良	淡黃褐色	氯化物有

第20表 出雲国府跡木製品観察表

掲図番号	写真図版	出土遺構	取上番号	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	備考
41-1	26	一貫尻I区3層		不明	18.5	1.8	0.6	焦げ
41-2	26	一貫尻I区	No.18	不明	17.0	1.1	0.7	
41-3	26	一貫尻I区3層		不明	10.0	1.0	0.3	
41-4	26	一貫尻I区3層		木の皮	-	-	-	
41-5	26	一貫尻I区3層		木の皮	-	-	-	
64-1	45	37Tr56号溝		楕の部材	(74.6)	(29.7)	(7.7)	
64-2	46	大曾根4区56号溝		楕の部材	(76.7)	(33.7)	(7.7)	
75-1	56	37Tr4号溝	No.178	不明	(29.0)	(6.5)	(1.3)	
75-2	56	37Tr4号溝下層		不明	(26.6)	(1.1)	(0.5)	
75-3	56	37Tr4号溝下層		不明	(7.4)	(3.3)	(1.05)	
75-4	56	37Tr4号溝下層		不明	(3.8)	(0.7)	(0.6)	
75-5	56	37Tr4号溝下層		不明	(9.3)	(0.8)	(0.5)	

第21表 出雲国府跡鉄製品観察表

掲図番号	写真図版	出土地点	種別	長さ(cm)	幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	備考
76-1	55	37Tr3層	楔	4.9	2.5	0.5	17.36	
76-2	55	37Tr3層	不明	3.4	1.25	0.5	3.35	

第22表 出雲國府跡全属器生産関係遺物観察表

掲番号	写真図版	出土地点	種別	胎土	色調	重量(g)	備考
42-1	27	一貫町1区60年調查区	瓶型鉢沿岸	黒褐色	121.4		メタル度○、表面の上(灰白色)と本底 黒褐色に付着
42-2	27	一貫町1区60年調査区	瓶型鉢沿岸(破片)	黒灰色~明褐色	26.5		メタル度○、本底黒褐色に付着
42-3	27	一貫町1区	小瓶	陶褐色	2.29		同前品
76-3	53	37Tr3層	羽口	やや黄、微細砂粒多く含む	40.37		黒色のガラス質化になる、難熱変色部分 あり
76-4	53	37Tr4号下層	羽口	1~2mmの白砂跡 交じる	21.36		黒色に黒色のガラス質化になる
76-5	53	37Tr4号下層	羽口	やや粗、3mm以下の 白砂跡多く含む	23.97		黒色のガラス質化になる、難熱変色部分 あり
76-6	53	37Tr4号下層	羽口	やや粗、1mm以下の 砂粒多く含む	53.94		黒色のガラス質化になる
76-7	53	大舟塚4区1層	羽口	やや粗、4mm以下の 白砂跡多く含む	201.85		黒色のガラス質化になる
76-8	53	37Tr3層	瓶型鉢沿岸	暗茶褐色	40.8		メタル度△
76-9	53	37Tr3層	瓶型鉢沿岸	暗褐色~淡褐色	24.1		メタル度○
76-10	53	37Tr4号下層	瓶型鉢沿岸	黒色~明褐色	23.6		全山頭曲、羽口付元のガラス質化した 部分
76-11	53	37Tr	瓶型沿岸	黒褐色~茶褐色	25.9		メタル度△
76-12	53	37Tr4号下層	瓶型鉢沿岸	黒褐色~明褐色	15.8		メタル度○、今見立している
76-13	53	大舟塚4区3層	瓶型鉢沿岸	深紅褐色~茶褐色	8.3		メタル度○、全山風化
76-14	53	37Tr3層	瓶型鉢沿岸	暗黒紫色~灰白色	107.0		全山頭曲、羽口の先端部分が融透した 部分
77-3	53	37Tr3層	瓶	明褐色	16.02		同品

第23表 出雲国府跡石製品観察表

掲番号	写真図版	出土遺構名	器種	石材	長さ×幅(cm)	厚み(cm)	重量(g)	色調	備考
6-1	7	寄附	砥石		20.7×13.4	13.6	4760.0	黄褐色~暗褐色	一面に磨痕と痛み
77-3	55	大舟塚4区2層	石鏡	滑石類			119.08	單灰色~黒灰色	
77-2	55	37Tr1層			10.9×9.6	3.2	537.57	灰色	両面に打痕
78-18	57	人命原4区60年清	筋試石	滑石	9.7×10.5	7.7	664.59	明白色	No.222

第24表 出雲国府跡石製品観察表

掲番号	写真図版	出土遺構名	石材	制作段階	重量(g)	特徴
43-1	27	一貫町1区60年	滑石	高明	250.26	無地石。明確な削痕は一切ない。色向は削痕面と自然面の区別つかず
43-2	27	一貫町1区60年	滑石	材木大	12.06	
43-3	27	一貫町1区60年	滑石	骨飞(木)(木板)	30.98	
43-4	27	一貫町1区	滑石	星石	156.11	自然面の片面に異物多く見られる。一方から打撃で折っている
43-5	27	一貫町1区60年	滑石	半玉(木材)	22.49	次頭面へ工作削削したもの。
43-6	27	一貫町1区	滑石	半玉(木材)	12.74	中に空のよろいのが含まれている
43-7	27	一貫町1区60年	滑石	半玉(木材)	7.80	次頭あり。
43-8	27	一貫町1区60年	滑石	半玉、無材	1.88	部に斜面を残す。端面にぶれがあり
43-9	27	一貫町1区	滑石	半玉、木材	5.03	自然面へ削削する面の間に、次調整を入れためた状況
43-10	27	一貫町1区	滑石	半玉、木材	4.08	次削れ、削れ痕あり。自然面を残す
43-11	27	一貫町1区	滑石	半玉、木材	5.80	次削れあり。辺りは自然面は残す
43-12	27	一貫町1区	滑石	半玉(木材)	4.90	次削れ、削れ痕あり。削削から最初に工作削削。自然面を残す
43-13	27	一貫町1区	滑石	半玉(木材)	3.11	次削れ、削れ痕あり。自然面を残す。敵引きで丸めている
43-14	27	一貫町1区60年	滑石	半玉(木材)	5.13	次削れ。伴に鋸刃あり
43-15	27	一貫町1区60年	滑石	半玉(木材)	6.59	次削れ。自然面を多く残し、敵引きも見られないまま研削へ進んだ。板状面
43-16	27	一貫町1区60年	滑石	半玉(木材)	0.40	自然面を残しつつ、日々を研削。研磨
43-17	27	一貫町1区60年	滑石	半玉(木材)	2.43	
43-18	27	一貫町1区60年	滑石	木玉(空心)	1.43	全面研削のみ。穿孔時に破折。
43-19	27	一貫町1区60年	滑石	木玉(空心)	0.10	
43-20	27	一貫町1区60年	滑石	研磨	17.53	
43-21	27	一貫町1区60年	滑石	エンドスクリーピング	1.02	
78-1	57	37Tr1号下層	磨玉	半玉	2.96	二次削れ。半玉から大きな変化なし。
78-2	57	37Tr1号下層	磨玉	半玉	19.00	
78-3	57	大舟塚4区1層	磨玉	半玉(木材)	4.86	自然面から削す。丸くしようとすると、薄くしようとすると要領を誤る感じ。た だの削れ。
78-4	57	37Tr1層	水晶	剥離	180.25	自然剥離面。薄褐色かだった石材。一度でけり割り。表面の小さな剥れは新しい?
78-5	57	大舟塚4区3層	水晶	透石	140.82	上準備完了後に剥離。他は全て自然剥離。
78-6	57	37Tr1層	水晶	剥離	35.32	大きな剥離面を切削している。
78-7	57	人命原4区3層	水晶	丸玉素材	15.83	資源から。大溝削。底面を切削後そのまま移動している。一定方向からの細い削痕が多い 入る。(浮いて打らしきものあり)
78-8	57	大舟塚4区3層	水晶	半玉(木材)	6.49	二次削れ。鋸刃あり?。敵引きほんの僅か
78-9	57	37Tr1号	水晶	半玉(木材)	7.70	二次削れ。底面なし。
78-10	57	大舟塚4区3層	水晶	半玉(木材)	4.76	自然面面に限らず。赤褐色から淡青へ。薄く削った石材に特に二次剥離を入れないまま削 る。
78-11	57	人命原4区3層	水晶	半玉(木材)	8.70	自然面から削す。石材を蛇形ようにした状態で削かい。研磨ではない。忍石は無水晶
78-12	57	人命原4区3層	水晶	半玉(木材)	3.69	二次削れ。底面なし。もううな形は見られない。
78-13	57	37Tr1号下層	水晶	半玉(木材)	3.77	自然面から削す。一次削れ。底面に敵引きしきものあり
78-14	57	37Tr1層	水晶	半玉(木材)	3.81	二次削れ。底面を削りながら打削す。
78-15	57	37Tr1層	水晶	大玉台とF	11.82	表面削るのみ。底面は研削もぬみ。底面に擦痕などさきものあり
78-16	57	37Tr1層	水晶	丸玉(木材)	1.96	滑削手元。
78-17	57	37Tr1.2層	水晶	半玉(完成品)	1.24	底面研磨。
79-1	61	37Tr1層	集積石	透片	2.83	
79-2	61	37Tr1層	集積石	透片	4.02	
79-3	61	37Tr1層	集積石	透片	1.43	自然面研磨す。
86-1	61	38Tr1層	水晶	半玉(木材)	5.60	
86-2	61	38Tr1層	水晶	半玉(木材)	5.3	被打役用
86-3	61	38Tr1層	水晶	半玉(木材)	7.50	自然面研磨す。

# 図版





一貫戸地区全景（南から）



昭和44年調査区（西から）

図版 2



59号溝検出状況（南から）



一貫尻 II 区南壁土層堆積状況



一貫尻Ⅰ区護岸状施設検出状況（南から）



護岸状施設土層堆積状況（南から）

図版 4



一貫尻 I 区拡張トレンチ（西から）



水没した一貫尻 I 区（北から）



護岸状施設（北から）



護岸状施設（西から）